

# 東方英雄章～【妖怪と人間と】

秦喜将

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

忘れ去られた存在の行きつく果て【幻想郷】 幻想郷の賢者であり、支配者である八雲紫は

とある一人の少年への恩返しを果たす為に、『境界を操る程度の能力』で恩人である少年を幻想入りさせるのだった。八雲紫に誘われ幻想郷へやってきた少年は、弱肉強食の幻想郷で何を見て、何を思うのか……。しかし、彼の選択はあまりにも単純だった。これは『英雄』と呼ばれた少年と、その英雄を慕う幻想郷の住人達とが織りなす、笑いあり涙あり、そして理不尽ありのそんなお話！

## 目次

### イベント

特別篇 サマー・メモリーズ① 1

特別篇 サマー・メモリーズ② 11

特別篇 サマー・メモリーズ③ 20

特別篇 サマー・メモリーズ④ 31

特別篇 サマー・メモリーズ⑤ 41

特別篇その弐 夏はよいよい、少年怖い? 51

特別篇その弐 夏はよいよい、少年怖い?② 61

### 開口

序章 再会……そして 69

一話 博麗さんと霧雨さん 76

二話 弾幕ごつことスペルカード……そして 84

三話 お面少女と人里へ 91

### 異変……そして宴会へ

四話 寺子屋教師と蓬莱人 100

五話 初めての異変 109

六話 ひっくり返して壊して不明にして 116

七話 鬼人正邪とランドール・スカーレットと封獣ぬえ 125

八話 もう一つのカード 132

九話 決着と代償 140

十話 宴会に誘われて 150

十一話 楽しい宴会 161

十二話 なんやかんやで 169

十三話 うんたら問答と忘れ物 179

十四話 優しい僧侶さん

189

十五話 文々。新聞

202

十六話 過去の少年

213

### 月の姫と少年編

十七話 宴会への問答

227

十八話 とある日の訪問者

238

十九話 買い出し途中で

247

二十話 思い返す姫

259

二十一話 再会、月の二人と星の一人

267

二十二話 ちよつとした語り合い

276

二十三話 月と彼の過去

287

二十四話 月と彼の過去その②

296

二十五話 月と彼の過去その③

307

二十六話 月と彼の過去その④

317

二十七話 月と彼の過去その⑤

337

二十八話 思いの他

346

二十九話 不死とは

355

### 日常編

三十話 刹那の対峙

368

三十一話 命蓮寺にお出かけ

376

三十二話 神様との出会い

386

三十三話 紅魔館へ

400

三十四話 魔法使いの魔術知識

412

三十五話 仕事探しは難題

422

三十六話 正邪の思惑

430

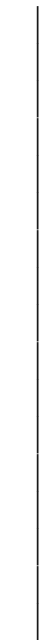
三十七話 プレオープン



442

三陣宗教編・神話の獣

『キャラクター説明1』



453

三十八話 意外な出会い



460

三十九話 神霊廟



468

## イベント

### 特別篇 サマー・メモリーズ①

S i d e 乖 離

夏、それは一年の中で最も暑い季節。

蝉が鳴き声がイライラする程にうるさく、蚊の大量発生と羽音で更にイライラさせられる季節。

さらには毎年恒例の如く外の熱気にやられ、熱中症でダウンする人が後を絶たない。

極めつけは、部屋のエアコンや扇風機が故障した時の絶望感だ。あれは冗談抜きで死ぬ！

これだけ聞けば、夏とはただのクソ季節でしかない。

だが夏にも良いところがある。

例えばお祭りだ。一年に一度のみの夏祭りそして花火祭り。友達を誘って行く者も居れば、家族で行く者、恋人と行く者、皆それぞれだ。

他にも川で泳ぐとか、スイカを食べるとか、アイスを食べるとか、旅行に行くとか。

特に、現代の学生達にとっては夏休みといった約一か月以上の休日期間がある。その間に上記のものを楽しむ者達が多くいるのだろう。

学生の本分である勉強から一時的に解放され、ハイになる者もチラホラと居る筈だ。しかし宿題と言う名の嫌がらせがあるのは解せぬ、まったくもって解せぬ！

かく言う今の俺には宿題等はないのだけどな？

上記の前置きは無視して、俺も結局この蒸し暑い夏を満喫している者の一人である。

現在の俺はというと、幻想郷を離れ紫と共にデート……もとい、現代世界に来て有名アイス屋さんの行列に並んでいた。

もちろん並んでいるのは俺だけですがね？

「はいお待ちー！」

アイス屋さんのおじさんから、二人分のアイスを受け取りポケットからお金を渡す。

「まいどありー！次のお客さんどうぞー！」

俺はさっさと行列を抜け、紫と待ち合わせているシヨツピングモールへと向かう。

シヨツピングモール入口で、数個の買い物袋を携えた金髪美人を発見する。言うまでもなく紫である。

紫は俺に気付き、笑顔で手を振って来た。

「ごめん！待たせてしまったかな？」

「いえ、私も今買い物が終わったところですよ」

俺は紫の下に駆け寄り、アイスを渡す。

「わざわざ買いに行って頂き、ありがとうございます」

「気にするな！これくらいどうということはないさ。あ、荷物持つよ」

「ではお願いします」つと言った紫から荷物を受け取り、俺と紫は歩き出す。

歩きながら俺は買った物について質問してみた。

「結構荷物あるけど、何を買ったんだ？」

「藍が新しいフライパンが欲しいと言っていましたので、そのフライパンと、橙用のマタタビや着替え等です。その他は全て私用品ですね」

「そっかー」

アイスを食べながら、何処へ行くという訳でもなくただ歩き続ける俺と紫。

道中、紫の美しさと可憐さに魅了された者達の視線をすごく感じてならない。

その殆どが男であり、アイスを食べている紫を見て『俺あのアイスになりたい』なんて呟く者が結構居た。

俺の予想ではあるが、多分頼めば今食われているアイスの代わりになれるかもしれないぞ？

紫は妖怪である訳だし……。ただ、そうなると地獄絵図に変わり果てるのみなのであまりオススメはしない。気持ちは分かんなくてもないがな。

それにしても、今年の夏は非常に暑い。

照り付ける太陽と、地面からの熱気で汗が止まらない。あまり汗を掻かない俺といえども、既に背中がグツシヨリになってしまっている。正直かなり気持ち悪い。

それに引き替え、紫はまったく汗を掻いていない。こんな真夏日だというのに、こやつは暑くないのだろうか。

「お前さあ、この炎天下の中暑くないの？」

「私は境界を弄っていますので、暑くはないですよ？」

そう言っ、紫は得意げな表情を俺に見せつけて来る。……羨ましい限りだ。

現代世界はきつと、地球温暖化が進んでいるからこんな暑いのだろう、きつとそうだろう！でなければこの暑さに納得いかない。

そんな事を思いつつ歩き続けていると、不意に紫が手を握ってきた。

紫の手は冷たく、心地よいものだった。

「あの、どうしたの紫……？」

俺が上記の問いかけを投げかけると、紫は顔を赤らめ小さく呟いた。

「せ、折角……二人きりですので……その、手を繋いでみたいなあ……なんて……」

なるほど、そう言う事ね。

こうして手を繋いでみると、昔を思い出す。紫がまだ子供だった時も、こうして手を繋いだ事があったっけな。

「その……ご迷惑でしたか？」

紫は半泣き寸前になりかけながら聞いて来る。

「いや、全然迷惑なんかじゃないよ」



俺がそう言ってやると、紫の顔パアツ！と明るくなり、「それならよかったです♪」と言った。

それより、俺達は一体どこへ向かって歩いているのでしようなあ。

歩き続けて10分した位だろうか、不意に紫に念話が飛んできた。

『もしもし、紫様！』

「あら藍、どうしたのかしらそんなに焦って？」

ひどく落ち着きのない藍の声色から察するに、何やら緊急事態の臭いがする。

『幻想郷に突然……海が幻想入りしました!!』

「……は？」

まったくもって突然の事に、二人揃って素っ頓狂な声を出してしまった。

※※※

藍の報告を受け、幻想郷に戻って来てみました……海に。

眼前に広がる広大な青い湖、ほのかに香る潮の臭い、月の引力に引き寄せられ行ったり来たりを繰り返す波……うん、まごう事なき海ですな！

「どうしてこうなった……」

俺の真横でこの光景を信じられないといったように紫は呟く。

この光景を信じられないのは分かる、実によく分かる。だがしかし、今この瞬間にもこうして見えている光景は幻想ではなく現実なので、受け入れるしか選択肢はない。

ま、是非も無いよネ！

なんてバカな事を考えつつ、俺は未だ放心状態の紫をおいて海の水を手で汲んで一口飲んでみた。

うん、辛い！すごく塩辛い！海独特の塩水の辛みが俺の口の中で暴

れまわる。

だが一つ疑問に思うのは、この塩水は現代世界の海とは違って汚染物や薬物云々の影響を受けていない、純粋な塩水の辛みがあった。

「まさか……ね」

これはあくまでも俺の見解だが、この海は現代世界の海ではなく、今よりも遙か昔の物、下手をすれば神代の海という可能性がある。でなければこの塩水の説明がつかないし、何よりこの海から感じる魚達の気配が異常すぎるのだ。

感じる気配は今の時代の魚達よりも遙かに強く、活き活きとした物が多い。

しかし、何故唐突に海なのだろうか……。この夏場に限って海は人間にとつて最も忘れ去られる可能性が低いというのにだ。もしかしたら神代の産物つてというのが原因なのかもしれないな。

俺が思案に耽っていると、ようやく我に返った紫が問いかけてきた。

「乖離様、何を考えているのですか？」

「この海についてだよ。どうやらこの海は現代の海とはまったくの別物らしい」

「と、言いますと？」

「つまり、この海は過去から幻想入りして来たってことになる……と  
思う！ 思いたい!!」

最後何故か願望系になってしまったが、まあ気にしないでおう。

俺の雑な説明を受けた紫はというと、スキマを開き中をこそこそと漁っていた。

「何やってんのお前？」

「探し物です……。あら、あれをどこにやったかしら？」

探し物をしているのは見れば分かるが、俺が聞いたのは何を探しているのかって意味だったんだけど、敢えてここは黙っておく。

「あ、あった」

そう言うと紫はスキマを大きく開き、中から大きなテントを取り出した。

そのテントの大きさは軽く十数人は入れるほどの大きさだった。  
バカ力……もとい、妖怪パワーって凄いなあ〜(棒)

俺が紫の力に呆れていると、紫はせつせとテントを張り始めた。

「ふう、これで完了かしら？ 乖離様、どうでしょうか？」

「どうと聞かれましたも……凄いなー、としか言えないのだが」

「お褒め頂き光栄です！」

俺のほぼ棒読みに近い賛辞に紫は満面の笑みを浮かべた。何故そんなに喜ぶのかは知らないけれどもね。

しかし凄いものだな、あの大きなテントを一人で張ってしまうなんて。驚きを通り越して呆れるレベルだ。

でもこの張ったテントって何に使うのだろうか？

※※※

あれから数時間後の出来事。

幻想入りした海は、完全に幻想郷住民の海水浴場と成り果ててしまった。

紫同様、気付けば俺は死んだ魚のような目で、

「どうしてこうなった……………」

と呟いていた。

事の顛末だけ説明すると、あの後紫のスキマで家に帰り昼飯を済ませようとしていたところ、突然幻想放送で『海が幻想入りしたからみんなく、泳ぐわよ〜♪』

と、上記のノリで紫が幻想郷全土に発信してしまったのだ。

無論無視も出来たのだが、その放送から数分した後、下記の方々が必死こいた目で俺を誘いに来たのだ。

一つ・霊魔理コンビ

二つ・スカーレット姉妹

三つ・信仰が欲しい宗教の皆様

四つ・蓬莱人のお三方

五つ・ノリで来ちやった妖精二人と妖怪三人

六つ・うちの定食屋で働く娘達

七つ・面倒くさいからその他諸々

総勢20人以上、この数で押し寄せられて、断れる者がいるだろうか？少なくとも俺には断れないしおそらく断れる者などいないと思う。

とにかく、上記の面々が来た時の俺の心情は『帰れお前ら！』であった。

そして現在に至る訳だが、俺は相変わらず死んだ魚の目で海を眺めてつつ、家から持って来た大きなバーベキューセットで魚を焼いていた。

「死んだ魚の目で魚焼いてる……魚可哀想に」

先程からこうしてぬえは俺に嫌味を飛ばしてくる。別に迷惑というわけではないが、ちよつとうるさい。

「てか、ぬえは泳がないのか？皆気持ち良さそうに泳いでるぞ」

俺は海から視線を外さずぬえに問いかける。

するとぬえは、ゆっくりと立ち上がり俺の問に答えた。

「私はもう少し後に泳ぐ！今はこうして乖離を弄るのが楽しいからね」

「そうかい……」

俺はそう呟き、焼いていた魚を一口食べてみる。

うん、美味しい。パリパリとした皮の触感と、脂身たっぷりの柔らかい魚肉がなんとも言えない。

しかしこれだけでは勿体無いので、家から持ってきた特製のタレを掛けてもう一度食べてみる。

うまし！先程とは違い特製のタレが効いていてより深い味わいになった。今度店でも出してみようかな。

俺が一人美味しく焼き魚を食べていると、それを羨ましそうにぬえが見ていた。

「乖離だけずるい！私にもちようだい！」

「ほれ」

食べ掛けではあるが、焼き魚をぬえに手渡すと目を輝かせて一気にかぶりついた。

「ん〜おいしい〜♪」

ぬえはご機嫌に魚を食べていく中、不意に俺を呼ぶ声があった。

「乖離くーん！」

声のした方へ視線を向けると、白い水着を着た東風谷先輩が笑顔で走って来ており、豊かに育った胸が上下に弾んでいた。

グ、刺激が強すぎる！

「乖離君、何をしているんですか？」

「魚焼いてます……」

「美味しそうですね〜」と言いながら焼けている魚を覗き込む東風谷先輩。

その際見えてしまう谷間に視線が釘付けになりそうなのを必死に堪え、出来るだけ空を見ようと頑張る。

「なくにデレデレしてんのよ」

ぬえは不満気に呟く。

仕方ないじゃないか、俺だって男なんだからね？美少女の水着姿、それも巨乳の東風谷先輩ともなれば、その大きな胸に自然と視線が行ってしまうのは当然のことだろ、男の子なんだから俺。

そもそもの話、責められるべきは俺ではなく無防備な東風谷先輩ではなからうかぬえさん。

なんて言い訳を考えていると、東風谷先輩が焼き魚を持って聞かされた。

「乖離君、これ頂いてもいいですか？」

「どうぞ……」

「ありがとうございますー！」

そう言って東風谷先輩はぬえ同様焼き魚にかぶりつく。

「このお魚さんとっても美味しいですねー！」

喜んでもらえたのなら焼き甲斐がある。

俺が次の魚を焼く準備をしていると、ぬえはどこかへ歩いて行くようにしていたので、聞いてみる事に。

「どこ行ってんだぬえ？」

「水着に着替えてくるよ」

「そういえば、ぬえはまだ普段着でしたね。」

ぬえはさつきと着替えに行ってしまった、今度はぬえが変わって東風谷先輩と二人きりになってしまった。

「ごちそうさまでしたよ」

もう食べ終わってしまったのか、東風谷先輩は合掌のポーズを取って骨だけになった魚をゴミ袋に入れた。

「そう言えば乖離君、この水着……どうですか？」

東風谷先輩は顔を赤らめ水着の評価を求めてくる。

「ごちそうさまです」

「はい」

俺には上記の言葉しか言えない。きつと分かる者には分かる、東風谷先輩のスタイルの良さを知っている男共バカにならな。

しかし俺の言葉が理解できていないのか、東風谷先輩は不満気に何度も聞いて来る。

「あの、どうだったんですか？それに『ごちそうさま』って何なんですか？乖離君ってば〜！」

申し訳ないが東風谷先輩、男の俺からその意味を言うのはとても恥ずかしいので諦めて頂きたいですね。それとちよつと近いです豊満な胸が直に当たりそうですマズイです俺の精神がおかしくなりそうですなので離れてくださいお願いします。

つと、心の中で思いながら俺は東風谷先輩に揺さぶられている。

「まあ、似合ってると思いますよ？俺的には」

「本当ですか?!ありがとうございます!!」

褒めたら褒めたで、今度は勢いよく抱き着いてきた。

抱き着かれた際感じる柔らかな胸の感触、大きいだけでなく形も良かったため硬過ぎず柔らか過ぎずのバランスのとれた感覚が俺の胸部に当たる。

マジ、勘弁……これ以上は……理性が！

ギリギリのところまで東風谷先輩に離れてもらい、俺は急いで紙コップにお茶を注いで一気の飲み干した。

クソ、この先輩に恥じらいはないのか！……嬉しかったけどネ！

「そうそう、乖離君は泳がないのですか？」

「俺は後から泳ぎますよ、今はまだ魚を焼いていたので（精神維持の為にね）」

俺の答えに、東風谷先輩は残念そうに肩を落とした。

「そうですか、残念です。あ、でも泳ぐ時は誘ってくださいね？」

「了解です」

そう言つて東風谷先輩は海の方へ行つてしまった。

そして今度の俺はボツチでございます。悲しくはない、慣れてるから！

俺は一人魚を焼きながら海を眺める。

皆楽しそうにはしゃいでいる。

海で泳ぐ者達も居れば、砂浜でお城を創る者達もいたり、ビーチバレーを楽しむ者達、釣りをする者達もいる。

そんな中、俺はとある一人の女性に注目していた。

その人物とは藍であり、その藍は黄色い水着を着て黒いグラサンを掛けてサーフィンを楽しんでいた。

大きな波を自在に乗り回すその姿はもう格好いいとかそんなレベルではなく、最早シブいまでである。流石は藍だな。

俺が先程同様、魚を焼きながら海を眺めていると、再度誰かから大きな声で呼ばれた。

だが俺はまだこの時は知らなかった。

この後、俺がとんでもない地獄を味合わされる事など俺はまだ知らないのであった。

## 特別篇 サマー・メモリーズ②

Side 乖離

「よっし！次は私の番だぜ！」

「……………」

「しつかり当てなさいよ魔理沙！」

「魔理沙いっけー！」

魔理沙は木刀を片手に、準備運動の如く肩を鳴らしている。

そんな魔理沙を奮い立たせるように、野次馬共が意気揚々とはしやぎだす。

「……………」

俺はただひたすらこの光景に…………いや、この理不尽に対して悟りを開いていた。

魔理沙は目隠しをして、ゆつくりと近寄って来て大きく木刀を構える。

「それー!!」

大きく振りかぶった木刀は、対象物から外れ砂浜に強く叩きつけられる。その際野次馬どもから「惜しい〜」などの声が飛んでくる。

「クッソーー！当てられなかったぜ」

「……………」

魔理沙は目隠しを外し、悔しそうに地団太を踏んでいた。しかし俺は尚も沈黙を貫く。

「次は私の番ね！」

そういつて、魔理沙同様に肩を鳴らしてやる気満々の意を見せる霊夢。

魔理沙から目隠しと木刀を受け取った霊夢は、目隠しを着けて木刀を握り、ゆつくりとこちらに近づいてくる。

さて、もうお気づきの方もいらっしやるのではないだろうか？



そう、今俺は……スイカ割りのスイカ役を（強制的に）請け負っている。断ることすら許されずに……酷い!!

こうなった経緯は約五分前に遡る。

魚を焼いていた俺を魔理沙が呼びに来たのだ。『スイカ割りしよっぜ!』と言って。

暇であったので了承したのだが、それが間違いだったとはその時は思わなかった。

魔理沙に連れられて、俺は霊夢達の待つ場所まで来たのだが、その場所に着いた瞬間魔理沙が地面に弾幕を数発撃ち込み穴を作ってしまった。

その穴は人間一人くらいなら余裕で入りそうなほど大きな穴だった。

俺は魔理沙の開けた穴を覗いていると、不意に霊夢に蹴り落とされてしまったのだ。結構痛かったよ。

するとそれを待つていたかのように、レミさんとフランがスコップを手にして俺を埋めてしまったのだ。もちろん首から下だけをね。

抜け出そうにも、砂が重すぎたのと、埋められ方が雑だった勢で身体に力がうまく入らず抜け出せなかった。

何故こんなことをしたのかと聞くと、四人とも口を揃えてこう言ったのだ。

『面白いから!!』

上記のセリフを聞いた瞬間、俺は大声で『理不尽じゃあああああ!!!』と叫んでから、この状態を受け入れた。

そして現在に至る訳だが、霊夢は摺り足でゆっくりゆっくりと俺の方へ近づいてきている。博麗の巫女としての勘が働いているのか、正確に俺の方へ近づいている。

皆楽しんでるようではあるが、やる側とやられる側では全く違うと理解しているのだろうか。やる側はヒットさせれば名声アップと称賛の嵐であり、やられる側はただ痛いだけ……この差である。やら

れる側には何のメリットもない、むしろ痛いだけのデメリットonlyだ！

そんな事を考えている間に、既に霊夢と俺の距離は五十センチ程で、今木刀を真つ直ぐに振り下ろせば間違いない俺の頭上に落下し激突する。それだけはなんとしても回避せねばならない！でなければ俺が不幸な目に遭う。

霊夢は勢いよく木刀を俺に向けて振り下ろす。その瞬間、俺は魔理沙を転移させ身代わりにした。

「え、ちよつ！ふぎゃ!!」

霊夢の振り下ろした木刀は魔理沙の頭にクリティカルヒットし、バチン！という大きな音を醸し出した。

叩かれた魔理沙は頭を抱え呻き声を上げながらゴロゴロと転がっている。

「あれ？どうなったの？何で魔理沙の悲鳴が聞こえたの？」

霊夢は訳が分からないといった表情で目隠しを外し、現状を確認する。

「乖離の奴が私を転移させて身代わりにしたんだよ!!うおおお痛いぜ」

「自業自得だろ」

魔理沙はずつと頭を抱えて痛がっている。一方霊夢は少し困った顔で魔理沙に「ドンマイ！」と告げていた。確かにドンマイだな！

「はいはい！次は私の番！」

そう言つてフランは元気よく手を挙げる。まだやる気なのか……。しかし、俺としてもこれ以上は御免被りたいので、取り敢えず出る事にした。

砂の中に埋められていたということもあつて、変な所にまで砂が入っていたので払い落としていると、フランが不満気に叫んでいた。「私もスイカ割りしたいわ！ねえねえお兄様、やらせてよう」

「嫌だ」

「ブー……」

俺がスイカ役を断ると、フランは頬を膨らませ拗ねてしまうが、俺

だって魔理沙の二の舞は勘弁だ。しかも次はフランがするというのなら、吸血鬼の腕力で俺の頭が崩壊するのは目に見えている。

「男らしくないわねえ〜」

レミさんはやれやれといった感じで首を左右に振る。しかし、言われっぱなしも癪なので反撃してみる。

「ならレミさんがスイカ役やりなよ。お姉様だろ？あ、それとも高貴な吸血鬼様にはスイカ役も出来ませんか？」

「なんですって……」

乗って来た。てかチョロ過ぎだろどんだけ無駄なプライド持っているんだこの人。まあ面白いからもう少し煽ってみることにする。

「何か間違った事でも言ったか？俺は進んでという訳じゃないが、スイカ役はやつたぞ？まさかとは思うが、下市民に出来て貴族には出来ない……なんて言わないよね？」

「言わせておけば好き勝手に言っ……いいわよ上等よ！やってやろうじゃないスイカ役!!」

チョロイ……マジチョロイ。相変わらずレミさんは適当な揺さぶりを掛ければ簡単に乗ってくれる。だからチェスでもオセロでも俺に勝てないんだよ。

「ホント？お姉様やってくれるの!？」

「ええ、もちろんよ」

レミさんには悪いが、これで俺が標的にされる事はもうなくなっただろう。これで一安心……なんて安堵していると、後ろから急激な魔力の上昇を感知した。

嫌な予感がしたので、後ろを振り返ってみると額に青筋を浮かべた魔理沙が八卦炉をこちらに向けていた。

「さっきはよくもやってくれたな乖離！」

「……………」

瞬間、俺は全力ダッシュで逃げた。足場が悪いとかどうでもいい、取り敢えずその場から逃げなければという本能の警告に従い全力で逃げた。

当然そんな簡単に魔理沙が俺を逃がす筈もなく――

「待て乖離ー！」「恋符・マスタースパーク」

八卦炉から放たれた強力な魔力砲はまっすぐに俺の方へ接近してきた。

背中を向けている状態での迎撃はほぼ不可能だ。火力が火力なだけに、今更身体強化を行っても遅いのは明確。

万事休すの状況で、不意に俺とすれ違う形である少女が魔理沙のマスパに向かって駆けだしていった。

「引き裂け！」「リバース・オン・クラレント」

少女の手に行っている白銀の剣は黒み掛かった赤に変色し、一撃の下マスパを一刀両断してしまった。

二つに別たれたマスパは近くの岩に激突して爆発した。

「なんで邪魔するんだ正邪！」

そう、先程俺を助けてくれた少女とは、天邪鬼でうちの定食屋の副店長こと鬼人正邪その人だった。

魔理沙の問いかけに対し、正邪は不敵な笑みを浮かべ答えた。

「邪魔だあ?!お前のマスパが私のテリトリーに入ったから叩き斬ったんだよ」

相変わらずのメチャクチャな理由だが、今回はそのメチャクチャな理由に助けられたな。

しかし魔理沙の方は納得できていないようで、再度八卦炉に魔力を集め始めた。まだ撃つ気かよあいつ！

「邪魔するならお前ごとブツ飛ばすぞ正邪！」

「ハッ！やれるものならやってみる!!……てのは嘘で、来い乖離！」  
急に正邪は俺の手を掴み、全力疾走し始めた。その勢いに負けて俺

は完全に引っ張られる形となった。

「あー！ちよつと待て、まだ魔力溜まりきってないんだ！」

「知るかよそんなもん！残念だが乖離は私が貰っていくぞ！」

正邪は挑発気味にそれだけ言うと、振り返らず俺を連れて走り続けた。

※※※

正邪のおかげでなんとか魔理沙を撒いた。そしてその間ずっと正邪は俺の手を握って放そうとしなかった。

そうこうしている内に、俺と正邪は少し大きめの岩場に身を隠していた。

「もう追ってきてはいないな」

「助かったか……。それとありがとな正邪、おかげで命拾いしたよ」  
「礼には及ばねえよ」

そう言つて正邪は少し顔を赤くして答えた。可愛いね♪

さてこれからどうしたものか、俺は特にやることがある訳でもないしこのまま海で泳ぐというのもいい。でも俺まだジャージだから水着に着替えなければならぬ。

俺がそんな思案に耽つていると、正邪がクラレントを俺の首元に突然突き付けて来た。

「あの、何のマネですか正邪さん……」

「他に何か言うことはないのか？」

「……と、言いますと？」

「……………死ね！」

正邪は上記のセリフを吐き捨てると、突然クラレントで斬りかかってきた。

寸でのところで回避したが、危うく首と胴体がおさらばするところだった。

「何すんだよ急に！」

「黙れバカ！私を前に言う事があるだろうが！」

「いや、意味わかんねえよ」

「だったら早く死ねイ！」

急に怒り出した正邪はクラレントで俺を斬り殺さんと襲い掛かってくる。

なんとか躲しているが、このままではいずれ斬られてしまう。折角の海で殺傷沙汰とかマジシャレにならない。ん、でも待てよ……海↓  
正邪↓怒る。

「もしかして、その水着褒めて欲しかったのか？」

「なっ!!違えーし!!全然褒めて欲しくなんかねえよ!!」

凶星だ、正邪は顔を真っ赤にして攻撃の手を止めた辺り、本当に水着を褒めて欲しかったようだ。

因みに、正邪が着ている水着は赤、白、黒のシマシマ模様だ。

「似合ってるぞ? うん、結構可愛いと思う」

「……………」

正邪は無言のまま顔を赤くさせ俯いてしまう。その際クラレントは粒子化して消えていった為、おそらく照れているようだ。

「もつと早く言えよ……バカ／＼／」

それだけ言って正邪はそっぽを向いてしまう。照れ隠しにしては随分と可愛らしいな。

なんて思った瞬間、もの凄い形相で睨まれた。

「お前今何思った……………」

「いえ…………何も思っていないです」

相変わらず怖いなこいつは…………今のは照れ隠しでもなく本気で怒っている時の顔だったな。確か前にぬえが正邪をからかった時にあんな顔で睨んでいたっけな。(その日ぬえは正邪にボコられた)

なんやかんやしている間に俺は正邪と一度別れ、一人浜辺を歩いていた。

程よい冷たさの波が行ったり来たりを繰り返し、足を冷やしてくれてなんとも気持ち良かった。

俺が一人浜辺を歩いていると、道中でこころちゃんを発見した。

声を掛けようと近づいてみると、なにやらこころちゃんはカニを

ジーンと眺めていた。

「こころちゃん、何してんの?」

「あ、乖離…………今この変な生き物の観察をしているの」

「それはカニっていう海とか川に生息する生き物だよ」

「カニ…………我々の仲間か」

そう言ってこころちゃんは更にカニを見つめていた。

おそらくさきほど仲間と言ったのはカニの甲羅が表情のように見えているからだろう。カニの甲羅には人が笑っているように見える模様が付いているからな。

「我々に……似ているなお前は」

実際カニに表情も何も無いなんて、今の彼女を前には口が裂けても言えないよ……だってこんなに目を輝かせているのだから。

そんな事を考えていると、こころちゃんはお面で顔を隠して問いかけて来た。

「乖離、私の水着似合ってる?」

こころちゃんの水着は薄いピンクにフリルの着いたなんとも可愛らしい水着だ。どうでもいい事だが、結構俺好みのチョイスだな!

「うん、似合ってるよ。結構可愛いと思うぞ?」

「そう……ありがとう」

顔がお面で見えないが、声色から察するに嬉しがっている反面、少々恥ずかしいのかもしれない。

「そういえばさこころちゃん、豊聡耳達と一緒にじゃなかったか?」

「あ、そういえば神子ならさつき乖離を探しに行ったよ?」

「マジか、じゃあすれ違いになった……いや、無いな。俺浜辺歩いてたし」

「神子達に会いに行く?」

「うむ、どっちでもいいけどまあ……会いに行ってみますかねえ」

少し面倒ではあるが、あいつらが俺を探しているというのなら、こちらから会いにいったりやるとしよう。別段俺に予定がある訳でもないしね。

「じゃあ、私も行く!」

そう言っでこころちゃんは俺の手を繋いでくる。最近はこちらちゃんのこういった行動が多いネ!でも嬉しいから許す。

「んじゃ行くかうか」

「オー!」

俺とこころちゃんは豊聡耳達を探しに行くことになったのであつ

た。

それにしても、なくにか嫌な予感がするんだけど……何でだろうな。

こころちゃんと共に豊聡耳を探している最中——突然俺の本能が大音量で『この場から離れろ!!』と警告音を発し始めた。

すると、空から何やら俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「乖離クーン！遊びに来たわよくん♪」

「あばばばば!!」

なるほど、先程の嫌な予感と大音量の警告音はこの事だったのかと、上空を見上げて理解した。

赤い髪をなびかせ満面の笑顔で急行落下してくるおバカちゃんに、そのおバカちゃんに連れられて涙目で悲鳴を上げている緑髪の少女。

まさか、夏の海だからと言ってわざわざロリ閻魔まで連れて来る事もないだろうに……まったく。

まったくもって、ハチャメチャな夏だよね。

「乖離、空から女の子が!! (×2)」

ナイスボケだねこころちゃん……。



## 特別篇 サマー・メモリーズ③

### Side 乖離

空から女神様と閻魔様が降ってくる。構図がこれだけなら鼻で笑っているところだが、如何せんこちらに落下してくる二人がアレなので、俺は何とも言えぬ状態だ。

「乖離、あれはどうするの?」

「こころちゃんは小首を傾げて問いかけて来るが、丁度俺もあのお二人さんをどうしようか考えていたところだ。」

「どうするって、どうしようね〜」

色々とほぼ諦めムードで口からそんな言葉が零れ落ちる。

あの二人はおそらく後五秒くらいすればこちらに激突するのは火を見るより明確だろう。しかしだからと言って何もしない訳にはいかないのです——

「こころちゃん、映姫様のキャッチお願いできる?」

「わかった!でももう一人はどうする?」

「へかちゃんは俺がなんとかするよ」

ぶつちやけ二三歩下って落ちて来るのを待てばいいだけの話のだが、それをすると、映姫様のウザ……ありがたいお説教がお待ちかねになってしまうので、それだけは回避したいのだ。

とりあえず、俺は半歩前に進んで落下してくる女神様キャッチの態勢に入る。

本音を言うなら『空飛べよ!』って言ってやりたいところだが、それもそれで後々面倒なので黙っておく。

各も思いつつ、俺は全身強化を施し降って来た女神様をお姫様抱っこの要領で見事キャッチした。

「痛いー!」

それでもやはり数百メートル上空から落下してきたので、キャッチの際に掛かる落下エネルギーを殺しきれず、思わず上記の言葉が出てしまった。

「乖離クン久しぶりねん！会いたかったわ〜！」

俺がある意味不幸な目にあつたというのに、相変わらずこの女神様はテンション高く俺に抱き着いて来る。そしてその際俺の胸部に当たる柔らかな感触が……。

「んっん〜」

どうやらこころちゃんは映姫様のキャッチに成功していたらしく、二人は横に並び、映姫様が一つ咳払いをした。

「ごきげんよう、氷匏乖離。お変わりないようですね……」

「え〜つと、うん、変わりはないです」

「そうですか、なら良いのです。……それより、いつまでそうしているつもりですか？」

そう言つて映姫様は目を細め現在の俺の状態を指摘して来る。

「そうですね。降りろへかちゃん」

「やだー！」

ごめんなさい映姫様俺には無理だったようです。この甘えん坊女神様をどうにかするなんてことは俺では不可能なようです。

「へカーティア様……！」

「うう……」

映姫様は更に目を細めへかちゃんを睨みつけると、流石にマズイと感じたのかへかちゃんは渋々といった表情で俺から降りた。閻魔様スゲー!!

「それで、二人は何をしに来たの？」

先程までこの構図を見ていたこころちゃんは俺の腕を取るなり、そんなセリフを吐いて明らか敵対心を向けた。

しかし流石は地獄の支配者達、そんなこころちゃんの意をどこ吹く風の如く受け流し、余裕の笑みで答えた。

「遊びに来たのよん♪」

「遊びに来ました」

二人の回答にこころちゃんはムスツと頬を膨らませる。

しかし遊びに来たとはさつきも聞いたけど、地獄のツートップが遊びにきていいのだろうか……。

おそろくだが、小町あたりは今頃『映姫様ー!!』って叫んでいるのではないだろうか。でもあれだね、いつもサボってるつけが今になって押し寄せて来たってところかな？それに引き替え映姫様は働き者だから今日くらいは羽を伸ばしに来たってところだろうね。

まあ、ヘカちゃんは別として……。

「それはそうとして、クラッピーはヘカちゃん？」

ヘカちゃんが居るのであれば、その部下であるクラッピーが居てもおかしくないのだ。しかも夏の海で遊べるとなると一番はしやぎ出しそうな人物が居ないのは以外だ。

「クラッピーちゃんなら寝てるわよ」

「寝てんの？」

「ええ、仕事でかなりお疲れの様だったわ」

何それ羨ましい！俺も許されるならさっさと帰って昼寝がしたい。でも俺を連れ出しに来た連中がそれを許す筈もないのでどうしようもないのだけどネ！

そんな事を思いつつ諦めるようにタメ息を吐いていると、こころちゃんが俺の腕を引っ張った。

「どうした？」

「神子達を探しに行かないの？」

そうでした、俺は豊聡耳を探していたのだった。こんな事をしている暇はないとは言わないけど、本来の目的を見失うところだった。

「悪いお二人さん、俺は豊聡耳を探さないといけないから先行くな？」

そう言つて、その場を去ろうとすると、こころちゃんが掴んでいる俺の腕とは逆の腕をガツシリと掴まれた。

掴んだのはもちろんヘカちゃんなのだけだな。

「私も探すの手伝うわ！折角だしねん♪」

まあ、そう言うだろうとは思ったけどね。

すると、今度はこころちゃんがあからさまに嫌そうな目付きでヘカちゃんに言い放った。

「ならあっちを探せばいいと思う！あなた一人で」

「それはこつちのセリフよ付喪神。乖離クンとは私が探すからあなた

があつちを探すべきよ?」

売り言葉に買い言葉つてあるけど、二人共なんでこうも喧嘩腰なんだろうか。いつもはおつとりした感じのころちゃんなのに、こういう時に限って妙に敵を作りやすくなる。それはヘカちゃんも同じなのだけれどね。

「二人共そこまでです。子供じゃないんですからそんなくだらな喧嘩はやめてください! 見ているこつちが恥ずかしいです」

この二人のやりとりを見かねた映姫様が助け舟を出し一触即発の二人を静止てくれた。

映姫様に注意された二人はプイツとお互いにそっぽを向き合った。それを見てやれやれといった表情でタメ息を吐く映姫様に、俺も同情した。

なんやかんやで、俺とこころちゃん、それと映姫様とヘカちゃんの四人で豊聡耳達を探していて、ようやく見つけた。

——見つけたのだが……。

「だから……こつちの方が氷鉋様も喜ばれると言っているだろう! 何故それが分からんのだお前は!!」

「それはこつちのセリフです! 乖離さんにはこちらの方がきつと喜ばれます! あなたのような時代遅れな品では落胆されるのでは?!」

「それはお前も同じだろう!!」

……なんじやありや?

道教と仏教のトップが対峙して訳の分からない言い合いをしている。何の言い合いかというと、かき氷に掛ける蜜とトッピングについてのようだ。

まあそれは良いとして、何故それであんな言い合いに発展するのだろうか。理解に苦しむとはこの事だなまったく。

バカじゃねえのあの二人……。

「バカっぽい……」

「バカっぽいですね」

「バカっぽいわねん」

後ろのお三方は呆れて上記のセリフを呟いてしまう始末だ。

なんだろうか、見ていて恥ずかしいを通り過ぎて見ていてイライラしてきた。しかもその話題の胸中が俺だと思うと尚更だ。

今も尚ギャーギャーと喚き合う二人に、俺は無表情で近づく。

すると、喚き合う二人の部下達は俺の表情を見るなり恐怖に近い表情で凍り付いてしまっているが気にしない。

「ああ、あのく……太子様………」

「どうした布都、屠自古？何かあつ……た………ヒイ！」

「あ、あの、ひ、聖………」

「聖様……その、あの………」

「どうしました星、一輪？今大事……な………とこ………ファツ！」

二人の表情は急激に真っ青に変わり、涙目で俺を見上げていた。

俺の告げるべき言葉は一つだけだ。そのことに対して慈悲もクソない。

俺は両腕を掲げ、手刀の形を作り――

『や』『か』『ま』『し』『い』『わあ!!』

言霊を籠めて大きく振り降ろし、二人の頭に直撃させる。

「グホッ！」

「ガッ!!」

見事に命中した俺の手刀で、二人は地面に倒れ伏しゴロゴロと頭を抱えて転がっている。

可哀想とは思わない、だってこの二人が煩かったんだし、二つの勢力のトップが部下の前でくだらない争いをしていたのだから、その制裁を加えたに過ぎん。

だから俺は悪くないぞ？そうだろ映姫様？

「判決……ハア……白ですねこれは」

俺の意を察してくれたのか、映姫様はタメ息混じりに判決を下して

くれた。流石は閻魔様と褒めてやりたいところだ！

「しかし、なかなか綺麗なクリーンヒットね！私なら泣いちやうわねん」

女神様のお褒めも頂けたことだし、さてと、次は頭を未だに抱えている二人についてだが。

「何をやってんだよバカ（×2）が」

俺はゴロゴロのたうち回っている二人に少々冷たい言葉を投げかける。

「うぐぐ……」

最初に頭を抑えながら豊聡耳が立ち上がった。それに続いて聖さんもよろよろと立ち上がった。

「お前ら、自分の部下の前で何醜態晒してんだよ！」

「それには深い訳が……」

「はい、深い訳があるんです」

少しションボリした様子で、二人は俯いたまま喋り始めた。

曰く、俺に合うかき氷の味は餡蜜風味だとか。by 神子

曰く、俺に合うかき氷の味はお汁粉風味だとか。by 聖

曰く、俺に合うトッピングは豆だとか。by 神子

曰く、俺に合うトッピングは小豆だとか。by 聖

「どっちも大差ないじゃん……」

なんとというか、団栗の背比べだ。まったくもって下らない話じゃないか。何故そんな事であれほどギャーギャーと喚き合っていたのか……考えたくないな。

そもそも俺はイチゴのかき氷が好きなんだけどなあ。

二人の話を聞いて呆れていると、豊聡耳が小さく聖さんに呟いた。

「お前の勢だからな……？」

それを聞いた聖さんは青筋を浮かべて言い返した。

「あらあら、自分の非を棚に上げて責任を全て私に押し付けるのですか？ 矮小な方ですねあなたは……」

「なんだと……」

「なんですか……」

「黙ろうか、お前ら？」

今度はグーをチラつかせると、二人は『ハイ』と子猫のように弱々しく返事をした。

「やれやれ、折角の海なんだから仲良くくらいしろよ」

「すいませんでした」

二人は流石に懲りたのか、頭を深々と下げて来た。

まあいいとして、二つの勢力のトップ同士が俺に頭を下げるっていうのもちよつとした問題になりそうなんだけどね。

それはそうと、俺はこころちゃんから豊聡耳が俺を探していると聞いてたので、丁度いいから聞いてみることにした。

「そういえば豊聡耳さあ、俺を探していたってこころちゃんから聞いたんだが、何か用でもあったのか？」

「それは……えっと、もう終わりました」

「？そうか」

どうやら既に終わってしまったようだ。であれば、俺がここにいる理由はもう無いだろう。

そう思い、俺はこの場を後にしようとする、急に聖さんに呼び止められた。

「あの、乖離さん」

「はい？」

「そういえば、先程ぬえがあなたを探していましたよ？」

「わかりました、ありがとうございます」

ぬえが俺を探しているとなると水着の事だろうか。ならば今度はぬえを探すしかあるまい。

俺は聖さんにお礼を言った後、今度はぬえを探す為に搜索を始めた。もちろんあのお三方を引き連れて。

「聖」

「何ですか神子さん」

「氷鉋様を怒らせるような真似はするべきではないな……………」  
「……………そうですね。しかし、芝居を打とうなどと言い出したのはあなたですからね？」

「しばかれた際自分の浅はかさを後悔したよ……………もう二度とせん」

※※※

あれから四人でぬえを探し回ること早十分、俺達は色々な場所を行ったり来たりを繰り返していた。

そんな中——

「腹が減ったなあ〜」

海に来てからというもの、俺はあまり食べ物を口にしていない。食べたとしたら、ぬえにくれてやった魚を一口だっただろうか。

そしてどうやら、腹ペコなのは俺だけではないようで、他三人も腹を抱えるようにしていた。

「何か……………食べ物〜」

「くう、閻魔たるものこの程度では『ギュルルル〜』うう／／／／／  
「……………マジ無理何か食べ物欲しいわ〜」

緊急事態ですねこれは……………。俺も俺だが、この三人は心なしか萎れていつている気がする。ピンチじゃんかこの三人！

しかし、現在地からMYテントまでそれなりに距離がある。それをこの三人が耐えられるか不安だ。

ならばもうやるしかないだろう。自然エネルギーの消費とか考えてる場合じゃないしな。

「三人共、俺に掴まれ！転移で俺のテントまで移動するぞ。そんなもって、美味しい飯を作ってやる」

「「やったー!!!」」

盛大に喜んだ声を上げた三人は、一斉に俺に抱き着いてきた。

「おっとー!」



急に抱き着かれたので転びそうになったが、なんとか留まれた。ていうかちよつと苦しい。そして暑苦しい！

「それじゃあ飛ぶぞ?」

俺のテントの位置は憶えている。現在地からそこまでどのくらい離れているかも解析済みだ。後はそこに座標を合わせて――

「着いた……」

転移完了、尋常じゃないレベルで自然エネルギーを消費してしまつた。まさしく疲労困憊といったところだ。流石に俺を含めた四人を転移させるのは無茶だったな。

「あ……」

「ん?」

俺が疲れた表情で自分のテントに目を向かわせると――そこには先程まで探していたぬえがフライパンとお玉を持ちガス焔炉で料理をしていた。

「おかえり乖離」

「ただ、いま?ぬえ」

思わず自分の目を疑った。

ぬえは黒い水着を着ており、更にその上から白いエプロンを羽織っており、長い髪をポニーテールにして結んでいる。

その姿がなんとも言えないほどに可愛らしかったので、俺は天使でも見ているのかと錯覚してしまいそうになった。

「可愛い……な」

「えつ?!えと、その……ありがとう／＼」

つついっ零れたセリフに、ぬえは顔を赤くして上記の言葉を呟いた。照れてる姿もまた可愛らしいけどね！

少しの間沈黙していると、俺の後ろからのそのそと三人が腹を抱えて現れた。

「飯〜」

「何か、食べ物を〜」

「お腹がああ」

すっかり失念していたが、居ましたね君達。

腹ペコな三人はゾンビのように這いながらぬえの方へ近づいて行った。

流星のぬえもそれにはビビったのか、慌てて料理しているフライパンを持って後ずさった。

「乖離、なんなのこの三人は？」

「ゾンビ（腹ペコ）だよ。多分お前の料理に惹かれてるんだと思うぞ？」

「怖いわこの構図は!!」

そう言いながらも、ぬえは落ち着いてフライパンを焔炉に戻し、三人に一枚ずつ皿を持たせて待機させていた。

流星は我が店の副料理長だな！

「さてと、俺は俺で作るとしますかね」

そう思い俺が料理に移ろうとした時、全身に強烈な痛みが走った。

「んぐっ……い！」

あまりの痛みに耐えかね、情けない声を上げ膝をついてしまう。

どうやら自然エネルギーの使い過ぎということだろう。無理は禁物だねホント！

一度態勢を立て直すべく、立ち上がろうとしたその時——

「乖離様？」

「ん？」

名を呼ばれ顔を上げると、そこには蓬萊人のお三方と兎二匹が居た。

何故——このタイミングなのだろうか……。神はついに俺を見放したのだろうか。

そんな問いをしてしまいたくなるほど、今の俺は絶望してしまっているのだ。何故なら——

「乖離様あー!!」

輝夜が猛スピードで俺に抱き着いて来るからだ。しかも、今の俺の体力と身体の調子では輝夜を抱きとめてやる事は不可能だ。

——しかし、輝夜にとって俺の事情など知る由も無いし、そもそも関係ない。輝夜のこういった行為は反射運動のようなものなのだから。

俺は完全に諦めた状態で、輝夜のタツクルに等しい抱き着きを甘んじて受け入れる事にした。

輝夜が抱き着いてきた際、ほんのりと香る甘い匂いが俺の鼻を突き抜け、一瞬の幸福感を得た後、俺は意識を手放したのだった。

## 特別篇 サマー・メモリーズ④

### Side 乖離

頭痛と共に、軋むような痛みが全身に走り、眠っていた意識が覚醒する。

「ん、ん〜っ！」

まだ頭と身体が痛い。しばらく気を失っていたみたいだが、未だに自然エネルギーの過剰消費の負荷が抜けきっていない。まったく今日は厄日だ。

意識と感覚が正常に戻り始めた時、不意に後頭部に柔らかな感覚があるのに気付いた。

心地よくて、どこか安心してしまうこの感覚は何だろうか。それだけではなく、ほのかに香るいい匂いの正体は？

俺はゆつくりと目を開ける。するとそこには、俺を気絶させた張本人である輝夜が俺を覗き込むように見つめているのが目に入った。

「乖離様、お目覚めになりましたか？」

輝夜はどこか心配そうに訊ねて来る。

問題ない、と口にしようとすると、再度体に痛みが走りつついつい苦悶の表情を浮かべてしまう。

「痛て〜」

少し掠れた声で上記の言葉を口にすると、輝夜はクスクスと楽しそうに笑みを浮かべた。

「何か可笑しかったか？」

「いえ、痛がる乖離様も可愛らしいなと思ひまして」

俺の痛がる姿を見て楽しむとか、ヒドイなこの姫様は……。

それはそうと、今現在の俺の状態はどうなっているのだろうか。

「輝夜、今の俺の状態って……？」

「はい！膝枕をさせて頂いてます♡」

やはりか、何故に膝枕なんだ？もっと他にはなかったのだろうか。

……もちろん嬉しいですがね？

なんてバカな事を考えるのは後にして、俺は膝枕越しに周りの状況を把握する。

現在の俺と輝夜はテントの中、それとあの腹ペコ三人は直ぐ近くでガツガツぬえの作ったであろう料理を食べている。それを苦笑いで見ているぬえと、その傍で新しい料理を作っている優曇華ちゃんと永琳。そして優曇華ちゃんを冷やかすバカウサギことてゐる。

皆なんだかんで楽しそうである。見ていて和む光景だが、誰か一人足りない気がするのは気のせいじゃない筈。

「あれ、妹紅が居ない……う？」

俺が気絶する前、輝夜に抱き着かれる前には確かに妹紅を確認している筈だ。でも今現在俺の視界には妹紅の気配はないが、どこに行ったのだろう。

妹紅を探すべく、俺は気配探知を行う。

すると、案外近くに妹紅はいた。

——俺と輝夜のほぼ真後ろに。

「輝夜、乖離は起きたか？」

「ええ、今お目覚めになったわ」

「大丈夫か乖離？急に気を失ったみたいだけど」

そう言っただけで妹紅はゆっくりとした足取りで俺の前に現れ、腰を下ろした。

「まあ、なんとかね」

「そうか、なら良かったよ」

妹紅はそう言うのと安心したような笑顔を向けてくれた。

——だが輝夜はそれが気に入らないようで。

「ちよつと妹紅、何乖離様に色気使ってるのよ」

「はあ？色気なんて使ってないわ！何言ってるんだお前!？」

妹紅は輝夜の言った事を否定するように抗議するが、輝夜はまったく妹紅の言う事に耳を貸さず、ワーキヤーと喚き散らす。

そしてそれに感化された妹紅も同じように喚き出す。

ある意味病人の俺の耳元で喚かないでもらいたいのだが、二人がこ

うなつてそまうともう手が付けられない。殺し合いに発展するまで後何秒掛かるかな。

なんて考えながら、俺はまだ痛む身体に鞭を打ち輝夜の膝枕を抜ける。

痛みはあるが動けない程のものでもない、それなりに回復したということだろう。

俺は二回ほど首を鳴らし、自分の荷物の中からフライパンと包丁を取り出し、余っている焔炉で料理に加わる。

「乖離、もう動けるのかいしら？」

「ああ、心配かけて悪い。しかし永琳、あんたもあの三人には手を焼いてるみたいだな」

「まったくよ……いつまで食べる気なのかしらね？」

残念だが永琳、おそらく腹ペコの彼女等の胃袋は海より深いぞ？特にヘカちゃんはその中でも折り紙付きにやばいからな。

そしてどうやら、優曇華ちゃんはそろそろ限界のようだ。戦力が一つ減るのは心苦しいが、彼女にも休息が必要だろう。

「優曇華ちゃんお疲れ、代わるから休んでな」

「う、うん……ありがとう」

俺は優曇華ちゃんからフライパンと箸を受け取り、代わりに務める。

「ごめんね、あまり役に立てなくて」

「気にしなくてもいいさ。寧ろ俺が気絶中の間よく耐えてくれた」

優曇華ちゃんは疲れた表情で座り込み、後ろを振り返って更に疲れた表情になった。

料理をガツガツと食べ続ける三人組と、その少し後ろで未だワーキヤーと喚き合う輝夜と妹紅を見れば、仕方ないことだからな。

でもこの状況が結構シユールで俺は好きだけどね。

「さてと、少し本気で行く……ぬえ」

「ん？……ああ、はいはい準備するね」

ぬえは気だるげに手を振りながら答える。折角のオフを仕事で潰されるたらそんな態度になるのは分からなくもないが、そう嫌そうに

しなくてもいいじゃない？

ぬえの準備も完了したことで俺とぬえは料理に入る。因みに俺が作ろうとしているのはステーキで、ぬえは豚ニラ炒めを作るようだ。

まずはステーキからだ。油を敷いてバターと卸したニンニクをフライパンで熱していく。そうするとニンニクの香ばしい匂いが鼻孔を燻る。

バターが溶けたら今度は玉ねぎと卸し生姜を焼き目が付くまで炒める。

次に焔炉の温度を最大に上げて肉を投下する。これは肉の表面に焼き色をつけておく方法だ。その際にお酒を入れると一気に表面を焼きあげることが可能なのだ。ちよつと危ないけどね。

ある程度焼き目を入れたら、弱火にして赤ワインを加える。後は蓋をして数分待つだけ。だからと言って目を放すと焦がしてしまう可能性があるので要注意！

さて、俺の工程はここまででは順調である。対してぬえはと言うと、驚いた事に次から次へとフライパンに豚肉の細切れと刻んだニラを流し込むように入れて、塩と醤油で味付けをしてどんどん皿に出している。

フライパンと焔炉が良品である為、肉とニラに火が通りやすいのだろう。でないとなんなポンポン料理出せないからね。

最初こそぎこちなかったぬえの料理は、今や俺に引けを取らないレベルまで進化を遂げてくれたようで俺は嬉しい。

まあ一日に百人単位の料理を作っていれば当然かな。そろそろ料理長の座取られるのも時間の問題かもしれないな。

「さて、そろそろ出来たか？」

フライパンの蓋を開けると、湯気とともに赤ワインも加わったことで更なる奥深い香りが鼻に届く。中の肉は良い感じに焼きあがって

おり、ついつい涎が出そうになった。

ステーキを皿に移し、最後の仕上げに特製ソースを満遍なくステーキに塗る。

「俺の方はこれで完成っ」と

皿を持つて三人の食べているテーブルに運ぶと、一番最初にこころちゃんが反応を示した。

「乖離、それは……………」

「ステーキだよ」

俺がそう答えると、こころちゃんは涎を垂らしながら目をキラキラと輝かせ始めた。しかもそれはこころちゃんのみではなく、どうやら他二人も同じなようだ。

「ステーキ?!今ステーキって言った!?!」

「近い!近いうてばへかちゃん!!」

「落ち着いてくださいへカーティア様、はしたないですよ」

俺にジリジリと迫りくるへかちゃん。そしてそれを静止させるべく注意を促す映姫様。しかし映姫様よ、そんな涎顔で言われても説得力ないぞ?」

とりあえず、俺はステーキをテーブルの上に置いて、次の料理に入る。ステーキを置いた瞬間から後ろが戦場と化したが無視しておう。どうせへかちゃんが勝つしな。

※※※

とりあえずあの腹ペコ三人組の腹は満たせる事に成功した俺とぬえは、二人して浜辺で黄昏ていた。因みに最初のステーキは案の定へかちゃんがほぼ全部食っちゃったよ。どんだけ食いしん坊なんだあの女神様は……………」

そして輝夜と妹紅だが、結局あの二人はいつまで経っても煩いままだったので、永琳が笑顔でお灸を据えたとか据えなかったとか…………結構曖昧に終わったらしい。



しかし今思うと、海に来て俺は一体何をしているのだろうか。やった事と言えば魚焼いて、スイカ割りして、逃げ回って、説教して、気絶して、料理して……碌に遊んでねえじゃん俺、マジで何やってんだろ。

「ハア……」

思わずタメ息が出てしまう。ここまでくると最早呆れてしまう。

大体の話だが、こんな事になったのは元を質せば紫がアホな事を言ったからだ。でなきや俺はそもそも家から出てないってのに。

俺が呆れ返っていると、不意に顔に水を掛けられた。しかも塩水……。

「何間抜け面してんのよ」

塩水を俺に掛けて来た主犯であるぬえは、悪びれる様子もなくケラケラと笑っている。

「やったなお前……」

テンションがテンションなだけに、流石にイラツと来た。仕返しをしてやらねばなるまい。

俺は少し足を伸ばし水に少し浸ける。そこから自然エネルギーの応用でぬえの足元を暴発させる。

「うわっ！」

するとぬえは上記の驚いた声を上げて後ろに倒れ込んだ。これぞ波紋のビート……なんてね。

「もう、何すんのさあ……」

「それはこっちのセリフだったの。急に顔に塩水掛けてくるなよ」

「暇だったんだから別にいいでしょそれくらい」

ぬえは不満気に文句を呟きながら、ゆっくり立ち上がる。そしてまたゆっくりとした調子で浮遊し始めた。

「今度は塩水じゃなくて弾幕を掛けてあげよつか？」

悪戯な笑みを浮かべながら恐ろしい事を口走るぬえ。弾幕ごっこなら他所でやって欲しいところだが、しかしその対象が俺なのでどうにもならない。

「弾幕は勘弁してくれ」

「つまんないの〜」

そう言うなぬえさんや、俺だつて現在進行系で暇なんだから。ま、どうせこれから暇ではなくなるだろうけどね。

例えば――

「【氷符・アイシクルフォール】!!」

「ほら来た」

氷妖精の放ったスペルカード、空中より飛来する無数の氷の弾幕。一つ一つは大した威力はないが、質より数の力押しという戦法だ。面倒なので一応一掃しておこう。

「【地の理・水陣豪乱舞】」

俺の発動させたスペルカードによって、海の水はたちまち無数の鋭利な槍と化し、迫りくる氷の弾幕を殲滅すべく撃ち上がる。

無数の氷の槍は一直線に氷の弾幕へ向かって飛んでいく。

一つ一つがぶつかり合った際、氷塊が碎ける音と共に弾け飛んだ水がシャワーのように俺とぬえに降り注いだ。

「気持ちいいのに気持ちよくないんだけど〜」

「俺に文句言うなよ」

今も尚ぶつかり合う二つのスペルカードを見物しながら、ぬえは上記のような文句をまた呟く。俺の勢じゃないってのに。

「てかさ、何で加減してんの?」

「アホか、俺が本気でやったら勝負にならないでしょう」

はいはいそうですね〜と、ぬえは呆れたように笑いだす。

水の槍と氷の弾幕の鬨ぎ合いがしばらく続いた後、氷の弾幕を放った張本人である氷妖精が無い胸を張ってご機嫌な様子で姿を現した。

「流石は乖離、アタイの最高にして最大のライバル!よく今の攻撃を防ぎきってみせたわね!」

現れた氷妖精ことチルノ。幻想郷最強を自称するちよつと……いや、大分おバカな娘。見掛け倒しの氷の翼に、いつもと恰好が違い『ちらるの』と胸に書かれたスク水を着ている。

そして何故か俺は彼女のライバルらしい。

ついでにもう一つ言っておくなら、チルノの上記のセリフは毎度の事なので、決して今日に限った事ではないのだ。

「あんたさあ、毎度そのセリフ言ってるけどこれまでに一体何度乖離に負けたか憶えてる？」

「Shut up, you idiot, I have not talked to you! (黙れバカ女、お前になど話してない)」

付け加えが必要だ。チルノは結構無駄な知識のみバカみたいな速度で吸収する奴だった。その勢で一体何度慧音さんが頭を抱えていた事か……。

「え、なんて?..」

ぬえは英語を知らない。というよりも、英語自体幻想郷にそこまで存在してないので、チルノのあれは完全に俺の影響だ。しかし悪いとは思ってないので反省はしませんとも。

「チルノ、毎度言ってるけど急に英語使うなよ!ぬえがお前よりバカだと思われるだろう」

「フオローする気無いでしょあんた!」

「失敬な、俺はちゃんとフオローはしたぞ?表面だけだな」  
「尚悪いわ!」

ぬえは恥ずかしさと怒りを露わに、顔を赤くし俺に抗議の声を上げている。そんなぬえも可愛らしいネ!

一端ぬえの抗議をスルーし、俺は未だ自慢げに空中に浮遊しているチルノに話しかけた。

「チルノ、大ちゃん達は?」

「大ちゃんたちなら向こうで遊んでるよ?」

「そうなのか?じゃあお前は?」

「乖離と決着を着けに来た!」

決着って……こやつは一体今まで俺に何戦何敗してるか憶えてな

いのかよ……。まったく、こころちゃんじゃあるまいし。

「決着ねえ……。じゃあ円周率言ってみ？それが言えたら決着つけてやるよ」

「ホント！待ってね、 $\pi \cdot 3 \cdot 1415926535897932384626433832795028841971693$   
……………」

ヤベーこいつ本気で言ってるやがる！無駄な知識はバカみたいな速度で吸収するとは言ったが、円周率まで覚えやがるとは計算外だった。こいつの脳味噌の構造おかしいだろ絶対！

だが、幸なことに円周率は百桁あるのだから、このペースでいけばまだまだ時間が掛かるだろう。

俺はこっそりとぬえに耳打ちする。

「ぬえ、今のうちにここから離れるぞ！」

「はあ？何だよ」

「いいから！」

俺は半ば強引にぬえの手を引こうとすると、更なる厄介事が迫ってきている気がした。…………何故今日に限ってこんな事ばかりなんだよ！

——そしてどうやら、俺の勘は見事に的中したようで…………。

「乖離君、こんなところに居たんですか？探しましたよ」

そう言って東風谷先輩は早歩きで俺の方へと近づいて来る。

「お兄様みくつけた！」

「乖離さん、こんなところに居たのね」

「ようやく見つけたわよ乖離」

「乖離ー！さっきの恨み!!」

今度はスイカ割り四人衆が…………。

「モテる男は辛いね」

俺を冷やかすように正邪が嗤う。…………てかいつから居たんだお前！

「氷鉦様！このような所におられたのですね」

「乖離さん、探しましたよ?」

次は宗教関係のお二人さんと、その愉快的仲間たちが集まって来た。

「乖離、何してるの?」

「乖離くん、一緒に泳ぎましょう?」

「では私もついでに」

今度は腹ペコ三人が……いつ復活しやがった!

「乖離様! 私とも泳いでください♡」

「抜け駆けすんな輝夜!」

今度は妹紅と輝夜が……お前ら二人は永琳にお灸を据えられたのではなかったのか……!」

マジで、この人口密度高過ぎだろ。どうなってやがんだよまったく!

俺がそんなこんなで頭を抱えていると、ぬえはそつと俺の肩に手を置き。

「なんか、ドンマイ乖離!」

「励ましになってねえし……」

俺の自由はどこに行ってしまったのやら……。誰か探してくれない?

## 特別篇 サマー・メモリーズ⑤

何はともあれ、結局のところ乖離にとってこの夏の海は地獄でしかなかった。

スイカ割りのスイカ役を押し付けられたり、逆恨みでスペカを放たれたり、助けてもらったと思ったら斬られかけたり、仕舞いにはタツクルで気絶させられたりと、散々な目に遭っていたのだ。

しかしだからと言って、乖離がそれらの事に対し怒りや恨みといった感情を抱くことは無かった。乖離にとって、それらの全ては彼女らが楽しむためには必要は犠牲であると理解していたのだから。

故に、彼女らに怒りの感情を向ける事はないし、ましてや恨むことも無い。乖離も乖離で、その状況をそれなりに楽しんでいたのだ。

ただ、一つだけ思う事があつたとするのならば……『せめて釣りだけでもさせて欲しい』と、いうことだろう。

※※※

あれからというものの、乖離は自分の下に集まつて来た者達の要望を全て叶えて回つた。頭が痛くなるのを我慢しながらも、乖離は出来るだけ彼女らの機嫌を損なわないようにすべく、動き回つたのだ。

やれビーチバレーをしろだの、砂の城を創れだの、一緒に泳げだの、弾幕ごっこをしろだのと、あれやこれやと引つ張りダコにされながらも、乖離は懸命に彼女らを楽しませる為に尽力を尽くした。

結果は……語る必要もないだろう。あれだけの人数をたつた一人で捌ききつたのだから、その後どうなるかなど……言わずと知れたことである。

現在の乖離はというと、小船で沖の方まで出ていた。というのも、既に疲労困憊でのびてしまった乖離を、面白半分で小船に乗せ島流し

の如く捨て去ってしまったのである。(主に魔理沙が)

小船で沖を漂いはや数十分が経とうとしている。乖離は未だ疲れが抜けておらず、指一本動かせない状態で空に輝く太陽を眩しそうに、目を半開きにして眺めていた。

これがいつもの休日であったのなら、このまま寝てしまいうのもやぶさかではなかったのかもしれないが、今の乖離にとって『寝る』という行為ですら最早苦痛である。しかし寝むりたいのはやまやまであるのだが、如何せん身体がそれを拒絶している。

「うう……………」

小さな苦悶の音が零れ落ちる。それはこれまでの面倒事を処理してきた乖離から零れ落ちたものだ。全身に走る苦痛と疲労が、現在の乖離を作り上げてしまった。自然エネルギーの回復力を持つてしても、この苦痛と疲労が抜けきるには数日と必要になるだろう。

それをなんとなく理解していた乖離は、明後日の仕事に支障が出ないか心配になり、ストレスが溜まってしまふ。ストレスが溜まるということは、無駄にエネルギーを消費してしまうので、治るものもなかなか治らなくなるし、身体も動かなくなってしまうかもしれないのだ。

それはそうと、一体どれほど岸から離れてしまっているのか、それを考えてしまうと、乖離は全身の疲労とともに頭痛にまで苛まれてしまいそうになった。あまり考えたくはなかった。数十分も経っているのだから、相当沖の方まで漂っているに違いないからだ。

全身に走る苦痛と、疲労に苛まれながらも乖離はゆつくりと身体を起こし、吐きそうな気分を我慢しながらもギリギリ海岸を視認できた。見れば見る程に、色々と諦めてしまひそうになっていく。

「も、もう……………あんなに離れたのか?」

小船の際にもたれ掛けながら、乖離は嫌そうに呟いた。

何故こうなってしまったのか、などと一々考える余裕すらなく、若干の涙を浮かべて片腕を海に浸けた。

冷たくも、天から注がれる陽光によつていい按配の取れた感覚が、

疲労した身体を癒してくれるような感覚があり、乖離はその心地よさに眠りへ落ちていく――

しかしその時、不意に乖離の浸かっている片方の腕が、誰かによって握られた。

「お疲れ様です、乖離様」

眠りに落ちそうになった乖離の意識は、上記の声によって寸でこの場で留まった。

乖離は眠そうに、目を半開きにして声のした方向を確認する。するとそこに居たのは、紫色のフリルのついた水着を着た紫が微笑んでいた。

「紫……？」

「はい、私ですよ」

痛む身体に鞭を打ち、無理にでも起き上がろうとする乖離を、紫はそれを静止させ、もう一度寝転がせる。

「無理をなさらなくとも構いませんよ、相当お疲れなのでしょ？」  
「そうか……なら、そうしようかな」

紫に説得されて、乖離は潔く小船の底に背中を預けた。

再度寝転んだ乖離を見て、紫はまた和やかに微笑む。それを見た乖離も、安心したように小さく笑う。

紫はいつもとは違い、紫眼ではなく金色の瞳で、隣で身体を休める乖離を幸せそうに、それでいてどこか楽しそうに見つめている。

紫が金眼になる時というのは、主に妖怪としての本質が強く出ている時である。それ即ち、並の人間ならば餌となり、妖怪であるのなら玩具の如く惨殺されるものである。この状態の時の紫は、霊夢や他の者達からもかなり恐れられている。

だというのに、紫は乖離を襲う気配は無い。それだけではなく、そんな凶悪な妖怪が直ぐ傍に居るといふのに、乖離は何の不安も恐怖も抱いていない。それどころか、一種の安心感すら乖離と紫にはあった。

傍から見れば、この上なく異常な光景であるのだろう。餌を前にした妖怪と、その餌である筈の人間が、幸せそうな表情で手を繋ぎ微笑



み合っているのだから。

それもこれも、きつと乖離と紫の間に存在する……古くからの縁と絆によるものなのだろう。

でなければ、紫の幸せそうな表情と、乖離の安心しきった表情に、説明が付かないのだから。

※※※

S i d e 乖離

結局のところ、この夏の海は俺を殺すために用意されたイベントだったらしい。でなきや俺がこんなにも傷つく筈は無いのだから。

いつも定食屋で百人近くの客を捌いているが、今回は相手が相手なだけに、真面目に死を覚悟したかもしれない。マジでそう思えてしまう程に苦しかったんだよなあアレは……。

さて、最上記までの被害妄想は放っておいてだが、現在の俺は金眼に変わった紫に手を握られている状態である。

しかも小船で二人つきり……ハッキリ言ってメチャクチャ緊張している。緊張の勢で身体の疲労を忘れてしまい兼ねない程に……。だって仕方ないと思わない？紫ですよ？スタイル抜群な上に誰が見ても芸術かと思わせる程の美貌を持ち、整った綺麗な顔をしているんですよ？極めつけは童貞殺しの紫のフリルの着いた水着を着ているのだから。……しかも、結構おつきいよな……（何がとはいわないけど）

ついでに言っておくなら、俺は女性経験が乏しいので、こういった水着やスタイル抜群の女の子にはめっぼう弱い。ああ、この事が永琳に露見した時どれだけ色仕掛けで頭を抱えさせられたか……あれは一種のトラウマだよ。

俺がそんな回想に耽っていると、不意に握られている手が更に強く握られ、我に返った。

そつと片目だけ紫の方に向けると、俺の視線に気付き、柔らかな笑みを向けて来た。

何だか気恥ずかしくなり、ついつい視線を逸らしてしまう。向けられた笑みにきつと耐えられず、顔が赤くなつたからだろうか。

本当に、参つてしまう。こういう時に限つて俺には女性経験がないのだから、見つめ合うことすら恥ずかしくて目を背けてしまうのだ。だからといって女性経験を増やそうなどは思っていないけどな。だって俺にはそんな難易度ルナティック級な事できる筈ないしね。

「太陽が……眩しいなあ〜」

ふと、そんな言葉がなんのまいぶれもなく出て来た。

確かに太陽は眩しいが、何故唐突にそんな言葉が出て来たのか分からない。もしかしたら無意識の内の照れ隠しに出てしまった言葉だったりして……いや、無いな。

俺の眩きが疑問に思つたのか、紫は小首を傾げながら聞いてきた。

「眩しいのですか？」

「ん？まあ、うん。眩しい……かな？」

俺の返答を聞くやいなや、紫は口元には怪しき満点の笑みが浮かんでいた……スゲー嫌な予感がするんですが……。

そして、俺の予感は恐ろしいほどに的中した。

「——なら、私が日光を遮りますわ」

紫はそう言うのと、文字通り、紫が俺を押し倒したかのような体制で、日光を遮つた。

ちよつと待て……どうしてそうなるんだ？いや、どうしてそうする必要があるのか……日傘でも差せば万事解決だっただろうに、何故こう……押し倒したような体制で

日光を遮つたんだこいつ。

ヤバイヤバイ！心臓の鼓動が尋常じゃなく速い。それに顔もなんだが熱い……何でだろう。それに、この体制では目を逸らそうにも逸らせない。否が応でも紫の怪しげな笑いと若干ハイライトが消えかけの金色の瞳に釘付けになつてしまう。

目と目が合う。気恥ずかしさのあまり引きつった笑みが浮かんでしまう。

対する紫は更に口元を怪しく歪め、太陽を背にしたおかげで逆光も相成りますます妖怪らしさを醸し出していた。

金色に輝く瞳は、確かに獲物を捉えているようであった。そして口元では小さく舌なめずりし、どこから獲物を喰らおうかと吟味しているようであった。

ヤバイヤバイ！妖怪の本領を發揮した紫は色々とヤバイ！物理的に喰われる事は多分……無いと思うが、それ以外の、何か大事なものが喰われてしまいそうな気がしてならない。

俺は抵抗するように腕に力を入れようとするが、忌々しいかな……ここに来て今までの疲労があるのを忘れていた。

つまりまったく身体が動かない。疲れが溜まり、ストレスも蓄積されていた勢で身体が自由がまったく効かないのだ。将棋言う詰み、チェスで言うチェックメイトというやつだ。

まさに万事休すである。

最後に、俺は冷や汗を掻きながらもこの行動に走った紫に問いかけてみた。

「あ、あの……紫さん？何をしようとしてらっしやるの？」

「さて……何でしょうね……フフフ……」

ヤベー！マジでヤベーよこいつ！本気だよ！こいつの目マジで俺を喰う気の日だよ!!

俺の物語もここで終結になるって事だな多分。よし、潔く受け入れようそうしよう！どうせ抗ったところで無意味だしな、この身体じゃ。

「せめて、痛くしないでくれるとありがたい……」

俺がそう言うと、紫は一瞬驚いた表情に変わったが、すぐさま先程通りの笑みに戻り、ゆっくりゆっくりと顔を近づけて来た。

「心配なところも、痛くはしませんわ。——きつと、これ以上ない程の快樂が乖離様を癒すでしょう」

そう言つて、紫は若干息を荒くしながら近づいて来る。

俺は一度だけ瞬きをして、全てを受け入れる体制を整える。もう為す術無しだな。

俺は紫に喰われておしまいになるのだろう。(色々と)

——て、んな訳ねえでしょうが!!

俺は握られていない方の腕を素早く動かし、迫りくる紫の顔を掴んだ。俗にいうアイアンクロウだ。

アイアンクロウを受けた紫は、非常に驚いた顔をして、俺の表情を見て引きつった笑みを浮かべ始めた。

「アホウが……そう簡単にご馳走にありつけるとか思ったのかよ?!  
……舐めんな!」

握られていなかった方の腕を海に浸けていて幸をそうしたというところだろう。おかげで気休め程度だが、自然エネルギーを回復できた。それも神代の海だからできたんだろうな。

「さてと、覚悟は出来てるかね? ゆ・か・り?」

慈悲は無い。俺を喰おうとした輩には、それ相応の仕置が必要だ。

俺の言葉聞いた紫は、冷や汗を掻きながら、赦し懇願して来た。

「も、申し訳ございません。つい、調子に乗り過ぎました……。なので放してください! 痛いです! 凄く痛いです!!」

痛いのは当然だ。アイアンクロウだし、それなりに力も入れてるしな。そして放す気はない。諦めたまえ紫よ……。ここから先は一方的な制裁タイムだ!

——なんてヒドイことはしないけどね。

俺はアイアंकローを解き、その手で紫の頭を抱いた。

「きゃっー！」

上記の可愛らしい声とともに、紫は俺の胸に抱きかかえられる体制になった。

紫は驚き戸惑いながらも、身動き一つ取ろうとはしなかった。俺的にはありがたい。

「か、乖離様?！」

紫は困惑したような声で俺の名を呼んだ。唐突の事だから、無理もない事だろうがそこは出来れば察してくれてもいい気がするな。

「どうせ、せつかくの海で遊べなかったからこんな行動に出たんだろ?……なら、今はこれで我慢してくれ。ちゃんと体力が戻ったら遊んでやるからさ」

「乖離様……」

紫は俺の言葉に納得してくれたのか、気恥ずかしそうに俺の胸に顔を埋めた。

体力が戻ったらとは言ったが、ぶっちゃけると……実はもう全回復してたりするんだけど……ま、今はこの状態が心地よいから、黙っておくとしようかな。

※※※

そして、最終的に乖離は紫と共に数時間ほど他愛も無い会話で盛り上がりながら、二人だけの漂流を楽しんでいた。

兎にも角にも、彼にとつて、この夏の海というのは地獄でしかなかった筈が、知らず知らずに楽しい思い出になっていたのだろう。

友達と来る海というのも、悪くないと思える程度には楽しめたのだろう。

だが、決してこれが終わりという訳でもなかったりする。

なにせこの後、乖離と紫は岸部に戻り皆で一緒にBBQを愉しみ、夜になればまた皆で弾幕花火を上げたりと、なんやかんやで楽しんでた。

その際へカーティアが誤って【ルナティック・インパクト】を落とし、砂浜と海が消し飛んだのは一生忘れない思い出となるだろう。だが、最後は皆笑顔であったのは嬉しいことでもあった。そして乖離は思うのだった。

『海、二度と来ない!』

そう心に刻んだのであった。

※※※後日談（別話）

「結局あの海ってなんだったんだらうな?」

「さあね、私には分かんないかな」

「まあ、お前の頭じゃ無理だよなぬえ」

「何気に私をデイスるな!」

「まあ、それはそうと……俺は何してたんだ」

「知らんがな」

「……釣りしたかった」

「そだね」

「そういえばさ乖離!」

「なんだよ、急にテンション高くなって……」

「何か言う事あるんじゃない?」

「ああ、そうか、もうそんな時期かあ」

「ほらほら、早く!!」

「へいへい……」

「いくよ?せくの!!」

「二十六夜やと大先生、コラボありがとうございます!!」

## 特別篇その式 夏はよいよい、少年怖い？

### S i d e 乖 離

夏の神秘海異変が過ぎてはや一週間、されども何も変わらぬ暑い夏が続く。蝉は相変わらずうるさく鳴いている。とはいっても、これも夏の醍醐味と思えばある程度は許容できるものだ。彼らも彼らで、一週間限りの余命なのだから……。

あの日に突如幻想入りした海は結局数日で元の時代に戻ったらしいが、何が原因だったのかは未だに不明であるらしい。この世には摩訶不思議な現象が沢山存在しているとはいえ、あれは結構稀な類だろう。なんせ海そのものが時代を越えて入ってきたのだから。しかも、あの海で採れた魚は外の時代の魚よりも新鮮で脂も乗っけていてとても美味であった。正直、釣りができていたなら文句は無かったのだがな、残念だ。

原因は分からず仕舞いではあったが、あの海がいつの時代のものであったのからおおよその検討はついた。おそらくあれは神代・紀元前二千年辺りのものだろう。それを紫に報告したところ『四千年前の海って……微妙』みたいなコメントが返って来たんだったか。まあ、そんなことを言われても知らんがなって話なんだがね。

いやしかし、この世の神秘というものは中々に侮れないものだと思う。先の海が幻想入りしてきたというのも然り、神や妖怪が闊歩するこの幻想郷だって、傍から見れば立派な神秘だ。内と外を隔てる結果がうんたらかんたらとかもある訳だし。まあもつというなら、世界そのものの意思がこんなところでグータラ生活しているのもある意味では立派な神秘だと思う。しかも、今宵またもや説明不明の神秘が顕現なさりやがった。これは前回に比べれば質は劣るが、説明不能という点であれば十分拮抗できるものだと思は思う。それは……………。

「いや、背丈が異常に縮んでるんだが……」



鏡を前に、そう一人ごちる幼い俺。

現在の俺の身長はおそらく小学生低学年とだいたい同じくらいにまで縮んでいる。俺の元の身長が176cmだったのに対し、正確に測ってはいないが今は120cm前後だろう。つまり50cm以上も縮んでいる。背が縮んだだけならまだいいが、身長に比例し全体的に幼くなっている。思考とか精神とかその辺じゃなく、こう、身体的に。声までやたら高くなってるし……。

謀探偵マンガみたいに怪しい薬を飲まされたとかそんなものじゃなく、朝起きたら突然こうなっていた。最初は結構焦ったが、今は少し落ち着いている。というか、どうにもならないので落ち着かざるをえない。一応確認として能力やその他全般を使ってみたが、どうやらこれも比例してしまっているようでまるで役に立たない。転移を試みるも、移動できるのはほんの一メートルが限界。刀を顕現させようにも、出て来たのは小さなナイフ程度。クラスターカードの起動を試してみたが、これはまるで反応無しだ。しかも、肝心の自然エネルギーは雀の涙程度。それでも服のサイズ変更は出来たので良しとしておこう。

真面目に、俺死ぬんじゃないかとすら思った。

こうなった原因は分からないが、犯人はだいたい検討はついている。とはいえ、例えその犯人に辿り着いたところで今の俺にどうこうできる程の力が無い。よくて生きたまま喰われるか、傀儡のように弄ばれるかの二択ぐらいしかなさそうだ。第一、こんな幼児体系でどうやって外を歩くかだよ。

「行動あるのみ……かなあ」

首を右へ左へと動かし思考に走るも、いい案が浮かぶ訳でも無く、ただただ無為な時間を過ごすばかりだ。生産性の無い思考など放棄し、さつさと子供は子供らしくベットにGOすべきなのかもしれない。でもまあ、精神や思考は変わらないようなので、どうしてもそうする気になれないのだがな。

「乖離様く、いらっしやいますか？」

無駄な思考に走る俺を呼ぶ良く知る人物の声が耳に届く。言うま

でもなく紫である。そういえば、体が縮んでしまっている勢ですっかり忘れていたが、今日は紫とまた外の世界にシヨツピングでしたネ！さて、言い訳を用意しなくてはならなくなったぞ！

とりあえず、待たせる訳にもいかなないので玄関へと移動する。青年期の身長の時あまり気にならなかつたが、この身体では廊下が異様に長く感じてしまう。子供とは実に、不便だ。

この身体になつてうまく感覚が追いついておらず、歩くだけでも大変だ。妙に体が重いというか、脳への伝達が遅れているというか、自分でもよく分からない。それでも、なんとか玄関までは辿り着けた。

玄関のカギを開け、恐る恐る扉を開けると、以前とはまた違った格好の紫が長い金髪を弄りながら待っていた。身長が縮む前の俺なら、少しドキツとしていたのだろうが、意外にも特に思う事は無かつた。対して紫は俺に気付き、目を丸くさせて驚きの表情を浮かべていた。

「あ、あら？ここ乖離様のご自宅よね？どうして見ず知らずの子が？」  
「……………」

「いやいやいや、この私が。この八雲紫がたつた数千年生きてたぐらいで呆ける筈が……。おっほん……。ねえボク、ここに世界一かつこよくて優しくて強くて何もかもが素晴らしいお兄ちゃんはいないかしら？」

「そんな人いません。そもそもそんな完璧超人この世に存在しません」

「そ、そう……。う、ごめんなさいね……。オホホ」

そう言つて紫は苦笑を浮かべていた。とりあえず、事情とかそんなところを説明するのも面倒に感じた俺は一旦玄関の扉を閉めた。それでも、紫はなにやら外でブツブツ呟いている声は聞こえて来る。

「しかし、ホントどうしたもんかね……。これではまともにも外を出歩けないぞ」

紫の事はそつちのけで再度思考に耽る。先程の紫の反応からしてあいつが主犯という可能性は限りなく無くなつた訳だが、完全に消えている訳ではないので一応の警戒はしておいた方が良さそうだ。胡散臭いだけあつて、演技という可能性も捨てきれない。

それはともあれ、ここで何もしないという訳にもいかないのです、俺はもう一度玄関の扉を開けた。先程と変わらず、紫は何やら納得がいかないといった表情で髪を弄りながら何かをブツブツと呟いている。そんな光景に小さくタメ息を吐きながら、俺は紫に話しかけた。

「あの、外で立ちっぱなしというのもなんだし……入る？」

「えっ？あ……そ、そうね。お邪魔しようかしら」

とりあえず紫を家の中に入れリビングまで案内する。その間ずっと『どう見ても乖離様の家なのに』と呟いていたが、まだ気づかないのだろうか。というか、この反応からしてもう警戒をする必要は無さそう。ここまでが演技だとしてもまどろっこしいし。

紫をリビングの椅子に座らせ、一応お茶を出す。客人に何もしないというのは些か失礼にあたる。

「どうぞ……」

「あ、ありがとう」

なんと言うか、気まずい空気だ。身長が縮む前の俺ならいつも通りの世間話やジョークの一つでも挙げて楽しく雑談に興じていたところだろうが、今の俺は中身はどうあれ外見は子供だ。下手すれば幼児まであるかもしれない。こうなった原因は何なのかは分からないが、やはり早急に解決すべきだろう。

俺が一人思考に耽っていると、紫がお茶を飲み終え机にコップを置いた音で我に返った。紫の方を見ると、不思議そうに見つめる彼女と目が合った。気恥ずかしさに思わず視線を逸らすと、紫は面白そうにクスクスと笑った。

「あら、どうかしたの？」

「いや、別に何でもない」

こやつ、実は既に俺が乖離本人であると気付いているのではないか？気付いた上で俺をからかっているだけなのではないだろうか。だとすると非常に意地が悪いことだ。

「えっと、あなたはここに何の用ですか？」

「私？……今日はね、私の最愛の方と外の世界でショッピングデートだったのだけれど、その最愛の方がどうやら居ないみたいなの」

「へ、へ〜」

思わず苦笑いを浮かべてしまう。なんというか、申し訳なさと不甲斐無さから込み上げて来る罪悪感で腹が痛くなりそうだ。原因はとうあれ、紫との約束を破ってしまったのは俺の不徳の致すところだ。とはいえ、紫も紫で本当は気付いているのだろうが、こうして幼い子供に戻ってしまった俺が珍しいのだろう、イタズラの一つや二つはかけてみたいということなのだろうか。

「ねえボク」

「え、何……？」

「あなた、ひよつとして……」

とうとうバレるか……。まあ、それはそれでいいんだけどね。これで心置きなく謝罪が出来るというものだ。俺としてもこういった形で約束を破ってしまったのは非常に不本意だった訳だし。

「乖離様………の、弟さんか何かかしら？」

一瞬思いつきりド突いてやろうと思った。何故そうなるのか……確かに弟とか妹が欲しいなあとか思った事はあるけど、そんな者が俺に居る筈が無い。妹というならこころちゃんとかフランとかその辺りで間に合ってるけれどもね。しかし、何故そこで外すんだこいつは……。もう完全に俺だと見破る雰囲気だっただろうに。

「いや、弟とかじゃないんですが……」

「そ、そうなの？じゃあ息子さん」

「紫、お前マジでシバくぞホント……」

あまりにも空回りした回答に流石の俺もイライラしてきた。弟の次は息子だと？俺に息子なんている訳が無いだろうに。そもそも息子が居るとしたら一体誰が俺の奥さんなんだよ。俺は生まれてこの方結婚経験も女性を抱いた経験も無いっていうのに……。彼女だって居たことナインダゾー。

「その声色と雰囲気……。まさか、あなたは……。か、乖離様なんですか？」

「気付くの遅いわ！てか、最初から気付いてたんじゃないのか」

「いえ、全く……」

驚いた……。ホントに気付いてなかったっていうのか。何と云うか、それはそれで傷つくというかなんというか……。ええい、もう一々考えるのも面倒になって来た。

「ハア、朝っぱらからドット疲れたよ。何で気付かないかな」

「か、乖離様が……。幼体化するなんて」

あれ？何だろうか、とても悪寒がするのだが……。何故紫は下を向いたまま小刻みに震えているんだろうか。そして今気付いたが、手足がスキマで固定されてしまっている。いつの間にか、何故固定されなければならぬのか。あれかな、俺が約束破ったからそのお仕置きとか……。お仕置きって、子供じゃあるまいに……。あ、今の俺は子供だったね。

「あの、紫さん？」

未だ尚小刻みに震える紫に声を掛けると、その震えはピシヤリと止まった。そしてゆっくり顔を上げると、急に紫は俺に飛びついてきた。

「キヤアアアアア!! 乖離様がシヨタ化したアアア!! 可愛すぎるウウー!!!」

「ちよっ、おいー!」

抵抗する事も叶わず、紫に思いつきり抱きしめられてしまった。豊かに実ったメロン二つに挟まれ、上手く呼吸ができない。こういった状況は男冥利に尽きるのだろうか、これはマズい。マジで、窒息しそうだ……。

「っ、ゆか、紫……。苦しいって……」

「世界一かつこよくて強くて優しい乖離様が世界一可愛くて愛くるしくて柔らかい乖離様になったわああ!!」

紫、完全に暴走中のようだ。そんなことはどうでもいいとして、早く解放して欲しい、このホールド状態が非常に苦しい。なんとかいうか、柔らかい壁に両方から押し潰されてしまうような、そんな感覚がある。そして妙に良い香りがする。香水でもないね、なんだろうか。

未だに開放してくれない紫、キヤーキヤーと叫びながら更に腕の力を強めて来る。妖怪パワー恐るべし、拘束から逃れようと精一杯力を

籠めるもまるで歯が立たない。力の差以前に、種族の差で大きなアドバンテージがあるというのに、それに加えて俺は子供になったときたもんだ。こんなの敵う訳が無いじゃないか。というか、マジで死ぬ！息が持たない。

「紫、放してって！し、死ぬってばホントに!!」

「あ、申し訳ありませんわ乖離様」

俺の悲痛な声がようやく届き、紫はそつと俺を開放してくれる。数回の咳をした後、肺一杯に大量の酸素を吸収した。危うく紫の胸の中でご臨終するところだった。おおくわばらくわばら。

「しかし、本当に縮んでしまいましたね乖離様」

「それ、嫌味で言ってるのか？それとも単にからかってるだけ？」

「どちらかというと後者ですね。でも、乖離様の幼年期がこんなに可愛らしいなんて……フッフ」

怖い怖い、そんな怪しげな笑みを浮かべないでほしいものだ。仮にもこっちは人間なんだ、そんな笑みを見せられたら恐怖でチビツちゃうよ。子供だしね。

「えつとき紫、今の俺はまあこんな感じな訳なんだよ。だから今日はシヨツピングに行けそうにない。ごめん」

「フフ……謝る必要はありませんわ乖離様。こうして幼くなった乖離様を見られた事でシヨツピング一回程度軽く我慢できますもの。それに……いつもの乖離様ではなくても、幼い乖離様は一体どんな味にするのかしらね」

「おわッー」

突如、またもや紫に飛びつかれる。それも今度は俺を押し倒すような形で。

おかしいな、どうして紫スイッチ入っちゃてるんだ？それに瞳の色も金色に変わっている。妖怪としての本質を現すにしては些か早くないだろうか。感じられる妖気も子供だから敏感なのか、ピリピリと肌が痺れるほどに漏れ出している。

困った事に、今の俺にはこの状況を打破する手段がない。転移は無意味だし、愛刀を顕現させようにもエネルギー不足で小さなナイフし

か出て来ない。加えてクラスターカードなんてうんともすんとも言わないこの始末。ホント危機つてのはいつやってくるか分からないものだ。こんな子供の姿で喰われるなんて俺は御免だし、まだ死にたくもない。精一杯の抵抗はするつもりだが、はてさて最低クラスまで弱体化した俺が最高クラスの力が発揮できる今の紫にどれだけ対抗できるか……。まあ、そんなもの言わずと知れた事だろうけどね。

「オレタベテモオイシクナイヨ？」

「そうですか？ 私には極上の品に見えますが……？」

ビビッて片言になってしまった俺を全く意に介さず、紫は相変わらず不気味な笑みを浮かべている。こころなしか頬まで赤く染めている。金色に輝く瞳は、あの日の夏の海の時と同じように獲物を捉えている。俺という小さな人間という名の獲物を、狩り食さんとしているのか。

正に万事休すだ。自然エネルギーが雀の涙程度しかない今の俺にはあの時の様に反撃する力なんて無い。例え反撃が叶ったとしても、それはほんの数秒の延命に過ぎない。迫る確実な死から逃れられる訳では無いのだ。これもまた因果なのかもしれないが、あまりにも理不尽ではないだろうか。何でこう夏つてのは俺を殺しにかかるんですかねホント。

「フッフ……それでは、そろそろ戴きましようか……」

妖艶に、嘲笑するかのように嗤う紫。迫る死を前に今の俺に出来ることなどたかが知れている。精一杯抵抗するにしても、そんなもの所詮子供が駄々こねる時に少し暴れる程度。ならばいつその事、受け入れてしまった方が潔いというもの。つて、見た目子供なのに何を考えられているんだろうな……。

ゆっくりと目を閉じる。これ以上、というかあんまりグロテスクな光景は見たくない。紫が俺を喰うシーンなんて一体誰得って話だよ。それならいつその事何もかも放り捨ててしまえば気が楽になるってもんだ。何より、色んな意味で俺の名誉の為にも。

「それでは……頂きますわ乖離様」

死が、迫る気配を強く感じる。子供になって分かった事があるとす

れば、それは抗いようの無い恐怖からはただただ怯える事しか出来ないという事だ。勉強になったのはいいが、その対価が死つてのは些か、いや全く納得いかないんだけど。

目を閉じて数秒がたっただろうか……。覚悟を決めたのはいいが、未だに痛みの一つも感じない。アレかな？ 痛覚の境界でも弄られたか。それだと余計生々しい光景が映るだけだからよほど怖いな。しかし、そう思っていると、何やら紫がクスクスと笑っている声が聞こえてくる。

「えいッ！」

「いてっ」

恐る恐るゆっくり目を開けると、何やら楽し気に笑っているいつもの紫が見えた。目を瞑っていたから分からないが、俺今額を軽く小突かれたのだろうか。

「ウフフ、本当に可愛らしいですね、乖離様♡」

「もしかして、からかったの？」

「言った筈ですわ。どちらかというと『後者』だ」と

あく、なるほどね。そういうことだったのか……。それはそれで安心したが、やれやれ心臓に悪いねこれは。冗談にも限度つてものがあるよまったく。紫の方はイタズラのつもりだったのだろうかけど、こっちは真面目に生命の危機を感じたよ。人間相手に妖怪・しかも幻想郷最強の妖怪様が本気で脅かしてくるなんて、大人げないのもいいところだ。

「紫、俺が元に戻った時憶えてろよ」

「今の乖離様がそんなセリフを言っても、まるで怖くありませんわ。それどころか寧ろカワイイ！」

やれやれ、今日は厄日だ。……。一体この幼体化はいつまで続くのやらね。ずっとなんて思うとタメ息しか出て来ないな。



「ところで、まだ瞳の色金色のままだけど？」

「フッフ、それもそれで一興ではないですか？」

「いや、普通に怖いよ」

## 特別篇その弐 夏はよいよい、少年怖い？②

S i d e ぬえ

「なんか、今年の夏はやばいよなあ……」

客一人居ない定食屋の中で、ふと一人の天邪鬼が液晶テレビを前にそう呟いた。

別段、彼女はテレビを付けてニュースを見ている訳ではない。本当に、これといった深い理由もなく、定食屋の外で猛威を振るっている異常な気温に対し、淡々と呟いただけだった。

天邪鬼の言葉に同意するように、今度は一匹の吸血鬼が気だるげな声を上げる。

「定食屋の外に出たら暑さで死んじゃいそうだなものね〜」

うんうんと、扇風機にあたりながら面霊気が賛同するように頷く。

この定食屋には夏の暑さ、そして冬の寒さ対策を兼ねてエアコンが二台設置されている。その二台をフル稼働させることによって、この定食屋内だけは外の猛暑から逃れることが出来ている。とはいえ、電気がバカにならないのは必然のことである。

「そういや、今日は非番なのに何でお前ら定食屋来てんの？」

「多分皆正邪と同じこと考えてると思うわよ？」

「私は外の猛暑が怖くて……」

「みんな一緒ね！」

そう、ここに居る妖怪達は揃いも揃って外の猛暑から逃げて来た哀れな小物達だ。外の地獄のような暑さにも負けじと働いている者達もこの人里には多く居る。妖怪の山に居座っている天狗たちなんか毎日仕事ばかりでほぼほぼ社畜状態だと聞いた事がある。彼らに比べれば私達など取るに足らないのだろうが、本音のどこ他人事なのでどうだっていい。

「なあぬえ、腹減ったから何か作って〜」

不意に、正邪は私の方へ振り向き上記の要望を投げかけてきた。

「いいけど、何が食べたいの?」

とは訊くものの、正邪が何を今食べたがっているかなんて分かりきっている。この猛暑から逃げてきているんだ、必然的に夏の風物詩へと誘われるのは仕方のないこと。

「そうめんが食いて〜」

「言うと思った。……トッピングは?」

「たまごとキュウリとカニカマあ〜」

「出汁は?」

「濃いめで〜」

ふう、と小さく息を吐き私は厨房へとそうめんを作る為に移動する。

「ここらとフランは何かいらない?」

「私はアイスクリームが食べたいわ〜」

「冷蔵庫行け!フランは?」

「ジャンボパフェがいいな」

「無理乖離に頼んで」

無慈悲かもしれないが、パフェなんて今の私の技術では再現できない。彼女らが求めるスイーツ系は乖離の十八番なのだ、私には乖離みたく初見で豪華スイーツ作成とかできない。

なんだかんだと自分に言い訳をしながらも、そうめん作成の為鍋に水を張り沸騰するまで火を入れる。

鍋は二、三分放っておいていいとして、トッピングに使う卵焼き作成に移る。

「と、卵ってまだあったっけ?」

冷蔵庫を開け卵の有無を確認してみるが、思った通り無い。……そういうえば、この前乖離が卵の補充が必要だのなんだの言っていた気がする。それに、よく見れば冷蔵庫に卵補充求むと張り紙が貼っている。

「買い出し……行かないとダメかな」

この猛暑の中外に買い物など行きたくないけど、そうでもしないとそうめんだけに関わらず、明日からの定食屋営業にも差し障ってくる。

る。それを思うと頭が痛くなりそうだ。

半ば諦めムードで鍋の火を消し、今週の買い出し担当の張り紙に目を通す。まあ、分かっていた事だが案の定今週の買い出し当番は私だった。憂鬱な気分になりそうだが、これもまた一興として受け入れる。

タメ息を零しながら厨房から一度出た私は、カウンターに置いてある自分の財布をポケットに仕舞い、店番を正邪に任せて店を出る。その際買い出しに行つてくると告げたら何故かこころとフランに揃つて『ジャンボパフェ買って！』と頼まれたが面倒だったので『嫌だ』と断りそのまま店の扉を閉め買い出しに向かう。

「しかし、ホントこの熱気と暑さは一種の異変レベルよね……」

店の外は思ったよりもずつと暑い。現在は丁度昼頃なので照り付ける太陽は頭上に居座っている。店内はエアコンが効いていたお陰でこの地獄のような暑さを回避できていたけど、いざそのエアコンという文明の機器が存在しない店外に出るところも違うというのか。

「あつっう〜」

歩いてまだ一分程度しか経っていないのに早くも汗が滲み出て来た。どうして今年の幻想郷はこんな猛暑なのか不思議でたまらない。これもキットあのスキマ妖怪の勢に違いない。そうでないとこの暑さに納得がいかないし……。

それにしても、この間の異変で買った水着は殆ど着る機会が無かった。折角正邪と可愛いのを買いに内緒で外の世界に出ていったというのに。とんだ無駄足……まではいかなくても少し損した気分になる。幻想郷では満喫して泳げる所なんて限られているし、そもそもそう言った場所には決まって余計な連中が集まりやすい。

参ったものだ、かつては正体不明の大妖怪と畏れられたこの『封獣ぬえ』が暑さと水着が満足いくまで着られなかったことを惜しんで落ち込むなどと……マミゾウに知られたらいい笑いものだ。大妖怪失格などと笑われ酒のいい肴にされるだろう。

「て、落ち込んでてもどうにもならないわよね……」

フルフルと顔を振って邪念を払う。過ぎた事を一々数えていても

婿が明かないもの。こういう時は乖離に教わった通り、これからどう楽しい事を見つけていくかに専念しよう、無駄に悩んでいても仕方がないし。

「ぬええええええつっつ!!!」

気を取り直し、いざ買い出しへと歩を進めようとした途端、聞き慣れたような、でも何だか初めて聞くかのような声が無処からか響いてきた。声の主を探そうと辺りを見渡してみるけど、それっぽい感じはどこにもしない。空耳だったのかな。

「ぬうううううえええええつっつ!!!」

「あれ?」

今度は空耳じゃない。ちゃんと私の耳に届いたどこか慌てているような、それでいて焦っているような声でした。でも、何故だろうか……聞こえて来た声は聞き慣れている筈なのに、どこか甲高いとかなんというか。

もう一度見渡してみると、どう見ても十歳にも至っていないような人間の男児が私の方へ半泣き状態で猛ダツシュしてきているのが見えた。整った顔立ちに、綺麗なアメジストのような瞳。純日本人を思わせるような真っ黒な髪の色と、現代人をイメージさせるような服装。私の知る中で、この特徴にピッタリと当て嵌まる人物は一人しかいない。

「……誰?」

思わずそんな言葉が出てしまった。なんとなく理解が出来るようであるでピンとこないのは何故だろう。とてつもなく乖離に似ているのに、あれは乖離ではない。乖離の身長は私はより全然高い。なのに私の名を呼びこちらに猛ダツシュしてくる人間の子供はどうみても私より低い。加えて乖離の声はあんな甲高い声ではないのだから。

「ぬえつ!!助けてええ!」

「ぬおっ!」

猛ダツシュしてきた人間の子供は私に抱き着き、瞬時に私を盾にするように後ろへ回った。その無駄のない動作はこんなか弱い幼子とは思えないものだった。

「ちよ、何？なんなの？」

子供は恐怖のあまりか、ブルブルと身体を震わして怯えている。

なんか、不思議な気分になる。普通人間の子供が妖怪に助けを求めなんてありえない事だけど、こうして助けを求められれば何だか悪い気はしない。

「えっと、どうしたの？」

「と、とりあえず安全なとこまで移動して!!」

子供ながら切羽詰まったように叫ぶ。一体何があつたのかは分からないけど、一旦場所を移した方がよさそうね。

私は改良オカルトボールを取り出し、出来るだけ人目のつかない場所を思い浮かべる。

オカルトボールが起動し、辺りは不思議な光で一瞬真っ白な世界へと変貌する。この光にはある程度慣れてるとはいえ、やはりとても眩しいものだ。

光が弱まっていき、少しずつ辺りが鮮明になっていく。辿り着いたのは迷いの竹林のどこかだ。先程までいた人里とは違い、竹林が暑苦しい日光を遮りどこか涼し気な風だけが耳を掠める。その気持ち良いくらいの冷たさがとても心地よい。

「ふう、助かったあゝ」

私に抱き着いていた子供は緊張が解けたのか疲れたように地面に腰を下ろす。

「さっきは急だったけど、あんた一体誰？妙に乖離に似てるけど」

「似てるんじゃないよ。色々訳アリで幼児退行してるけどね」

いや、乖離に限ってそんな超常現象はありえない。他の人間ならともかく、幼児退行とかどこにでもあるおとぎ話程度に乖離が影響される筈もない。以前だってあのスキマ妖怪にスキマ送りにされて何食わぬ顔して空間ごと開けて出て来たんだから。

「信じていないようだけど、ホントに本人だからね？」

「……じゃあ、何か証明になるものでも挙げてよ。私とのファーストキスの日は？」

「おい待て！ぬえとキスなんてした覚えはないのだが!？」

そりやまあそうだよ。だって私のファーストキスはいつぞやの異変解決後の宴で寝ている乖離にこっそりとしたものなんだから。起きていたら本気で殺してやろうと思っていたのは内緒。

「いつの間にか穢されていた……」

「ふうん……誰にどう穢されたのかわかる？」

満面の笑みで、私は幼児化した乖離の胸倉を掴み持ち上げる。乙女の純情を踏みにじる輩は即刻鉄拳制裁あるのみだ。

「いえなんでもないです寧ろ光荣です！あと苦しいから放して!!」

掴んでいた手を放しすと、乖離はストンと地面に尻餅をついた。痛い苦悶の表情を浮かべ眩きを零す。

「何するんだよぬえ」

「バカで鈍感なクソつたれには天誅が下ったのよ」

「理不尽……」

「そんなことより、何で幼児化なんてしてるのよ？まさかそういう趣味だったとか」

「お前は俺を何だと思ってるんだ……。この幼児化は知らんよ。今朝目が覚めたら勝手にこうなってたんだから」

解せぬといった表情で乖離は埃を払いながら立ち上がる。見た目は完全に子供なのに、言動も仕草もいつもの乖離だ。どうやらこれは本当に何かの異変のようね。もしかしたら乖離以外にも幼児化している者が居るかもしれない。

「幼児化した経緯は分かったけどさ、何で逃げてたのよ？」

「シヨタコンと化した紫……これで納得できる？」

「それは普通に恐怖でしかない」

そりや逃げるしかないわね。私が乖離でも絶対逃げる。あんなのに追い回されると思うと背筋がヒヤリと冷たくなった気がする。なんとというか、前回の海異変と並んで乖離は難儀なことばかりらしい。

私は小さく息を吐き、乖離の小さな手を優しく握って永遠亭を目指すことにした。あの薬師なら乖離の幼児化を元に戻すことが出来るかもしれない。

「あの、どこに行くの？」

「永遠亭」

「何故に!？」

「何故って、あこ以外まともに診察できる場所なんてないでしょ？」  
「それもそうなんだが……この状態で行けば間違いなく玩具にされると思うのだが」

まあそうなった時はご愁傷様ということでご我慢してもらおう事でしょう。後で文句言ってくるようであればその時は子供らしくお仕置きしてやろう。なんだかこうして見る乖離も新鮮な訳だし。

迷いの竹林の構造はあの不老不死の案内役がない以上ここにいる乖離しかルートを知りえない。乖離のナビゲートを仰ぎつつ、順調に永遠亭へと向かう。子供ながらに乖離の足取りは意外と早いおかげか、予想より早く目的地に到着できそうだ。

なんとというか、こうして乖離と手を繋いで一緒に歩くというのは久しぶりな気がする。こういった手を繋いで歩くというポジションは基本こころかフランなのだから。正邪は結構嫌がっていたけど。いつもは手を繋いでエスコートされている立場なのに、今回は乖離が子供になってしまった分なんだか乖離のお姉ちゃんになった気になる。

「乖離……」

「ん?どうしたぬえ」

「あつ、いや……なんでもない!」

改めて見てみると、いつもの凛々しい姿ではなく、年相応の愛らしさがまた良いと思えて来る。中身はいつもと大差は無いのだろうけど、それもそれでまたくるものがある。スキマ妖怪の気持ち少し理解できたかもしれない。だからといってシヨタコンになる気は毛頭ないが。

「もうじき永遠亭に着くよ」

「案外早かったわね」

「……出来ることなら行きたくなかったけどネ!」

不快感を隠すことなくそう口に出す乖離に、苦笑いをうかべつつ少しだけ手を握る力を強める。

永遠亭ではあの薬師とバカ姫がいるんだ、こんな状態の乖離を見て



暴走しないとも限らない。ここは、お姉ちゃんとしてカワイイ弟を守ってやらなければならぬ。

私はそう自身に言い聞かせ、見えて来た和風式の建物を軽く睨みつけたのだった。

「ぬえ帰ってくるの遅くね？」

「サボってるのか？」

「ぬえちゃんに限ってなさか………」

「探しに行くか!!」

## 開口

### 序章 再会……そして

『いつか……いつか私が、あなた様の縛りを……世界の拘束から解き放つてみせます！どうか……どうかその時は……』

少女は涙で顔を濡らしながら、自身に背を向けている一人の少年に叫び、悲願する。

『フフ、お前が言うとうと本当にそうなりそうな気がするよ。そうだな、もしもアレを俺から断ち切ってくれたなら、その時は……お前の望みを何でも一つ叶えよう』

そう言つて少年は少女の方へ振り向き、安心させるように笑い掛ける。

少女は涙を拭い、少年の顔を見て、愛らしい子供の笑みを向ける。

少女の笑みと共に、少年は青い粒子となって消えていく。

『いつの日か……私が、必ずや成し遂げてみせます！』

※※※

そこは、緑が生い茂る草原と、煌めく太陽の日差しで一寸の濁りもない小川。

その付近に佇む小さな家。

家の庭には小さなベンチがあり、色とりどりの花々が咲き乱れている。

そのベンチに一人少年が腰を下ろす。その少年は日本人をイメージさせる黒髪と、アメジストの様な透き通った紫色の瞳を持つ。本を片手に足を組みその上にメモ帳を置いて本の内容を口にしながら鉛筆でスラスラと書いていく。

「古来より人は人ならざる者達を恐れる。妖怪・神・悪魔・幽霊等、人は自分たちの知識・理解の及ばない存在達を忌み嫌い、拒絶してきた。それは無理もない事だろう。それは仕方のない事だろう。人は、全世

界の食物連鎖の頂点であり、また最下位の存在なのだから」

本の内容を書き終え、少年はそつと本とメモ帳を閉じさらに独り言を呟く。

「人が自身の理解を超えている存在を畏れ、恐怖するのは当然の事だ。なにしろ相手は自分がどれだけ逆立ちしようとも全くの意味を為さない怪物なのだから」

そう言う少年は立ち上がり、小川の方へ歩き出す。

その道中も、少年は独り言を続ける。

「特に人は妖怪を恐れる。どんな妖怪であれその力は通常の人間の数倍は上をいくからだ。故に人は、身体的な力ではなく知力と底なしの欲望をもってこれを打破してきた。その果てに得られるものが、互いの絶滅だと知る由も無く……」

独り言を呟いている間に、少年は小川へとたどり着いた。

そしてゆつくりと腰を降ろし、ぼくつと小川を見つめる。

しばしの間何も言わずにいた少年は、また独り言を呟き始めた——しかし今度は、誰も居ない筈なのに、まるでそこに居る誰かに語り掛けるように。

「妖怪達や神々、悪魔は人間が欲深く浅ましい生き物だと言うけど、俺にはそうとは思えない。人は数十年という短い時の中でしか生きていけないのだから、『あれをしたい』『これをしたい』と思うのは当然だと俺は考えている。それに人間は貧弱だから他者より欲深いくらい許してやって欲しいんだけどさ……そうは思わない？」

「さあ、私に聞かれましたも何とも言えません。そもそも私は人間ではないので……」

「そりゃあごもつともで」

少年はゆつくりと声の方へ振り返ると、そこには導師風の服を着た九つの尻尾が生えた金髪の女性が立っていた。

「初めまして、私の名は八雲藍やくもらんと申します。紫むら様の命によりお迎えにあがりました。『氷ひが砲のかいり乖離』殿」

そう言って、八雲藍と名乗った女性は深々と頭を下げた。

その仕草は誰が見ても優雅であり可憐なものだった。

「八雲………ん？八雲つて、もしかして紫の親族なのか?!」

「親族というより、私は紫様の式神です…」

藍は乖離の間に淡々と答え、乖離も「へえ」と相槌を打つ。

しばしの沈黙が続き、先に沈黙を破ったのは乖離だった。

「えっと、藍さん？俺を迎えに来たって言っていたが、俺は紫から何も聞いていないぞ？もしかして、誘拐を迎えに来たってオブラートに包んだの？」

「私の事は藍とお呼びください。しかし、どうゆうことですか？紫様からは既にそちらに連絡はしてあると聞いたのですが…？」

またもや沈黙が続き、お互い困ったような笑みを浮かべた。

乖離は少し考え込むように腕を組み、首を右左へコクコクと傾ける。

そして何かを決めたように、バツッと立ち上がる。

「よしーじゃあ藍、紫の所に案内してもらっていいかな？どうせ紫のことだし、ただ雑談がしたいとか、暇だからなんて理由じゃないだろうし」

「よろしいのですか？」

「ああ、構わないさ。きつと何か重大な事で相談でもしたいんじゃないかな？」

「大正解です」と、藍は内心で乖離に拍手を送るが、決して悟られぬよう表情には出さない。

「では、こちらへお入りください」

そう言うと、藍の隣に空間の裂け目が現れた。

その中には沢山の『目』があり、ずっとこちらを凝視してくるのだ。

並の人間なら数分で発狂するであろうその裂け目、『スキマ』に少年は何の戸惑いも無く入っていった。

※※※

side 乖離

藍に誘われ、俺はある大きな屋敷の庭に立っていた。藍曰く『マヨヒガ』と言う住まいだとか…。

周りには綺麗に整えられた砂利と観葉植物たちが並んでいる。俺はこういうものには結構素人だが、かなり丁寧に入手入れされているのは分かる。

なんて事を考えている間に、俺は客間に案内され、藍からお茶と茶菓子を頂いていた。

「この茶菓子美味いなあ、どこのだろう？」

「それは人里から買ってきた物ですね」

「人里？それはどこにあるんだ？」

「それについては紫様からご説明があるかと…」

藍はそう言って何も答えてくれない。しかし、俺を呼び出した張本人である紫は何をしているのだろうか？かれこれ10分は待たされている。

これが外であったのならまだ分からなくもないが、さすがに客を待たせるのは頂けないな…俺だからいいけど。

なんて思いながらお茶を啜っていると、襖が開き足まで届きそうな金髪の美女が入ってきた。

紫を基本としたフリルのついたドレスを着ていて、その佇まいと仕草からは、恐らく特殊な趣味を持つ男以外の男性全員を魅了するような妖艶さがみてとれた。

俺があっけにとられていると、女性は心底嬉しそうに顔を赤らめて俺に語りかける。

「お久しぶりですわ、乖離様…私の事を憶えていらつしやいますか？」

憶えているも何も、こんな美女など俺の知り合いには居ないんだが…しかし、俺もそこまで鈍感ではない。俺を前にどこかそわそわしているところとか、感じ取れる妖力は明らかにかつての比ではないが、その質で誰なのか判別できる。

それに、『あの日』からなにも変わっていないところを見れば、おのずと理解できる。

「そう、彼女こそ……」

「紫……だろ？随分と綺麗になったじゃないか……一瞬誰かと思ったぞ？」

「フフ、ありがとうございます。ああ、こうしてあなた様と再会できて、心から嬉しく思います」

「そう言つて紫は俺の前に座り、深く深く頭を下げる。」

「所謂土下座だ。」

「そして、今日はお忙しい中わざわざ私の我儘に付き合っていたいただき、感謝の言葉しか上げられません」

「はは、忙しかった訳ではないが、突然の事だったから少々驚いたかな？」

「先程藍から聞きましたわ、乖離様宛に送った手紙が、手違いでそちらに届いていなかったと……誠に申し訳ございません」

「いやさあ、別にそれはいいんだけど……そろそろ顔上げてくれない？さつきから藍の目が点になってるし、俺もなんだかやり辛いし」

「そう、先程から紫は俺に頭を下げたままなのだ。その勢で藍は『どういうこつちや！』って顔してるし、何よりこのなんとも言い難い空気に俺が耐えられない。」

「しかし、私にはこうするしか謝罪と感謝の念を表現出来ません」

「だからさ、俺は別にいいんだって！それにお前がそんなだと本題に入れないだろ？」

「——ッ!!」

紫は一瞬ビクツツと肩を震わせ、ゆっくり頭を上げた。

「やはり、気付いておられたのですね……」

「まあな……お前が雑談なんかで俺を呼ぶ訳ないしな。………で？建て前はどうでもいいから、要件だけ話せ」

「少し威圧的になってしまったが、大丈夫だろう。」

紫は小さく深呼吸をして、俺にかつての『約定』を投げ掛ける

「あの日、乖離様は私と約束してくださいました。世界の拘束からあなた様を開放すれば、私の願いを何でも一つ叶えてくださると……」

「そうだな………そこで案の定お前は俺を開放してみせた。だから俺が

お前の望みを承諾するのは道理だな。いやはや、これじゃどっちが『救われた』か分からないな」

「乖離様がどう思われているかは存じませんが、『救われた』のは私です。この事実だけは、私の『境界を操る程度の能力』をもってしても覆りません。つと、話がそれてしまいました。私の願いの前に、その願いに関係する世界の話をしてもよろしいでしょうか？」

俺は首を縦に振る。

少女説明中☆

紫は俺に自身のこれまでの人生の話をしてくれた。話の内容は俺と別れたあの日以降の事であった。紫は自身の能力で『幻想郷』と呼ばれる忘れ去られた者達が集う世界を創ったのだとか、その世界を維持する上で必要不可欠な結界『博麗大結界』の話、そして幻想郷は妖怪も神も人間も存在している。その為、抑止力となる存在、『博麗の巫女』の事を、事細かく説明してくれた。

「なるほどね、幻想郷か……紫、お前もなかなか酔狂な世界を創ったものだな、よもや忘れられた者達、『表』で否定された存在を『裏』に誘うなんてさー！」

「幻想郷は全てを受け入れます。故に、表の世界で生きられなくなつた妖怪や神、それと人間も私達は受け入れています」

「そうか……そんでき、結局のところお前の望みってなんなのさ？」

紫は再度深呼吸をして、俺の目を見ながら自身の望みを告げる。

「私の願いは………乖離様に、私達の幻想郷で生きて欲しい……これだけです」

「………三つ聞かせてくれ」

「なんなりと……」

「二つ目、その幻想郷にはお前以上の力を持った妖怪もしくは神ほどのくらい存在する？」

「片手で数えられる程です」

「二つ目、その世界に金銭感覚はあるのか？」

「もちろん存在いたしますわ。お望みとあらば、乖離様の財産をこちらの金に変換致しますが？」

「ああ、そう？それならお願いしようかな？最後の質問次第で……？」

突如その場に重苦しい空気が充満する。紫は眉を顰め、俺がどんな事を聞いて来るか警戒しているとみてとれる。どうやらさつきまで一切口を開いていない藍からも鋭い視線を感じる。そして俺は、最後の問を口にする。

「幻想郷は……楽しいか？」

俺の最後の質問に、二人は鳩が豆鉄砲食らったような顔をした。

だが直ぐに紫が笑い始め、藍は呆れたように苦笑いを浮かべた。

「アハハハハツツ!!お腹がつ、お腹が痛いwww」

「んく俺そんなに笑われるような事言ったか？」

「フフフ、申し訳ありませんわ乖離様、あまりにも可笑しくて、それでいてとても嬉しかったものですから」

そう言つて紫は目元の涙を拭いて、俺に向き直った。

「先程の質問ですが、お答えいたしますわ……幻想郷は、決して乖離様を退屈させませんわ。きつと、毎日が面白可笑しくなるはずですよ」  
「そうか、それなら安心したよ」

どうやら向こうの世界は、面白可笑しい事で溢れているようだ。それなら俺も助かるってものだ。誰が好き好んで退屈な世界に行くだろうか……

そうして俺は紫に導かれ、人生初の、世界の裏側『幻想郷』に幻想入りを果たすのだった……



## 一話 博麗さんと霧雨さん

### S i d e 乖離

「あのく乖離様、これは一体……」

「お前の言いたい事は分かっているさ紫、しかし俺にもどうしてこうなったか理解できないんだよ……」

そう、今俺と紫の前には、三万円を握りしめ失神して倒れている紅白巫女さんがいるのだから……

ことの発端は約数十分前に遡る

※※※

「へく、ここが幻想郷、忘れられた者達の行きつく果ての世界か！」

「どうですか？ 気に入って頂けましたか？」

「景色は最高だ！ ここでランチなんてしたら最高に贅沢だろうよ」

俺は幻想入りして、ほぼ幻想郷全土を一望出来る丘に案内され来ていた。

驚いた事に、その丘は本当に幻想郷全土を一望出来る程に標高が高く、綺麗な場所だった。

「なあ紫、あの集落みたいな所は何だ？」

「あこは人里ですわ」

紫曰く、幻想郷の中でも最も多く人間が集まっている場所らしい。あそこには里の守護者と呼ばれる者と自警団なる者達が里の警備を担当しているらしい。

今度行ってみようか。

「ん？ なあ、じゃああのデカイ寺みたいなのは何だ？」

「ああ、あれは命蓮寺ですね。ここ最近宗教戦争に勝利して、随分活気立っているみたいですが……」

「ふうん、この世界にも宗教云々があるんだな。流石は幻想郷だ！」  
「お褒めに預かり光栄ですわ」

「でも、やはりどの世界でも戦争ってのはあるんだな……」

幻想郷の全てを知っている訳ではないが、やはりこの世界も世の理という名の呪いを受けているのだろう。特に戦争なんてろくなものじゃない。あんなのはただ理不尽に、無意味に命が零れ落ちていくだけのものなんだから。そう思うと、脳裏でいままで見て来た戦争がフラッシュバックしていく。

泣き叫ぶ子供達や、罪もない人達を無情にも殺していく者達。私利私欲の為に人を、命を道具としてしか扱わない者達。

こんな事を考えている俺は今、一体どんな表情をしているのだろうか……

「乖離様、どうされましたか？どこか辛そうな表情をしておられるようですが……」

「ん？ああ、すまない。少し過去の事を思い出していてね……」  
「そう……ですか」

どうやら紫は浮かない表情をしていた俺を心配してくれたようだ。全く、こんなところは昔となら変わっていないんだな。

「おっと、こんな辛気臭い話はやめだ！んん、あつ！紫、あの大量に竹の生えている場所は何だ？」

「え？あ、ああ、あれは迷いの竹林という場所です。一度あの竹林で迷えば、二度と出て来られない様になっている場所ですよ」

迷いの竹林か……面白そうだな、今度行ってみようかな？でも、迷うのは勘弁したいし、やっぱりやめておこう。

「因みに、迷いの竹林には、永遠亭という一種の医療施設があり、そこには月の民達が住んでいるのですよ？」

前言撤回！死んでも行こう……そうしよう。

ある程度の場所は把握した。色々行ってみみたい場所に目星は付けたし、そろそろここを離れるとしよう。

そう思った矢先、俺はある一件の建物が目に留まり、そこを見つめながら紫に問う。

「紫、あの神社みたい場所はなんだ？やたらとデカイ霊力を感じるぞ？」

「流石は乖離様、あの神社こそこれから私達が向かう場所……『博麗神社』ですわ」

博麗神社……確か、幻想郷を覆う博麗大結界を管理し、人と妖怪の抑止力たる博麗の巫女の住む場所だったか……知った被るようだが、その博麗の巫女とやらはそんな望んでもいない仕事を、使命だと感じて代々請け負っているのだろうか……。

そう思うと、自然と同情の念が込み上げてくる。失礼ではあるが……。

「さて、そろそろ参りましょうか」

「おう！」

俺は紫に呼ばれて、彼女の下に足を運ぼうとした瞬間、猛スピードで何かが俺達の真上を通り過ぎていき、突風が生じた。

一瞬の出来事だったので、アレがなんだったのかは判らなかつたが、黒い翼を生やした生き物だという事は確かだろう。

「今のは……一体なんだったんだ？凄く速さだったな」

「あれは、きっと彼女でしょうね……」

「彼女？」

「いずれ解りますわ……ええ、嫌でも……いずれ、ね？」

どういふこっちゃ？俺には全くもって理解できないんだが……ま、紫がいずれ嫌でもわかると言っているのだから、近い内にさっきの黒い翼の正体は解るだろう。

「乖離様、そろそろ参りませんと」

「あ、そっか！悪い悪い、今行くよ」

俺は走って紫の下までいくと、紫はスキマ開き俺と共に博麗神社へとワープした。

「到着です」

「……あの～紫さん、お一つ訪ねてもよろしいかね？」

「フフ、どうぞぞ？」

「なにこの無駄に長い階段はっ！」

なんなんですかねこの無駄に長い階段は？バカなんじゃないかと思うんだが？並の神社の階段の四、五倍はあるんですが？そして紫、その妙なドヤ顔はなんだ？凄いのは認めるけどさ、これを無駄なクオリティーだと思うのは俺だけですか？そうですか……。

「それでは乖離様、私は博麗の巫女を呼んで社の前まで連れて来ますので、この階段を上がってきてください」

「理由求む」

「彼女を社前まで連れ出すのはなかなかホネなんです。なので、乖離様を待たせるのもあれですし、せつかくです。この階段を上がってきて頂こうかと」

「ふくん………で、本音は？」

「私と彼女の痴話喧嘩ばりのやりとりを知られたくないです」

「素直でよろしい」

「それでは」と、そういつて紫はスキマを開いて消えてしまった。

しかし、この階段を登るとなると、結構厳しいものがあるんだが……まあ、別に急いでいる訳でもないし、ゆっくりと上がっていく事にしよう。

なんやかんやで階段を進んでいると、なにやら後ろが騒がしいと思いき振り返ると、近くの田んぼだろうか？その場所付近で小さな子供達が遊んでいた。

一人は水色の髪の毛で、背中に似たような色の羽？らしきものを付けて「アタイったら最強ね！」っと叫んでいる。二人目は金色の髪の毛で頭に赤いリボンをくっ付けていて「そーなのかー」と言っている。いや寧ろそれしか言っていない気がする。三人目は薄緑色のロングヘアを首元で結んでいて、『THE・妖精』って感じの羽が生えていて「あわわわわ」っと落ち着きのない表情で混乱していた。

こうして見ていると、なんだか平和だなあと感じてしまう。なんて思っている間に、どうやら俺は頂上まで上りつめていたようだ。

辺りを見渡していると、広い敷地に古参を思わせる年期の入った社があった。

社の入り口前には賽銭箱が置かれてあった。なので俺は一応神社である事を考慮して、財布を手に取り中身を確認する。

「えっと、万札が一、二、三、四、五か……ええい！二枚残して三枚飛んでしまえー！」

俺は半ばやけくそに賽銭箱に諭吉三枚をぶち込む。別に金に困っている訳ではないが、やはり財布が寂しくなってしまうのは気が引けるというものだ。まあいいけどね

すると、何処からかドタドタと地鳴りのような音を立てて、一人の少女が姿を見せた。

「今っ！お賽銭を入れたのはあなた!」

息を荒くして走ってきた少女は、紅白の巫女装束を着ていて、頭に大きなリボンをつけていた。その恰好と少女から感じる霊力で、彼女がこの博麗神社の当主、博麗の巫女であることが分かった。

それより気になったのが、たかが賽銭程度でここまで必死な顔をしている事だった。

「あ、ああ、賽銭を入れたのは俺だが……」

「あ……あ……」

「ん？」

「ありつつがとオオオオっ!!」

突然大声で感謝を叫ばれたと思ったら、俺の手を握り上下にブンブンと上げ下げを繰り返してきた。察するに彼女の神社には参拝客はほぼ皆無と言っているほど少ないのだろう。

それより、早く手を放してもらいたい。割と痛いのだが……。

「ま、まあ喜んでもらえてなによりだよ……ていうかもう放してくれないかな？」

「そんなことより、お賽銭は一体いくら入れてくれたの？いや、聞くまでもないわね！この目で確かめる!!」

そう言って彼女は俺の手を放し、賽銭箱の蓋を開け、顔を突っ込んだ。それよりも、俺の手をそんなこと扱いとは、なかなか酷いのだが……。

「ぎ、三万円!!よっしやー！今日は久しぶりの鍋にするわよ!!」

彼女は嬉しそうに叫び、そのまま後ろ向きに倒れ込んだ。

※そして現在に至る

紫に先程の出来事を説明すると、紫は苦笑いを浮かべて「まあ、そうでしょうね」っと呟くだけだった。

さて、この倒れている巫女さんはどうしようなどと考えていると、ハツと目を覚ました。

「ここは……確か私は、高級焼肉店でみんなと飲み食いしていた筈……」

さつき今日は鍋って言ってなかったかな？夢と現実が違うという事なんですかね？

「霊夢、いい加減にしなさい。客人を前にしてその醜態、博麗の巫女として恥ずかしくないのかしら？」

「うるさいわね、分かってるわよ……。えっと？私は博麗<sup>はくれいれいむ</sup>霊夢、この博麗神社の巫女をしている者よ！それで、あなたは？見たところ外来人みたいだけど？」

何故か面倒くさそうに自己紹介をされたが、そこは敢えてスルーしておこう。指摘するの面倒だし。なにより、その態度から察するによっぽど賽銭がうれしかったのだろう。

「俺は氷匏乖離、外来人？ってのはよく解らないが、まあそんな感じかな？よろしく博麗さん」

「霊夢でいいわよ。見た感じあなたの方が年上でしょ？因みに私は十五歳よ」

「わかったよ霊夢。ってことは、霊夢と俺は三つ違う位になるのかな？」

「えっと、乖離さん？でいいわよね。乖離さんは十八ってこと？」

「さあね？俺は俺の年齢を憶えていないんだよ。ただ憶えているのは、体の成長は十八で止まっているって事ぐらいかな？だから、永遠の十八歳ってところか」

「ふうん……どこかで聞いたことのあるキャッチフレーズね……ねえ紫？」

「あら、どうして私に振るのかしら？」

「あんた以外の誰に振るのよ！」

ふとこの二人のやり取りが、『あのバカ友等』に似ていた。まさか、こんな形で、俺の最も古い記憶の一部が再現されそうになり、自然と笑みが零れた。

「ん、どうしたのよ？」

「どうかされたのですか乖離様？」

「ん？いやね、二人のやり取りが面白かったものだからつい、ね……」

二人は「なんのこっちゃ？」つというような顔をしている。

俺が懐かしい思い出に浸っていると、霊夢が俺にある事を聞いてきた。

「そういうえば、乖離さんって人間なの？」

「俺は純度100%の人間だが？」

そう、俺は人間だ。霊夢は俺を妖怪だとも思っただろうか？

そして紫よ、その「あなたの何処が人間なのですか？」みたいな視線を送るのはやめてくださいとても痛いです。

「でも乖離さんは十八で身体の成長が止まっているって言ってなかった？」

「ああ、それはだな——「おーい、霊夢——！」

霊夢に俺の身体の成長が止まっている理由を話そうとした時、突然の声によって遮られてしまった。

「ん？あ、魔理沙！」

俺も声のした方へ振り向くと、箒に跨った魔法使いを思わせる服装の金髪少女が空から降りて来た。

「親方！空から女の子がっ!!」っと叫びそうになったのは秘密である。

「よう霊夢、遊びに来てやったぜ！」

「お賽銭は？」

「無いぜ！」

「ハア、まったく……」

霊夢は面倒くさいと言わんばかりの態度を取るが、それすら意に返さないように笑う魔法使い風の少女。

「ん、霊夢に紫と……誰だぜ？外来人か？」

しかし、俺を見るなりなにやら奇妙なものでも見る様な目が変わった。そしてまた外来人と言う単語が出て来た。一体どういう意味なんだ？現代風に外国人つてところか？

「俺の名は氷匏乖離、外来人？つてやつだな！よろしく」

「そうか！私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ！よろしくな乖離！」

「ああ、よろしく頼むよ霧雨さん」

「魔理沙でいいぜ！それより乖離は外来人だから、『弹幕ごっこ』は知らないのか？」

弹幕ごっこ？妙な名前だな。アレかな？マシンガンを両手に笑いながら相手に打ち込み合う……的なものだろうか？

「いや、知らないな」

「そうか！なら私が教えてやるぜ！」

「あんたがやりたいだけのクセに」

霊夢のツツコミに魔理沙は「まあまあ！」と答える。

しかし、せっかくだ！多分この世界での決闘のルー的なものだと思うし、教えてもらって損はないだろう。

「わかった、教えてくれ魔理沙！」

「おう！そうこなきやだぜ！」

「ああ、もう！仕方ないわねえ、うちの敷地内でやりなさい！」

霊夢からお許しが出たようだし。

俺と魔理沙は広い境内で弹幕ごっこをすることにした。

そして、お互い所定の位置に付く。

「それじゃあ、準備はいいか？」

「いつでも始めてくれて構わないよ」

「行くぜ！弹幕は……パワーなんだぜ！」



## 二話 弾幕ごっことスペルカード…そして

### Side 紫

乖離様と魔理沙が弾幕ごっこを始めて数分が経とうとしている。

魔理沙は箒に跨り空中で弾幕をばら撒いている。一方乖離様は空を飛ぶことなく、地上で魔理沙の弾幕を回避している。先程からずっとこの戦況が続いている。

「クソッ！なんで当たらないんだぜ！」

魔理沙は自分の弾幕がごとごとく回避されているのに随分ご立腹のようね。まあそれは無理もないわね、相手が空を飛んでいるならまだしも、回避に重力という制限が付いている地上であこまで涼しい顔して避けられていては、流星の私もイライラしてアレを使うでしょうし。でもまあ、重力という制限が付いている中であれだけ回避し続けられるのだから、流星は乖離様ね。

「ああ！もうっ！こうなったら！」

「ちよっ、魔理沙?!」

霊夢の制止も虚しく、魔理沙はポケットの中からミニ八卦炉を取り出し、それを乖離様に向けた。

「くらえ！必殺【恋符・マスタースパーク】」

突如、魔理沙が構えたミニ八卦炉から極太の光のレーザーが放たれた。その速度ないままでの弾幕の数倍で乖離様に接近する。どうやら乖離様も突然の事で虚を突かれたように反応が遅れた。

「ッ!!」

魔理沙の放った極太の光のレーザーは乖離様を？み込み大きな爆発音と砂煙を巻き起こした。しかし、少しやりすぎじゃないかしら？

「魔理沙！いくらなんでもやり過ぎよ、相手は初心者なのよ？」

「あ、悪いぜ……ちよっと頭に血が上り過ぎた」

「まったく！それより早く見つけ出して治療しないと」

「ふう、今のは危なかったな！」

霊夢が乖離様を探しに行こうとした突如、乖離様はまるで何もな

かったかのように砂煙の中から現れた。

「え？」

「ん、何だその幽霊でも出たみたいな顔は？」

「な、何でアレをまともに受けて無傷なんだぜ！おかしいだろ?!」

魔理沙の言う事はごもつともだ。確かに魔理沙のマスタースパークは乖離様に直撃した。しかし今の本人は何事も無かったかのような顔をしている。それに、きつと魔理沙の強さを知っている者達なら、今の魔理沙と同じ顔を反応をするでしょうね……今の霊夢みたい……。

「一体どうなってるのあなた？何で魔理沙のマスパをもろに受けて傷一つ無いのよ？」

「ん？ああ、それはだな、こいつを使ったからな」

そう言うと、乖離様の周りに金色の粒子が集まり、何かの着物の形に変わった。

「な、なんだぜこれ？」

「これは【天の羽衣】と言って、ありとあらゆる衝撃を無効化する防御アイテムなんだ！これでさっきのレーザーを防いだった訳さ」

「なるほど」といった顔で霊夢と魔理沙は相槌と打つ。

「でもさっきのは本当に危なかったな！一瞬こいつでも防ぎきれないかもって思ったからなあ。そんな事は滅多になかったし、堪んねえなオイ！」

乖離様はとても楽しそうに笑っていた。こんな顔をして笑った乖離様を見るのは一体何千年振りだったかしらね。

「それよりさ、魔理沙のさっきのは何だったんだ？」

「ああ、あれはスペルカードよ！」

「スペルカード？」

少女説明中☆

「なるほどね、弾幕ごつことスペルカードルール……相手に魅せる為

の決闘方法か……戦いは戦いでも、物理も然り、精神戦でもあるのか」「そういうこと。どう？・気に入ったかしら？」

「ああ、なかなか面白いな！よし魔理沙、さっきの続きだ！今度は俺の力の一端を見せてやるよ！」

「ああ！それじゃあいくぜ！」

どうやらまだ続けるらしいわね。でも乖離様は楽しそうでもあるし、止めるのは無粋というものかしら……——ん？今「俺の力の一端を見せてやるよ！」って言ってなかったかしら？いえ、絶対言ったわよね？！

「ちよつとお待ちください乖離様！」

「ん？どうした紫？」

「まさか、あの能力を使われるおつもりですか？」

「安心しろ紫、アレは使わない。そもそも、あんなの使ったら世界の危機でしょ？」

「そ、そうですか……ならいいのですが……」

よかった。万が一にでも乖離様があ有能力を使用するとなると、幻想郷どころか、月や冥界、果ては地獄にまで影響を及ぼしかねない。

私はほつと胸を撫で下ろす。

「お待たせ魔理沙、さっきの続きを始めようか！」

そう言つて乖離様は魔理沙の方に走っていった。

魔理沙は既に空中で待機しており、いつでも再開可能といわんばかりに八卦炉を構えていた。

一方乖離様は、左腕が紅い稲妻を帯びており、その紅い稲妻が一点に収束して柄が黒く、刀身が紫色の刀を顕現させていた。

一体いつあの刀を出したのかしら？

「魔理沙、お前の好きなタイミングでスペカを使ってくれて構わないぞ？・俺はそのことごとくを打ち払うからさ！」

「言つたな？・なら今度は手加減無しだぜ！」

どうやら魔理沙はもう乖離様を初心者としては見ていないみたいね。これからは完全にいつもの弾幕ごっこになるかしら。

ふとそんな事を考えていると、再度霊夢が私に尋ねて来た。

「ねえ紫、乖離さんは能力持ちなの？まったくそんな気配はしないのだけれど……それに、霊力も感じないところを見ると、そもそも本当に乖離さんは人間なの？」

「そうね、乖離様はどうみても人間ではないわね……今戦っている姿を見ると尚更ね……」

今現在乖離様は魔理沙の放つ弾幕もスペカも一つ残らず斬り伏せていっている。あんなのは最早人間ではない。私でも放たれる弾幕とスペカ全てを防ぐなんて不可能なもの。

「でもね霊夢、乖離様は人間よ？その形ではなく、その『在り方』は紛れもなく人間なのよ……」

「何よその在り方って？」

「それは私からは言えないわね……本人に直接聞いてみるといいわよ？それと、能力についてだけど、乖離様は間違いなく能力持ちよ？」

「どんな能力なの？」

『根底から全てを覆す程度の能力』よ」

「……………は？」

霊夢は目を点にして間の抜けた声をあげた。まあそれも無理もない事でしょうね、言葉で言われた程度では理解できないものなのだから。

「まあ、能力名を聞いただけじゃ理解できないでしょうから、解りやすいようにいうなら、『万象変換能力』って感じかしら？」

「なにそれ？」

「要は、あらゆる事象、事柄を自分の自由な方向へひっくり返すものでも思ってなさい」

そう、乖離様の能力はありとあらゆる現象・状況・状態を、自分にとって幸になる方向に自由変換するもの。それが例え、私の『境界を操る程度の能力』であつても例外ではない。

「ちよつと待ちなさいよ！なにそのチート能力！意味解んないんだけど！」

「私も最初聞いた時は『なにその出鱈目能力?!?!』って思ったわ。でも、乖離様曰く『俺の能力にそんな万能性なんて無いぞ？そりゃ聞いただ

けならちートかもしれないけど、実際は半端なく燃費の悪い能力だぞ？』って言ってたわよ？」

「そ、そうなの？」

「ええ、乖離様が言うには、根底から覆すといっても等価交換みたいになるから大した役に立たないそうよ？」

「ふくん……無償で能力は使えないって感じなのね」

「そういう事ね……ただ、充分な対価を支払う事ができれば、幻想郷の一つや二つは簡単に消し飛ぶでしょうね」

「洒落にならない冗談はやめなさいよ……」

霊夢はジト目で私を見る。確かにそんな事になったらこちらとしては堪ったものではないわね……。でも——

「乖離様の本来の能力を以ってすれば、冗談抜きで可能なんでしょうけどね……」

「まって紫……それはどういう意味……？」

いつになく霊夢は私を真剣な目で睨みつけてくる。どうやらここは素直に話した方が面倒事にならずに済みそうね……。

「さつきあなたに話した『根底から全てを覆す程度の能力』はね、乖離様本来の能力の副産物なのよ？」

「は？能力の副産物？」

「そう、あの方の本当の能力はね……『原災を起こす能力』よ……もはやそれは『程度』を付けることすらおこがましい程の、絶対的な崩壊能力」

「原災……ッ!!紫、まさかそれって……!」

「察しがいいわね霊夢……そう、あの方の能力は……原初の地球の姿を呼び起こす能力」

原災……私もアレを初めて見た時は心の底から恐怖した。あんなものがこの世に存在していたなんて、無茶苦茶だと思っただぐらいよ……。あの方の振るう原災の力には境界すら存在せず、そこにあるのはただただ絶対的な絶望でしかないのだから……。

「そう……本当に、出鱈目な人なのね……」

「そうね……」

私と霊夢の間にしばしの沈黙が流れた後、私は二人の弾幕ごっこに意識を戻した。

既に魔理沙のスペカは残り一枚、その一方で乖離様は無傷のまま刀を構えて余裕の笑みを浮かべていた。

「それで最後か魔理沙？思ったより強かったから、結構時間掛かったな！」

「ハアハア……なんだぜそれ？嫌味かよ」

「そんなことはないさ……俺は本当に魔理沙が凄いと思ったんだよ」

「そうかい！ならこいつで、本当に最後だぜ！【魔砲・ファイナルスパーク】」

现阶段の魔理沙が持つ最大火力の一撃。それはあのマスパを大きく上回っており、私でさえ防ぐより回避を選ぶほどの火力を持つ。しかし乖離様は刀を仕舞い、一枚の布のようなものを取り出し――

「ハハッ！跳ね返せひ○りマント！」

○らりマントとやらで魔理沙の最大火力を打ち返してしまった。

んなアホな……

「嘘だろっ?!」

魔理沙は自分の最大火力を跳ね返され驚いた表情と声を発していた。しかし、その時だった――

「紫様、乖離殿、家の輸送が完了――え？」

仕事から戻った藍がスキマから出てきて、跳ね返されたファイナルスパークの射線上に立ってしまった。

「危ない！藍！」

「藍！逃げなさい！」

霊夢は猛スピードで藍を救出に向かおうとしているが、恐らく間に合わない。

私もスキマを開いて藍を救出しようとした。しかし、間に合う筈もない。

一瞬思考が停止しそうになったその時――

乖離様が藍の下に立っており、天の羽衣を藍に被せた。

「乖離殿っ!!」

藍の叫びが聞こえたと同時に私と霊夢、魔理沙の視界から真っ白な光とともに二人の姿が消えた。

その直後広大な爆発音と共に黒い煙が上がった。

### 三話 お面少女と人里へ

#### S i d e 乖離

「乖離殿、朝食の用意が出来ました。降りてきてください！」  
「分かった、今行く！」

俺は藍に呼ばれ、自室のある二階からキッチンのある一階へと足を運ぶ。

紫と藍によつて幻想郷に持つてきてもらった二階建ての家。俺は階段を下り、一度洗面所に向かい右手で顔を洗う。それから直ぐに藍のいるキッチンへと向かう。

道中からすでに美味しそうな味噌汁と香ばしい焼き魚の匂いがしてきた。

俺はドアノブを捻りキッチンへ入る。

「おはよう藍、今日も美味しそうだな！」

「おはようございませ乖離殿、今日の味噌汁はカツオ出汁を使ってみました。御口に合うと幸いです」

そう言つて藍は俺に一礼をして、朝食が用意された机の前に座る。俺は藍の向かい側へ座りお互い「頂きます」と言つて料理に手をつける。

「うむ、流石は藍！カツオ出汁の味噌汁もまた美味だな！それにこの焼き魚も絶妙な焼き加減だ！俺も多少料理に理解はあるけど、ここまで美味しくは出来ないな！」

「お褒めに預かり光栄です」

藍は俺に柔らかな微笑みを向けた。しかし本当に藍の料理は美味い！俺もそれなりには出来るんだが……さすが藍！俺に出来ない事を平然やつてのけるそこにシビれるあこがれるウ！

なんて、訳の分からないテンションになつてないでさっさと食べてしまおう。

「それより乖離殿……左腕の容体はいかがですか？」

藍は心配そうに、包帯で巻かれた俺の左腕を見ていた。



「ん？ああ、それなあ……多分あと一週間くらいで完治すると思うよ？俺は存外傷の治りは早いし」

「そう……ですか」

藍と俺の間に気まずい空気が流れた。どうやら藍はまだあの時の事を引きずっているようだ。

まったく、気にする必要はないというのにな。

この顛末は三日前の弾幕ごっこまで遡る

※※※

Side 藍

突然の事だった……。

私は紫様の命により、乖離殿の家を幻想郷への輸送を完了させ、その報告をしに紫様の妖力を辿った。どうやら紫様は博麗神社におられるらしい。そこで私はスキマを広げ、博麗神社に繋がった。私は仕事の報告の為スキマから出た。

「紫様、乖離殿、家の輸送が完了——え？」

突如感じた膨大な魔力。そちらに振り向くと、一直線に私の方へ向かってきていた。

感じた魔力から察するに、魔理沙の放ったものと分かったが、当の本人に視線を向けると驚きと焦りの表情をしていた。

私は何がなんだか全く解らず、思考が追い付いていなかった。

瞬間的にスキマを開こうとしたが、絶対に間に合わないと思った。アレを喰らえばいくら私といえどもタダではすまない。下手をすれば死ぬだろう。

思考が停止しかかったその時——私の頭に金色の布のような物が被せられた。

もうダメかと思ったその時、一瞬だが乖離殿が私の目の前に立っていたのだ。

「乖離殿っ!!」

私の叫びと同時に目の前が一瞬真っ白に染まりその直後、耳の鼓膜が破かれそうな程の爆発音が聞こえ、とてつもない衝撃波が生じた。しかし、私にはその衝撃波は届いておらず、むしろ衝撃波は私を避けるように消えてしまった。

砂煙が上がり、視界を遮られてしまっていた。感じ取れるのは紫様の妖力、霊夢の霊力、魔理沙の魔力だけだった。が、しかし——砂煙が消えていくと、私の前に一人の男性の姿が見てとれた。

「乖離殿っ！」

「ん？藍か……無事でなによりだ」

乖離殿は私が無傷であった事を確認して安堵の笑みを向けてくれた。

「藍！無事?!」

紫様は真っ先に私に飛びつき私の安否の確認をしてくださった。

「大丈夫です」と私が返すと、紫様は安心したように息を吐いた。そして直ぐに紫様は乖離殿へ視線を移す。

「乖離様、お怪我はございません……せ……ん……ッ!!」

「……大丈夫さ、咄嗟に結界を張ったし。けど、左腕はイカレちゃったけどな」

私は乖離殿の左腕を見て絶句した。乖離殿の左腕は肘の部分から真っ赤に変色しており、血管が切れたように、至る所から出血していたのだから。

「藍！乖離さん大丈夫——ッ!!」

「藍、乖離！大丈夫かぜ……なっ!!」

遅れてやって来た二人も乖離殿の左腕を見るなり絶句を禁じえなかった。

「ん？ああ、これなものは掠り傷みたいなものだから、大丈夫だ！」

「どこが掠り傷なんだ！」っと思っただけではないようで、三人とも今の私と同じ事を思ったに違いない表情をしていた。

「も、申し訳ございません乖離殿……私が未熟なばかりにお手を煩わせてしまって……」

「なんで藍が謝るんだ？これは俺のエゴでやった事だぞ？」

「しかし、私がつと強ければこんな事に——あうっ！」

突然頭に衝撃が走った。どうやら私は乖離殿に手刀と頭に喰らったようだ。

私の頭から手を放した乖離殿は呆れたように私に言った。

「あのなあ藍、俺なんかの心配より自分の心配をしろよ！飯にも女の子だろ？男が女を守るのは当然、それをいちいち女が口出しすんじゃないの！オーケー？」

「ですが——」

「え？何？藍さんもう一発喰らいたいの？」

「も、申し訳ありません……………」

流石にマズいと思った。なにせ先程までと違い、乖離殿の目からハイトが消えていたのだから…………。

「分かればよし！大体、女の子だからもつと自分の身体に気を遣えよ！傷ついていいのはこの世で男だけで充分だわ！」

そういつて乖離殿は博麗神社を後にした。紫様は私にニッコリと微笑み、乖離殿の後の追って行った。

「なんか……………凄い人だったわね、色々」と

「あ、ああ……………」

「そうだな…………。それより、私もお二人の後を追わねばな！」

「あ、ちよつと待つて藍！」

急いで飛び立とうとしたところ、突然霊夢に呼び止められてしまった。

「む、なんだ？私は急いでいるのだが？」

「その天の羽衣を少し貸して欲しいのよね。調べたい事があるから」

「……………これか？」

私は未だに被せられていた金色の布……………着物を手に取った。

しかしこれは天の羽衣というのか……………綺麗だ！

「そう、それ！こつちに渡してくれない？」

「残念だがそうはいかない。これは乖離殿の所有物だからな、私が判断して良いものではない」

「ふくん……………そう。なら今度本人に直接聞いてみようかしら？」

「そうするといいい。ではな！二人とも」

私はそう言っただけで二人の後を追った。

数秒でお二人に追いつき、そのまま乖離殿の家まで案内をした。

「そうそう藍、今乖離様は左手が使えないから、代わりにあなたが乖離様の身の周りのお世話をしなさい」

「はい、心得ました」

「いや、別に一人でも大丈夫なだけけど？でもまあ、やってくれるって言うなら、お言葉に甘えようかな？」

「任せてください乖離殿、これでも家事スキルなら幻想郷一であることを自負していますので！」

「おお！それは頼もしいな！」

「あ、もちろん下の世話もするのよ？藍」

紫様の爆弾発言に、私と乖離殿が同時に嘖き出したのは言うまでもないだろう。

※※※

再度乖離

なんて事があつた三日前。そして現在に至る訳だが、俺は超絶暇を  
持て余していた。

藍はどうしても外せない仕事が出来たと言って紫の所に行つてしまつたし、ぶつちやけ今の俺はやる事がなくてとても退屈なのだ…。

そこでふと、俺は天の羽衣を取り出した。

「……………傷はついてない……………でも、何故だろう？…こころなしかこの幻想郷に来て、日に日に天の羽衣の靈力が強くなっている気がするんだよな」

こんな事は前には一度も無かつた為、俺は少し不安なのである。

「これがもし壊れでもしたら、彼女絶対怒るよなあ〜」

天の羽衣を見つめながら過去の事を思い出していると、突然玄関のドアを叩く音が聞こえた。

「誰だ？客人か？こんな場所に？」

そう、俺の家は博麗神社から約三キロ離れた外れにあるのだ。しかもここは紫が言うには、俺の家が建ってる所は中級妖怪の巣窟らしいから、滅多に人など立ち入らない場所との事だが、こんなところに来る奴なんているのだろうか。

「はいはい今出ますね〜」

そう言っただけで俺は玄関まで足を運び、ドアを開けた。

「どちら様ですか？」

「こんにちは」

玄関のドアを開けると、そこには不思議なお面を被ったピンク色のロングヘアードとチェック柄の服に大きくふんわりとしたスカートが印象的な少女が立っていた。

「……………、こんにちは？」

「……………」

「えーつと？俺の家には何か用かな？」

「あなたは誰？どうしてこんな危険とこにいるの？」

「俺は氷鉋乖離……………外来人って奴だよ。それと、壮大なブーメランになっただけ？」

「私は強いから、大丈夫！」

「そ、そうなんだ……………」

お面の少女は拳を俺に突き出して強いアピールをしているが、表情がずっと無表情な為、とてもシニールな光景だ。

「えつと、君は？」

「私？私は秦ころろ！お面の付喪神で面霊気」

「へ〜、君は付喪神なんだね」

確かに、よくよく観察してみれば彼女の中には妖力が流れていた。しかもその妖力も決して弱くない。かなり自分の妖力操作に慣れているようだ。

「それで、こころちゃん？君こそどうしてここに居るんだ？」

「私は人里に向かう時はいつもこの道を使っている。だからこんなところの人に居ると分かって、少し心配になったから注意してあげよう

「思ったの」

「そうか、優しいんだな君は……でも心配はいらないぞ？俺は強いからな！」

「そうなの？なら安心！でも長居は禁物！たまにこの辺りに上級妖怪が出没するから」

「ご忠告ありがとうございます。気を付けるよ！あ、そうだ、こころちゃん折角だしお茶でも飲んでいかない？これも何かの縁だし、この幻想郷の事を色々教えてくれるとありがたいな？」

「わかった！」

そう言っところろちゃんは足早に家の客間に入って行った。

話していて思ったが、あの子は根っからの子供なのでは？

俺は一度キツチンへ向かい、お茶を用意してこころちゃんの居る客間へと向かった。

「お待たせ、お茶と茶菓子を持ってきたよ」

俺が客間に入ると、こころちゃんは先程片付け忘れていた天の羽衣をジッと見ていた。

「綺麗……」

「気になるのか？」

「うん……。これは乖離の物なの？」

「今はね」

「今は？」

「そうさ……それはあるお姫様からの預かり物なんだよ」

「お姫様?!どんな人なの？」

どうやらお姫様という単語を聞き、先程以上に食いついてきた。やはり妖怪は妖怪でも、女の子という事なのだろう。

「とんでもない美人さんだよ！長い黒髪で、和服がこれでもかかってくらい似合う……ね」

「優しいお姫様なの？」

「いや、断じてそれは無いな！俺なんて出会い頭早々『失せなさい、私はあなたのような底辺の人間を相手にしている暇はないの』って言われたからな」

「なら酷いお姫様?」

「いや、それも少し違うかな?確かにいい性格をしているけど、自分が認めた相手には礼儀を怠らない。そんなお姫様だったよ」

脳裏に甦る別れ際のあの言葉。

『どうか……どうかこれを持って行ってください。あなたと私を繋ぐ大切な物ですから………いえ、私の心配は無用です。私には彼女が付いてますから。それに私は不老不死……死を持たぬ者………そう、ですか………でしたら、いつの日かこれを私に返しに来てください。いつかまた会えるその日まで、私はいつまでもあなたをお待ちしております』

「いり——かい——乖離!聞いてる?」

「ん!ああ、ごめんなんの話だっけ?」

いかんいかん………客人が居るというのに自分だけの世界に入るとは………後でちゃんと謝っておこう。

それよりこころちゃん、顔近くないですかね?

「お茶とお茶菓子がなくなつた。補充を要求する」

「あく、もう無くなつちやつたか………君に出したので最後だったんだけどね」

「それは残念……」

そう言つてこころちゃんは無表情のまま悲しそうに下を向いた。心なしかお面まで変わつてない?

「ん?そう言えば、どうして乖離は左腕に包帯を巻いているの?」

あ、今更なんですなその質問。

「これはちよつと、ヤンチャしてしまつてね……」

「そうなの?ヤンチャしてる子なら、私の友達にもいるよ?」

「そうなんだね」

「あつ、そうだ!そろそろ人里に行かないと!」

こころちゃんはバツと顔を上げて立ち上がり、俺の手を掴む。

ん?なんで俺は手を掴まれたのだろう………。

「急がないと!ほら、乖離も早く早く!」

こころちゃんは急かすように俺の手をグイグイと引っ張る。

「あのさ、俺も行かないとダメなの？」

「?どうして当然の事を聞くの?」

あ、当然なんですね俺に拒否権なんて無いパターンなんですねわかりました。

「それじゃ、玄関で待っててくれない?財布取って来るからさ!」

「分かった!直ぐに来てね?」

そういうやいなやこころちゃんはまだしても足早に駆けていった。俺はとりあえず、食器云々を片付けて一端二階の自室へ財布を取りに行く。

財布を持った俺は、玄関まで行き、ドアを開けた。既にこころちゃんは準備万端の如く、空中で待機していた。

いやいや、俺は空飛べませんよ?

こうして俺はこころちゃんと共に(彼女は飛行で)人里に向かったのだった。



異変……そして宴会へ

## 四話 寺子屋教師と蓬菜人

S i d e 乖 離

こころちゃんに連れられて、俺は人里に足を運んでいた。この幻想郷に来た時から一度は行こうと思っていた場所である。紫曰く、主に人間主体の里なのだから……そりやそうか、人里って呼ばれているんだからな。

しかしこころちゃんの話によると、割と頻繁に妖怪も出入りをして  
いるらしい。

「つつてもあれだな……案内人里って所は遠いんだな」

俺とこころちゃんが俺の家を出て早三十分が経とうとしているのに、今だに人里に着かないのである。

「そうだね、でもいつもならもつと早くいけるんだけどな」

そう言っつてこころちゃんは無表情のまま隣から返事を返してくれ  
る。多分ではあるが、それは俺が空を飛ばない事への嫌味だと思  
う。

「いつもならどのくらいで着くんだ？」

「空を飛ばばすぐに着く。今は徒歩だからそれなりに時間が掛かっ  
ているんだと思う」

「さいですか……」

互いの間にどこか気まずい空気が流れた。そりや俺だつて空を飛  
べたら随分と楽なんだろうが、生憎と俺は空を飛ぶことは出来ない。  
加えて、俺は純粹に高所恐怖症である為、高い場所が苦手なのだ。（た  
だし特定の一部は例外）

「……………」

「……………」

そろそろこの空気はマズいと思う。俺の精神的に。しかもこのな  
んとも言えない空気のまま人里なんかに入ったら、絶対勘違いされて  
しまうだろう。結構ダメな方向性の……。

「うゝむ、どうしたものかねえ」

「何の考え事？」

「いや、ちよつとね……このまま人里に着くのかなあ？つと」

「道はこつちでちゃんと合ってるよ？」

「んゝ、そう言う問題ではないんだけどなゝ」

やはりダメだ。今の俺のコミュ力ではこの空気は変えられない。

そんな事を考えていると、唐突にこころが叫び出した。

「あ！見えて来たよ、人里！」

「む？おお、アレが人里かあ」

どうやら目的地到着と言ったところだろうか。目の前には、大きな門があり、そこを守るように立っている二人の武装をした人間と思わしき男。多分門番かなにかだろうと俺は解釈する。

俺とこころちゃんはそのまま門に近づいたところ、二人の門番に引き留められた。

「そこの者、止まれ！何者だ？ここらでは見ない顔だな？」

「俺は外人人って奴さ。つい最近この幻想郷に来たばかりでね、人里で少し買い物しようと思つて来たんだけど」

「外人人か……ん？貴様、その腕の包帯はなんだ？」

「ああ、これか？ちよいとバカをしてこうなった」

門番の一人が聞いて来るものだから、俺は包帯でグルグル巻きにされている左腕を門番に見せつけるように前へ出す。

「そ、そうか……では通れ！くれぐれも問題を起こすなよ？」

「はいよ」

そう言つて門番は俺とこころちゃんを通してくれた。疑問なのは完全にこころちゃんやんがスルーされた事なんだが……その辺どうなんですかね門番さん？俺はともかく彼女は妖怪なんです……。

あの後俺はこころちゃんの案内を得て、人里の中にある寺子屋まで赴いていた。理由としては、「人里の事ならまずは寺子屋へ」との事らしい。

道中すれ違ふ人達は、もの珍しそうに俺に視線を向けていた。しかし人里という事もあつて、なかなかの賑わいであつた。色んな店や家

が建っており、その中でも一番俺の目を引いたのが、中央広場を過ぎた際に見えた『龍神像』と記された大きな石像だった。

こころちゃん曰く、幻想郷の創造神でもあり、天界と呼ばれる世界の最高神なのだとか。

あれ？幻想郷の創造者は紫なのではなかっただろうか……。

色々と考え事していると、どうやら寺子屋とやらに到着したらしい。

目も前には『寺子屋』と書かれた看板があり、人里入口程ではないにしろ、大きな門が建っていた。

「着いたー！」

「着いたな」

こころちゃんは嬉しそうに無表情ではしゃぐ。やはり子供という事なんだろう。

そんな事を思いながら、俺は寺子屋の門を軽く叩いてみた。

コンコンと耳当たりの良い音がした。しかし反応無し。

少し時間を空けて、再度門を叩く。今度は先程より少し強めに。しかしまたも反応無し。

「ありや？居ないのか？」

「うーん、この時間帯だと慧音は中でみんなに勉学を教えている頃かも？」

「ふーん」

慧音とこころちゃんの口から出た人物の名前、その人がこの寺子屋の主人なのだろう。それも勉学を教えているとなると、この寺子屋は外の世界で言えば塾といったところだろう。

「仕方ないな、人に勉学を教えているとなると、邪魔をする訳にもいかないし、出直すか……」

「ん、誰だ？この寺子屋に何か用か？」

一度出直そうとした時、不意に後ろから誰かに声を掛けられた。声色からして女性だとわかる。俺は声のした方へ振り返ると、そこには白いカッターシャツに紅いモンペを着た銀髪の女性が腕に数本のタケノコを抱えて立っていた。

しかし、この気配は……………。

「で、まったく見ない顔だけど、この寺子屋に何の用な訳？」

銀髪の女性は少し威圧的に聞いてきた。

「俺は氷鉋乖離、外人人です。最近幻想郷に来たばかりで、知らないことが多いのでここに来れば色々と教えてもらえると、この子から聞いたものですから」

そう言っただけで俺は隣にいたところちゃんへと視線を移した。

当のこころちゃんはどう言うか……………。

「あ、妹紅！」

「ん？こころか、久しぶりだね。元気にしてた？」

「うん！」

妹紅と呼ばれた女性と、こころちゃんは知り合いだったらしく、二人共嬉しそうにしていた。

「おっと、自己紹介が遅れたね！私は藤原妹紅、ここの寺子屋に住んでいる慧音の友人さ。さつきは威圧的にしてしまって悪かったね」

「いえいえ、見ず知らずの男がこんなところに突っ立っていると、警戒するのは当然ですから」

完全に社交辞令のようになってしまっている。藤原さんは少し困ったように笑いながら「敬語なんていいよ、堅苦しいから」つと言ってくれた。

「そうだ！慧音に用があるんだろ？付いてきなよ、案内するからさ」

そう言っただけで藤原さんは寺子屋の門を開けて入っていった。俺とこころちゃんも藤原さんに付いて行く事にして、彼女の後を追った。

門を越えた先には、綺麗に手入れされた庭が広がっており、大きな屋敷のような物が建っていた。

藤原さんに付いて行っていると、ふと彼女が俺に言ってきた。

「そうか、乖離は外人人なんだね……………この幻想郷で何か困った事があったら何でも相談してくれよ？力になるからさ」

「ありがとう藤原さん」

「妹紅でいいよ。苗字で呼ばれるのはなんだか変な感じがするんだよ」

「わかったよ妹紅、何かあったら遠慮なく頼らせてもらう」

思うのだが、この幻想郷にはフレンドリーな人が多いのだろうか？俺の出会った人は自分の苗字ではなく、名を呼ばせようとする。と言っても、まだ数人しか出会ってないんだけどね……。

「そういえば、乖離はその左腕はどうしたんだ？随分重症のようだけど…」

「これは、バカやって自分で付けた傷だよ……」

「ふうん、いい医者を知っているから、紹介しようか？」

「大丈夫さ、こんな傷一週間もすれば直ぐに治るから」

「そうか……」と言ってそれ以上妹紅は何も聞いてこなかった。

妹紅と話をしていると、俺達はようやく屋敷の玄関に着いた。

紫の家もそうだったが、ここもここでもかなりの大きさだ。ざっと博麗神社の社六つ分だろうか。

俺が呆気にとられている間、妹紅とこころちゃんは平然と玄関のドアを開けて中に入っていた。

いやいやいや、不法侵入も甚だしいのだが？

「ん？どうした、来ないのか？」

「いや、これって完全に不法侵入だろー！」

「何を言っているんだよ？……いいから入って」

そう言っただけ妹紅は俺の手を掴み無理やり屋敷の中に入れた。

妹紅はこの屋敷に何度も来た事があるのか、迷う事なく慣れた足取りで進んでいく。俺とこころちゃんはその後を追っていった。すると、人の声が聞こえて来た。耳を澄ますと、それは子供の声と大人の女性の声だった。

どんだんその声が大きくなり、俺達はその声の発生源と思われる一室の前まで来た。

「慧音、入るぞー！」

妹紅はそう言うや否や、扉を開けそのまま部屋に入っていた。

俺とこころちゃんも妹紅に続き、部屋の中に入った。

「妹紅、来るなら来ると先に連絡をしてくれといつも言っているだろう？」

「まあまあ、あーこれ差し入れね？」

妹紅は腕に抱えていたタケノコを慧音と呼んだ青み掛かった銀髪の女性に手渡した。

「おおー！ありがとう妹紅！……ではなくてだな？毎度毎度、お前は何度言えば分かるんだ！」

「ハハハ」と妹紅は笑って受け流す。

「ハア、まったく……ん？ところで妹紅、そちらの二人は客人か？いや、一人はこころか？」

「はじめまして、俺は氷匏乖離。外来人です」

「はじめましてだな、私は上白沢慧音。ここ寺子屋で教師をしている。よろしく頼む」

「ええ、こちらこそ」

俺は上白沢さんに一礼をして、教室の周りを見渡した。

最初に目に入ったのは、いつぞや見掛けた三人組だった。

右の寝ている水色、真ん中の慌てている緑、左のそーなのかー。その他の他は知らん。

「えつと、乖離でいいか？」

「ええ、大丈夫です」

「では、どうして乖離はここに来たんだ？」

「こころちゃんから、ここに幻想郷の事を良く知る人物がいると聞いたんです。それは上白沢さんで間違いありませんよね？」

「慧音で構わないぞ？いかに、私はこの人里と幻想郷の歴史などを沢山知っているからな！」

そう言つて慧音さんは得意げに胸を張る。

「しかし、アレですね。今のこの場はかなり異質だ！なんせ、人間一人と妖怪妖精多数、それに加えて半妖と不老不死まで居るんだから、これは珍しい」

「なっ!!」

「？」

妹紅と慧音さんは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をして驚いており、こころちゃんは何の事かわからないといった顔（無表情）で首を

傾げていた。

「君は今私を半妖と言ったのか？それだけじゃない、妹紅のことも不老不死と……」

「いつから気付いていたんだ!？」

「まず妹紅は出会った時に気付いたよ……俺の知り合いに不老不死が二人いてさ？その二人と同じ気配を感じたからね！慧音さんは、今さっき気付いたよ……なにせ霊力と妖力を同時に感じたからさ」

妹紅と慧音さんは信じられないといった顔で固まっていた。すると、寺子屋の門を潜ってから一切喋らなかつたところちゃんが口を開いた。

「そういえば、乖離からは霊力も妖力も何も感じないけど、本当に人間なの？」

「あ、確かに……」

「言われてみれば、そうだな……乖離、君は一体……」

なにやら妙に警戒されているようなので、俺はところちゃんの間に正直に答えた。

「俺は少し特殊な存在でね……人間ではあるのだが、生まれついて霊力も何も無かつたんだよ」

「しかし、それでは生まれた瞬間から死んでいる事にならないか？人なら霊力、妖怪なら妖力、そして神なら神力と、生きとし生ける者たちにとってこれらは生きる上で絶対になくってはならないものの筈だが？」

「その通りです慧音さん。しかし、俺は本当に霊力も妖力も、ましてや神力すら持ち合わせていない。ならそんな俺が何故生きているのか？答えは簡単！俺は世界のどこにでも溢れている自然エネルギーを糧に生きているからですよ！」

「自然エネルギーって何？」

「どうやらところちゃんには自然エネルギーを知らない様だ。仕方ない、ここは一から教えておくか……」

「なるほど、乖離は妖精の類だったのか！」

「うん、全然違うな！」

「こころちゃんに1から自然エネルギーに関して説明をしたが、どうやらおかしな方向へ理解が進んでしまったらしい。まあ、あながち間違いない気もするんだが……。」

「しかし驚いたな……人の身で自然エネルギーを糧にしている者がいるなんて……そりゃ霊力も何も感じない筈だ」

「ん？ちよつと待つてくれる？自然エネルギーつてそもそもなんな訳？」

「……………」

さつきこころちゃんに話したばかりなのに、まだ理解できてないのか？

仕方ないので妹紅にも簡単に説明してやるとしよう。

「自然エネルギーつてのは、要するにだ！世界に満ち溢れている空気が酸素、太陽の光みたいなものだよ！あ、因みに自然エネルギーだから生命からあふれ出す『穢れ』もその一つに挙げられるかな？」

「穢れ……………」

穢れという単語を聞いて、妹紅その単語だけを呟いて黙りこんでしまった。

「妖精も、元を辿れば自然エネルギーが生み出した意思を持つ概念生命でもあるからな！」

「がい……………なんだっけ？」

「こころちゃんにはちよつと早かったかな？」

俺は苦笑いを浮かべていると、突然真横から大きな声が聞こえて来た。

「ああー！こころがいる！それに何だ？アタイ達と同じ感じの奴までいるぞー！」

どうやら先程まで寝ていた水色妖精が目を覚ましたらしい。起きて早々このテンションとは、恐れ入るな。

「初めましてだな！俺は氷匏乖離、君は？」



「アタイはチルノ！げんそーきよー最強の妖精だ！」

幻想郷最強の妖精……これまたビツクなのが出て来たな。

「チルノか……君は幻想郷最強なのか？」

「当然！アタイったら誰もが知ってる最強の妖精だもん！」

「この前私と弾幕ごっこして完敗してたけど？」

後ろからこころちゃんの手厳しい発言が聞こえた。空気を読んで最強って事にしておこうと思ったのに、子供の純粹さは恐ろしいな。

「う、うるさい！あの時はアタイ本気出してないからノーカンなのよっ！」

「ならもう一回勝負する？」

売り言葉に買い言葉ってことわざがあるけど、こころちゃんもなかなか大人げないな。いや、そもそも子供だったわ。

そんな一触即発の二人を静止しようとした時——突然外で大きな爆発音が聞こえた。

「なんだ今のはっ！」

「爆発！」

俺と妹紅と慧音さんは部屋の扉を開けて急いで外に出たのだった。

そしてこれが、俺にとって初めての『異変』であった事に、まだその時は気付いていなかった。

## 五話 初めての異変

S i d e 妹 紅

私と慧音、乖離は先程聞こえた爆発音の確認の為、急いで寺子屋を出て中央広場に向けて走って急行していた。

「一体今のはなんだったんだ！明らかにただ事ではないだろう」

「わからない！でもさっきの爆発音は相当大きなものだったから、人里で何かあったのには変わりないだろう！」

慧音は随分と焦っている。それも無理はないと思うけど……。彼女はこれでも里の守護者であるのだから。

そんな事を思いながら走っていると、突如真横の家が大きな音を立てて崩壊した。そして崩壊した家の中から奇妙な生き物が姿を見せた。

私達は立ち止まり、その生き物を見て驚愕した。頭が獅子で胴体が黒山羊、コウモリのような羽を生やし尻尾が蛇の怪物だった。

「な、なんだこいつ！」

「わからない……だが、どうやら敵である事に違いはないな……。来るぞっ!!」

慧音の警告と共に、不明の怪物は咆哮を上げ私達三人に突貫してきた。

私は大きく跳躍して回避する。どうやら他二人もうまく躲したよ。うだ。不明の怪物は勢いを殺しきれないまま別の家にぶつかった。その衝撃で家は倒壊し、砂煙が上がった。あの突進はまともに喰らわない方がいいだろうな……。

「二人共無事か？」

「俺は問題ない」

「私も大丈夫だ……しかし、なんなんだあの生物は？いや、妖怪なのか、アレは？」

「多分だが、アレはキメラだろうな。西洋ではキマイラ、東洋では鵄とも言うらしい」

キメラ……聞いた事のある名だ！それにキマイラ……鶴か……ん？鶴……だつて？

私の頭にはある一匹の大妖怪の姿が浮かびあがった。

「まさか……」

「妹紅？どうした、心当たりでもあるのか？」

「ああ、少しな」

「それよりさ……また来るぞ！」

乖離の言葉を合図に、先程キメラが突っ込んでいった家の破片が吹き飛び、中からうねり声を上げながらキメラが現れた。

仕方ない……こうなったらやるしかないな……。

「慧音、乖離……下がってて、私がやる」

「妹紅、手を貸さなくていいか？」

「大丈夫だよ！それより慧音は先に行ってくれ！こんなのが他にいないとも限らない！」

「そうだな！任せたぞ妹紅！」

慧音は私にこの場を任せると言っただけで先に中央広場へ向けて走っていった。

「乖離、こいつは私が抑えるからあんたは早く逃げろ！」

「俺の事は気にするな……それより、ぼさつとするな！」

乖離が叫んだと同時に、キメラは先程のように突進してきた。驚いた事にその速度は先程のものより速かった為、私は慌てて空を飛んで回避する。

「クソッ！」

思わず悪態をついてしまったが、今は気にしないでおく。

私は体中から炎を開放し、キメラを見習って奴に突進した。そして炎の拳を思いつきキメラに叩き込んだ。キメラは悲鳴を上げ、吹き飛んだ。だがこんなものでは終わらない。私はキメラを追撃し、そのまま今度は顔に炎の膝蹴りをお見舞いしてやった。

「まだまだああ!!」

次はキメラの蛇の尻尾を掴んで、空へ飛びあがった。私は尻尾を強く握りしめ、体から炎を放出した。その炎はキメラを覆い全体を満遍

無く焼いていった。

炎が消えて、黒焦げになったキメラを放し、私も地上に降りた。

「ふう、こんなものかな」

私は慧音を追うために乖離に声を掛けようとした時——背中を何者かによつて切り裂かれた。

「なっ!!」

驚いて後ろを振り返ると、先程黒焦げにした筈のキメラが立っており、前脚からは私の血と思わしき赤い液体が付着していた。

私は再度燃やしてやろうとしたが、体が痺れて動けなかった。どうやらあのキメラの爪には麻痺毒があるようで、体の自由が利かなかった。すると、キメラは私に飛びつき押し倒してきた。胸元を前脚で抑えられており、爪が肉に食い込んでいた。

「うっ、ク、クソ……」

体が痺れてしまって動かない。キメラは呼吸を荒くし、口からボタボタと血の混じった涎が出ていた。相当私の攻撃が効いていたのか、それが体を急速に冷やし体温の上昇を抑えるものと直ぐにわかった。しかし、この状況は非常にマズいものだろう。

私は不老不死だ。このままこのキメラに殺されても、時間が経てば復活する。だが、近くににいる乖離は別だ。私と違い彼は普通の人間なのだ。このまま私が殺されれば、間違いなく次の標的は乖離になってしまうだろう。

それだけは絶対にダメだ！関係のない一般人を襲わせるなんて冗談じゃない！

そう思い私は、精一杯の力で一枚のスペルカードを使用しようとした——その瞬間、紫色の斬撃が私の目の前を通り過ぎ、キメラを頭から真つ二つに切り裂いた。

「なっ!」

突然の事に私の思考は追いついていなかった。私が困惑していると、乖離がひよっこりと顔を見せた。

「大丈夫か妹紅?」

「か、乖離!い、今のは!」

「落ち着け、キメラは俺が殺したからもう大丈夫だ」

乖離が殺した？私の思考はまだ状況の整理が出来ておらず、訳がわからなかった。ふと上を見上げると、乖離は右腕に一本の紫色の刀を持っていた。

あんなの持ってたっけ？

「そ、そうか……乖離が殺ったのか」

「油断大敵だな」

乖離は笑いながら刀を消した。どういう原理なのかはわからないが、兎に角私は乖離に助けられたという事は理解した。私は胸に食い込んでいるキメラの腕を引っこ抜き、立ち上がった。

「ありがとう乖離、助かったよ」

「礼には及ばないさ、俺は当然の事をしたまでだからな！」

「そっか……。あのさ、さっきのが乖離の言っていた自然エネルギーってやつなの？」

「その通りだ。あれが俺の使う自然エネルギー『凶』ってやつだよ」

「凶？」

「人間や妖怪でいう『穢れ』と呼ばれる類の物さ」

「穢れ……………」

「つつても、さっき使ったあれはその穢れの根源みたいなもんだよ」

「な、何それ？」

「説明は後でな！それより、慧音さんを追ってくれ！俺が感知しただけでも、さっきのキメラはこの人里に五、六体存在している。あれを全て相手にするのは幾ら慧音さんでもほねだろうからな！」

確かに、あんなのがまだ五、六体いるのなら幾ら慧音でも厳しいだろう。

「分かった。それより、乖離はどうするんだ？」

「俺はあのキメラ共の親玉を潰しに行くよ！妹紅は人里と慧音さんを頼む！多分直ぐに応援が来るだろうからさ！」

「了解！無茶するなよ！」

「お前がな！」

乖離は足早にどこかへ去っていった。別れ際に皮肉を言われた気

がしたが、まあ気にしないでおこう。

## S i d e 乖 離

妹紅と別れて、俺はダツシユである場所へ向かっていた。走っている道中、ふと置き去りにしてきた寺子屋生徒達を思い出す。

「こころちゃん達を置いて来てしまったが、大丈夫かな」

などと呟き彼女達の身の安否を心配したが、直ぐにその考えは消え去った。

こころちゃんは妖怪だし、彼女の内包する妖力は相当なものだ。まず油断さえしなければ負ける事はないだろう。それには幻想郷最強（仮）の妖精チルノもいるのだから、まず問題ないだろう。

それ以外にもそれなりの手練れもいた気がしたし、心配するだけ無駄だろう。

そんな事を考えていると、大きな木の壁が見えてきた。どうやら人里を覆う壁に着いたようだ。俺は走る速度を落とすことなく、むしろ更に速度を上げた。

そして、俺は自身の自然エネルギーをブースターの如く放出し、人里の壁を跳躍して飛び越えた。

着地の際にもう一度自然エネルギーを放出し、高度からの着地による衝撃を殺した。

着地による衝撃は殺していたが、やはり痛いものは痛かった。しかし、今の俺にはそんなものを気にしている暇など無かった。なにせ――

「おいおい、勘弁してくれよ……。流石にこの数はズルくないか？」

そう、俺の目の前には数十を軽く超えた数のカメラがこちらに殺意の視線を向けていたのだから。

しかもあのカメラ共の中には数体他の連中より明らかに大きく、それでいて強靱そうなのがいたのだ。

「やれやれ、仕方ないな……。相手してやるよ子猫共！」

俺は右手に紫色の刀を持ち、自然エネルギーで自身の身体能力を強

化して、キメラの群れに突っ込んで行った。

そこからはまさに惨劇と呼ぶに相応しいものだっただろう。

数十というキメラを一斉に相手とり、一匹たりとも逃さず全てを殲滅した。

最初の一匹は横に一薙ぎして、上顎と下顎をさよならさせ、一緒に胴体ともお別れさせた。続く二匹目は縦に刀を斬り降ろし、頭を真っ二つに切り裂いた。これは人里のキメラと同じだ。更に次、次、次、次、次と……数十以上いたキメラは早くも残り三匹となった。だがこいつ等を逃がす道理も無く、俺は自然エネルギーを刀に収束させ、斬撃波を放ち三匹同時に切り殺した。

しかし、俺にはこの殺していったキメラの行動に、違和感を覚えた。「どうなってるんだこいつ等？ 最初の一匹ならともかく、二匹三匹と、目の前で仲間が殺されれば、恐怖の一つでも覚えるだろうに……。だがこいつ等は俺に一切恐怖を感じていなかったぞ？」

そう、こいつ等は俺に恐怖のきよの字も感じてすらいなかったのだ。まるで、目の前の敵を殺す為だけに創られた機械のように……。「なんにしても、調べる必要があるそうだな。さてさて、こんな惨い事をするのは一体どこの外道だ……」

無意識の内に俺は怒りを露わにし、自然エネルギーを放出していた。その影響で、周り一帯がざわめき始め、草木が枯れていった。それに気づいた俺は少々熱くなり過ぎた頭を一度冷やし、放出していた自然エネルギーを止めた。

「やれやれ、俺もまだまだ子供と言う事だろうな……。こんな事で頭に血が上るとは……」

ひとまず俺は、この妙な事件の犯人を捜すべく、目の前の森の中に入った。

Side  
???

「いや〜さっきのは驚いたな……。私のキメラをあかも容易く切り殺していく人間がいようなんて……。それに、人間とは思えない位と

んでもない殺気を放っていたし、あの人間は何者なんだ？」

私はクスクスと笑いながら、先程の人間について考えていた。

常人とは思えない程の戦闘能力。あれはいくつもの修羅場を潜り抜けて来た者のソレだった。更に、あの人間は左腕を包帯で巻いており、その左腕を使おうとしなかったのを見る限り、負傷しているのだろう。あんなのがどうやって負傷するのかは知らないけど……。

それを考慮するに、あの人間は間違いなく彼女と同等の強さだろう……多分。

だが――

「あの人間には興味はあるけど、そろそろ二人共戻ってくる頃合いだろうし、さっさと始末するか……。私のキメラを容易く葬れるだけの力は評価しよう……。だが――お前はここで終わりだな！」



## 六話 ひっくり返して壊して不明にして

### S i d e 霊夢

久しぶりに異変が起きた。それも今回は今までのと違い随分と質の悪い異変だ。

私は今日のお昼頃、縁側で遊びに来ていた魔理沙とお茶を飲んでいたら、突然倉庫の方で大きな爆発音のようなものが聞こえた。驚いた私と魔理沙は湯呑を置いて、直ぐに倉庫の方に向かった。倉庫が見えた時には既に半壊状態になっており、私と魔理沙は口を揃えて「どうしてこうなった……？」と、間の抜けた声を出していた。

呆気にとられていると、半壊した倉庫の中から頭が獅子で胴体が黒山羊、尻尾が蛇の形をした化け物が現れた。

「な、なんだぜあれ？」

「知らないわよ！大体、こんなの幻想郷に居たっけ？」

魔理沙は「いや、居ないだろ……」と答え、八卦炉を取り出していた。

私も数枚のお札とお祓い棒を構えた。こつちに気付いた妙な化け物は、グルグルとうねり声を上げ、突然私達に突進してきた。私と魔理沙は左右別々に化け物の突進を躲した。

「なんなんだぜこいつ！急に襲い掛かってきやがって！」

魔理沙は悪態をつきながら自分の箒に乗って空中へと避難した。

私も魔理沙を追うように飛翔した。

「あの化け物がなんなのかは後よ！今はあれを退治するまで！」

「そうだな！なら、私があいつをブツ飛ばすぜ！」

そう言つて魔理沙は八卦炉を化け物に向けた。あの化け物は空が飛べないのか、ずつとこちらを見上げていただけだった。

「吹っ飛べー！【恋符・マスタースパーク】」

極太の光は真っ直ぐ化け物に急行していき、そのまま化け物を？み込んで爆発した。砂煙と爆煙が上がり、私達の視界を遮った。毎度の事思うけど、魔理沙は加減つてものを知らないのかしら？誰が挟れて

しまった庭の土を直すと思っっているのかしら……まあ紫だから問題ないんだけど。

「どうだぜ？やったか？」

「あれを喰らってまともに立っていられる筈ないでしょ？」

「ま、それもそうだな！」

しかし、何故か私にはどこか嫌な予感がしていた。魔理沙のマスクをあけ物は避ける事もせずまともに喰らったのだから、生きていても相当な重症な筈なのに、どこか安心出来なかった。

ようやく砂煙と爆煙が晴れてきたから、私と魔理沙はさっきの化物を確認する為少しだけ高度を落とした。

地面には大きな穴が空いており、その中央で血まみれになり横たわっていた化け物の姿があった。

「やったぜー！アハハハ！！」

魔理沙は嬉しそうに高笑いをしていた。目の前の化け物はピクリとも動かない。なのに、やはりこの嫌な予感は拭いきれないままだった。

私がこの嫌な予感が拭いきれないで、頭を悩ませていた時——私の博麗の巫女としての勘が大音量で『人里に向かえ！』と告げてきた。

私は咄嗟の判断で、急いで魔理沙の手を引いて猛スピードで博麗神社から離れ、人里へ向かう。

「なっ！ど、どうしたんだぜ霊夢！」

「話は後よ魔理沙！今は人里に向かうわよ！」

「はあ!？」

「私の勘が人里に向かえって告げているのよ！よく分からないけど、凄く嫌な予感がするのよね……」

「お前が言うとお洒落にならないぜ霊夢……!」

魔理沙は私の勘の良さを知っている為、状況の理解は出来なくても私を信じて付いて来てくれた。

私は魔理沙の手を放し、出来るだけスピードを上げて人里へ急行した。魔理沙もスピードを上げて私の後を追った。

『やれやれ、あいつの創ったキメラをこんな惨い殺し方してくれちゃってさ……ホント、どいつもこいつも人間って奴は……でもまあ……いいぞ！どんだん殺せ！そして沢山の憎しみを生み出せ！それが私達の力となる！フフ、フハハハハ!!』

※※※

私と魔理沙が人里に着いた時、私は絶句した。

数十……いや、数百を超える数の化け物の大群が人里を囲むように押し寄せていたのだから。

一瞬幻想郷に末期でも訪れたのかと錯覚してしまいそうになった。魔理沙に至っては清々しい程の笑顔で「私帰るぜ！」などと呟いたくらいなのだから、多分幻想郷は明日で滅ぶわね！

よし……私も帰っていつも通りお茶でも飲もうかしら？

「なんていいわけないでしょうがっ!!」

「うわっ!どうした霊夢!」

自分で自分にツツコミを入れた事で、思ったより大きな声がでてしまい魔理沙が驚いた表情をしていた。そんなことより――

「どうしたもこうしたもないわよ!このままじゃ本当に幻想郷が滅んじゃうでしょうが!魔理沙、さっさとあの化け物共を退治して主犯をとっ捕まえてゲンコツをお見舞いするわよ!」

「何言っただげ霊夢、あんな数どうにかなる訳ないだろ!」

「どうにかなるならないの問題じゃないでしょ?どうにかするのよ!」

「しかしだな霊夢……」

私と魔理沙がそんな問答を続けていると、人里の正門付近で大きな火柱が上がった。あの炎はおそらく妹紅のものだろう。妹紅が戦っているという事はきつと慧音も動いているはず……。

「今の炎は、妹紅か?」

「多分そうね……。ひとまず、妹紅と合流しましょう!彼女なら力に

なってくれるはずよ？」

「そ、そうだなーよし、急ごう霊夢！こうなったら自棄だぜ!!」

魔理沙は覚悟を決めたようで、私より先に火柱の上がった場所に急行していった。まったく、さっきまでの弱気はどこに行ったのやら。

私と魔理沙は人里の正門に着くと、ふと見知ったお面妖怪がおり、その周りには化け物の死骸が幾つも転がっていた。

「ごころー！」

「む？この声は……霊夢？」

いつも通りの無表情で、私のいる方へ振り向いた。

「これ、あんたがやったの？」

「うん。妹紅に手伝って欲しいと頼まれたから……」

「そう……それで？その肝心の妹紅はどこにいるのよ？」

「妹紅ならこの正門を私に任せて人里の外周を回ってくるって言ってたよー！」

ごころに正門を任せしたのは賢明な判断と言えるわね……。それより、妹紅は人里の外周を回るって事は、あの数の化け物を全て相手にする事になる訳だから、いくら彼女といえど流石に厳しいはず……。

「ごころ、妹紅がどっち側に行ったか知らない？」

「右方面に飛んでいったよ！」

「分かったわ……魔理沙、あんたはごころとここで正門を死守して！私は妹紅を追うから！」

「わ、分かったぜ！」

魔理沙とごころにこの正門を任せられた私は、ごころに言われた通り右方面に向かって飛んだ。

それより、こんな時あのスキマ妖怪は何をしているのかしら？ノコノコと私の前に現れた時には、一発ぶん殴ってやるべきよね！

なんて考えて飛んでいると、案の定私の前にスキマが開き中から胡散臭い笑みを浮かべた紫が出て来た。

「は〜い霊夢♪異変解決の方は順調かしら？」

私はこの超絶腹が立つ程の笑みに堪忍袋の尾が切れ……いえ、もは

や爆発して――

「今までどこで油を売ってたのよこのスキマ妖怪!!」

そう叫んで私は紫の顔に全力のドロップキックを喰らわした。

「あぐうー!」

情けない悲鳴を上げて紫は吹っ飛んでいった。しかし、私はあの程度では許さない!猛スピードで紫を追いかけ、そして追いついたところ――

【霊符・夢想封印】

「ちよつ、霊夢……それはっ!」

なんか聞こえた気がしたけど、関係ないわね!

七色別々に輝く七つの光の玉は、非情無情に紫に襲い掛かり、色とりどりの爆発を起こした。

多分これであの迷惑スキマ妖怪は死んだはずね!

「フウく、スツとしたわ!」

私のストレス発散も済んだ事だし、妹紅を探しに行こうとした時、再度私の前にスキマが開き、ボロボロの紫が出て来た。

「ハアハア……霊夢、あなたねえ……私じゃなかったら死んでたわよ?」

「あれ?死んだと思ったのに、死んでなかったのね」

「悪かったわね死んでなくて……。そうじゃなくて、この異変の主犯格が判明したのよ」

「ふくん……。で、誰なのその主犯って?」

「少し待って、あなたの勢でこっちは息がかなり乱れているんだから……」

そう言って紫はスキマから湯呑を取り出し、それにお茶を淹れて勢い良く飲み干した。

「フウ、ちよつと落ち着いたわ……」

「ならさっさと話してくれない?私急いでいるんだけど?」

「分かっているわよ……。それで、その主犯格っていうのが……あの指名手配中の天邪鬼と、正体不明(笑)の大妖怪なのよ」

指名手配中の天邪鬼……それに正体不明の大妖怪……。

私の頭に真つ先に浮かんだのは『鬼人正邪』と『封獣ぬえ』というイタズラ好きのポンコツ妖怪達だった。

「で、その二人がこの異変の主犯なの？」

「ええ、まず間違いなくね……」

「それが分かっているのなら何であんたが退治しに行かないのよ！今つてある意味幻想郷の危機でしょ？」

「確かにそうね……。でも、妖怪退治はあなた達人間……。特に、博麗の巫女の仕事でしょ？」

ダメだこのスキマ妖怪早くなんとかしなないと。

「あつそ！なら私はもう行くわよ？妹紅と合流しないといけないし！」

「あの蓬莱人なら多分そう遠くないはずよ？」

紫はそう言つて私に手を振りながらスキマの中に消えていった。

紫の情報が正しければ、妹紅は近くににいるはずね。

私は一度自分の頬を軽く叩き、妹紅を追った。

S i d e 妹紅

乖離達と別れてどのくらい経つただろうか……。私は一度慧音と合流して、その後慧音に人里の正門を頼まれた。私は慧音に言われた通り正門に来ていたが、やはりそこにもカメラが数体いた。カメラ達はまだ私に気付いていないようで、正門の門番二人を囲むようにしていた。私は気付かれないようにカメラ達に接近して、隙を突いて門番二人を高速で救出し、慧音の所まで避難するよう指示をして、追つて来たカメラ達を炎の柱を展開し、一掃した。

その後この異変に勘付いたのか、こころが私の下まで駆けつけてくれた。

私はこころからとんでもない事を知らされた。

こころ曰く『この人里周辺に、ううん……。人里全域に数百を超える化け物が近づいている』と言う話だった。

私はこうしてはいられないと思い、こころに正門の警備を頼んだ。

以外にもこころはノリノリで了承してくれたから、正直助かった。今度何かでお礼をしないとね。

そして今現在私は、人里外周を右回りで移動しながらキメラの大群を殲滅していた。

「まったく、何体いるんだよこいつらー！」

先程から殺せど殺せど、降って湧くように次から次へとキメラ達は現れる。

この手の輩はまったくもって厄介だ。こいつらは恐怖する事なく、仲間が沢山殺されているというのに、まるで感情の無い虫の如く襲い掛かってくる。

「しつっこいんだよー！【不死・火の鳥―鳳翼天翔】」

私は大きな炎の鳥を作り出し、それを迫りくるキメラ達に向けて放った。

炎の鳥に触れたキメラ達は一瞬で火だるまと化し、数秒経てば絶命していた。

だが、それでもまだまだキメラ達は湧き続けた。流石にもう我慢も限界に達し高度を上げ、もう一枚のスペルカードを使用した。

「いい加減にしろー！お前らはあのバカ姫並に鬱陶しいんだよー！【パゼストバイフェニックス】」

私の身体は炎で燃え上がり、その炎は段々と形を作り始め、最後には一羽の大きな炎の不死鳥へと変わり果てた。

「もう灰も残してやれないからな！燃え尽きろおお！！」

炎の不死鳥から放たれる赤い弾幕は、キメラに命中した途端灰も残さず消し去った。

私の取った戦法は一つ……：相手が数の暴力ならこっちは質の力押しだ！

逃げ惑う訳でもなく、恐怖する訳でもなく、キメラ達はただただ無意味に私の作り出した炎の不死鳥が放つ弾幕に当たって消えていくだけの光景に、私は憤りを感じずにはいらなかった。

「なんなんだよお前らは！無意味に突っかかって来るくせに、仲間が殺されてもケロっとしてさあ！さらにはその光景に恐怖も何も感じ

ないなんて、生き物として破定してるんだよ!!」

「そりやそうだよ。そういう風に改造?したのはぬえちゃんだもん」

私は突然後ろから聞こえた声に驚き、声のした方へ振り返った。

そこに居たのは――

「こんにちは、蓬萊人さん」

金色の髪の毛に紅い瞳、背中には宝石のような翼が生えている十代前半の少女。間違いない!こいつは……。

「フランドール……スカーレット」

「私の事憶えてくれてたの?嬉しいわ!」

無邪気に喜ぶフランドール……。何故……何故こいつがああキメラの事を知っている?それにぬえだつて?やっぱりあいつの仕業だったのか!

それより気になったのは、何故この暴走吸血鬼がここにいるのかという事だ。

吸血鬼は日の光に弱いはずだ。なのにこいつは白昼堂々私の目の前に居る……。一体何だどうなっているんだ?!こんなの前代未聞だ!

「フフフ、何でって顔してるね?理由は教えてあげないけど、ヒントなら教えてあげるよ?」

「ヒントだと……?」

私は殺気を含んだ目でフランドールを睨みつけるが、フランドールは私の殺気など何処吹く風のように受け流した。

「そうだよ……ヒントっていうのはね?今の退屈な幻想郷だよ!」

そう言つてフランドールは、狂気的笑みを浮かべた。

私は臨戦態勢をとろうとした時――突然右腕が爆発し、肉片が辺り一面に飛び散った。

「なっ!」

「あれ?思つたより簡単に壊れちゃつた……なんだ、蓬萊人つて不老不死って聞いてたけど、案外脆いのね?」

忘れていた。この吸血鬼の能力を……。こいつの能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』だ!幻想郷でもトップクラスの危険能力に数えられる存在だ。



私は破壊された右腕を再生させるが、その瞬間——今度は私の胴体が爆発して、その場で私は意識と失った。

「うくん……やっぱり退屈ね、今の幻想郷は……。お姉様も、咲夜も、パチエも、美鈴も、霊夢も、魔理沙も最近全然遊んでくれないし……。あ、でも正邪ちゃん的能力ってすごいよね！お日さまの下でも全然平気だし、喉も渴かないし！あっ！そういえば、ぬえちゃんが早く来てって言ってたんだっけ？急がなきゃ！」

七話 鬼人正邪とフランドール・スカーレットと封獣  
ぬえ

S i d e 乖 離

人里から離れて一体どのくらい経ったのか。数十を超えたキメラ共を一掃してからというもの、まったくキメラに遭遇していない。キメラはおろか、動物や虫でさえ見ていない気がする……。動物の代わりに俺の周りには、木！木！木！

三つ揃って森だ！なんてアホな事を考えている暇はないが、兎に角俺の周り一面は森で囲まれていた。人里を慧音さんと妹紅が守ってくれているからいいんだが、さつきから何の気配も感じないというのは些か異常だ。

「まったくどうなってやがる……。あのキメラ共は全く見つからないし、さつきまで感じていた強い気配も突然消えてしまっているし……。ああーもう！マジでどうなってんだ！」

行き場の無い怒りを露わに、俺はその場で地団太を踏んだ。

しかし、本当におかしい。ここまで来る道中、確かに感じていた強い気配が突如として消えてしまったのだ。これでは搜索の目処も立たないばかりか、最悪俺だけが迷子なんていう可能性もある訳だ。そんなのは御免被りたいのだが……。

「焦っていても仕方ない。一端人里に戻って妹紅達の手伝いでもしようかな……。ん？この霊力と魔力は」

俺が頭を悩ませていた時、急速で人里へ接近する二つの力を感じ取った。おそらく霊夢と魔理沙だろう。この妙な事件に勘付いて、人里の安否確認に来たといったところだな。

あの二人が動いたという事は、いよいよもってただ事ではないらしい。最初からただ事ではないんだけだな。

「霊夢と魔理沙が来たという事はもう人里は大丈夫だろう……。妹紅と慧音さんもいる訳だしさ。俺帰ってお昼寝でもしようかな」

……なんて、簡単には帰らせてくれないよな。俺が主犯を見つけ出すって言ってしまった訳だし、最後までやり通すのが筋ってもんだ」男に二言は無い！の精神で、俺はとりあえず先程まで感じていた気配のする方に向かう事にした。勿論徒歩でなんだがね。

※※※

あ…ありのまま今起こっている事を説明すぜ！『俺は人里から離れるように走っていたと思ったら、いつのまにか人里に近づいていた』な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされているのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ！もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

なんて、どこかの有名アニメ漫画の台詞を使って説明した訳だが、実際は結構簡単な現象だ。どうやら、俺をこの先に行かせない為に一定のラインに結界を張っているのだろう。その結界つてのが多分、ある程度の範囲まで近づいたらその対象の意識と方角を逆向きにするものだろうな。

「まったく、猪口才が…手間を取らせるなよ」

俺は右手に自然エネルギーを集中させ、一枚のマントを作り出した。

これぞ俺のビックリアイテム、○らりマントだ！これを使うのは魔理沙との初戦以来だろうか。

「逆向きに変えてしまうのなら、それすら逆向きに変換して元に戻せばいいだけの話だろ？」

俺はひら○マントを羽織り、もう一度人里から離れるように走りだす。

そしてどうやら俺の作戦は成功したようで、どんどん人里から感じる色々な気配が遠ざかっていくのを感じた。

「フッフ…思い通り！思い通り！！思い通り！！」

あまりに幼稚な結界を難なく破ってしまった為、俺は柄にもなく下品な笑いが出てしまった。自重せねば…。

しかし、そのおかげで感じ取れなくなっていた強い気配を再度感じることが出来た。さっきの結界には気配察知の反射も出来たのか。

そして感じ取れる気配は、強い存在だけではなく目の前に空から降りてきた三頭の翼を持った巨大なキメラも含まれている。

キメラは降り立つやいなや、瞬時に戦闘態勢に移行していた。だがこの三頭のキメラは他の個体より、明らかに違った点が見てとれた。

一つは、俺の出方を窺うようにゆっくりと近づいてきている事。

二つ目は、一頭が突っ走ることなく連携をとるように、俺を囲もうとしているところだ。おそらく、この三頭には他の個体と違い知性がある。

三つ、この三頭は俺に敵意と殺気に向けてはいるが、何らかの指示を待つように俺を囲んだ状態から動こうとしない事だ。

そして気付く——先程から感じていた強い気配がどんどん強くなっていく事に……。

どうやら、この事件の主犯の御出座しのようなだ。

「随分とここに辿り着くのが早かったな！少しばかり驚いたわよ、人間！」

そう言つて空から深紅の瞳と背中には六本の異形の翼を持つ、黒髪の少女が真ん中のキメラの頭の上に降り立った。手には三又の槍を持っており、それを俺に向けてきた。

「よく正邪の叛逆結界を越えてこられたわね！でも、それまでだ！これからはこのお気に入りのおキメラ達が相手だからな！お前はここで終わりだ！」

清々しい程の勝利宣言に、俺は若干の呆れと楽しさを感じた。それと正邪とは誰ぞや？

「えつと？お前がこの妙な事件の主犯で間違いないんだよな？」

「その通りよ！平安京を恐怖のどん底に突き落とした大妖怪……正体不明のアンノウン！封獣ぬえとは私の事だ!!」

ドヤ顔と共にとんでもない事を口走る封獣ぬえと名乗った大妖怪の少女。

この子はアレだろうか……その、アホな子なのかな？

「あの〜ぬえ？今思いつきりお前自身が言っってはならない事を言わなかったかな？平安京の大妖怪、鶴つていえばさ……正体がバレたらアウトじゃなかったっけ？」

「あ……」

ぬえは「しまったああ！」と大声を上げて慌て始めた。うん、やっぱりこの子アホな子だ（確信）

するとぬえは半泣き状態になりながら俺に悲願してきた。

「い、今のは忘れなさい!!」

「……いやあ、それは無理だろ？」

「いいから忘れなさいってばあ!!」

「え、嫌ですが？」

最早否定形ではなく完全否定になってしまった。ぬえは「なんでさー！」と騒ぎながら真ん中のキメラの頭の上でジタバタし始めた。これには流石のキメラ達もどこか困ったような視線をぬえに向けていた。

やばいこの子超面白い！

「くうくうこうなったら、お前を殺してきつきのを無かった事にするまでだ！やってしまえキメラ達！」

半ば八つ当たりで俺に三頭のキメラをけしかける。

ぬえの言葉を合図に、三頭のキメラはまるで鎖の外れた獣のように俺に襲い掛かってきた。

俺は脚に自然エネルギーを集中させ、跳躍で三頭の攻撃を回避した。だが直ぐに三頭の尻尾の蛇が俺を食い殺そうと接近していた。

「やれやれ、ままごとでもする気か？こんなもの、初はつから避けるまでもない！」

俺は右手に紫色の刀を顕現させ、それを大きく横薙ぎして三匹の蛇の首を斬り落とした。斬り落とされた蛇の首は、地面に落ちた瞬間――まるで液体のように弾けた。

その光景に流石の俺も驚きを隠せず、一瞬隙を作ってしまった。

「ハハ！隙ありだね！」

俺の隙を見逃さなかったぬえは、三又の槍で俺の背中を貫こうと、

猛スピードで接近してきた。

だが――

「なんてね……隙ありはお前だよ、ぬえ」

「なっ！」

俺はぬえが背後に回っている事を知っていた為、案外楽に彼女を誘う事に成功した。俺はすぐさま脚に自然エネルギーを送り、強化を施しブースターの如く自然エネルギーを開放し、その勢いを利用し、回転して背後から接近してきたぬえの槍を蹴りつける。

バキーン！と鉄と鉄が衝突したような音をたて、俺の蹴りとぬえの槍はぶつかり合う。しかし、ぬえの方は俺の蹴り耐えられず吹き飛ぶ。

「クウツ！」

だが、ぬえは少し苦間の表情を浮かべただけだった。

それにしても流石は大妖怪の武器、今の一撃で傷一つ付いていない。そこいらの武器程度なら今ので粉々になっているはずなんだがな。

なんて考えている余裕もなく、後ろからは三頭のキメラが前足を上げて俺を叩き落そうとしていた。

「お前ら……邪魔だ！」

俺はそこで初めて能力を使用し、俺とキメラとの距離を一瞬で覆し接近する。

流石のキメラも驚いたような顔をしたが、俺にとって今はそんな事は関係ない。そのまま頭から縦に刀を振り降ろし、キメラを真っ二つに切り裂いた。

真っ赤に飛び散る鮮血を他所に、俺は再度能力を使用し二頭目のキメラの腹下まで移動し、刀を横薙ぎにキメラの上半身と下半身を分けた。既に俺の足場は二頭のキメラの血で塗りたくられていた。

その光景にぬえは驚きはしたが、直ぐに不敵な笑みを浮かべた。

「驚いたよ……まさか、そのキメラを一瞬で二頭殺してしまうなんて……。でも、残念だったな！お前のした行動は、逆に私を強くした！」

突如、ぬえの妖力が今までと比べ物にならない程に膨れ上がった。

その膨大な量は、もしかしたら紫に迫るかもしれない程に。

「フフ、感じる……。感じるぞ！人間達の恐怖の念が……。！ようやく私の願いは成就されるんだ！」

「願い？」

「そうさ！私の願いは、人間達に格の差を知らしめること。妖怪こそが絶対であることを……。もう一度！この幻想郷に教えてやるのさ！」

「そうか……。この幻想郷にねえ……。ぬえ、ハッキリと言ってやるよ！お前程度ではそんな事は不可能だ。上には上がいるもんだからな」  
「急に何を言い出したかと思えば、そんなことか……。分かつてるよそんなことぐらい……。だから私は協力者を欲し、そして得たのさ！その協力者って奴を……。そうだろ？二人共——」

ぬえの言葉を合図に、俺の背後に二人の妖怪の気配を感じ、反射的に全力で後ろに跳躍した。

その反射が幸をそうしたのか、さつきまで俺のいた所が突然爆発した。

俺は着地し、先程爆発した場所を確認すると、そこには金髪でぬえと同じ紅い瞳と背中から宝石のような翼を持った少女が立っていた。

「あれ？今のは取ったと思ったのに、避けられちゃったわ」

「しつかり狙えよフラン」

フランと呼ばれた少女の後ろから、悪態をつきながら二本の角を生やしたこれまた紅い瞳の少女が現れた。

「ごめんね？でも、次は外さないから大丈夫だよ正邪ちゃん！」

正邪？ああ、彼女がさつきぬえの言っていた反逆結界つてやつを張った張本人なのか。

「そんな事よりさあ、ぬえ……。なんだこの有様は？たかが人間一人に手こずり過ぎなんじゃないか？」

「そんな事言つたつてさ、この人間結構やるんだよ？瞬間移動したり、私の槍を蹴りで弾いたりとかさ！」

「瞬間移動？咲夜みたいなのね！」

「ふ〜ん……。只者じゃないって事か」

その只者じゃない人間は今結構焦つてたりするんだけどね……。

まさか、今のぬえ並の妖力持ちの妖怪が二人追加され、その結果合計三人になってしまっているんだからな。あ、まだキメラも居たね！忘れてたよ。

しかし、この状況はちよつと厄介かもな。キメラは瞬殺できるとして、他三人とやりあう余裕なんて、今の俺の自然エネルギー残量では無理だ。

ただ、今の俺ならの話だな……………。



## 八話 もう一つのカード

### S i d e 霊夢

紫と別れてからというものの、私はいまだに妹紅を探し続けていた。紫はそう遠くないって言っていたのに、まったく出会わないんだけど……。やっぱり夢想封印だけじゃ足りなかったかしら。

でもだんだん近づいている気はしていた。あの化け物たちの焼け焦げた死骸があちらこちらに散っているのを見る限り、本当に妹紅がこっちにいるのは間違いないはず。

そして見つけた。

探し当てるのに数十分掛かってしまったけど、確かに妹紅を発見した。

はずなんだけど——

「なんであんた死んでんのよ?」

「うるさい……私だって好きで死んだんじゃないんだから。あ、でも本当に死ぬるのならバッチ来いなんだけどね」

折角見つけたというのに、妹紅は胸に大きな穴を空けた状態で地面に仰向けで倒れていた。

どういう経緯かは知らないけど、本当に懲りないわねこの死にたがりは……。

「で?あんたは何でここにいるのさ霊夢」

「こころに聞いてあんたを探しに来たのよ!それと、この異変の主犯を伝えにね?」

「そっか……。でも、この異変の主犯は知っているよ。どうせ封獣ぬえなんでしょ?」

「知ってたの?」

「私を殺した犯人から聞いたのさ」

妹紅を殺した……?誰が?この幻想郷でもこの不老不死を殺せる者なんてそうはいないはず……。まあ、殺しても死なないんだけど。

それでも気になるわね……。妹紅も妹紅で、不意打ち程度に引つ掛かる程間抜けじゃない訳だし……。そうになると、妹紅を殺せる者なんてかなり絞られるはず。

でも、この辺りから感じる妖力は……。まさか——

「ねえ妹紅、あんたを殺したっていう奴って……。まさか、フランじゃないでしょうね？」

「ご名答だよ。あの暴走吸血鬼さ！油断してこの様にされちゃったって訳なんだ」

やっぱり……。妹紅を殺したのはフランなのね。

でもおかしい……。なんたってフランがこの異変に？

「どうなってんのよ、この異変の首謀者はぬえと正邪じゃなかったの？あのスキマババア、なんであんな面倒くさい奴の情報を先に話さないのよ！」

確定！紫にはこんど私から夢想封印の各バリエーション全てを叩きこんでやろう！

私が紫にお見舞いする夢想封印のバリエーションをどれから喰らわせようか考えていると、妹紅はある事を聞いてきた。

「正邪？正邪って言えばあの天邪鬼だろ？なんであいつまでいるんだよ」

「知らないわよそんなの！紫がぬえと正邪が主犯って言ったのよ」

「あの賢者がねく……。っと、そんな無駄話をしてる暇はない。霊夢、手が空いているのなら手伝って！早くキメラ共を一掃しないと人里が危ないんだ！」

妹紅はそう言つて勢いよく立ち上がった。

気が付くと、既に妹紅の胸の穴は塞がっており、まるでそこには最初から穴など無かったかのように回復していた。本当に不老不死って凄いわね。それにキメラって何よ……。あの化け物の事かしら。

「それはいいんだけど、あの三人はバカ共どうするのよ？紫が動いている訳でもないんだし、私かあんたのどっちかが主犯退治に向かわないと埒があかないじゃない？」

「ああ、それなら心配ないよ。相当強い……。ある外来人が主犯退治に

向かってくれているから」

相当強い外来人？もしかして——

私の頭には紫をして『最強』と言わしめた——三日前に幻想入りしてきた一人の外来人の少年が浮かんだ。

「妹紅、その外来人の名前って分かる？」

「え？確か……氷匏乖離って名前のはずだけど……霊夢知ってるの？」

やっぱり、乖離さんが……それなら確かに安心かもしれないわね。本来なら博麗の巫女として私が異変解決に向かうのが当然なんだけど、乖離さんが異変解決に向かつてくれているのなら私達は人里を守ることに専念するべきね。

「おい——おい霊夢！聞いているのか？あんた乖離の事知っているのかって聞いているんだけど！」

「え？ええ、知ってるわよ？乖離さんの事でしょ……。乖離さんは三日前に紫と一緒に私の所に来て、三万円お賽銭入れてくれた人だし」  
あの時の事は私の生涯で忘れることは絶対しないと断言できるわ！

「へくよかったじゃん。あんたの神社にお賽銭なんてする者はいないと思っただけど、乖離も随分と酔狂なんだね！」

妹紅は私を馬鹿にするようにケラケラと笑う。喧嘩売ってるのこの死にたがりは？

「ま、そんな事は置いておいてだな……そろそろ周りの連中を一掃しない？」

「そんな事ってなによ……。でもまあ、それには賛成ね」

妹紅と無駄話をしている間にどうやら、キメラだったかしら？が集まってきた。

「私としては、さっさと乖離の手助けに行きたいんだよね？フランドールへの仕返しもあるしさー！」

「あんたって結構根に持つタイプなのね……」

やっぱり妹紅とはなんらかの因縁であつても作らない方がいいわね……。ふとした事で社を燃やされでもしたら堪ったものではない

し。

「まあ、それはともかくさ……まずは」

「ええ、まずは」

「この雑魚を蹴散らさないかね（な）」

私はお祓い棒をキメラ達に向け一枚のスペルカードを宣言する。

「【神技・八方龍殺陣】」

私のスペルカードに続いて、妹紅もスペルカードを宣言する。

「【蓬莱・凱風快晴―フジヤマヴォルケイノ】」

私と妹紅の放った二つのスペルカードが、キメラの群れを一掃していく。方や八方を囲み、敵を蹂躪していく結界。方や大地を焼き尽くす鳳凰の爆撃。この二つのスペルカードによって、殆どのキメラが有無をいわず蹴散らされていった。

「ふう、あらかた片付いたみたいね」

「ちよつとやり過ぎたかもしれないけどね」

「そんなもん無視よ無視。たとえば誰かにこの風景を指摘されても、紫の勢にしておけば万事解決なんだから」

「ハハ、確かに」

私達はただこの異変で発生したキメラ達を退治していただけなんだし、きつと誰も怒ったり嘆いたりしないはずよね！

例えそこにあったはずの森が――草木一本残らず消し飛んでいったとしても。

もちろん悪いとも思っていないし、反省する気もない。

「キメラ共はきつつきので最後みたいだな！よし、乖離の応援……もとい、フランドールへの仕返しに行こうか」

「本当にブレないわねあんた……」

私は妹紅の復讐心に呆れて溜息が出た。けどまあ、乖離さんの応援っていうのには賛成ではあるんだけどね。

ふとそんな事を思っていると――ここから一キロ程離れた別の森から、紅い光の柱が見えた。

その紅い光の柱は、どこか見覚えのある稲妻を放っていた。あれほ

どの物を造っておきながら、一切その力を観測出来ない事から、アレを造り出した者が誰なのか直ぐに分かった。

「な、なんだ今の光の柱は!？」

「おそらくアレは乖離さんの造り出したものよ!急ぐわよ妹紅!」

「あ、ああ!」

私と妹紅はさっきの光の柱が上がった場所に猛スピードで飛んで行った。

私と妹紅はようやく紅い光の柱が上がったと思われる場所までたどり着いた。

そこには四人の人影があり、その三つはやはりこの異変の主犯と思われるにぬえと正邪とフランがいた。私は今すぐこの異変を終わらせるように三人に叫ぼうとして——やめた。

四人目は——私の知っている人物ではなかったのだから……。妹紅も驚きを隠せないようで、目を見開いて固まっていた。

そこに居たのは、白い外套を着ていて、白髪のロングヘアを首元で結んでおり、綺麗な赤い瞳を持っている。そして両頬に縦状に赤い線のようなものがある少年が立っていた。さらにその少年から溢れ出ている紅いオーラは、紅魔の吸血鬼の持つ禍々しいものではなく、それに少し似てはいるが圧倒的に質が違っていた。そのオーラはどこか優しく、見ているだけで心が安らぐかのような感じがあった。

でも、それだと役者が合わない。あの光の柱を造り出した張本人と思われる乖離さんの姿が見えない。

あれ?でもあの顔は何処かで見えた気がするのよね……。髪の色も長さも、瞳の色も何もかも違うはずなのに、顔立ちだけは乖離さんそっくり……。あれ?もしかして……アレが乖離さんなの?

※※※

S i d e 乖離

霊夢と妹紅が駆けつけて来る十数分程前――

さてさてどうしたものでしょう。俺の目の前には紫ほどではないにしろ、相当の妖力持ちが三人……。ついでにキメラが一匹。

能力を使うにしても、アレは半端なく燃費が悪く、残りの自然エネルギーから精々転移一回あたりが限度とみた。

逃げるにせよ、あの三人から逃れるのは至難の業だ。万全の俺なら可能性が無い訳ではないが、どう考えても今の状態では不可能だ。

「仕方ないな、こいつを使うとするか……」

俺は服の内ポケットから一枚のカードを取り出した。そのカードには紅い線が枝分かれしたように刻まれていた。

「一応聞いておくけどさ、お前らの目的って一体なんなのさ？こんな訳分かんない事件を起こして、何がしたいんだ？」

俺の問いかけに三人は不敵な笑みを浮かべて次々に返答を投げかけた。

「さっきも言ったけどさ、私は妖怪を中心とした世界が欲しいんだよ！別に人間に絶滅して欲しいって訳じゃないんだ。ただ、私は人間なんか私達妖怪の上に乗っているのが我慢ならないんだ！だからこの異変を私達三人で起こして、調子に乗っている人間達に妖怪の本当の恐ろしさってやつを教えてやるのさー」

「私はある意味ぬえと同じさ。私は自分で自分の事を強いと思い、弱者を虐げる連中への反逆の為にこの異変に手を貸したんだ。人間も妖怪も、どいつもこいつもに、虐げられてきた者の痛みってやつを体験させてやりたいんだよ。奪われる苦しみを……失くしてしまう辛さを……圧倒的理不尽に抗えない自分の弱さへの憤りをな！」

「私はね……ずっと退屈だったの……お姉様も咲夜もパチエも美鈴も霊夢も魔理沙も全然遊んでくれなかったわ……。だからね、ぬえちゃんと正邪ちゃんの異変に協力すれば、また皆が遊んでくれると思ったの……。怒られてもいいから、誰かに遊んで欲しかったの」

ぬえは妖怪のプライドと誇りの為に……。当然だな、彼女は平安時代最も恐れられてきた大妖怪……鵜。ある意味では妖怪の象徴とされる彼女が、現状の人間の圧政に目を瞑るはずがない。

正邪だったか？彼女の妖力からしておそらく天邪鬼だろう。基本的に思ったことの反対の事しか言わない、動かない妖怪だ。その存在は古くから討伐難易度が他の妖怪に比べてそこまで高くない。だが、彼女は違うのだろう……。その本質は強者に対する憎しみと反逆の精神・弱者に対する愛情と共存の心がある。

フランは、ずっと寂しかったとみえる。彼女は言った。『怒られてもいいから、誰かに遊んで欲しかったの』と……。妖怪とは元来、人間以上に精神に依存した存在達だ。人間以上の力と引き換えに、心が脆く貧弱だ。そんな妖怪が……。もう誰にも見てもらえなくなったら？もう誰にもその存在を認識してもらえなくなったら？答えは簡単だろう。

その妖怪は消えてなくなる――

「ふむ、各々の事情は理解した。……。そうだ！お前達の名を聞いていなかったよ！俺は氷匏乖離……。お前らは？」

「私はさつき教えたからパス」

「私は鬼人正邪だ」

「私はフランドール・スカーレットよ」

「オーケー、封獣ぬえ、鬼人正邪、フランドール・スカーレットね？憶えたよ」

「ふくん、そんな事はどうでもいいけど、ねえぬえちゃん正邪ちゃん。もうあの人間は壊してもいいの？」

あれ？折角親身になって色々考慮して、どうするか考えていたのに酷くないですか？

「いいんじゃない？ていうか、さつさとしないと！あの八雲紫まで動いているらしいし！」

紫も動いていてくれるのか？でもまったくあいつの妖力を感じないのだが……。寝てるのかな？まさかね……。嘘だと言えよ紫。

「まあいいか……。さてと、色々と言いたい事は言ったし、これからは説教の時間だ!」

俺は手に持っていたカードを地面に落とした。その行動に、理解できないといった顔で三人は首を傾げていた。

「なんでスペルカードを捨てるの?」

「残念だが、これはスペルカードじゃないんだよ。似ているかもしれないが、俺はこれを——クラスターカードと呼んでいる」

「クラスターカード?」

「ああ、これは俺の秘密兵器でな?ぶつちやけ、紫か霊夢相手ぐらいじゃないと使わないかなって思ってたけど、お前ら三人を相手にするにはこれを使わないと厳しいんだよね!」

俺は地面に落としたクラスターカードを踏む。その瞬間、クラスターカードから紅い枝分かれした線が発光し、俺の身体中に刻まればじめた。

「お前らがもつと弱ければ、霊夢に任せようと思ってたけどやっぱり止めたよ。お前らは俺直々に説教をくれてやる」

俺の周り半径十メートルは紅い稲妻を発生させ、魔方陣のようなものを展開していた。

三人は何も言わなかった。ただ今起きている状況に目を細め、臨戦態勢に移行していた。

「幻想郷のルール……スペルカード風に言うのなら、こう名付けよう

——【冠位・夢想顕現】

その宣言と同時に辺り一面に紅い光が充満し、大きな光の柱を造りあげた。

その光の柱は、まだ昼過ぎの幻想郷を紅く照らした。

その光の柱を目撃した幻想郷のパワーバランスを担う者達は——

『美しい……』

と、同時に思ったのだった。



## 九話 決着と代償

S i d e 乖 離

クラスターカード……これを使うのは一体いつぶりだっただろう。気を抜けば爆発してしまいそうな程の自然エネルギーの量。それに加えて制御の難しい『陽』の力。

この二つの力が、俺の身体を循環している。

本来ならこんな物は使うべきではないのだが、今回は久しぶりに興が乗ったのと、目の前にいるヤンチャ少女達へのお説教も兼ねているから、目を瞑っておくことにする。

だがやはり、今の俺は前回の時より随分と弱体化しているようだ。俺の中で流れる自然エネルギーの質が落ちている。それだけではなく、陽の力も前回と比べて弱くなっている。

この状態は持って約三分が限界といったところだろう。その前にさっさと決着を付けなければ。

「さてと、準備は出来た。始めようか三人とも」

「フフ、ならまずはお前からだね！【禁忌・レーヴァテイン】」

フランドールは一枚のスペルカードを宣言する。すると、彼女の手には大きな炎の大剣が顕現した。

「いっくよー！」

フランドールは炎の大剣を構え、こちらに突貫してきた。その速度は思っていたものより随分と速く、気を抜いていた訳ではないのに、もう既に俺の目前に迫っていた。

「アハハハ！壊れちゃえー！」

フランドールは炎の大剣を大きく縦に振りかぶる。この状況では剣での迎撃は間に合わないかと判断した俺は、両手に自然エネルギーを集中させ、白刃取りで受け止める。

「あっちー！」

予想以上の熱に、おもわず情けない声を出してしまった。

「よく受け止めたね。でも、いつまで持つのかなあー！」

俺を真つ二つに切り裂こうと、フランドールは更に力を増している。流石は妖怪といったところだろう。自然エネルギーで身体能力を強化しているとはいえ、押し返す事など不可能、耐えるので精一杯だ。

「ッ！」

参ったことに、どんどん炎の大剣は俺の両手から擦れ落ちていつている。

このままでは確実に殺されてしまうだろう。

「へっ！舐めるなよお嬢ちゃん！」

俺は額に自然エネルギーを集中させると、横から炎の大剣に頭突きをして軌道をずらした。

ガン！と大きな音を立て炎の大剣は俺の両手から離れ、そのまま地に激突した。その瞬間地面は数メートルほど焼き切られていた。

あれを喰らっていたらマジであの世行きだったに違いない。

俺は一度フランドールから距離を取る。

「あれ、逃げちやうの？つまんない」

「はは、安心してくれ。今のは前座だからさ……この遊びは決して、君を飽きさせはしないよ」

「そう、ならもつと楽しませてくれるの？」

「もちろんだ。…といつても、これからはワンサイドゲームにしかないがな？」

俺は陽の力と自然エネルギーを両手に集め、黒い弓と白い矢を作り出す。

弓を右手に、矢を左手に持ち構え、矢と番える。

矢を引き絞り、狙いを定めて射ち放つ。すると放たれた白い矢は、紅い稲妻を帯び速度を上げてフランドールの頬を掠め、そのまま何処かへ飛んで行った。

「えっ？」

何が起きたのか分からないといった顔で咄然とするフランドール。それはどうやら彼女だけではないようで、後ろで待機していたぬえと正邪も同じのようだ。

「ぬえ……今の見えたか？」

「……全然見えな……かった」

あの三人には見えていなかったようだが、俺にはちゃんと見えていた。

まあ無理もないだろう。今の矢は並の妖怪や人間程度には感知すら不可能な代物だ。例え紫や霊夢といった桁外れの存在でも目で追えるかどうかだ。

「な？言っただろ、ワンサイドゲームにしなければならないってさ？」

「……ッ！」

「でも安心してくれ、これはあくまでも遊びだから。さつきみたいなものは使わないよ」

他者からみれば完全に舐めているようにしか見えないだろう。しかし、さつきも言ったようにこれは遊びだ。殺し合いではない。

故に、俺が本気を出す必要などないのだ。

「それから、面倒だから三人同時にかかってこいよ。そうじゃないと対等な遊びが出来ないだろう？」

「どうやらそうするしかないみたいだな」

「そうだな」

後ろで待機していた二人はフランの隣に立ち、それぞれがそれぞれのスペルカードを構える。

残り一分半――

「俺には時間がないから、さつきと済ませてもらうぞ？なに、それでも退屈はさせせん！残り時間存分に楽しもう」

俺は数本の矢を空中に展開させ、それを三本掴み弓に番え放つ。

放たれた三本の矢は一本ずつ三人に接近していく。今度の矢は先程の矢より随分と遅く、三人にも見えているようで、避けようと各自散開していく。

上手く三人とも避けたようだ。しかし、今の矢が気に食わないのか、ぬえが叫ぶ。

「舐めてるの？こんな物に当たる私達じゃないぞ！」

「あつそ……その台詞は背後を確認してからもう一度言ってみな？」

俺の言葉に驚いて、三人は急いで背後を見る。するとどうだ？三人ともギョツとしたのか、急遽回避行動をとり始めた。

無理もないだろう。俺の放った矢はホーミング式のものなのだから。

「クッ！このううう!!」

「何よこれ、うっとうしいわ!」

「チツ、邪魔だ!」

ぬえは槍で矢を撃ち落とし、フランドールは炎の大剣で焼き斬り、正邪は能力だろうか？腕を振って矢を吹き飛ばした。

「お見事……お代わりはいくらでもあるぞ?」

俺はイタズラっぽく笑い、再度弓に矢を三本番える。

残り一分――

今度はさっきのより少し強めに弓を引き、矢を放つ。

再度放たれた三本の矢は、先程のものより明らかに速度が増しており、高スピードで三人に接近していった。

それともう一つ、この矢には少々細工を施してある。

「「「こんなものおお!!」」」

三人は再度矢を撃ち落とそうとするが、俺にはその行動にどうしても笑いを堪えられなかった。

「おいおい、いいのか？それに触れてもさあ?」

三人に俺の声は届いておらず、そのまま撃ち落とそうとしていた。

先に動いたのはフランドールで、さっきと同じように矢を焼き斬ろうと炎の大剣を振りかざすが――矢が剣先に触れた瞬間、矢は紅い電気へ変化し、フランドールに纏わり付いた。

「ぎゃあああああ!」

フランドールは紅い電撃に襲われ、ビクビクと体を震わせながら地面に落ちていく。

「「え?」」

突然の事に他二人も驚いているようだが――そんなポーっとしている暇があるのか？

「って、ヤバッ!うぎゃあああああ!」

「ちよ、まつ！ぎにやあああああ！」

余所見をしていたぬえと正邪は、自分達にも同じものが接近していることを忘れていたようだ。油断大敵だな。↑（ここテストにでるぞ）

フランドールと同じように、体をビクビクさせながら地面に落ちていく姿がなんともお笑いぐさだった。笑わないけど。

残り十五秒――

「ちつくしょうくく」

「うくく、体がビリビリする」

「お姉様たちに叱られるく」

能力を使って三人を同じ場所に転移させておいたが、三人とも半泣き状態で悔しがっていた。

その光景がどうにも微笑ましく、つい口元が緩んでしまった。

そしてどうやら時間切れのようで、俺は元の姿に戻った。その瞬間

――俺の全身に激しい痛みが襲って来た。しかも左腕においては、今にも千切れそうなほどの痛みが走っていた。

あまりの痛みに堪らず苦感の表情に変わってしまい、地に膝をついてしまう。

「う、くううッ！」

酷く痛む左腕を見やると、白かったはずの包帯がまるで嘘のように赤黒く染まっており、指先からポタポタと黒に近い色をした血が滴り落ちていた。

「ハアハア……やれやれ、ちよつとやり過ぎたかな？ 藍や紫が見たらなんて言って怒られるだろうな、ハハ」

仕方なく俺は着ていた服の一部を破り、左腕に応急処置として巻いておくことにした。

巻いた時にも酷い痛みが走ったが、そんなことよりも、今はあの三人の下に向かわなければ。

俺は全身の痛みを歪めながら、ゆっくりと立ち上がろうとする――突然右肩を担がれた。驚いて右肩の方をみると、人里にいないはずの妹紅がいた。

「妹紅……」

「お疲れさん。ナイスだったよ」

俺は訳が分からないといった顔で唾然としていると、今度は左腕に白い布を巻きつけられた。

今度は何だと思いい、左腕のほうを見ると、バカを見る目をした霊夢が居た。

「れ、霊夢?」

「あなた、バカなんじゃないの?こんな腕で戦うなんて」

「ぐうの音も出ないな……」

霊夢は「やれやれ」と言って、俺の左肩を担いでくれた。

俺は二人に両肩を担がれた状態で、痺れて動けない三人の下へたどり着いた。

「やあ三人とも。調子はどうだ?」

「体が痺れて動けない」

「右に同じく」

「うわーん!お姉様ごめんなさい」

一人だけ面白い子がいるが、今は後回しにしよう。今はそれより、彼女たちのこれからのことについてだ。

その件で先に口を出したのは霊夢だった。

「あんた達覚悟は出来てるのよね?人里に被害を出したただけでなく、私の神社の倉庫まで壊して、ただで済むなんて思わないことよ?」

「けッ、結局こういう結末か!あくあ、今回の異変も骨折り損のくたびれ儲けだったな」

霊夢の言葉に呼応するように、正邪は笑っていた。それはまるで、何かを諦めたような笑い方だった。

「なあぬえ、フラン……」

「何?」

「どうしたの正邪ちゃん?」

「私達妖怪って奴はさ……不幸だな。人間と違って、望んだ世界も、望んだ物の手に入らないんだからさ。いつもいつも、どんな時だって……どいつもこいつも邪魔しにきやがる!」

本当嫌になるよと言って正邪は笑い続ける。その笑いに誰かが答える訳でもなく、ただただ一人で笑い続けていた。

「ああ、もういいや……そら、さっさと止めを刺せよ。この異変の首謀者は私なんだからさ！」

「何言ってるんの正邪!？」

「正邪ちゃん?」

「あーあー!早く楽にしてくれよう。痛いのは嫌いだからさ」

もう、なんというか……あれだな。完全に自棄になってるなこの子は。

何か語り始めたと思ったら、今度は急に止めを刺せだの早くしろだのよく分からない事を叫び始めた。これどう始末をつけようか悩むぞホント。

(霊夢妹紅、どうしようアレ……結構面倒くさいんだけど?)

(知らないよそんなの。乖離が捲いた種だろ?)

(そうね、これは乖離さんが捲いた種なんだし、乖離さんがどうにかすれば?)

(そうは言ってもだなく)

俺達が三人で耳打ちしていると、フランドールが俺に声を掛けてきた。

「ねえお兄様……」

「はいお兄様です」

「お兄様は……正邪ちゃんを殺してしまうの?」

フランドールは悲しそうな目で俺に問いかけて来た。フランドールの問いに、正邪とぬえも目を細めて俺の回答を待っていた。

ん?お兄様って呼ばれたか俺?

「どうなのお兄様?」

「乖離……?」

「乖離さん?」

妹紅と霊夢もどうやら俺の回答が気になるのか、少し心配そうに見つめてきた。

仕方なく、俺は口を開くことにした。

「ハア、あのさう？いちいちそんな事聞くか普通？」  
「え？」

フランドールは俺が何を言っているのか分からないといった顔をする。

更には最悪の回答が返ってくると思っっているのか、涙まで流し始めた。少女を泣かす趣味は俺には無いってのに。

「答えはNOだ。なんで遊びが突然殺傷沙汰になるんだよ」

「そ、それじゃ……」

「ああ、殺さないよ。言ったる？説教するだけだってさ」

「フフ、良かったじゃん正邪」

「うるさい……」

ぬえは笑いながら正邪を茶化し、それに正邪は少し顔を赤くしてそっぽを向いた。

「本当に正邪ちゃんを殺さないのね？」

「なかなか信じてくれないな。殺さないって。そんな物騒な事する必要もないだろ？」

「ありがとうお兄様！」

フランドールは嬉しそうに笑う。その笑顔はまるで太陽のように眩しかった。

「乖離さんって甘いのね」

「そうかな？普通だと思うけど……それより霊夢はいいのね？」

「ああ、もういいわよ。今更怒る空気でもないでしょ？」

「そうだな。ていうか、霊夢も甘いじゃんよ？」

「普通でしょ？」

そう言っつて霊夢は小さく笑った。俺も霊夢に釣られて笑っている。妹紅が俺達二人に尋ねてきた。

「あのさ、私フランドールに殺されたんだけど……仕返しどうしよう？」

「お好きにどうぞ」

俺達にはもはやこれしかいう事はなかった。

妹紅はえくと言っつて苦笑いを浮かべた。



「さてと、三人とも？そろそろ矢の効力が切れる頃だから言っておくよ」

三人はごくりと唾も？み込んで、一体何を言われるのだろうかと言顔を引き締めた。

「各々の目的、このヘンテコ事件を起こした理由も理解している。そんな訳で、お前ら三人の事は責めないでおくよ」

「ど、どうして？」

「どうしてってお前、それが正しい願いであるからだよ」

「え？」

ぬえは驚いた表情で目を見開き、俺を見ていた。

そもそも彼女たちの願いはある意味では自分たちの存続に繋がっている。妖怪とは古来より人の恐怖を糧に生きている者達だ。幻想郷ではない今の時代、妖怪や神といったものはもう都市伝説となっており、人々から忘れ去られ科学によって否定されたのだ。

「誰だつて生きたいと願うことは当然であり、当たり前前の欲求だからな。俺はお前たち三人の目的を聞いた時、根底にある『消えたくない』という想いを感じたんだ」

「な、何を言つて……」

ぬえや正邪、フランドールは口をパクパクと動かしているが、俺は構わず話を続けた。

「特に、確信が持てたのはフランドールの言った『寂しい』って言葉だったんだよ。妖怪は精神に強く依存するだろ？だから、お前たちは間違つてないんだよ」

方法はともかくな？つと付け加え、俺は三人に微笑みかける。

「まあ何はともあれ、辛い時は俺の家でも訪ねて来な！茶ぐらいなら出すよ」

俺はそう言つて、ゆつくりと妹紅と霊夢に放してもらい、家のある方へ歩きだした。そんな俺に正邪が静止をかけた。

「ちよつと待て！お前はそれでいいのか？私達はお前を殺そうとしてたんだぞ？」

「あつそ！どうでもいいよそんなの。殺されるのには慣れてるからさ

「それに、他二人はともかくお前は俺に何もしてないだろう？」

「そ、そうだが……」

「なら問題ないんじゃないかね？ いちいちそんな事気にしてると参るぞ」  
ハハハ、と笑いながら俺はその場を去って行く。

今回得たものは、幻想郷には楽しい奴がいるってこと。

今回失ったものは、もう使い物にならなくなった左腕。

良くも悪くも、幻想郷は暇しないってことだろう。

「あ、人里で買い物するの忘れてた！……まあいいか」

この後家に帰って、左腕が使い物にならなくなった事を紫と藍に話すと、メチャクチャ怒られた。そして三時間の説教を受けた。

人里行っておけばよかったよ……。

## 十話 宴会に誘われて

S i d e 乖離

今日も快晴、絶好のお散歩日和。キラキラと輝く太陽よ、こんにちは！

あの事件……異変とやらが終結して早一週間が過ぎた。

あの日を境に、俺は一度も家を離れていない。特に出掛ける必要があつた訳ではないが、兎に角もう一週間と家の半径五メートル以上から外へ出ていないのだ。

普通に考えればおかしい事なのだろう。一週間も家から離れないなんて、よっぽどの事でもない限りありえない。

とはいえ、俺は別に引き籠りという訳ではない。それどころか、寧ろこんな天気の良い日は散歩に出掛けて、川で釣りを嗜男のロマンみたいくらいだ。片手でだけどな！

ならそうすればいいだつて？——出来ることならね。

あの日から毎日毎日、一人の来客が来ているのだ。別に鬱陶しい訳じゃない。

その来客というのが、異変の日に最初に出会った面霊気・お面の付喪神の秦ころちゃんだ。

ころちゃん曰く『寄り道ついでに遊びに来た』との事だ。——最初はな？

俺はころちゃんの遊び相手として、毎日あることで遊んでいた。それは将棋である。古くからある日本の伝統的な遊びだ。発祥の地は古代インドなのだとか……。

そして彼女は どうしても勝ちたい相手がいるのだとか。

そもそも寄り道ついでに遊びに来たとか言っていたが、それがどうだろう？俺が左腕が使い物にならないのと、将棋を打てると知った次

の日から、完全に俺の家に入り浸ってしまった。

そんなこんなで、俺は今日もお昼時に将棋盤を囲んでこころちゃんと向かい合っていた。

「むむむ、ここだー！」

「へく、はい詰みね？」

「ぐわあああ」

こころちゃんは無表情のまま悲鳴を上げ、後ろに倒れ込む。和室で打ち合っているから怪我の心配はない。座布団もあるし。

盤上には玉を囲む形で金が三枚、銀が四枚、飛車角二枚ずつもちろん裏返っている状態。

因みに俺が王将ね？

先程の勝負は誰もが圧倒的と呼ぶだろう。人によってはイジメなんて言う奴もいるんじゃないだろうか？

だが勘違いはしないでもらいたい。俺はこころちゃんに充分過ぎるハンデを与えた上でこの結果になっているのだ。

こころちゃんは二歩アリ、開始歩全て【と】に変換、更には俺の金銀全てこころちゃんにくれてやった。

それでも五十手以内に終わらせたがな。

「これで二十戦二十勝だね」

「ぐぬぬ、もう一回！」

「まあいいけどさ、いい加減毘敷かれてるのに気付こうかこころちゃん」

「乖離のはどれが毘でどれが毘じゃないか見分けがつかない……」

こころちゃんは無表情で頬を膨らまし、不満を吐き出す。

普通に見れば、こころちゃんは下手くそのようにしか見えないかもしれない。だがしかし、彼女も彼女で相当のやりてだ。多分今時の大人じゃ相手にもならないかもな。

「それじゃあ盤上を戻そうか。ハンデはもつと増やすか？」

「ううん。今度はもう一回ノーマルでやりたい」

「玉以外全て消されたいの?」

「あれは地獄だった」

「こころちゃんを青くしながら俯いた。

初見でこころちゃんと打ち合った時、俺はこころちゃんの玉以外全てを食い尽くし、完全に遊んでいたのだ。あの後泣かせてしまったのは秘密だ……。」

「でも、そんな乖離を超えられたのならきつと私もあの人に勝てると思う」

「前にも言ってたねそんな事。こころちゃんが勝ちたい人って誰なのさ?」

俺は将棋の駒を所定の位置に戻しながら、こころちゃんに問いかけてみた。

「私を造ってくれた人……とつても強くて、カツコイイ……私の神様」

「ほうほう、神様か。それは凄い」

「でも今は私の方が強い。将棋ではなく、単純な実力なら」

「そつかそつか。それで、その神様って人の名前は?俺も少し気になるんだよな」

「確か、ととさと……違った。豊聡耳神子とよさとみみのみこって名前」

瞬間——俺の駒を戻そうとしていた手が止まった。

豊聡耳神子……だと?」

その名は確か——

「こころちゃん、その豊聡耳神子ってさ……もしかして聖徳太子なんて呼ばれてなかった?」

「ん?聖徳までは知らないけど、太子様ってあいつを慕う連中が呼んでいた気がする」

「やっぱりか。まさか、この幻想郷でその名を聞くとは思わなかった。」

あの無駄に偉そうな箱入り娘が、こころちゃんの創造主だったとは……てかあいつ呼ばわりされたな今。しかも実力はこころちゃんより下って……。」

「一体どれだけ前だったかは憶えていないが、俺は一度豊聡耳に会っ

ていた時のことを思い出す。

第一印象は、大人しそうな博学の少女

ところがどっこい！化けの皮を剥がすとまあ凄い！

そして第二印象は、大人を正論と余計な煽りでキレさせる事が趣味のいい性格した腹黒娘。

上記のを見れば兎に角ロクな奴じゃなかったが、以外な弱点としては独りポツチになると年相応に泣きまくるちよつと面白い奴。

しかしながら世界というものは分からないものだ。

あんなクソガキが後に聖徳太子と呼ばれ、十人の話しを同時に聞くことが出来たといわれる日本有数の聖人の一人となったのだから。

彼女の定めた法、成し遂げて来た実績は現代でも広く語り継がれている程である。

まったく、何故あんなのが聖人に成れたのかまったくもって理解不能だ。

だがしかしおかしい事がある。あいつはあくまでも人間のはずなのだ。こころちゃんの話しがでつち上げの嘘でないのなら、何故まだ生きているというのか？あいつが生きていた時代は、今より遙か1400年以上も前だというのに。

「あのクソガキが……何やってんだよ」

「どうしたの乖離？」

「え？あ、いやすまん。ちよつと考え事をだな？」

俺は苦虫を噛み潰したように顔を引きつらせ、淡々と駒を戻す作業を進めた。

そして駒を所定の位置に戻し終わり、再度こころちゃんとの打ち合いを始めた。

「なあこころちゃん。その豊聡耳神子はこの幻想郷にいるのか？」

こころちゃんは首を横に振った。こころちゃんが言うには、どうやら豊聡耳は『神霊廟』と呼ばれる幻想郷とは違かった、仙人達の住まう世界にいるそうだ。

「じゃあどうやったたらその神霊廟ってどこに行けるんだ？」

「行き方は色々あるけど、ちよつと面倒くさいかも」

面倒ならあまり行きたくはないが、もし豊聡耳が仙人となっているのなら、この時代まで生きていることは頷ける。

まああいつに限ってそれはないだろう………多分………そうであつてほしい。

「分からないもんだな、世界つてやつはさ」

「急にどうした、悟りでも開いた？」

「ハハハ、残念だが俺にはこれといつて悟るようなものはないんだ……。あ、王手ね？」

こころちゃんと雑談を交えていると、既に俺の駒はこころちゃんの玉を捉えていた。喋りながら打つていた勢か、こころちゃんは今までよりも注意散漫になつていたので簡単に王手を打つことが出来た。さてさて、後何手で玉以外全て絞りつくせるかな？

「そういうえば、乖離は私以外と将棋を打つたことはあるの？」

こころちゃんは玉を動かさず、王手を回避しながらそんな事を俺に問いかけてきた。

「三日程前に、紫と打つたかな。あれはヤバかったよ？勝つたのは俺だったけど、一瞬でも気を抜いたら一方的にやられていたかもな」

「妖怪の賢者は強いのか？」

「あれは強いってもんじゃないよ。多分今の時代の将棋師、階位でいう竜王クラスが束になつてかかつていっても軽くあしらわれるんじゃないかな？」

そう、本当に紫は強かった。多分俺が今まで打つて来た将棋師達の中では文句なしの最強だ。

まさか勝負を着けるのに百手以上使つたのは紫が初めてだったと思う。

俺がいくら策を労してもことごとく見破られてしまったし、紫の守りも全然崩せずになっていたから、俺は結構焦つていたと思う。

しかし紫には一瞬のミスがあつたから、そこを突いて勝負を着けさせてもらった。

あの後頭がキリキリといつて痛かった。

当の紫はというと、涙を流しながら『無敗だったのに〜!』と泣き叫びながらスキマを開いて帰っていった。『ガキかつ!』とツツコミたくなった。

俺と紫の対局を見ていた藍も『紫様が負けたとこなんて初めて見ました』と言つて驚いていたっけ。

そんな回想をしていると、もう既にこころちゃんの駒が歩と玉の二枚しかなくなっていた。

流石のこころちゃんも心が折れたのか、無表情なうえに目からハイライトが消えボーっとしていた。

ごめんねこころちゃん。俺手加減出来ないんだわ!

「さてさて、俺の勝ちだね!あ、お昼ご飯ラーメン作るけど食べる?」「うう、食べる……」

こころちゃんは目に涙を浮かべながら俺の問いに俯きながら答える。

流石に大人げなかっただろうか。

俺が台所に向かおうとした時、インターホンが家中に鳴り響いた。俺は誰だろうと思ひ、一度玄関へ向かった。

玄関の扉を開け、誰が来たのかを確認すると、そこには紅白巫女ごと博麗霊夢が立っていた。

## S i d e 霊夢

紫に教えてもらつて、今日私は異変解決者である外来人、乖離さんの家に来ていた。

その家は人里と博麗神社の丁度中間地点に存在する森の中に堂々と建っていた。この辺は低級妖怪が多いし、たまに中級妖怪が現れる常人にはかなり危険な場所だ

でも、乖離さんの実力ならそんなもの問題にすらならないはず。

乖離さんの家には初めて来たけど、和風というより洋風に近いイ



メージの家で、一人で住むには少しばかり大きな家だった。

私はインターホン？とやらがあるかと紫から聞いていたからそれを探していたが、以外と早く見つかった。

玄関のすぐ右の壁に押しボタンのようについていたものを一回押してみた。

するとピンポンと奇妙な音が家の中から聞こえてきた。

インターホンを押してから数秒すると、家の中から足音が聞こえてきた。その音は次第に大きくなり、こちらに近づいているという事がわかる。

そして目の前の扉が開き、中から先の異変で悪化してしまった左腕を包帯で巻いて固定している乖離さんが出て来た。

「おや？霊夢じゃないか。久しぶり〜。今日はどうした？」

「久しぶりね乖離さん。今日は少し話があつて来たのよ。それより、その腕大丈夫なの？」

「少し邪魔だけど、生活には問題ないよ。出来れば斬り落としたいけどな」

ハハハと、愉快そうに笑いながらさりげなくえげつない事を口走る乖離さん。常識的に考えて、そんなこと普通は言わないと思うんだけど……。

あ、ここは常識に囚われてはいけない世界・幻想郷だったわ。

「そうだ霊夢、昼飯食った？」

「え？いえ、まだだけど……」

「そうか、なら俺達今からラーメン食うんだけど、霊夢も食べるか？」

「いいの？」

「もちろん」

ありがたい。そういえば今日はお昼御飯まだ食べていないんだつた。話だけ済ませてさっさと帰ろうと思つたところこんな幸運が舞い降りるなんて、やっぱり日々の行いがいいおかげよね、絶対そうよね？でも今俺達って……。

「俺達って、誰か居るの？」

「こころちゃんが遊びに来てるんだよ」

「こころが？」

乖離さんは若干はにかみ笑いを浮かべながら、軽く首を縦に振った。それよりこころも乖離さんと面識があったのは以外だ。妹紅もだけど。

「お昼を頂くのはいいんだけど、誰が作るの？もしかしてこころ？」

「いや、俺だけど？」

「その腕で？」

「何か問題でも？」

問題しかないと思うんだけど……。まあ、せつかく御馳走してくれらというのだから、ありがたく頂いておくとしようかしら。

私は乖離さんに家の中に入れてもらい、和室に案内された。乖離さんはラーメンを作りそのまま台所へ向かった。

そしてその和室には意気消沈したこころが座布団四枚を縦に並べてうつ伏せ状態で倒れていた。

一体何があったのよ。

「こころ、あんたどうしてそんな状態になっているのよ？」

「乖離と将棋して負けた……。コテンパンに」

こころはそう言うてある方向を指さす。そこには大きな将棋盤があり、沢山の駒が四方八方に散っていた。見たところこころと乖離さんが勝負をし終わってまだ片づけしていない感じだった。

でもこの将棋盤はおかしいと思うのは私だけかしら？盤上には、一方に玉と歩が一枚ずつの計二枚。もう一方にはその二つの駒をまるでリンチでもかけているかのように配置された数十の駒達……。

「なにこれ？」

「私が玉で、乖離が王将。一方的に遊ばれた。乖離の考え事の片手間に……」

何それ怖い。普通どんなに上手い将棋師でも相手の持ち駒をほぼ全て奪い取るなんてやろうとしても出来ない芸当だ。もしもそんな頭のおかしい芸当が出来るとしたら、それこそ紫ぐらいじゃないと不可能なはず。

「乖離さんって将棋とんでもなく強いのね……。紫といい勝負ね」

「残念だが乖離曰く、その妖怪の賢者も三日前に撃破済みとのことらしい」

「嘘でしょ?!あの紫に!」

これには流石の私も驚きを隠せず、つつい大きな声で叫んでしまった。

私も将棋なら幻想郷の中でもかなり強い自信はあるけど、それでも一度として紫には勝つたことがない。弾幕ごっこならともかく、私をして紫には将棋では絶対に誰も勝てないと言わしめた程なのに、その紫を乖離さんは既に撃破済みだなんて……。

「驚きを通り越してもはや笑うレベルね。全然笑えないのがなんとも恐ろしいけど……」

「脳の構造がどうなっているのか知りたい」

私もそれには少し同感。

それと、今度乖離さんを永遠亭に連れていこうかしら?左腕の事もあるし。

その後少しこころと色々話していると、おいしそうな匂いが部屋に充満し、乖離さんがトレイに三つの器を載せて部屋に入ってきた。

「二人共出来たぞ」。さ、将棋盤を隅っこに寄せてそっちのちやぶ台を持ってきてくれ」

「は〜い」

私とこころは乖離さんに言われた通り将棋盤を部屋の端に寄せて、近くにあつた少し大きなちやぶ台を部屋の中央に寄せた。

乖離さんは寄せられてきたちやぶ台の上にトレイを置いて、私とこころの分の器を先に寄せてくれた。

私とこころはありがたく器を手に取り、三人向かい合うようにちやぶ台の前に座った。こころは器を持った時「あちちち」と言つて零しそうになつていたけど、大丈夫だった。

私達三人は用意された箸を取り、両手を合わせた。

「「いただきます」」

そう言つて私はラーメンを口に運んだ。

瞬間——私の中であるものが弾けた。

「うっま!!なにこれ超美味しいんだけど!!」

初めて食べたラーメンは、今まで味わったことのない味が口いっぱい広がった。

のど腰のいい麺、辛過ぎず甘すぎずの醤油ベースのスープ。なにやら醤油だけがベースじゃないようでもあるけど。

私はこれまでこんなにおいしい食べ物をお口にすることがない。とても幸せな気分だった。それはどうやら私だけではなく、ここも同じようだった。

しかし気付けばあっという間に食べ終わり、スープまで完食していた。

正直お代わりが欲しいけど今は我慢することにした。

本題を忘れかねないし。

「ごちそうさま。ふく美味しかった!」

「そう言ってくれると嬉しいよ」

「あ、そうだ乖離さん!大事な話があるんだけど」

乖離さんは「どうした?」と聞き返しながら、私達が食べ終わった器と箸をトレイに戻し片付けをしている。

「今日の晩方博麗神社で宴会があるんだけど、是非乖離さんにも出席してもらおうと思ってるんだけど、大丈夫よね?」

「宴会?なにそれ?」

「宴会っていうのは、異変後に行われる……要はお疲れ様会みたいなものなのよ。まあ、それに出席する連中は適当に理由をこじ付けて酒を飲みたいって奴らの集まりみたいなものなんだけど」

私の説明を聞いて乖離さんは悩むように首を右へ左へと動かしている。

万が一にでも断られたりでもしたらどうしようかしら。今回の宴会は異変解決の祝いと、乖離さんの歓迎会でもある訳だし、なんとしても出席してもらいたいよね。

なんて考えていると、乖離さんが私に聞いてきた。

「えつとき、その宴会つてのには酒飲めないとダメ…なんてことはないよな？」

「も、もちろん大丈夫よ。お酒飲めない奴も来たりするから、気にする必要はないわよ！それに、きつと紫たちも来るから喜ぶはずよ？」

「そうか、それなら行ってみてもいいかな？あ、そうだ！どうせだし、宴会料理でもこさえていくか！」

そう言つて乖離さんはトレイを持って部屋を出て行った。

多分また台所に向かったみたいね。宴会でも乖離さんの料理が食べられると思うと、なんだか舞い上がってしまいそうね。それに乖離さんが結構乗り気になってくれたのは嬉しい。これで紫に小遣い抜かれずに済むわね！

「宴会なら私も行く！場を盛り上げる能楽も必要でしょ？」

「そうね。それにこころも今回の異変では活躍してくれたし、いいわよ」

「やったー！」

こころはいつもながら無表情のままピョンピョンと嬉しそうに飛び跳ねている。

宴会に参加できることがそんなに嬉しいようね。

私は乖離さんにお礼を言つて博麗神社へ帰ることにした。

一刻も早く宴会準備を済ませないといけないから。

そして、宴会の時間がやってきた。

## 十一話 楽しい宴会

S i d e 乖 離

霊夢に誘われて、俺は異変のお疲れ様会こと、宴会に出席すべくころちゃんと共に宴会料理をこさえて博麗神社に向かっていた。

約一週間振りに来た博麗神社は、前回と違って多くの気配を漂わせていた。感じる気配は妖怪、妖怪、妖怪のオンパレードだった。折角の異変解決の祝いなのに人間はこないのだろうか。しかし、よくよく感知してみると霊夢と魔理沙の霊力と魔力を感じ取れた。やはりあの二人はちゃんというようだ。まあ当然だろうが。

だがしかし、俺は思うのだ。別に宴会つて時に人間を取って食おうとする妖怪なんていないと思う。もしもそんな事をしようものなら、間違ひなく霊夢か魔理沙に退治されてしまいうだろう。紫あたりは別としてだが。

「それにしてもだが——マジでふざけてんのこの階段?」

俺は久しぶりに見た異常に長い階段を前に苛立ちを覚えていた。

本当にどうなっているのか疑問に思うのだこの階段の長さは。別に空を飛べるのなら「なんのこれしき!」って感じなのだろうが、空を飛べない俺にとってこの階段の長さはもはやイジメの域なのだ。

この階段の製作者は絶対俺を筋肉痛にしたいに違ひない。

「そう?・私はそうは思わない!」

俺より少し後ろを付いて来ていたころちゃんは首を傾げていた。ころちゃんの言う事は分からなくはない。だとしても俺にはどうしてもこの階段の長さには異議を唱えずにはいられなかったのだ。

「まあいいや。それよりも、さっさと上って宴会に出ないとな」

「うんうん。早く行こー!置いてくぞ〜」

ころちゃんは意気揚々と階段を足早に上り始めた。俺は小さくタメ息を吐きながらころちゃんの後を追っていった。

ある程度上った後、俺は一度振り返り森の中へ沈んでいく夕陽を一人眺めていた。

それはとても綺麗な夕陽だった為、俺はついつい見惚れてしまっていた。

「幻想郷は本当に綺麗な所だな……。俺の居た世界とは段違いだよまったく」

夕陽の鑑賞に浸っていると、数十メートル先からこころちゃんの声が聞こえてきた。

「おーい！本当に置いていくぞー！」

「悪い！今行くよ」

俺は急いでこころちゃんを追って行った。道中右手だけで宴会料理を運んでいた為、追いつくのに思ったより時間が掛かってしまった。

ようやく頂上に到着した俺は、初めて来た宴会に驚きを隠せないでいた。境内の庭に広く敷かれたブルーシートの上に、沢山のテーブルが並べられており、そのテーブルの上に置かれている色とりどりの料理の数々。

そしてなんとといっても、そのテーブルをギウギウウで囲みワイワイと騒ぎ酒を飲み合う妖怪たちに俺は驚いていたのだ。

宴会料理絶対足りてないよな？

「あ、乖離さん！来てくれたのね」

俺が目の前の光景に呆気にとられていると、霊夢が声を掛けてきてくれた。

「よう霊夢……。凄いなこの妖怪の集まりは」

「そうでしょう？なんでも、紫がなにやらあの妖怪の集団に妙な事を吹き込んだらしいのよね」

紫、一体なにをしているのやら。しかしまあ、宴会は皆で集まってワイワイする方が楽しいし、ある意味グツジョブではあるが……。流石に多すぎではないだろうか。

軽く数百人はいるんじゃないか？霊夢なんてしかめっ面で「これだから参拝客が増えないのよ！」なんて若干キレ気味だし……。

「なあ霊夢、そういえばこころちゃん見なかったか？途中まで一緒に

来ていたんだが、頂上に近くなった辺りから先に行ってしまったんだけど……あ、これ宴会料理ね？」

「ありがとう乖離さん！……ここなら向こうの方で踊ってるわよ？」

俺は霊夢に宴会料理を渡し、教えられた方向に目を向けると、遠くの方でこころちゃんが舞を踊っている姿が確認できた。しかもその舞はプロ級に上手いものだったので、ついつい見入ってしまった。宴会には踊りなどの余興は必須ということなのだろう。流星はこころちゃんだな！

「ところで乖離さん、お酒は飲めるわよね？」

俺がこころちゃんの舞を鑑賞していると、霊夢がそんなことを問いかけてきた。

「酒か、飲めなくはないけど……なんで？」

「折角の宴会なんだし、たまには羽目を外さないでしょ？」

「そうだな……でもアレだぞ？俺酒癖悪いから酔って宴会が血祭りになりかねなくなるぞ？血祭られるの俺だけだ！」

「そ、そうなのね。なら無理には言わないわ」

霊夢は苦笑を浮かべながら「それじゃまた後でね」と言っただけの手渡した宴会料理を持ってどこかへ行ってしまった。

霊夢がいなくなっただけ俺は一人になってしまったが、直ぐにまた別の人が俺に話しかけてきた。

その人物は一週間と三日振りの魔理沙だった。

「お、乖離！久しぶりだぜ！来てたんだな」

「やあ魔理沙、久しぶりだな。元気だったか？」

魔理沙は「もちろんだぜ！」と胸を張って元気一杯に答えた。本当に久しぶりに会ったが、正直見違えた。以前会った時より魔力の質が上がっていたからだ。あれから特訓でもしたのだろうか？

「聞いたぜ乖離。お前今回の異変を一人で解決したんだって？凄いな！」

「そうでもないさ。霊夢や妹紅、それに魔理沙やこころちゃんに慧音さんが頑張ってくれたおかげだよ」

「ん？私はあの時は乖離には会ってないはずだぞ？」



「感知したのさ。皆の霊力や妖力、そして魔理沙の魔力をな？」  
「え？」

魔理沙は鳩が豆鉄砲でも喰らったみたいな顔になり、キョトンとしていた。

まあ突然そんなことを言われても理解できないかもしれないが、事実であることには変わりない。正直あの時霊夢と魔理沙が来てくれていなければ、結構厳しいものがあつたと思う。でなければ、あの三人と遊んでなんていられなかつただろうし。

そういえば、あの時感じた妙な気配は一体誰だったのだろうか。ずっと俺を見ていたような……。

そんな事を考えていると、魔理沙が俺の使い物にならなくなった左腕を痛々しそうに眺めていた。

「なあ乖離、この左腕って……」

「ん？ああ、これは先の異変で悪化してしまっていてね、もう感覚すらないんだ」

「だ、大丈夫なのか？」

「生活していく上では問題ないよ。ただ、少し邪魔だから今度斬り落とそうと思っている」

俺は陽気に笑って答えると、魔理沙は突然表情を険しくして俺の肩を掴んできた。

「だ、ダメだぜそんな事したら！私がいい医者を紹介してやるから、斬り落としたりなんてしたらダメだぜ！」

「お、おお」

魔理沙が突然鬼気迫るような顔で俺の肩を掴んできたものだから、つい勢いに負けて頷いてしまった。

「本当だな？」

「ほ、本当だ……」

ならばよし！と魔理沙は俺の肩を放して小さくタメ息を一つ吐いた。

正直こんな左腕なんてどうでもいいけど、折角魔理沙みたいな美少女が俺を心配してくれているのだから、ここは敢えて魔理沙に従って

おくことにした。

「そうだ！乖離も宴会を楽しめよ？今回の主役はお前なんだぜ？」

「ああ、ありがとさん。それと、霊夢に俺の持ってきた宴会料理を渡し  
てあるから、よければ食べてみてくれ」

「わかったぜ！それじゃ、また後でなく！」

魔理沙はそう言つて霊夢の居る方へ去つて行つた。

再度俺は一人になってしまった。折角の宴会でボツチなんて、ここ  
まで惨めなものはあるだろうか……。

「さて、どうすつかな。あ、お茶貰つてこようかな？その後に考えよ  
う」

俺はお茶を貰いに妖怪たちの集団に紛れようとした時、またもや知  
人の声が俺の足を止めた。

「乖離様……探しましたわ。一体何処に居られたのですか？」

声の主からして紫だろう。

俺は紫の声のした方へ振り返ると、そこにはやはり紫が立ってい  
た。

しかし、俺の目に映つた紫はいつも着ている紫のフリル付きのドレ  
スではなく、中華をイメージさせる紫の導師服を着ており、長かった  
あの金色の髪も纏め上げていた。

その姿に俺はどこか神秘的なものを感じ、だらしなく見惚れてし  
まっていた。

「乖離様、あの……どうかなさいましたか？」

「あ、いやすまん。ついつい見惚れてしまっていた。久しぶりに会つ  
た時もだが、本当に紫は綺麗になつたなくつとね？」

「え？」

紫は目を見開いて驚いた顔をしてた。そしてすぐに顔を赤くして  
俯いてしまった。何故紫が俯くかは分からないが、お世辞でもなんで  
もなく本当に紫は綺麗な大人の女性になつたと思う。多分だが、俺が  
今まで出会ってきた大人の女性の中ではダントツで紫が美人と言え  
る。どこの世に出してもまず恥ずかしくないだろう。

胡散臭いのが魂にキズではあるが。

「どうした紫？」

「い、いえなんでもありませんわ／＼」

顔を俯かせたままそう答えた紫はゆっくり俺の方へ近づいてきて、そつと俺の右手の袖を掴んだ。

「せ、折角の宴会ですし、席を準備しておりますわ……ど、どうぞこちらへ」

そう言つて紫は俺の袖を引いて準備した席とやらに案内してくれた。別に袖を引く必要はないとは思うが、折角なので為されるがままであることにする。俺としても別に嫌という訳ではないしな。

それにしてもさつきから他の妖怪達からの視線が妙な気がする。まあ無理もないとは思うが。なんといつても紫ほどの大妖怪に、なんの力も感じないどこにでもいる平凡な人間がどこかへ連れていかれているのだ、仕方ない。

妖怪たちの視線はみるみる内に哀れな人間をみる目が変わっていた。

中には『あんなに若いのにかわいそうによう』だとか『宴会で食われる人間……面白い』とか『妖怪の賢者も酔狂よなあ』と呟く者たちもいた。

なんですかね？俺紫に食われるんですかね？絶世の美女に食われるのなら男としては本望だが、出来ればもう少し生きていたいのですが……。

「着きましたわ乖離様」

「乖離殿、お久しぶりです」

紫に連れられて来た場所には既に藍が座っており、俺が来たのを合図にわざわざ立ち上がってまで藍は挨拶をしてくれた。今日の藍は帽子を被っていないようだ。

しかし、もつと楽にしてくれてもいい気がする。折角の宴会で堅苦しいのはアウトだと思ふし。

「久しぶり藍、元気してたか？」

「はい、いつも通りです。それより、乖離殿……左腕はまだ痛みますか？」

藍は少し申し訳なさそうに聞いてきた。大して心配することではないと思うが、彼女にもなにか思うところがあるようだ。もしかするとだが、初めて会った時の弾幕ごっこの事だろうか。

「ああ、痛みは大分引いて来てるよ。それよりさ、そんなに畏まらなくてもいいぞ？折角の宴会なんだからさ、楽しもうぜ」

「は、はい……乖離殿がそう仰るのであれば」

「よしよし、それでいいんだよ」

俺は笑いながら藍の頭を優しく撫でる。帽子を被っていないなかったので、とても撫でやすかった。サラサラと触り心地の良い綺麗な髪がなんとも気持ち良い。

撫でられる側の藍は顔を赤くして黙っているだけだった。一方紫はどこか羨ましそうな目で俺を見ていた。

撫でて欲しいのならそう言えばいいのに。

「お、乖離じゃん！久しぶり」

俺が藍の頭を撫で続けていると、またしても誰かに声を掛けられた。

俺は一度藍の頭を撫でるのを止め、声のした方へ振り向くと、赤いモンペが特徴的な少女……妹紅が手を振りながら近づいてきた。

「やあ妹紅、久しぶり！元気だったか？」

「不老不死の私が元気な訳ないでしょ？」

妹紅は皮肉交じりに返すが、俺が聞いた元気ってのはそういう事じゃないのだが……。

「そうかい……。って、妹紅は一人なのか？」

「まあね……あ、でも後で慧音が寺子屋の生徒達を連れてくるから、今は一人かな」

「そうか、ならここで一緒に飯でも食おうぜ！折角だからさ」

「……いいのか？」

「もちろんだ。いいよな？紫、藍」

「乖離様がよろしいのでしたら、私は何も言いませんわ」

「私も紫様と同じです」

紫と藍はそう言っていたが、その顔にはどこか不満が見て取れた。

俺は少し席をずらし、隣に妹紅を座らせた。近くにあつた皿に料理をよそい、妹紅に渡した。

「ありがとう」

「礼には及ばんさ。あ、紫もしよかったら霊夢と魔理沙も呼んできてくれないか？折角だから、皆で食べよ？」

「そうですわね……分かりました。すぐに二人を呼んで来ます」

「ありだとなー！」

「礼には及びませんわ。乖離様はごゆるりと宴会をお楽しみください。藍、乖離様に料理を運んであげなさい」

「はい、直ぐに！」

紫は霊夢と魔理沙を求めて……藍は宴会料理を求めて二手に別れて行った。

俺は二人が去つた後、近くにあつた麦茶を手に取り一息に飲み干した。そんな俺を妹紅は可笑しそうに笑っていたので、俺もそれに釣られて小さく笑った。

「なんていうか……宴会って新鮮だなく〜」

俺はすっかり暗くなり、綺麗な星々が輝く空を眺めながら、黄昏るように呟いた。

## 十二話 なんやかんやで

### Side 紫

乖離様に霊夢と魔理沙を連れて来るように頼まれて、一応二人を見つければ戻ってきた方がいいのだけれど――

「でさう……ころちゃんつてば将棋に負ける度に後ろに倒れるんだよ！もう最高に面白くて腹が痛いので必死で我慢してる訳なんだよ！」

「何それ変なの……。でも乖離って将棋できるんだね、今度私もやろうよ！」

「いいぞ！いつでもかかってくるよ！」

何故あの蓬莱人と楽しそうに談笑しているのかしら？！

乖離様と妹紅は大きな声で笑いながら話しを続けている。まだ私が霊夢と魔理沙を連れて戻って来たことに気付いておられないようだ。

それより、ちよつと目を放した際にどうしてあの二人はあそこまで仲良くなっているのかしら？！だいたい、私だって乖離様とお話ししたい！！

私は歯をギリギリと軋ませながら二人が笑い合っている光景を見ていた。地底の橋姫ではないけれど、私的にかなり妬ましい光景。そしてこれが俗にいう嫉妬という感情だつてことはすぐに分かったけれど、最愛の人をポット出の女に取られたのだから、嫉妬するなどという方が無理な話だ。

「紫どうかしたの？なんか顔怖いけど」

「大丈夫……なんでもないわよ。そう……なんでもないのよ」

「目が死んでるけど？」

霊夢の指摘に、私はスキマを開いて鏡を取り出し自分の顔を見てみた。確かに目が完全に死んでいる。我が事ながら、ちよつと怖いわね……。私は二回ほど顔を叩いて気持ちをリセットし、乖離様に声を掛ける。

「乖離様、二人を連れてまいりました。遅くなり申し訳ありません」  
「おお、ありがとな紫！それと二人共、こっちに座れよ！一緒に飯食おうぜ」

乖離様は手招きをして霊夢と魔理沙を呼ぶ。二人もそれに従うように乖離様の前に座って会話に参加し始めた。

なんとか嫉妬心は隠せたみたいね。万が一にでも、妹紅なんか嫉妬していたのがバレ、器の小さい女だなんて思われたら多分一生立ち直れないでしょうね。そして『紫って嫉妬深いだけじゃなく、器まで小さいんだな』なんて言われた日には自殺ものよ。

え？幻想郷はどうするのかですって？——はて、何の事かしら？

「お〜い紫、何ぼさつとしてんだよ、こっち来て飯食おうぜ」

「はい、ただいま」

乖離様に呼ばれて私は乖離様の隣に座る。もう一方の隣に座っている妹紅がなにやら睨んできたけど、喧嘩を売っているのなら宴会後に買ってやろうかしら。

私も同じように妹紅を睨み返していると、不意に霊夢が問いかけてきた。

「ねえ紫、こころから聞いたんだけど、将棋で乖離さんに負けたって本当なの？」

「は？」

魔理沙と妹紅は霊夢の言った事が理解できなかったのか、間拔けた顔になり目を点にしていた。一方乖離様は苦笑いを浮かべて麦茶を口に運んでいた。

「ええ、本当よ？私は乖離様に将棋で負けたわ」

「嘘だろ?!紫が負けたって、霊夢よりも強いのか?!」

「だからそう言ったでしょ？私は乖離様に負けたのよ……。将棋なら絶対負けない自信があったんだけれどね」

「うそ〜ん……」と魔理沙は呆れたように言うが、本当に乖離様は強かった。私はあらゆる戦法、あらゆる揺さぶりを仕掛けてもその悉くを突破されてしまったのだから。

あんなのは久しぶりだったわね。そう、丁度二百年くらい前に幽子と打った時以来だったかしら。最後には私が勝つただけれど……。

そして乖離様に負けた時におもわず泣いて帰ってしまった醜態は忘れましょう。

### S i d e 乖 離

紫が霊夢と魔理沙を連れてきてくれたおかげで、ここの席は随分と賑やかになった。俺としては嬉しいことなのだが——何故だろう？ 周りからの目がとても痛いのだが。俺なにも悪い事してないんだけど。

「ハア……」

「どうしたの乖離、タメ息なんか吐いて」

「いや、なんだか周りの視線が痛いなくって思ってたさ」

「そう？ 私は何も感じないけどなく」

妹紅は分かかっていないのだろう。その視線が主に男の妖怪からのものだったことが……。

まあ？ 今の俺の現状は他の男からしたらとんでもなく羨ましいほど両手に花、前にも花つて感じなんだろうけどさ、俺は別に下心がある訳じゃない。ただ皆と食事がしたいだけなんだ。そもそも、下心があったらとつくに理性を保てないまま周りの四人を襲っていると思う。

まあ、そんなことをした次の瞬間にはあの世にいるのは目に見えているがね？

「あ、そういうえば！ 乖離さんの作って来てくれた宴会料理美味しかったわよ？ あれはもう絶品だったわ！」

「私も食べたぜ乖離！ あれメチャクチャ美味かったぜ！」

霊夢と魔理沙はさも満足そうに笑って感想を言ってくれた。美味しかったってのなら嬉しいけど、もしかして全部食っちゃったのだから



うか？

「ちよつと待ちなさい二人共！乖離様の作った宴会料理があるの？私  
があなた達を呼びに行つた時は無かつたわよね？」

「そりやそうよ？私と魔理沙で完食しちやつたんだから。正直全然食  
い足りないけどね」

紫の問いに霊夢は無慈悲にも残酷な事実を紫にぶつける。そんな  
に美味しかったのならもつと持つて来ればよかつたかもしれない。  
そして紫よ、悔しいのならまた作つてやる。だから怒りに任せて妖力  
開放するのはやめて欲しいのだが……。

「ねえねえ乖離、乖離つて料理できるの？」

紫のご立腹を他所に、妹紅は興味深そうに聞いてきた。

「まあ、人並み以上にはね？和洋中、全部作れるよ。なんなら今度将棋  
ついでに食べに来るか？」

「いいの？自分でいうのもあれだけど、結構大食いだぞ私？」

「問題ないさ。こちとら毎日四人分作つてるからな！」

「乖離の家には誰か住んでるの？」

「いや、俺一人だけだが？」

「一人で四人分食べてるの？」

「うん」

「おおう」

妹紅は驚いたような顔をして俺に拍手を送ってくれた。料理や食  
べる事に関しては、結構好きだから別に拍手されることではない気が  
する。それに、和洋中において『和』だけなら俺なんかより藍の方が  
絶対上手いだろう。

そういえばその藍はどこに行つたのだろうか。宴会料理を探して  
どこか彷徨っているんだろうか？流石に遅くないかと思う。

——噂をすればなんとやら……そんな事を考えていると、両手一  
杯の宴会料理を持って藍が戻ってきた。疲れているのだろうか、息が  
乱れている。

「お、遅くなりました」

「お疲れ様藍、大丈夫か？」

「な、なんのこれしきです！」

俺は藍から大量の宴会料理を受け取り席に座らせると、藍は近くにあったお酒を猪口に注ぎ一息に飲み干している。どうやら相当疲れしているみたいだ。

そして今思ったのだが、この宴会で麦茶とか飲んでるの俺だけじゃないだろうか？他の妖怪達も皆お酒を飲んでるし、紫や藍は当然として霊夢や魔理沙に妹紅も皆お酒を飲んでる。つまり、この宴会においてお酒を飲まず麦茶なんぞしかけたもの飲んでるいるのは俺だけって事になる。

「ハハ、お酒……飲もうかな」

「あら、乖離様もお酒が飲めるのですか？」

「嗜む程度にね……。飲み比べとか、そんな事は出来ないけどさ」

俺の返答に紫は少し残念そうな表情を浮かべた。俺としてもお酒は飲みたいところだが、如何せん俺はアルコールに弱く酔いやすい体質なのだ。以前も調子に乗ってコップ一杯のお酒を飲んだ時、それからの記憶がないのだ。そして正気に戻った時には泥酔い状態に陥り吐き気と頭痛で三日間動けなかった。

そんな出来事があった為、俺はあの日以降お酒を一滴も飲んでいない。

「乖離はお酒弱いのか？」

妹紅は両手に猪口を持って俺に聞いてくる。それを見るに俺と飲み交わしたいようではある。

「俺は結構弱いよ？コップ一杯のお酒で暴走したあげく三日間動けなかったし」

「能力使って飲めるようにしないのか？」

霊夢の言うことも考えなかった訳ではない。しかし、能力を使ったところでお酒への耐性は多少なりと付くにしても、それはあくまで一時的なものである為時間経過で耐性はきれる。故に、俺にとって能力を使ったところで酔うのが早いか遅いかの違いでしかないのだ。

だから霊夢への返答は――

「しないよ。そんな事してもあまり意味はないからね」

「そう、乖離さんがいいならいいんだけど……」

すまないとは思っている。俺だつて出来る事なら酒豪の如くお酒を飲みたいのだ。

自棄酒……なんてな。

そんなこんなで皆と談笑していると、不意に三つの強い気配がこちらに近づいてきているのに気付いた。どうやらその気配に気付いたのは俺だけではなく、他五人も同じようだった。

一人は分かる。肌がヒリヒリと痺れるような強い妖力……おそろく今回の異変の主犯の一人……フランドールだろう。

もう一人は妖力ではなく霊力だった為、それが妖怪ではなく人間だということとは直ぐに理解できた。だがその霊力はとても冷たい感じがした。言うなれば、鋭いツララといったところだろう。

残り一人は間違いなく妖怪だった。だが、感じる妖力の強さが他二人とは比べ物にならない程のものだった。そこに有るといっただけで、並の妖怪や人間ではひれ伏し恐怖し畏怖してしまいそうな、そんな圧倒的な妖力。

これを俗にいうカリスマといやつだろうか。

考え事もつかの間、既に三つの気配は俺の背後に在った。俺は座つたままゆつくりと振り返る。そこにはやはりフランドールがいた。笑顔で宝石のような羽をパタパタとはためかせながら。もう一人は銀髪のメイド服を着た女性。メイドとは常に笑って仕事をする者のことだが、この女性は違う。どう見ても笑っていない。ていうか目を瞑り無表情のままだ。なんというか、少し取っつきにくい感じの人だ。

最後の一人は……思っていたよりも小柄で、背丈はフランとどっこいどっこいと言ったところだろうか。だが、背中に生えた蝙蝠のような大きな翼と青み掛かった銀髪に口元に見える鋭利な牙と、溢れんばかりの妖力が、目の前の少女は只者ではないと物語っていた。

青髪少女はゆつたりとした足取りで俺に近づいてきた。

「こんばんは。初めましてね、私はレミリア・スカーレット。あなたが氷鉋乖離で間違いないかしら？」

レミリアと名乗った少女は着ていたスカートを少し摘み上げ、社交辞令のようにお辞儀をする。その動作は気品に溢れ、上品な貴族をイメージさせた。

誰に対しても礼儀は大切だ。それが例え子供のように見える少女であつたとしても……。

俺は立ち上がり、彼女に習いそつと胸に手を置き深くお辞儀を返した。

「いかにも……俺が氷鉋乖離で相違ない。して、俺に何用でしょう？」

「フランからあなたの事を聞いて、お礼に来たのよ」

「お礼？」

意外な言葉に俺は少し戸惑つてしまう。お礼なんて言われても、俺は何かしたのだろうか。まったくもつて身に覚えがない事なのだが……。

「ええ、先の異変であなたはフランを止めてくれた。本来それは私の仕事だったのだけれど、私は異変があつたことなど知らなかつたのよ。だから、私の代わりにフランを止めてくれた事に感謝しているのよ」

「なるほどね……。だが、悪いがレミリアさん、あなたから感謝される筋合いはないよ。俺は単純に、フランドール達と遊んでいたただけだからね」

「あなたがそうでも、私はそれでもあなたに感謝するわ。フランを止めてくれて……本当にありがとう」

再度レミリアさんは俺に頭を下げた。それも今回のはお辞儀ではなく、謝罪と礼を籠めてのものだ。その光景が珍しいのか、後ろの連中も然り周りの妖怪達まで驚いていた。しかし、本当に俺は頭を下げられるような事などしていないのだが……それでもまあ、今は彼女の顔を立って何も言わないでおくことにしよう。

「そうそう咲夜、彼にアレを渡してあげて」

「畏まりました」

咲夜と呼ばれたメイド服の女性は少し大きめの袋を持ち、俺に手渡してきた。

俺は手渡された袋の中を覗くと、なにやら赤い箱が二つほど入っていた。

「レミリアさん、これは？」

「それはティーセットよ。もう一つはクッキー、おやつ時に食べてちょうだい」

「いいのか？貰っても」

「もちろんよ？それはあなたへのお礼の証みたいなものよ。まあ、つまらない物だけれどね」

「そうか、ならありがたく頂いておくよ。あ、そうだ！レミリアさん達も一緒に飯食ってかないか？折角の宴会だしさ」

「いいのかしら、私達も一緒に…？」

「問題ないだろう」

「それなら」と言ってレミリアさんは霊夢の隣に座った。レミリアさんが霊夢の隣に座った瞬間、俺の真横に居たはずの咲夜さんは一瞬でレミリアさんの斜め後ろに立っていた。どういう原理かは知らないが、瞬間移動かなにかだろうか……。

「ねえねえ」

不意に袖をクイクイと引つ張られ、そちらに顔を向けるとフランドールが俺を呼んでいた。

「どつたの？」

「その……この前は、ごめんさい」

少々顔を俯かせたまま、フランドールは俺に謝罪の言葉を掛ける。レミリアさんにも言った事だが、何故彼女らは俺に礼を言ったり謝ったりするのだろうか。俺は別にそのような事される行動はとっていないはずであるというのに。でもまあ、フランドールは自分が悪かったと思っっているようなので、ここは敢えて笑うことにする。

「ハハ、謝る必要はないよ？俺は君達と遊んでいただけだからね。それより、謝るのなら俺じゃなくて妹紅に謝ったほうがいいんじゃない？」

俺はそう言つて妹紅のほうを見やると、案の定妹紅は不機嫌そうな顔でフランドールを睨んでいた。よほど殺されたのが悔しいとみえる。

「嫌よーだつてあの不死人は私に負けたんだもの」

「はあ!？」

フランドールの言葉にキレてしまったのか、妹紅は腕から火を放出しながら更に鋭い視線でフランドールを睨みつけるが、フランドールも負けじと妹紅を睨み返す。まさに一触即発の状態に、俺が二人をなだめようとした時——二人の頭上にスキマが開き、そこから妖力を帯びた拳が二人の頭を強打した。

「ぶぐゅっ!」

「きやうツ!」

紫のゲンコツが相当痛かったのか、二人は頭を抱えてうずくまってしまった。それもそうだろう。なにせ誰が聞いてもあれは痛いと分かる程、ゲンコツを受けた際大きな音が鳴り響いたのだから。俺は苦笑いを浮かべつつ紫の方を見やると、額に青筋を立て怒りの笑みを浮かべていた。

「喧嘩なら他所でやりなさい二人共。ここは宴会の場であり、乖離様の歓迎会の場でもあるのよ?これ以上今回の主役たる乖離様のお手を煩わせるようなら、スキマの中に叩き込むわよ?」

これはとんでもない脅し文句だ。紫のスキマの中に叩き込まれれば、多分霊夢辺りでないと戻つてこれないだろう。いや、下手をすれば霊夢でも無理なのではないだろうか……。紫の能力を知っている二人も、それを理解したのか申し訳なさそうに正座してしまった。

「うう、ごめん乖離。熱くなり過ぎた」

「ごめんなさいお兄様……」

あ、俺に対する申し訳なさなんだ!

二人は若干涙目になっていた。可哀想ではあるが、仕方ないだろうと思う。

「俺はいいからさ、取り敢えず二人共仲直りな?それと紫、流石にゲン

コツは可哀想だと思っただが」

「乖離様は甘過ぎます」

甘いか……。確かにそうかもしれないが、妹紅はともかく見た目が幼い少女にまでゲンコツは流石にアウトだと思う。その少女に雷撃の矢を撃ち込んだ俺が言えた義理ではないんだが。それと、何そこの巫女と魔法使いは我関せずの如く宴会料理食ってますかね……。少しはツツコミを入れるべきだと思うのは俺だけなのか……。

そして思う……。まだまだ宴会は始まったばかりなのだ

## 十三話 うんたら問答と忘れ物

S i d e 乖離

レミリアさん達を誘って皆で宴会を楽しんでいる俺と愉快的仲間たち。

皆あちらこちらで色々な会話を楽しんでいる。見ていてなんだか和む光景だ。

かく言う俺は、膝の上にフランドールを乗せている。そしてちよくちよく彼女の所望する料理を俺が後ろから彼女の口に運んでいる。一応念の為に言っておくが、これは決して故意ではない。彼女たつての希望なのだ。

『お兄様のお膝の上に座りたいわ!』とのことだ。

俺としても別に断る理由なども無い訳だし、構わないだろう。

ただ、一つだけ問題があるとしたのなら……さつきから紫と藍に妹紅から凄く凝視されている気がする。もはや紫に至つては軽い殺意すら感じる程に……。スゲー怖いです今の状況。

「お兄様、次はあのチェリーが食べたいわ!」

どうやらこのお嬢ちゃん、次はチェリーがご所望のようだ。

「あいよ〜」

俺は近くの皿にあったさくらんぼ（チェリー）を能力で右手に転移させ、それをフランドールの口元に持つて行き、フランドールはパクンとチェリーを頬張る。

「おいしい〜」

「そりゃようござんした」

異変の時はあまり考えていなかったが、こうしてみるとフランドールはやはり見掛け通りの子供なのだという事が理解できる。こうして膝の上に座らせている間も、嬉しそうに羽をパタパタとはためかせている。そして時折見せる無邪気な笑顔もあいまって、より一層彼女が（精神的に）子供なのだということがわかる。

そう言えば、この子は一体何歳なんだろうか？非常に気になる。



「なあフランドール」

「フランでいいわ！なあにお兄様？」

「フランってさ、何歳なの？見た目からして十代成りたてっぽいけど」  
「495歳よ？」

おかしいな……俺の耳がイカレてしまったのだろうか、今495歳と聞こえた気がするのだが……。もう一度聞いてみよう。

「もっかい聞くけど、フランは今何歳？」

「だから495歳よ？」

うん、どうやら俺の耳は本格的にヤラれちゃったようだ。こんな少女が三桁代など天地がひっくり返ってもありえないことだからな……。

「冗談だろ？……冗談だよな？」

俺の取った行動は、もはや現実逃避と相違なかった。何せこんな小さな少女が、見た目も中身も子供のフランが俺より年上だなんて、色んな意味で認めたくなかったのだから。

「本当よ？因みに、お姉様は私より五つ上で500歳なのよ！」

止めの一撃ありがとうフラン。おかげでもう何もかもがどうでもよくなりそうだ。

しかし、フランだけでなくレミリアさんまで俺より年上だったのには驚いた。幼いながらも礼儀を弁えたい子だと思っていたのだが、やはり人は見掛けに寄らないということだろうか。いや、この場合は人ではなく妖怪か？まあどちらでもよいが。それと、もう一つ気になったことが俺の中にはあった。フランといいレミリアさんといい、姉妹であるのなら一体彼女等は何の妖怪なのだろうか。

「そういえばさ、フランとレミリアさんは姉妹なんだろう？二人は何の妖怪なわけ？」

「妖怪などと一緒にしないでくれるかしら、私達は高貴で気高い吸血鬼よ？そこら辺の雑魚どもと一緒にされるのは不愉快よ」

「何を偉そうに言っているのよこのカリチュマ吸血鬼」

「うるさいわよ霊夢！」

霊夢の容赦ないツツコミにレミリアさんは顔を赤くして霊夢に突っかかっっていく。

それとカリチュマとはなんぞや？

しかし吸血鬼か……西洋で広く知られている古典的な妖怪……いや、悪魔と言った方がいいだろうか。鋭く強靱な爪は鉄をも引き裂き、単純な腕力も他の妖怪達とは一線を画すほどに強く、人の目では追えないほど俊敏な動きをするのだとか。

そして最もよく知られている特徴は、その名の通り人間を襲い、その鋭利な牙で血を吸う悪魔。一説には血を吸われた人間は彼等の眷属と成り果てるのだとか……。

「ん？じゃあフランやレミリアさんも人間の血を吸ったことがあるのか？」

「ええ、そりやもちろんあるわよ？つて、痛い痛い痛い！放して霊夢！」

レミリアさんは霊夢に組み伏せられながら俺の間に答えてくれた。可哀想ではあるが、そんな姿じゃなかったら拍手してたかもしれない……。

ていうかいつの間に組み伏せられたんだろう……。

「お兄様お兄様！私も一回だけあるわ！」

フランは意気揚々と俺を見上げて答えた。可愛らしい限りの笑顔ではあるが、言ってることがアレな勢でなんとも言えない。だがやはり、吸血鬼は人間の血を食料にしているのか。だとするのなら、彼女等の月の血の摂取量はどうからいなのだろうか。

俺が考え事に耽っていると軽く肩を叩かれ、叩かれた方を見やると妹紅が何かを聞いたそうな顔をしていた。

「あのさ乖離、私が言うのもあれだけど、乖離って妖怪とか怖くないのか？」

「……いや、普通に怖いけど？」

「「えっ……」」

俺の返答が意外だったのか、妹紅は驚いたよに目を見開いていた。それは妹紅だけではなく、もう一方の隣に座っていた紫や藍も妹紅と

同じような顔をし、お酒を飲む手を止めているほどだった。そんなに俺の返答が意外だったのだろうか。

「乖離様は妖怪が怖いのですか？」

「そりやもちろん怖いさ、俺人間だし」

「い、意外です……。てつきり乖離殿は妖怪に恐怖心など感じないものだとばかり」

「俺は神様か何かか？」

しかし藍の言うことも分からないわけではない。何せ俺が彼女等に取って来た態度は妖怪を恐れていないかのような素振りしか見せていなかったのだから。

「で、では乖離様は私や藍……。乖離様の膝の上に座っているフランドールやレミアアの事も怖いと思われているのですか？」

「ま、そうなるかな……。つっても、怖いからといってビクビクなんてしないけどさ」

確かに俺は人間、妖怪は怖いものだ。しかしだからといってそれを恐れ恐怖し、畏怖するかと問われれば、答えは否だ。

確かに妖怪は怖い……。だが――

「……所詮はただ怖いだけの存在だろ？なら何も問題ないじゃないか。その怖さに絶望した訳でもあるまいし」

それだけ言って俺は麦茶を一気に飲み込んだ。紫達は目を点にしているが、別にそんなになる程のことでもない気がする。レミアアさんに限っては『アホが何か言ってるわ』みたいな顔しているし、レミアアさんみたくそんな感じではないと思う。

「お兄様は私の事怖い？」

「怖いよ？でも、ある意味では怖くないな」

「どういうこと？」

「だってフランは怖いというよりかは、見掛け相応のカワイイ女の子じゃん」

「ホント!?ありがとうお兄様!」

フランは俺の返答がさぞ嬉しかったのか、羽をいまままで以上にパタパタとはためかせ始めた。俺は別に大した事を言った覚えはないの

だが、フランが嬉しいのならそれでいいだろう。

「じゃあさ、乖離は不老不死をどう思う？」

妖怪の次は不老不死と来た……。適当に流すことは可能だが、妹紅の真剣な表情を見るにそれは得策ではないだろう。しかし不老不死と来たか……。これは妖怪云々より少々厄介かもしれない。……。でもまあ——

「生き続けるだけの存在——以上！」

「え、そんだけなの!？」

「そんだけだよ」

妹紅は俺の返答が意外だったのか、真剣だった顔が拍子抜けたような顔に変わった。その後も、気持ち悪くないのか?・気味が悪くないのか?・化け物とは思わないのか?などと色々聞いてきたが、俺はその全てを『NO!』と答えてやった。ハッキリ言って不老不死など死なずに生き続けるだけの存在であって、それ以外はその他の者達と大差は無い。——ただ、一つだけ挙げるのなら……。永遠の別れを知る事になるといったところだろうか。

「なんか、乖離って凄いな……。不老不死をなんとも思わないなんてさ」

妹紅はどこか安心したように小さく呟き、お酒を猪口に注ぎ一息に飲み干した。

妹紅は不老不死であり、きっと俺の想像以上に長い時の中を生きてきたのだろう。——であれば、アレを告げても問題ないだろうか……。――

「なあ妹紅、不老不死は辛いかな？」

妹紅は「当然だ」と答えた。その表情は言葉通り悲しそうな、そして苦しそうな表情だった。

不老不死は辛い……。ならば、大丈夫だろう。

「そうか……。俺はそうでもなかったけどな」

「そうかい。——え、今乖離何て言った?!」

妹紅は最初こそ流すように答えたが、少し間を置いて俺の言った意味を理解したのか、血相を画いて聞き返してきた。

「だから、俺はそうでもなかったぞ？」

「待て待て待て！え？………。そ、それって………。もしや、乖離は——」  
「そうさ、お前の想像通り——俺は不老不死だよ……元、だけどね？  
だから不老不死に対して気持ち悪いだとか、気味が悪いだとか、化け物なんて思ったことは無いよ」

俺は目を瞑り、少し恰好付けて臭いセリフを言ってみた。我ながら結構恥ずかしい。

俺は目を開けて妹紅を見てみると、驚いた事に妹紅は目からポロポロと涙を零して泣いていた。俺は何か妹紅を泣かせてしまう事を言っただろうか……。自称ではあるが一応紳士として見過ごせない状況だ。

「お、おい何で泣いてんだよ妹紅！」

俺は少し焦りながらも妹紅を慰めるように声を掛けるが、一向に泣き止む気配がない。だが、妹紅は泣きながらも俺の問いかけにだけは答えてくれた。

「う、うう………。あいつら以外………にも理解者が居たんだと思うと………嬉しくて………同時に悲しくなって………う、ああああ」

ヤバイヤバイヤバイ！泣き止ませるはずが更に悪化させてしまった。それだけではなく、女の子を泣かせてしまった勢で周りの視線がものすごく痛い。精神的にも、ある意味物理的にも……。俺と妹紅の話を終始聞いていたメンバーは仕方ないといった顔で見守ってくれていることはある種の救いといえるだろう。

俺が戸惑い、焦っていると紫が助け舟を出してくれた——

「乖離様、その壊れた不死人は放っておいて宴会を楽しみましょう」と、思ったがまったく違った。紫は無情にもここで妹紅を切り捨てると言うのか……。俺も俺で大概だが、流石にそれは酷くないだろうか。まったく、いつから紫はこんな酷い子に育ってしまったのだろうか。

だが予想外にも紫の言葉が効いたのか、妹紅は泣き止み怒りの表情へ変わって紫に突っかかる。

「はあ？！誰が壊れてるって！」

「それはあなたよ妹紅」

俺を挟んで紫と妹紅はギャーギャーと喚き合う。正直うるさいところの上ないが、妹紅が泣き止んでくれたのはよかった。もしかしたら、これは紫の計算の内だったのかもしれないな。後で礼を言っておくでしょう。

そんなやりとりがあり、それなりに宴会を楽しんでいると不意に俺は忘れ物をしたのを思い出した。

「フラン、少し退いてくれるか？俺忘れ物を取りに戻らないといけな  
いから」

「えー、お兄様と離れたくないわ！」

「直ぐに戻るからさ、ね？」

俺がそう言うのとフランは渋々と言った表情で俺の膝から退いてくれた。俺はフランの頭を優しく撫で、感謝の言葉を述べた後走って家の方へ向かった。

※※※

走って約十分といったところだろうか。本来なら一、二時間掛かる距離だが、少し無理をして自然エネルギーを全身強化と脚力強化に回した為、思ったより早く自宅に戻ることが出来た。因みに、全身強化をせず脚力強化のみを使用した場合、体が（主に脚）が耐えられず、骨折もしくは筋肉の破裂を起こしてしまう。

まあ、そんなことはさて置き何故俺が家に戻ってきたかというところ、前途の通り忘れ物をしてしまったからだ。本当に今更な事ではあるんだがな……。

「えっと、あれはどこにやったかな〜と」

俺は今自室にて、とある一冊の本を探していたのだ。それこそが宴会から抜け出してまできた忘れ物だ。俺が探している本は、俗にいう魔導書と呼ばれるものである。俺は別に要らないのでゴミに出そう

かと思っていたが、丁度宴会ということもありこの幻想郷には魔理沙という魔法使いが居るのだから、プレゼントしようと思っていたのだ。ゴミをプレゼントするなんて最低かと思われるかもしれないが、念の為に言っておこう。——これは俺からすればただのゴミだが、俺ではない別の者達。そう、魔導士や魔法使い、魔術師からしてみればとんでもないお宝なのだ。

それは何故かって？——今俺が探している魔導書は……世に有名な大魔術師・魔術王ソロモンの所有物だったのだから。

おそらくだが、魔道世界においてソロモンの名を知らない者は居ないのではないだろうかとすら思える。

まあ、その話は追々するとして今はその魔導書を見つけなければならぬ。だが、あちらこちらを探しても全く見つからない。俺の自室はほぼ書齋の様になってしまっている為、既に数百冊の本を置いてある。

「困ったな、マジである本どこにやったっけな」

俺は困り果てて諦めようとしていた。プレゼントはまた今度でいいかな？なんて思ったりもしたが、直ぐにその思考を放棄する。男に二言は無いのだから。

だが本当にどうしたものか……このままではフランにどやされるのは間違いないだろう。

そうして俺が悩んでいると、机の引き出しからコンコンと音がした。何だろうと思ひ、机の引き出しを引くと、その引き出しから紫が出てきた。

どこから出とるんじやこいつは……。

「どったの紫？」

俺の問いかけが聞こえていないのか、紫は俺を他所に本で埋め尽くされた部屋中を見渡していた。俺は敢えてそれ以上何も言わず、紫がこちらに気付くのを待っていると、漸く俺に気付き慌てて引き出し（正確にはスキマ）から出てきた。

「も、申し訳ありません乖離様。乖離様に部屋があまりにも綺麗だったのでつい見惚れてました」

「この惨状を見てそんなセリフが吐けるお前を誇りに思うよ」

「ありがたきお言葉ですわ」

残念だが紫、俺はお前を褒めてないからな？むしろ嫌味を言ったくらいだ。

「んで、どうしたんだ？」

「帰りが遅いと思いましたが、何をなされているのかを確認に参りました」

「なるほどね、そうかそうか。悪いがもう少し遅れそうだと皆に伝えてくれ。俺は探し物で忙しいんだ」

「何を探しておられるのですか？」

「魔導書」

俺はそれだけ告げて魔導書探しに戻った。しかし、マジで見つからない。俺はわりと綺麗好きだから使った物はちゃんと元あった場所に片付けている。だというのにまったく見つからないとはどういう事だろうか。

なかなかお目当ての魔導書が見つからずイライラが増してきた俺に紫が声を掛けてきた。というかまだ居たのか……。

「か、乖離様……その魔導書とはどういった魔導書なのですか？」

「ん？……ああ、魔術王ソロモンが所有していたと伝えられている物だが、それがどうかしたのか？」

俺がそう答えると、紫は何故か額に冷や汗を掻いていた。それだけではなく、妙に顔が引きつっている。紫はオズオズといった調子でスキマを開き、そこから一冊の本を取り出した。そしてその本というのは、先程から俺が探していた魔導書であったのだ。

「紫……それは何だ……？」

俺が静かに問いかけると、紫の顔はみるみる内に青ざめ始めた。もしや紫は俺の部屋かた魔導書をクスねていたのだろうか。いや、紫に限ってそれは無いだろう。まあそれはともかくとして、今は急いで宴会に戻らなくてはならない。

「何でお前がそれを持っているかは知らないが、取り敢えず今は宴会に戻るぞ！」



俺は玄関へと急いで向かい、靴を履いて博麗神社へ向けて走り出そうとしたが、再度紫が俺の前に現れた。

「お待ちください乖離様、博麗神社には私のスキマを使って向かいましょう」

そうか、その手があつたか。何故俺は紫のスキマという便利な移動手段があるということをし念していたのだろう。紫に頼めばあの悪趣味な階段を上らずに済んだというのに……。まあ、今更悔やんでも後の祭りだ。今は折角の誘いに乗っかるとしよう。

「ああ、それじゃあ頼むよ」

「はい。ではこちらへどうぞ」

紫はそう言って少し大きめのスキマを開いてくれた。毎度思うことだが、このスキマの中の目玉達はどうにかならないのだろうか……。気味が悪いとまでは言わないが、少々気が引ける。

なんてことを思いながら、俺は再度宴会場こと博麗神社へと戻ったのだ。

## 十四話 優しい僧侶さん

S i d e 乖 離

紫のスキマを使つて宴会場、博麗神社の境内に戻つて来た。つい数十分前に居たはずなのに、どうしてこうも懐かしさを感じてしまうのか。俺はまだ若いはずなんだが、実は結構耄碌していたりなんてことがあつたりしてね。まあ、考えすぎだろう。

俺はこの宴会場で一際強い気配を発している場所へ向かう。何故ならそこには先程まで一緒に飲み食いしていたメンバーがいるからだ。だが、俺には一つだけ心配事がある。

それは言わずもがな、フランの事だ。直ぐに戻つてくるとは言ったけど、数十分も待たせてしまったのだからきつと怒っているだろうと思う。さてさて一体どう謝ればよいのだろうか？

俺がフランへの対処を考えていると、不意に肩を軽く叩かれ、振り向いてみるとどこかよそよそしい態度の紫がいた。

「あ、あの……乖離様」

「なに？」

「えつと……この本、魔導書の事なのですが……」

そう言つて紫はスキマから一冊の魔導書を取り出し、その魔導書で自分の顔を隠すように俺に見せて来た。そういえば、何故紫がこの魔導書を持っていたのか、まだ問い質していなかったな。

「それがどうかしたか？」

「はい。実は……乖離様の家から無断で私が持ち出しております……」

魔導書で紫の顔が見えないが、その声は弱々しかった。何故かは知らんけどね。というか、無断で持ち出していたのか。

「言い訳ですが、ちゃんと返すつもりだったので……。でも、その……つい見入ってしまったってお返しするのを忘れていました。……申し訳ありませんでした」

そう言つて紫は深々と頭を下げた。俺は紫が急に頭を下げてきた勢で、面喰らつてしまった。

さらに、その光景がどれだけ異常なのかは、周りの妖怪達の天地でもひっくり返つたかのように驚いた顔を見れば理解できた。紫ほどの大妖怪が、どこにでもいそうな貧弱な人間（俺）に頭を下げていたのだから、無理もない事だろう。しかも紫つて『幻想郷最強の大妖怪』なんて呼ばれていなかったか？

そんなことはともかく、この状況は俺自身にもあまりよろしくないのだ。紫はこれといつて悪い事をした訳でもないというのに、俺に頭を下げるなど間違つている。

「紫、頭を上げてくれ。俺は別にお前に対して怒っている訳でも、謝罪を欲している訳でもないから」

「しかし、私は……」

紫はなかなか頭を上げてくれない。状況が状況だけに、もしこんな様の紫を藍が見たりなどしたら、一体俺はどう藍に謝ればいいのか。そもそも謝つて許してくれるのだろうか。

「頼むから頭を上げてくれよ紫……マジでさあ」

さつきから周りの妖怪達の目線だ痛い。忘れ物を取りに戻る前もそうだったが、今回のはまったくそれとは違う痛みだ。『何あいつ妖怪の賢者に頭下げさせとるぞ？』

『人間怖ッ！近寄らんとこ……』……みたいな目で先程から見られている。

やめてよく俺友達出来なくなるじゃないかー。

だが、俺の願いは届いたようで、ようやく紫が頭を上げてくれた。これでなんとか妖怪達の誤解も解けるはずだ。確証はないが、まあいいだろう。

「さつさと皆の所に行こうぜ」

「乖離様……」

紫はまだ罪悪感が抜けていないようで、なかなか動こうとしなかった。

仕方がないので、今度は俺の番というように、俺は紫から魔導書を

返してもらい紫の手を引いて皆のいる場所に向かう。こうして紫の手を握ったのは何時振りだっただろうか。昔は小さかった子供の手なのに、今は大人の綺麗な大人の手に成長している。

なんていうか……その……下品なんですが……フフ………勃（キモイのでカット）

※※※

紫となんやかんやあったが、俺は無事（精神的）に皆の所に戻るこ  
とが出来た。

出来たのだが、やはりフランは俺が帰ってくるのが遅いということにご立腹だったようで、鳩尾にタツクルをもらってしまった。その威力は三十キロで車が突っ込んでくるのと同じくらいだろう。すんでの所で身体強化をしておいたので、骨折は免れた。

その勢で、現在俺は小さなうめき声を上げて地面に膝を着いている状態だ。

「ううう〜」

「大丈夫か乖離？」

「鳩尾は痛いわよね〜」

俺を心配するように魔理沙と霊夢が優しく俺の背中をさすってくれる。出来れば背中ではなく鳩尾のあたりをさすって欲しいところだが、我が儘は言うまい。

「あ、ああ大丈夫……」

まだ鳩尾部は痛むが、時間が経てばこの痛みも引いていくだろう。俺はゆっくりと立ち上がり、深呼吸をして呼吸を整える。そして俺をこんなにまで追い込んだ主犯・フランの方に振り向く。

「悪かったよフラン、探し物をしてたんだ」

「……罰として頭を撫でて欲しいわ」

「あいよ」

俺は優しく帽子の上からフランの頭を撫でると、気持ち良さそうに

目を細め不機嫌だったのが上機嫌に変わっていった。その証拠に先程まで萎れていた羽が元気になり、パタパタと動きはじめたのだから。子供は単純だが、そこがまたカワイイ所でもあると思う。

そういえばだが、妹紅だけがこの場にはいないのだ。気配を探ってみたところ、まだ宴会場にはいるようだ。それだけではなく、感知してきた気配の中には慧音さんの妖力や、異変があった日、寺子屋で見掛けた妖精の霊力とそーなのかーの妖力が一か所に集まっていたのだ。ということは、おそらく妹紅は慧音さん達の所に向かったのだろう。であれば心配なしでいいだろう。慧音さん達には後で挨拶に向かうとしよう。

俺はフランの頭から一端手を放し、懐から魔導書を取り出す。

「魔理沙、これやるよ」

俺はそう言って魔理沙に魔導書を投げ渡した。いきなりのことに魔理沙は慌てていたが、なんとか魔導書をキャッチ出来た。

「な、なんだぞこれ？魔導書か？」

「そう、その魔導書は魔術王ソロモンの所有物だったものさ」

「なにーッツツ!!」

魔理沙は目を見開き叫ぶさように驚きの声を上げた。その様子を見るに、やはり魔理沙も魔法使いの端くれ、流石にソロモンの事は知っていたか。

「ソロモンって言えば、あのソロモンか！伝説の……大魔術師の!!」

「だから、そのソロモンだって」

よほど信じられないのか、魔理沙は再三本当なのか？と聞いて来る。本当に、魔理沙に渡したのは間違いなく魔術王ソロモンの所有していた魔道書だ。

「な、なあ……読んでいいか！読んでいいか!!」

「お、おう」

俺が許可を出すと、魔理沙は嬉しそうに目を輝かせ、魔導書に目を走らせ始めた。魔理沙は魔法使いということもあるので、やはり魔道書などは読み慣れているようだ。その証拠に、十秒毎に一ページめくっていた。それだけを見れば、ただ流し読みしているようにしか見

えないのは黙っておこう。

俺もそれなりに読書家だが、こんなに早く読めるだろうか。……いや、無理だろうな。

魔理沙は自分の世界に入ってしまった為、戻ってくるまで放置することにした。では俺は今なにをしているかというと、魔理沙を除いたメンバーで雑談を興じていた。雑談と言っても、他愛もない世間話だが。

「なるほどね、レミリアさん達も外来人なのか。こりやビツクリ」

「顔がまったく驚いていないわよ？まあ、でもそうね。もう昔の話だけれど」

「昔つて、つい半年前くらいじゃない」

「過去の事なら、昔つて表現でもいいじゃない」

霊夢のツツコミに、レミリアさんは少し恥ずかしいように答える。その間あまり表情を変えていなかった咲夜さんはクスクスと口を当てて笑っていた。

「何笑ってるのよ咲夜！」

「も、申し訳ありませんお嬢様……」

おっと、笑っているのがレミリアさんにバレてしまったようで、咲夜さんはレミリアさんからお叱りを受けてしまった。叱られている時でも、咲夜さんはやはり引きつった表情のままだった。それほどまでにさっきのレミリアさんは咲夜さんのツボにハマったようだ。

主従による微笑ましい光景を眺めていると、突然背中に誰かが抱き着いてきた。十中八九フランだろうけど。

「どうしたフラン？」

「ん？お兄様に抱き着いてみただけよ？」

「何故？」

「そうしたかったから！」

フランは輝くような笑顔で返答をくれた。男としては実に嬉しいことだが、流石にそれだけの理由で抱き着いていいものだろうか……。あ、もちろん嬉しいですよ？

「あ、そうそう霊夢、トイレってどこにある？」

「玄関入って廊下の右奥にあるわよ？」

「ありがとう」

俺は抱き着いていたフランに放してもらい、立ち上がって社の方へ向かおうとして、腰に再度フランが抱き着いてきた。

「フラン？」

「私も一緒に行くわ！」

「フランもトイレか？」

「ううん、お兄様と一緒にいいだけ」

嬉しい事を言ってくれる。がしかし、流石にトイレまで一緒つてのはアウトな気がする。倫理的にね。

なんとかフランを説得しようとしても、フランは全て首を横に振るだけだった。仕方がないので、フランも一緒に連れて行く事にした。流石にトイレの扉の外にはいてもらうけどね。でないと、俺がトイレに少女を連れ込んだ鬼畜外道となってしまうからだ。

※※※

トイレを済ました俺は、玄関でシヨンボリと座っているフランが目に入った。玄関で待っているようにと言ったのは俺だが、あんなにも寂しそうにされては心が痛む。だからと言って、トイレも一緒という訳にもいかないのだが…。

「フラン」

俺が声を掛けると、フランは俺の方を向き勢いよく立ち上がり、俺の元にダツシユで駆けて来た。

「お兄様！」

そう言つてフランは俺に飛びついてきた。一瞬避けようとも考えたが、それは流石に酷なので、受け止めてやることにした。

それでも勢いがあった為、俺はフランを抱いたまま後ろに倒れてしまった。俺が下になったおかげで、フランには傷一つ無かった。まあ転んだ程度で吸血鬼が傷つくとは思えないが。ただ、人間である俺は

結構痛かったがな。

「いててて、フラン：大丈夫か？」

「お兄様が受け止めてくれたから大丈夫よ！」

「そりやようござんした。それと、退いてくれる？」

俺がそう言うのと、フランは渋々といった感じで退いてくれた。俺はゆっくりと立ち上がり、フランの頭を優しく撫でて待っていてくれた事に礼を言っって一緒に社を出た。

俺はフランと手を繋いだ状態で皆の所に戻っていた。その道中何度かフランがあつとに行きたいこつちに行きたいとせがんでくるので、それに付き合っっていて俺はへ口へ口状態だ。

運動音痴？うるせーよ。

そんなこんなで皆の所に戻っていると、不意に一週間前に感じた強い気配がこちらに近づいてきた。それは一つではなく、もう一つ存在していた。

感じるのは魔力・それも魔理沙の数倍はあるのではないかと思わせるほどに強大なものだった。どうやらその気配を感じ取ったのは俺だけではなく、フランも目を少し細め気配のする方向を睨んでいた。

少しその場で留まっっていると、二つの強い気配の持ち主がようやく現れた。一人はやはり先の異変の首謀者の一人、封獣ぬえ（アホの子w）だった。顔を合わせると同時に一瞬驚いた表情になったが、直ぐにグツと睨みつけてきた。

ぬえの睨みなどそつちのけで、俺はもう一人の人に意識を向けた。紫がかった膝までとどきそうな長い金髪に、ゴスロリ風の白黒いドレスを着た女性が金色の瞳でじつと俺を品定めするように見てきた。

敵意や悪意は感じない。が、内包する魔力が魔力なだけに、俺も警戒せずにはいられなかった。

しばしの沈黙の後、先に口を開いたのは白黒ドレスを着た女性だった。

「突然申し訳ありません、私は命蓮寺で住職をしている聖白蓮と申します。失礼ですが、あなたが氷匏乖離さんで間違いありませんか？」



この挨拶のされ方、今日で二度目な気がする。

「ええ、俺が氷匏乖離です」

聖白蓮と名乗った女性……それに、今命蓮寺で住職をしていると言っていた。命蓮寺と言えば、幻想郷に来た初日、幻想郷を一望できる丘の上から見えた人里付近にあった大きな寺だったはず。紫曰く、妖怪寺だとか。どうして妖怪寺なのかは少し興味がある。

「それで、俺に何か用でしょうか……」

「先の異変……ぬえを止めていただけありがたいがとうございました」

そう言って住職さんは俺に頭を下げてきた。

まただよ……今日で三度目だよ。一体一日に何度俺は女性陣に頭を下げられなければならぬのだろう。

「頭を上げてください。俺はぬえ達と遊んでただけなので、礼を言われるような事はしてませんよ」

「経緯はどうあれ、あなたがぬえを止めてくれた事には代わりありません。ですので、大事なぬえの家族として私はあなたにお礼を言わなければなりません」

そのセリフも今日で二度目だ。レミリアさんもだが、何故この住職さんも俺にお礼などするのだろうか。俺は本当にぬえ達と遊んでいただけだというのに。それに、ぶっちゃけ遊んでいたのは俺だけだったと思う。だってワンサイドゲームだったしさあ……。

「とにかく、本当に頭を上げてください。それに、寺の住職さんが簡単に頭なんか下げちゃダメですよ」

「そうそう聖、そいつに下げる頭なんかないよ！」

「そうですとも。俺なんか頭に下げちゃダメですよ」

ぬえの言葉に便乗するように、俺は住職さんに再度頭を上げてもらうように懇願する。一方ぬえは嫌味を言ったつもりだったのか、それに便乗した俺を悔しそうに睨んで来た。俺はどんだけこいつに嫌われているのだろうか。

紫同様に、俺の願いが届いたのか住職さんはようやく頭を上げてくれた。

「あなたは心が広いお方なのですな」

「そうでもないですよ。ただ単にアホなだけです」

「フフ、面白い方ですね。まだ数度しか言の葉を交わしていませんが、ぬえが気に入るのも分かります」

「ちよっ！聖何言ってるのよー！」

おっと、今何やら面白いカミングアウトが聞こえた気がする。ぬえが俺の事を気に入っているとかなんとか。つつけんどんな態度を取ってはいるが、実は心の中ではなんとやら、みたいな？俗にいうツンデレか……うむ、嫌いじゃない。

「あんた、今何考えた！」

「いえ何も……」

危ない危ない、ぬえはなかなか鋭いようだ。その勘の良さはやはり妖怪故なのかもしれない。

俺とぬえが他愛もないじゃれ合いをしていると、今度はほぼ毎日感じていた妖力が俺の方へ猛スピードで接近してきた。この妖力は間違いなくこころちゃんだろう。しかし、何故そんな猛スピードで走

「乖離見つけた！」

「へぶしっー」

何か意味不明な悲鳴が出たがどうでもいい……。考え事もつかの間、俺は猛スピードで接近してきたこころちゃんのタツクルをノーガードで背中に喰らってしまった。その痛みたるや、フランの鳩尾タツクル以上だった。

こころちゃんのタツクルで数メートル程吹き飛ばされ、背中の痛みで起き上がれない状態の中、こころちゃんは俺の背中に乗った状態で話しかけてきた。

「乖離遅い……私が折角舞を披露してやろうというのに……って、どうして倒れてるの？」

「じ、自分の心に聞いてみな……」

「ん、分からないから教えて〜」

嘘だ！この子絶対分かって聞いてるだろ！無表情だが俺の無様な姿を見て楽しんでる。そんな気がする。

「ていうか、俺から降りてくれない？さっきから背中痛いんですけど……」

「あれ、こころじゃん。何してんのこんな所で」

「あ、ぬえー！それと聖も。ん……あなたは誰？」

「私はフランドール・スカーレットよ！」

話聞いてませんねこの子。ていうか、マジで退いてほしい。こころちゃんが俺の背中に乗っているおかげで、さっきから背中の痛みがどんどん悪化していつているような気がするのは俺の気のせいですか？そうですか……。

大体、ぬえはともかくとして、フランや住職さんまで俺の事スルーですか？

「久しぶりですねこころ。元気でしたか？」

「うん」

「そうですか、それは良かった。……それより、そろそろ降りてあげた方が良いのでは？」

「あ、そうだった。乖離ゴメンゴメン」

「わざとだろこころちゃん……」

そう言っでこころちゃんはようやく俺の背中から離れてくれた。がしかし、それでもまだ背中の痛みの勢で俺は立ち上がれずにいた。いやマジで……。

「お兄様大丈夫？」

「大丈夫あんた」（クスクス）

フランよ、その心配はもう少し早くして欲しかったな。それとぬえ、人の不幸を笑うんじゃないよ。

「大丈夫ですか？少し待っててくださいね、今治癒魔法をかけますので」

そう言うと、住職さんの両手が黄緑色に輝き始めた。感じる魔力は癒しや潤いといった、回復専用の魔力だとすぐに分かった。本当にこの人は俺の背中に治癒魔法をかけてくれるようだ。

住職さんの手が服越しではあるが、俺の背中に触れると少しづつではあるが、背中の痛みが引いてきた。そして十数秒も経てばまったく

痛みを感じなくなり、普通に動けるようになった。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いえ、私にはこの程度しかできませんでした。その左腕も治そうしたのですが、私の治療魔法があまり効果を発揮しませんでした。お力になれず申し訳ありません」

「いえいえ、背中痛みを消してもらっただけで十分ですよ。その上この左腕まで治してもらおうだなんて、望み過ぎですよ」

「それならいいのですが……」つと住職さんは渋々ではあるが納得してくれました。本当にこの左腕まで治してくれようとしてくれたただなんて、とても優しい方なんだな。それに、寺の住職といえは、宗教勧誘でうるさいと聞いていたが、そんな素振りを見せないあたり、やはりあの情報はただの偏見紛いのものだったようだ。

「あ、そういえば、乖離さんはぬえやその他の妖怪の事などどう思っていますか?」

「え? ああ、面白い奴等だと思つてますよ?」

「……彼女等はあなたとは違う……。『妖怪』なのですよ?」

急に住職さんの顔と口調が真剣なものに変わった。それと同時に強い威圧感すら感じる。どうやら俺は今試されているらしい。

ああ、やはりこの人は彼女に少し似ている。姿形ではなく、その風格と物の見方が。

俺は近くでじゃれ合っているこころちゃん達を少し遠い目で見ながら、口を開く。

「そうですね……確かに彼女等は俺達とは違う妖怪だ。力も、物の考え方も、捉え方も、価値観もまったく違う」

住職さんは何も言わず、黙って俺の話しを静聴してくれる。そのおかげで、俺自身も話を進めやすいというものだ。

「しかしだからといって、彼女等妖怪が悪い訳じゃない。俺達人間にも色々な価値観や基準があるように、彼女等にもまたそれがある。そして、その善し悪しを決めるのはその者の育った環境に大きく依存する。……極端な例えですが、人殺しの家庭で育った子供が親の背中のみ見て育った場合、どうなると思えます?」

「その子は人殺しが正しいものだと思ひ込めようね……」

「そう。だから、俺には妖怪も人間もそれほど大した差などないと思うんですよ。妖怪も、生まれた時から常に人間と触れ合っていれば愛を持つだろうし、人間もまた妖怪と生まれた時から触れ合っていれば愛を持つことが出来る。まあ、結局何が言いたいのかというところですね、人間も妖怪も環境によって左右されるだけのことですよ」

そう、つまり妖怪が人間を襲って食おうとするのも、その妖怪が育った環境でもあり、それが彼等妖怪の生きようとする本能でもある。それは人間が牛や豚を食うのと何ら変わらない。妖怪にとつて人間は家畜同然……ならば、その価値観でいいじゃないか。それがおかしい訳でも、間違っている訳でもないのだから、それを咎める権利は例え神であつても持ち合わせていない。

それでも、妖怪が人間に対する見方が、時には餌から友へと変わる事がある。でなきやああして紫や藍にころちゃん、フランにレミリアさんとぬえといった妖怪達と仲良くできるはずがない。

俺の話を静聴していた住職さんは、何を思ったのか、ずつと顎に手を当てて考え込んでいた。そしてなにやら思いついたのか、ようやく口を開いた。

「つまり、乖離さんは妖怪が好きなのですか？」

おお、ずつと真剣に考え込んでいたと思つたら……そんな事か。そんなもの、問われるまでもなく――

「ええ、好きですよ。妖怪も、人間も……。どちらもね？」

俺の返答を聞いた住職さんは、クスクスと笑っていた。俺はなのか笑われるような事を言つただろうか。まったく身に覚えがないのだが。

「ごめんなさい……笑うつもりはなかったのですが、予想外の答えに驚いてしまって、気を詰め過ぎた自分が浅はかだと思つと……つい」

「は、はあ……」

なんだ、そういうことだったのか。てつきり俺の返答が頭のおかしい奴と思われたのではないかと心配になつたのだが、それならまあ良いだろう。自分の事だし。

「住職さんも、妖怪が好きなんですか？」

「聖で構いませんよ？白蓮でもいいですね、好きな方で呼んでください。それと、私も妖怪の事は好きですよ？彼等は我々人間とはまた違う、希望び満ちておりますので」

『その希望に導くのが私の仕事でもありますので』つと付け足して答えてくれた。なるほど、この人もこの人でやはり宗教家ということなのだろう。妖怪を好きであるが故、平等な存在として人と同じように接しているのかもしれない。であれば、あのぬえの態度が納得いかなからな。さつきまでも同じだが、聖さんはやはり宗教勧誘などはいない主義なのだろうか。まったくそんな素振りを見せない辺り、結構好感が持てるな。

「そうそう、乖離さんは仏教にご興味はおありですか？」  
「……………」

前言撤回、この人もバリバリ宗教家だ。まったく、あの豊聡耳とい何故こうも宗教家の連中は俺を勧誘したがるのか。まったくもって理解に苦しむ。

「興味はありますが、入信する気はありませんよ？」

「うっ、残念です。あなたほどの方が入信なさってくださいれば、妖怪達の希望となられるでしょうに」

そのセリフは人生で二度目だ。一度目は豊聡耳からだだった。あいつもあいつでかなり諦めが悪かったのは一種のトラウマものだ。欲だのなんだのとうるせーし。

「あ、でもいざれ命蓮寺に遊びに来てください。ぬえのこともありませんし、お礼も兼ねて歓迎致しますよ」

「ええ、近い内にお邪魔させていただきます。その時は色々よろしくお願いします」

「はい、喜んで！」

聖さんは嬉しそうに笑顔で返事をしてくれた。俺はその向けられた笑顔に癒されながら、まだじゃれ合い（弾幕ごっこ一歩手前）をしている三人の少女達の元へ向かったのだった。

## 十五話 文々。新聞

### S i d e 乖離

聖さんと軽い雑談に興じた後、俺はじゃれ合いをしていたおバカさん達を落ち着かせ、再度聖さんと数分雑談をしていたが、彼女も住職の身である為一足先に帰ってしまった。

もちろん命蓮寺に遊びに行く事を約束させられてね。

そして、その後どうしているかというところ——

「アハハハ！高い高い！」

「ちよつと、もつと早く歩けないの？」

「乖離遅い……」

「……………」

フランは俺に肩車された状態、ぬえとこころちゃんは俺の背中に浮遊してくっ付いている状態で歩かされていたのだ。……………どうしてこうなったんだ。

ことの顛末だけ説明すると、聖さんと別れた後直ぐに俺は紫達の元まで戻ろうと歩いていた。そうしていると、突然この三人が俺に飛び掛かってきたのだ。何故かは知らないが、おそらく子供のイタズラってところだろう。

「なあお三方、さっさと降りてはくれませんかね？」

「「だが断る！」」

三人揃って有名漫画家のセリフで拒否されてしまった。俺に拒否権は無いようで、困ってしまう。別に嫌だという訳ではない。むしろ嬉しい方だ。だが、この三人のTPOを弁えない行動のおかげで、まともや周りの妖怪達から嫌な視線を感じてしまう。俺の勢ではないというのに。

まあそれはともかくとして、俺は少し気になった事をぬえに聞いてみた。

「そういえばさぬえ、異変の日の最後に残ったキメラ、あれどうなったの?」

「ああ、居たわねそんなの。さあ、今頃どこかで幸せに暮らしているんじゃない?」

「ふん。それならいいんだけどね」

俺が最後の最後で結局仕留め損ねた……いや、敢えて見逃したキメラは今も元気にやっているだろうか。別に心配している訳ではないがなんとなく気になる。というか、今日のいままで、ぬえの顔を見るまであのキメラの事を忘れていたのは秘密だ。

「んじやもう一つ聞くが、お前聖さんと帰らなくてよかったのか?」

「別にいいわよ。私は帰りたいたい時に帰るだけだし……」

ぬえの言葉には、どこか寂しいといった感情があった。俺にはどうしてぬえが寂しいと感じてしまったのかはなんとなくだが理解できた。それに、彼女は俺に抱きついていて腕の力を少しばかり強めていたのだから。

「一人は寂しいかぬえ?」

「は、はあ?急に何言ってるのよ!」

「いや、なんとなくね」

俺がそう言うと、ぬえは少しの間黙り込んでしまった。

しばしの沈黙が流れた後、ようやくぬえが口を開いた。

「うっさいわよ……バカ死ね!」

「ぐほッ」

開口早々にこれだ。俺への罵倒と同時にぬえは背中を殴って来た。痛みはそれほど大したものではないが、先程折角聖さんに治してもらったばかりの背中なのだから、あまり痛めつけないでほしいところだ。

しかしまあ、俺はぬえの事はあまり知らないがこれが彼女なりの照れ隠しのようなものなのだろう。であればこの程度の痛みくらいは我慢できる。流石に本気で殴られたら死ぬがな。

「ぬえちゃんばっかりズルいわ!お兄様、私ともお話ししましょう」

「乖離、私も私も!」



ぬえとばかり話しているのが気に食わないのか、フランは俺の頭上でジタバタし始め、こころちゃんは俺の横腹を軽く小突いてきた。

「わかったわかった。落ち着けて二人とも！」

子供の相手をするというのは中々に苦勞する。一度機嫌を損ねれば拗ねてしまつてこちらの話しを聞こうともしなくなつてしまうのだから。それを思えば、この三人は幾分かマシに見えて来る。それは、それぞれがそれぞれのちゃんとした考えを持つてくれているからだろう。ぬえ以外は中身も外見も子供だがな。

そういえばだが、どうして俺はぬえに気に入られているのだろうか。不思議〜。

※※※

やっとこさ皆のところに戻つてくれた。

戻つてこれたのはいいのだが、俺があの人三人そのままの状態で連れて来た時は、結構危なかつた。何が？俺自身ではなく、紫があの人三人に対する殺意が兎に角ヤバかつた。なんとか落ち着いてはもらえたが、まだ完全にほとぼりが冷めておらず、今でもあの三人に対して殺気の籠つた視線で睨みつけている。おお、くわばらくわばら。

そして俺はというと、魔導書を読み終えていた魔理沙と、本に興味があるということで藍と霊夢、更にはレミリアさんも加えて魔導談義をしていた。

魔理沙が重点的に読んでいたページの説明から解釈まで、全てを手取り足取り隅から隅まで教えていた。魔理沙が聞いてきたのは固有結界と虚構世界の真理だ。

「んで、どこまで説明したんだつたか？」

「固有結界の発動からその術式までだつたはずよ？」

「ああ、確かにその辺だつたね」

意外なことに、魔理沙はともかく霊夢や藍まで真剣になつて俺の話聞いていた。レミリアさんは興味本意らしいが、彼女も彼女で割と真剣に俺の話聞いてくれていた。

説明に戻るが、そもそも固有結界とは術者の記憶、またはその魔術回路に刻まれた歴史などを疑似的に再現し、現実を歪め浸食する大禁呪である。結界とは名ばかりで、その本質は空間断絶に等しいものである。

簡単な例え話だが、霊夢が魔理沙と草原で対峙しています。そこには第三者もいます。そして魔理沙が霊夢に対し固有結界を発動します。魔理沙の固有結界（記憶に基く心象風景）は自分の家とします。となると、霊夢は魔理沙によって、記憶だけの魔理沙の家に強制転移されてしまいます。もちろん術者である魔理沙も一緒に。そして二人を見ていた第三者からすれば、突然目の前から二人が急に消えてしまったように見えるのです。

ここで一番のポイントとなるのが、先程言った空間断絶。魔理沙の発動した固有結界はこの世界とも繋がらず、魔理沙だけの疑似空間・スケールでいえば魔理沙だけの世界となる為、固有結界が解除されるまではどこをどう探しても霊夢と魔理沙は見つけることが出来なくなるのです。例えば紫が境界を操ったとしても、この二人を見つけないのは困難を極めるでしょう。

次に発動となるだが、訂正しよう。先程の例え話は少し極端だっただろう。……何せ、固有結界は魔術師三人で行うものであるからだ。先の説明で予想はつくだろうが、あれほど大掛かりな大魔術なのだから、たった一人での発動などまず不可能。それに、先程三人とは言ったが、その三人も並大抵の魔術師では不可能。幻想郷に魔術師や魔法使いといった者達が何人いるかは分からないが、せめて魔理沙以上のレベルの魔術師が三人揃わないと発動は難しい。

「とまあ、こんな感じになるかな」

「ん〜要は、ビックリ魔術ってこと?」

俺が説明下手だったのか、霊夢は首を傾げてしまう。しかもそれは霊夢だけではなく、レミリアさんまで首を傾げてしまっていた。まあ霊夢の質問はある意味正解ではあるが、ビックリ魔術の域ではないの

はご理解頂きたい。

「乖離殿、その固有結界なのですが、妖術という形で再現することは可能でしょうか？乖離殿の説明を聞く限り、不可能ではない。と思ったのですが」

流石は藍だ、俺の話をしつかりと聞いていてくれた。紫の教育が良かったのかそれとも才能か……もしくは両方か。どちらにせよ俺にとってにはありがたいことだ。

「不可能ではないけど、完全な固有結界という形はとれないかな。魔力ではなく妖力を核とする辺り、オリジナルとは別物になるかもね」  
「なるほど、勉強になります！」

藍はどこから出したか分からないが、一冊のノートにペンを走らせ始めた。勤勉なのは良いことだが、ほどほどにね。

「なあ乖離、私の知り合いに私と同等かそれ以上の魔法使いが二人いるんだが、そいつらとなら固有結界の発動ってできるか？」

「条件さえ揃えればおそらく」

「そっか！なら今度試してみるぜ！」

俺の答えに満足したのか、魔理沙は喜びの声を上げた。万が一の為にも、魔理沙達が固有結界を発動させようというのなら俺が監視人として居た方がいいかもしれないな。あれ結構危ないし。

とりあえず説明し終わった俺は、喉が渴いたので麦茶を一口だけ飲んで机にコップを置いた。さて、紫達はどうしているか…。

「だくかくらー！乖離の左腕は乖離の自業自得じゃんか！」

「何度も言っているでしょう？それを差し引いてもあなた達が悪いと」

「お前私の話聞いてないでしょー！」

「あなたが言えた義理でもないはずよー！」

なんの喧嘩だよまったく。千年以上生きてきた大妖怪二人が子供みたいに騒いじゃってまあ……見苦しいったらありやしないよ。

そもそもこの左腕はぬえの言う通り俺の自業自得であるが故、紫がぬえに対して怒りの感情を向けるのは筋違いというものだ。そして

ぬえもぬえで、どうしてそこまで食って掛かるのかねえ。俺には理解できないな。

「はいお二人さん、そこまでな」

そろそろ危なそうなので、俺は紫とぬえのいがみ合いの仲裁に入った。

「乖離様……」

「乖離……」

「紫、この左腕はぬえの言う通り俺の自業自得だから、ぬえ達を責めるのは筋違いだぞ？」

「しかし！」

「ほら見ろ！乖離だつてこう言ってるぞ！」

「ぬえもだよ。いちいち紫を煽らんでいい」

「うう……」

まったくぬえもだが、紫もいい歳の大人なんだから、子供みたいなやりとりはしないで欲しいものだ。見てるこっちが恥ずかしい。

「あややや、大妖怪二人を諫めてしまうとは……あなたが噂の外来人ですか？」

俺が紫とぬえに注意をしていると、急に後ろから女性の声が聞こえてきた。誰だ？と一瞬考えたが、感じる妖力からして俺が幻想郷に来た初日に見掛けた黒い翼の者であることが分かった。

俺は声の主を確かめるべく振り返ってみると、そこにはカメラを持った黒い大きな翼を付けた少女がキラキラした笑顔で立っていた。

「あら、文じゃない。今更来たのね」

「お久しぶりです紫さん。これでも急いで来たんですよ」

文と呼ばれた少女は紫の言葉に対し少々うなだれるように答えた。しかしなんだろうかこの娘は……。俺自身初めての感覚なのだが、この娘に相手取るととても面倒くさいことになる気がする。失礼なことであるのは承知の上だが、何故か俺の直感がそう告げている。

それに、紫以外のメンバーが彼女を『うわっ！面倒なのが来た！』みたいな目で見ていることからなのかもしれない。

「そんなことより本題に入らなくては！私は清く正しい射命丸文と申

します。文で構いません。あなたが噂の外来人で間違いありませんか?」

「え?あ、うん。間違いないよ」

考え事も束の間、文はメモ帳を取り出しグイグイと俺に寄って来た。

「やはり、グッドタイミングでした!あの、申し訳ないのですが取材させてもらってもよろしいですか?」

「しゅ、取材?」

「はい!私、幻想郷で『文々。新聞』と言う新聞記者をしております、ネタの提供をして頂きたく、取材をさせて欲しいのです!」

取材……悪くない。面白しろそうなので乗ってみることにしよう。

あと文さんや、顔が非常に近いです。

「俺でよければ、いいぞ?」

「ありがとうございます!オホン、では早速取材させてもらいますね?まずは、お名前を教えてください」

「氷匏乖離だ」

氷匏乖離さんですねぇつと、メモ帳にスラスラか書いていく。その手慣れた様は、本当に記者のようだった。自分で名乗ってたから記者なんだろうけどさ。

「では次、職業はなにをされてます?」

「今のところは何もしてないかな」

「ニートって事ですか?」

「そんなこと言わないでくれない?」

さすがにそれは傷つくな。でも否定できないというのがなんとも心苦しい。よし、職を探す。これからの課題として憶えておこう。

「幻想郷に来たのはいつ頃ですか?」

「ん、大体一週間と三日前くらいかな」

「なるほどなるほど。趣味はなんですか?」

「ゲーム・将棋・読書・釣り・料理等々」

「将棋もされているんですね!因みに実力はどのくらいですか?」

「さあね、分かんないかな?あ、でも紫には勝ったぞ?」

「フアッ!!」

突然の大声とともに、文の顔が驚愕に満ちた表情に変わってしまった。メモ帳を手から滑り落としてしまうほどに。そんなに驚くことなんだろうか。

「事実ですか紫さん!？」

「ええ、事実よ? 私の無敗録は乖離様によつて幕を閉ざされたわ」

そんなに重く語らなくてもいいだろうに。それに、俺が紫に勝てたのは最後の最後で紫がミスをしてしまったからであつて、俺の完全勝利と呼べるか分からないのだ。まあ、集中を乱した紫が悪いと言つてしまえばそれまでののだが。

「驚きました……将棋で紫さんに勝てる者がこの世に存在していたんですね!」

「大げさだろ! そこまで大したことでもないと思うんだが」

「何言つてるんですか! 紫さんはこれまで幻想郷で行われてきた将棋王決定戦で全試合無敗を誇つていたほどの実力者なんですよ!」

(将棋王決定戦だど?!? なにそれ面白そうなんだけど……俺も是非参加したい)

なんて思う事を許してもらいたいな。

「しかも将棋王決定戦に参加したメンバーは霊夢さんを始め、天人さんのお目付け役の方や、妖怪寺の僧侶さん、神霊廟の太子さん、白玉楼の幽々子さん、妖怪の山の軍神、我らが天狗の長である天魔さま、永遠亭の薬師さん、果ては地獄の閻魔様まで。皆歴戦の覇者と言つても過言ではない方々なんですよ!」

「そうなんだなあ。てか文は天狗だったのか」

「そういえば言つてませんでしたね! 私は鴉天狗なんです!」

しかし、文の言つていたメンバーの中には見知った者がいる気がする。妖怪寺の僧侶さんと言えば、今日出会った聖さんだろう。それに神霊廟の太子と言えば、十中八九豊聡耳だろう。それに地獄の閻魔様……おそらくあの説教好きのロリ……いや、これを言うのはやめておこう。嫌な予感しかしないし。

でもまあ、聞くところによると確かに凄そう者達ばかりではある。

「てか、本題から逸れてないか？」

「あ、そうでした！えっと、次の質問なんですけど……好みの女性のタイプです！」

そう言っただけは気を取り直したのか、地面に落ちたメモ帳を拾って再度取材を開始した。しかし、次はそう来たか。まあ答えられない訳でもないし、答えてみてもいい気がする。

「『その辺詳しく!!』」  
「!？」

突然紫と藍とこころちゃんがとてつもない勢いで押し寄せてきた。その顔はまさに鬼気迫るかのような表情で（こころちゃんは除く）。そこまで気になるのだろうか。紫はまあ、分かんなくても藍とこころちゃんは何故なのだろう。分からんなあ。

「えっと、好みの女性のタイプは……そうだな、ユーモアのある娘とかかな？それと、俺の作った料理を美味いと言って食ってくれる人もいいな」

「そういうえば料理もできると言っていましたね、何が得意ですか？」  
「得意な料理は色々あるけど、やっぱり一番得意といえばスイーツ系かな？」

「あやや、乖離さんはスイーツ系も作れるのですか？凄いですね！」  
「俺は甘い物とか結構好きだからさ、自分で色々作って食ってるんだよ」

「乖離……私もスイーツ食べたい」

こころちゃんは若干よだれを垂らしながら俺にスイーツを作って欲しいとせがんで来た。作ってやりたいが、まずはよだれを拭いてからにしようかこころちゃん。

そしてスイーツ好きはこころちゃんのみならず――

「お兄様！私もスイーツ食べたいわ!!」

フランは走って俺の背中に飛びついてきた。やはりだ。女の子は皆美味しいスイーツに惹かれるものだ。それは人間以外であっても例外ではない。ていうか女の子は皆甘い物が好きなんだろう。

「仕方ないなあ。よし、今度プリンを作っちゃろう！」

「わーい！」

フランとこころちゃんは嬉しそうに声を張り上げる。まったく、女の子ってのはスイーツに目がないようだ。ま、そこが魅力でもあるのだがな。

そんな中、不意に右手をツンツンとつつかれそちらの方を見てもみると、少し顔を赤くしたレミリアさんが居た。

「ね、ねえ乖離……その、失礼は承知の上なのだけれど……私にもプリンを作ってもらえないかしら」

スイーツって凄いな！最初に会った時は肌が痺れる程に強い妖力を感じていたのに、今ではそれが嘘のようだ。しかし、俺に断る理由があるはずもなく――

「いいよー！」

「本当?！」

「ただし、条件がある」

「わ、私だけ?!で、でもいいわ……言っでごらんなさい」

おお、威厳を示しているつもりなんだろうけど、まったくその威厳を感じない。それに、若干涙目な気が……。

気を取り直して、条件を言うでしょう。ただ、安心して欲しい。決して無理難題を言うつもりはないから。

「それじゃあ……レミリアさんの事さあ、レミさんって呼んでいいかな?俺が提示する条件はこれだけ」

「そ、それだけ?!」

「うん。多分レミリアさんとはこれから長い付き合いになりそうだからさ、今のうちに親しくなっておこうと思っただが……ダメかな?」

俺の提示した条件を聞くやいなや、レミリアさんはボケケつとして固まってしまった。そして、レミリアさんは少し顔を下にさげると、小さく肩を小刻みに震わし始めた。

「レミリアさん?」

俺が声を掛けると、レミリアさんは更に肩を震わし、勢いよく顔を上げると――



「アハハハハハ！最っ高よあなた！フフフ、ダメ〜お腹痛い」

——突然大声で笑い始めたのだった。

その笑い声にその場に居た者達はなんのこっちゃ？といった表情に変わった。フランでさえ（お姉様は壊れてしまったの？）なんて俺に耳打ちしてくる始末だ。それほどまでにレミリアさんの笑いは奇妙なものだったのだろう。

そして、ようやくレミリアさんは落ち着いたので、俺の提示した条件の返答をくれた。

「あー面白かった！それと、条件の事だけど……もちろんOKよ？好きに呼んでちょうだい」

「じゃあ、これからよろしくな。レミさん」

俺はそう言っただけで彼女に握手も求めた。

「ええ、こちらこそ」

彼女も快く握手をしてくれた。——瞬間、ほんの一瞬だけ眩しい光が俺とレミさんを覆いつくした。しかもその正体はカメラのフラッシュであったのだ。

「外来人紅魔の吸血鬼を口説き落すつと……いいネタになりますねえ  
フフフ」

「……………」

ここでようやく俺は理解した。何故俺が文に初めて会った瞬間妙な感覚を覚えたのか……きつとこのことだったのだろう。

さて、明日の朝ごはんは焼き鳥かな？

宴会はまだ続くのだろうか。そろそろ幕引き時じゃない？

## 十六話 過去の少年

side文

今宵は宴会。先の異変のお疲れ様会に取材半分暇つぶし半分で出席させていただきました。

今回の異変は、今までの異変に比べて最小規模とのことだったので取材をする価値もないと思っていました。しかし、我らが天狗の里の長であらせられる天魔様曰く『今回の異変は実質的に紅魔異変と遜色ないレベルだった』とのことでした。

最初は信じられませんでした。里の情報機関に問い合わせしてみると天魔様と同じ答えが返ってきたので、流石に信じるしかありませんでした。

異変から三日が経った後、私は一度博麗神社に赴き霊夢さんに今回の異変の事を聞いてみました。

異変の首謀者は紅魔の吸血鬼の妹さん、正体不明の大妖怪、指名手配中の天邪鬼だったとのこと。異変解決に乗り出したのは霊夢さんを筆頭に、魔理沙さんや竹林の案内人さん、更には寺子屋の先生にあるの面霊気だとか。

『流石は霊夢さん！相変わらず仕事だけは上手いですね〜』

みたいなノリで冷やかしてみたのですが、私の冷やかしは蚊を叩くかの如くあつさりとなに散ってしまっただけです。なにせ――

『バカじゃない文？今回の異変解決者は私じゃないわよ』

『へ？』

私は霊夢さんの返答に驚いてしまい、ついつい間拔けた声をだしてしまっただけです。

しかし、霊夢さんでなければ一体誰が異変を解決したというのか。私は霊夢さんではない異変解決者に少しばかり興味湧き、霊夢さんにその異変解決者を聞いてみたのです。返って来た質問の返答は。

『大体一週間くらい前に幻想入りしてきた外来人よ』

私はその言葉に更なる興味が湧かされてしまったのです。ていうか、それは最初に言って欲しかったですね。

これまでの長い幻想郷の歴史の中で、外来人などさして珍しくもない。何せ紫さんの遊び心で月に数人くらい幻想入りさせられているのですから。

だが、そんなものは問題ではない。問題なのは、その外来人が異変を解決してしまったということです。こんなの幻想郷始まって以来一度も無かったことなんですから。

しかも、その外来人の方はとんでもない強さの持ち主らしく、異変解決のエキスパートである魔理沙さん相手に圧勝してみせたのだとか。

しかし私には少し気がかりな点が一つ。それは———それ程の実力者を、何故紫さんが何もせずに放置しているのか、ということですよ。

『何故紫さんはそんな方を放置しているのですかね？』

『さあね……………ただ、紫が言うにはその人……………その気になれば幻想郷を破壊できるそうよ？』

あの瞬間———私の体内時計が数秒ほど止まってしまいました。頭が、脳が、意識がその一瞬だけその言葉の意味の理解を拒んだのです。

幻想郷を破壊……………なるほど、それで紫さんは敢えて放置という手段をとっているんですね。むやみに刺激すると幻想郷を消され兼ねない。

私がもし紫さんならきつと同じ手段をとっているに違いありません。それに、あの紫さんが意味のない冗談を言う筈がない。だとするならば、きつとその情報は正しいのでしよう。そしてこの事は絶対に口外しないようにしましょう。幻想郷全土でパニック状態なんてシャレになりませんし。

正直パニック状態は観てみたいですがね？

そして実際にその外来人に会ってみると———なんのことはない、

ただの気さくで面白おかしな人間の少年でした。少年だったのはビックリしました。

百聞は一見に如かずとはこういった事を言うのですね。

ただ一つ気掛かりなのは、彼からは何の力も感じないということですかね？本来人間であるならば、少なからずその身に霊力を内包している筈ですが、この人からはそういったものが全く感じなかったのです。

何故なのでしょうね？とても気になります。

※※※

S i d e 乖 離

射命丸文と言う名の鴉天狗が来てからといものは、俺はその文によつてずっと取材（尋問）を受けていた。内容は色々とあるが、代表として挙げるならば――

身長体重の事。

住んでる家と場所の事。

毎日の朝昼晩の御飯の事。

好きな人はいるかどうかの事。

結婚はしたいかどうかの事等々。

挙げていけばキリがないが、大体こんなものだろう。正直こんなつまらんことを聞いていて面白いのだろうか。俺なら絶対飽きるだろう。――だが何故だろう？文がしてくる質問（特に女性関係の事）を紫と藍が逐一手帳に書き込んでいる。俺に対する嫌がらせかなんかだろうか。

そんなことを考えていると、文から次の質問が飛んできた。

「乖離さんは幻想郷に来る前は、何をされていたのですか？」

「隠居……」

「はっ？」

はい？じゃないよ。俺は事実を言ったまでだ。実際に俺はこの幻

想郷に来る前は隠居生活を貪っていたのだから。それとぬえさんや、クズを見るような目はやめてくださいお願いします。

「え、えっと……隠居ですね。……ん？隠居って事は、隠居以前は何をしていたのですか？」

これは中々に痛いところ突かれてしまった。確かに隠居つてのは、仕事を辞めて静かに暮らすことでもある。まあ、答えられない訳でもないし別に俺は構わないのだが――

「文……それ以上の深入りは許さないわよ」

俺は別にいいとしても、紫はそうではないらしい。その証拠に、先程まで楽しそうだった顔が嘘のように変わっていたのだから。

「え？ど、どういうことですか紫さん!？」

文は少し怯えたように紫に聞き返すが、紫の返答は簡素なものだった。

「あなたは知らなくてもいい事よ……」

紫の威圧に流石の文も渋々ではあるが、諦めたようだ。俺としては別に知られたからどうということでは無いのだが、何故紫はそんなにあの事を隠したがるのか俺には分からなかった。紫にも紫なりの考えがあるって事なんだろうか……。

文が諦めて手帳を仕舞おうとした時、話題を掘り返えさんとする声があった。その声の主はレミさんだった。

「何よつまらないわね。折角の宴会なんだから別にいいじゃない？」

「興味本意などで聞いていい話ではないと言っているのよ」

「それを決めるのはあなたではなく乖離じゃないのかしら？」

レミさんの言うように、確かにその通りだ。あの話をするもしないも俺次第。だが、おそらく紫が皆にアレを知られまいとしているのは、ソレを話した後俺が幻想郷の敵になるのを恐れているからなのかも知れない。無論俺からは幻想郷の敵になる気はないが、必然的にそうなりうる可能性があるのは否めない。

紫とレミさんのいがみ合いを見てみると、後ろからまた誰かの気配を感じた。

確認の為振り返ってみると、両手一杯の宴会料理を持った妹紅が

帰って来ていた。

「妹紅じゃないか、もういいのか？」

「ん？ああ、慧音達の事か。慧音は子供達を連れて先に帰ったよ？それより……なにあれ」

妹紅はワーキヤーと喚き合う紫とレミさんを見つめながら、呆れるように聞いてきたので事の顛末だけを簡潔に説明してやった。

「なるほど、取材でねえ」

「そう。それでああやって喧嘩してんのさ」

妹紅は机に置いた宴会料理を食べながら俺と一緒に二人の喧嘩を観賞していた。その間他の皆は紫とレミさんの仲裁に追われていた。

そんな中、妹紅は小さく俺に呟いた。

「……私も、乖離の過去を聞いてみたいかな」

「そうか？なんの面白みもないと思うぞ？」

「場の賑やかしにね」

そっちだったか。しかし妹紅、アレを話すとなれば賑やかしではなく、逆に場が冷めると思うのだが。まあ、レミさんに従って折角の宴会の席なのだから、話しておくのもまた一興だろう。

そう決めた俺は、今も喧嘩をしている二人の仲裁に入る事にした。

「はいお二人さん、その辺にしときなさい。周りがビビッて逃げちまうだろ？」

俺が声を掛けると、さつきまで随分と喚き合っていた二人がまるで嘘のようにピタリと喧嘩を止めた。

これで少しは大人しくしてくれると信じ、俺は文に声を掛ける。

「文、さつきの取材……まだ続いているのなら、俺の過去を話すよ」

「ほ、本当ですか!？」

文は驚き半分嬉しさ半分で懐から再度メモ張と羽ペンを取り出した。

「乖離様……」

紫は心配そうに俺を見つめてくる。そんな顔で見られたら心が若干痛い、我慢しよう。

「大丈夫さ紫。流石に全てを話しはしないから。それと文、これから言う事は口外しないでくれるか？」

「わ、分かりました」

文の了承を得たことで、俺は近くにあった座布団を二枚重ねで座る。そうすると、俺を囲むように皆が座り始めた。

「じゃあ私ここにするわ！」

そう言ってフランは俺の膝の上に座った。うん、もう何も言うまい。

皆が席ついたのを確認した俺は、小さく深呼吸をする。

「そうだな……まずは俺の出生と——『あの日』の話からしていこうか……」

※※※

どれくらいの前的事だったかは、今はもう憶えていない。というより、最早そんな事など当の昔に忘れてしまっている。

だがそれでも、『その日』の光景だけは……今も尚、記憶の底に深く……深く刻み込まれている。

俺という人間……氷鉋乖離という人間は、今の時代の人間ではない。正確には西暦の人間ではなく、紀元前の人間であった。

ただ、紀元前に生まれた俺だが、育ちは西暦1990年代なのだ。そうなれば、当然矛盾が生じてしまう。紀元前の人間が、どうして西暦1990年代の育ちなのか……と。

それは、俺の持つて生まれた能力に深く関係する。既に周知の事だと思うが、俺は生まれついて霊力や妖力、ましてや神力や魔力を持っているなかった。代わりに、俺の中にあっただのは、自然エネルギー・世界のどこにもある空気や水、火や土に雷などの源となる力のことだ。おそらく、自然エネルギーを持って生まれたのは世界の何処を探

しても俺だけだと思う。

俺はどうやら、その紀元前の時代では自然エネルギーを持つという事が異端だったようで、その時代の魔術師や魔法使いによって世界の果てに飛ばされたらしい。俺自身まだ生まれたばかりの赤子だったから、そんな事は知る由もなかった。故に、俺は自分の親の顔も名も知らない。

世界の果てに飛ばされた俺は、赤子という身で『世界の中枢』に触れた。

それが切っ掛けだったと思う。

世界の中枢とは、この世全ての情報・あらゆる法則や概念の集合体であり、神々すら触れることの出来ない絶対領域だったそうだ。

だが俺はソレに触れた。

理由としては、俺が生まれつき自然エネルギー持っていたという事だった。さつきも言ったが、自然エネルギーは世界の根源とも呼べる力であった為、姿形、種族が人間であっても、俺は世界に触れる事が出来たのだ。

それが原因だっただろうか。俺は世界に蓄積された大量の情報を元に、最も優れた人間<sup>生物</sup>として、世界の『抑止力』に仕立て上げられたのだ。

そもそも抑止力とは、世界が歪みと判断した存在を排除し、世界の継続を促す存在である。

そして俺は西暦1990年代の日本の山奥にて、今の姿より少し若いくらいの姿で元の世界に戻って来たのだ。年代はかなり進んでいるけどな。

言語やその土地の歴史はすでに知識として与えられていたから、すぐにその環境に適応した。

それから数年経ち、俺は西暦1990年代の日本の山奥で、ある程度の知識と知恵・戦う為の能力を身に付けたのだ。

それから直ぐに俺は世界の中枢へと戻り、初めての任務に出た。



そこからだった——地獄の始まりは……。

世界の抑止力としての力を身に付けた俺は、まず始めに——人間を殺した。

俺が殺した人間は、極悪非道な者ではあったにせよそれまで人を殺した経験の無い俺には、とてつもない苦痛だった。

初めて人を殺した時の感覚は今でも憶えている。

——先程まで温かかった体がみるみる内に冷たくなっていく感覚。

——手にこびり付いた血の色。

——武器として使っていた刀から感じる人を斬ったという手応え。

——人を殺したという絶望感。

初めて人ろ殺した時はほぼ際限なく口から胃酸や汚物をまき散らした。

普通なら、『どうして自分がこんなことを』なんて思うのが当然の事だろう。だが俺はまったくそんな事を思わなかった。寧ろ、これは俺に対する試練なのではないか、と思ったくらいだ。

今ならば、バカげた発想だと心底思う。

俺は口元を拭き、恐怖で動かぬ身体にムチを打ちなんとかして奮い立たせた。

そして次に殺したのは妖怪だった。——本来妖怪は西暦1990年代にはほぼ存在していない。ならば何故俺が妖怪を殺したのか……。

——それは任務として過去へ飛んだからだ。

それがどの時代だったのかわからないが、兎に角俺は命じられた通り世界の歪みの対象となった妖怪を殺した。

その時も耐えられずに吐いてしまったがな。

そんな事をもう数えられない位続けて来た。最早命の感覚すら薄れ、人を殺しても…妖怪を殺しても何も感じなくなっていた。最初

はこれでもかって程に吐き続けていたのにだ。そして、俺の中では一体何の試練を受けているのかという意識すら消えていった。それでもただ命じられるがままに殺していった。

そこに正義や悪がある訳でもなく、ただただ機械のように……俺は殺していった。

救いも無く。

希望も無く。

理想も無く。

ただ無意味に……世界の奴隷として、歪みを抹消し続けた。

そんな事を続けて来たある時、初めて俺に護衛という任務が与えられた。それが、俺にとって初めて理想を持つという切っ掛けになったものだった。

護衛対象は一人の聖女だった。

年代がいつかなんて知らないが、まだ妖怪が居た時代だった。その聖女の特徴と言えば、色々と挙げられるが……敢えて挙げるなら、彼女は人でありながら妖怪を愛していたという事だろうか。

彼女の名は『アルニウン・レイシユラード』俺に道德と名を与えてくれた、恩人ともいえる若き少女だ。

彼女はまだ成人していなかった筈だ。おそらく見た目からして16〜19歳くらいだろう。

そして彼女は言うまでもなく、能力保持者であった。その能力が確か『癒しを与える程度の能力』だった筈だ。流星は聖女と呼ばれるだけの能力だと思った。

彼女の能力は身体的にも、精神的にも、あらゆることに癒しを与えた。

彼女と話をするだけでとても心が癒されいく者達を見た。

彼女に触れられただけで傷ついた身体が癒えていく者達を見た。

ただ彼女にも癒しを与えられない存在が居た。そう———それが俺だ。

彼女とどれだけ言の葉を交わそうと、彼女にどれだけ触れられよう

とも、俺は一切癒されなかった。そんな俺に、彼女は涙を流しながらこう語ったのだ。

『私ではあなたを癒せない。私ではあなたを守れない。——あなたはこの間にも傷ついているというのに……私ではあなたを救えない。ごめん……なさい。ごめんなさい』

彼女は何度も何度も俺に涙を流しながら赦しを乞うてきた。情けない話だが、守らなければならない者に守られようとしていたのだから、お笑いぐさだ。

だが、その代わりに俺は彼女から名を貰った。それが『乖離』という名だ。本より俺には名など存在していなかった為、とてもありがたい事だった。彼女曰く『東洋の殿方にそっくりでしたので、似合うと思いました！如何ですか？』だそうだ。

初めての自分の名に、俺は生まれて初めて笑うという体験をした。その後も彼女と色々な話しをし、これからの事を語り合った。俺には理想も夢も無かったから、彼女を手本に誰かを救いたいと思うようになった。

笑ってしまう話だが、あの時の俺はまだ幼過ぎたのだ。だから、まずは誰かの真似事から始めようと考えた。

——しかし結局、俺は彼女を死なせてしまった。

俺の一瞬のミスで、彼女は妖怪に殺されてしまったのだ。

その時初めて、怒りという感情を覚え、同時に悲しみという感情も覚えた。怒りもあったし、悲しみもあった。だが、俺は報復は考えなかった。そんなものは彼女が望んでいる筈が無いと考えたからだ。

任務を終えた俺は、一度頭の整理を行い今の自分が何者なのかを確かめた。その時だったかな、自分が不老不死だと知ったのは。

刀で腕に切り傷を入れても瞬時に回復し、首を刎ねても無意味の如く元に戻ったのだから。

俺の中にあっただのは不老不死に対する嫌悪感ではなく、寧ろ幸福感であった。

俺が死なないのなら、彼女とは違い無限に誰かを救えるのではないか、という思いだった。まあ、現実そううまく行く筈が無いって事は

後ほど嫌という程思い知らされたがな。

つまるところ、俺は彼女との出会いと『死』を感じたあの日を切っ掛けに、あらゆる世界を観て聴いて知って、沢山の感情や知識、経験を得ていった。そしてその果てに、俺はいつしか世界の歪み抹消する抑止力という存在ではなく、『乖離』という名の人間として生きていくと思うようになった。

因みに、紫と出会ったのも任務の一環であった。おそらく、俺は紫と出会ってから大きく変わっていったと思う。念の為に再度言うておくが、アルニウン・レイシユラードとの出会いはあくまで切っ掛けに過ぎないので、彼女を死なせてしまったのに対して、過去はどうあれ今は後悔も無念も無い。

※※※

「つてのが、俺の過去の一部の話となる訳だ」

全てでは無いにしろ、俺は要点となる部分の話を彼女等に聞かせた。話している中で、何度も何度も俺の中での日の光景が脳裏にフラッシュバックしていた。辛いこともあった。苦しい事もあった。ただそれ以上に——誰かを救うという行為偽善に、幸福を感じていたのも事実だ。

俺が話終えているというのに、その場に居る彼女達は未だに一言も口を開こうとしなかった。紫はや藍、魔理沙にレミさんといった帽子を被っている連中は、顔が見えないくらいに帽子を深く被っていた。

流石に話が重かったのだろうか。

「乖離は……強いなだな」

開口一番は、半泣き状態の妹紅だった。何故彼女からそんな言葉が出て来たのかは分からないが、妹紅は俺の過去の一部を聞いて俺が強い人間だと思ったのだろうか。

「強くなんかないさ。俺はある意味で、自分の弱さから逃げただけだからね」

「でも乖離は戦い続けた……そうだろ？」

「まあ、そうともいうかな？」

「私とは……やっぱり違うんだな。——覚悟の重さが」

妹紅はそれだけ言つて、涙顔のまま猪口にお酒を注いで一息に飲み干した。別にそんなになるまで俺の話など聞かなくてもよかつただろうに。

そして次に口を開いたのは、俺の膝に座っているフランだった。フランは少し悲しそうな表情のまま俺に問いかけた。

「お兄様は……楽しい思ひはできなかったの？」

「楽しい思ひは後から沢山できたぞ？」

「そうなの？」

「うん」

フランは俺の答えが意外だったのか、啞然として俺を見つめていた。だが直ぐに先程までの笑顔に戻り「そっか！」と言つて俺に抱き着いてきた。フランもフランなりに考えて、俺の答えに納得してくれたようだ。俺はとりあえず、感謝の意思を籠めてフランの頭を優しく撫でてやることにした。

俺がフランの頭を撫でていると、次々と口を開く者達が増えていった。

「……壮絶な過去だったのね。ごめんなさい乖離さん。私は興味本意の軽い気持ちで聞いていて後悔したわ」

「私もだぜ……なんか、ごめんな？乖離……」

霊夢と魔理沙は申し訳なさそうに謝ってきた。俺としては別段気にすることでもないので謝る必要は無いと思うのだが、彼女等にも思うところがあるのだろうし、ここは黙って謝られておくことにしよう。

そんな事を考えていると、今度はレミさんとぬえが同時に口を開いた。

「二フム、乖離にも暗い過去があつたのね……はあ？」

面白い事にお互い同じセリフでハモってしまった。そしてそれが気に入らなかつたのか、レミさんとぬえは互いに睨み合っていた。喧嘩にならなければいいのだが。

まだ何も言っていないのは、紫と藍、そして文とこころちゃんだけ

となった。俺はこの四人が気になり、確認の為最初に紫の方へ目を向けると、紫も同じ事を考えていたのか、お互いに目が合った。

すると紫は申し訳なさそうに、俺から目を逸らし「少し席を外します」と言ってスキマの中に入っていった。

仕方がないので今度は藍の方へ目を向けると、苦い表情のまま何かを考えていた。

という訳で一度藍はスルーして、今度はあの話をする発端となった文に目を向けると、俺の視線に気付いたのか、慌てて正座をとった。そして次に取った文の行動が――

土下座だったのだ。

唐突な文の行動に、俺は理解できなかった。というか、マジで今日で何度目なんだろうか、女性に頭を下げられるのは……。とりあえず、俺は文に自分の取った行動の真意を聞いてみる事にした。

「何で土下座してんのさ文？」

「あ、あややや……。いえ、その……。私はなんて軽率な行いをしたのだろうと思ひまして……。それでせめてもの謝罪と思ひましてですわ？」

「それで土下座なんてする理由あるの？」

「日本の作法として、相手に誠意を見せる行為は土下座しかないと思ひまして」

なるほど、そういう事なのか。確かに筋は通っている。――が、しかしあれだな。霊夢も魔理沙も文も、どうして皆俺に謝りたがるのかまったくもって理解不能だ。俺自身本当にそんなものどうでもいいというのにさ。でもまあ、『ジャパニーズ・ドゲザ』は珍しいから絵になりそうではある。

「とりあえず頭を上げてくれ文。俺は別に君等に謝罪してもらいたい訳じゃないから」

「あ、そうなんですわね！なら良かったです。はい！」

さつきまでの申し訳なさは何処へやら。文は俺の言葉を聞いて笑

いながら土下座を止めた。なんて奴だ！やっぱり焼き鳥にして食ってしまおうか！

冗談はさておいて、俺は最後にこころちゃんの方へ目を向けた。するとなんとビツクリ！こころちゃんは首を小さく縦に振りながら、スヤスヤと眠っていた。これには流石の俺も驚いた。あの空気でもよくもまあ寝られるものだ。俺なら絶対に出来ない事をこの子はやってのけた。本来なら失礼極まりない行為だが、もしかすると俺の過去の話はお子様であるこころちゃんには難しかったのかもしれない。であれば、眠ってしまうのも仕方ないだろう。

そんなこんなで、気付けばもう宴会も終盤だ。もう帰り始めている妖怪達もちらほらと見えてきた。

思えば、長いようで短かった宴会だ。いや、俺の過去話が無駄に長かっただけなのかもしれないな。

俺は最後にコップに残った麦茶を一息に飲み干したのだった。

月の姫と少年編  
十七話 宴会の問答

S i d e 正邪

【異変前】

私はいつものように自警団共から逃げ回り、向こうがへ口へ口になったのを気に逃げるのを止めて、返り討ちにしてやった。それが私の気晴らしにいつもしている事だ。まったく、あいつら人間はまるで学習しないな。猿かよ！

だが私のしている事は、世間様から見ればクズみたいな事なのかもしれない。愚かで無意味な事なのかもしれない。

それはまあ理解しているし、その自覚はある。悪い事なんだろうとも思う……。

んで？それがどうしたってんだ！

悪い事をしてはダメなのか？反省しないとダメなのか？もうしませんでした言わなきゃダメなのか？

冗談じゃないぜまったく！何で私がんな面倒くさい事しなきゃならないんだ？私は天邪鬼・人が喜んだり、嬉しがるのが大嫌いで、人だ嫌がったり、絶望したりするのが大好きな性悪妖怪だぞ？そんな私に反省しろだとか、心を入れ替えろだとか、そんな屁の役にも立たない事を言っつて、私が変わるとでも思っているのか？もしそう思っている奴がいるのなら、そいつは相当おめでたいんだろうよ。

だから私は今の生き方を変える気は無いし、これからも無い。私は私のやりたいようにやるだけだし、それをどうこう言う奴は許さない。天邪鬼であるこの鬼人正邪に、心を入れ替えるなんてセリフは存在しねえのさ！



→【異変後】

「なんて思っていた時期が私にもあつたな〜」

今宵は宴会。私は博麗神社から少し離れた高台から、月を見つめながら小さく呟いていた。

あの異変からもう一週間が過ぎていた。時間とは思ったより経つのが早いものだな。

あの日からというもの、何故かあらゆる事に対してやる気が起きない。いつもは人里に出向いて自警団共をからかい、その後私を追ってきた連中を返り討ちにして気晴らしをしていたというのに、最近はずれすらやる気が起きなかった。

三日くらい前だっただろうか、何処ぞの道教師が私を訪ねてきた。いつもなら挑発混じりに逃げていたのに、その時は逃げる気も起きなかった。そして果てには敵である筈なのに心配までされてしまった。

『お前……本当にあの天邪鬼か？』と……。

それから少し話をして、道教師は帰っていった。

どうしてこうなってしまったかは分かっている。分かっているが、それだけだ。その先は何も無い。

私がこうなってしまったのは、きつとあの人間の勢だ。名は確か……氷鉋乖離だったかな。うん、多分その名で合ってる。

あいつに負けたあの日から、私はこうなってしまった。きつと以前の私なら、恨みに恨み憎みに憎んでいただろう。でも今の私にその気は無かった。そもそもその気にもなれなかった。

本当、今の私って病気だよな。針妙丸が今の私を見ればなんて言うんだらうな。

「ハア〜」

私はタメ息を吐き、小さく俯いてしまう。しかし、これで何度目のタメ息だろう……マジで私大丈夫か？

そんな事を考え俯いていると、不意に後ろから草木が揺れる物音が聞こえた。

私はゆつくりと立ち上がり、物音のした方を見つめると、暗闇の中から一人の人間が現れた。

私はその人間を見て驚きを隠せずにした。何故こいつがここに居る？どうしてここが分かったのか。今私の目の前にいるのは、今回の異変の解決者である、氷鉋乖離その人だった。

私が面食らっていると、乖離は微笑みながら話し掛けてきた。

「やあ正邪、こんなところで何やってんだ？」

「別に……」

つぶつきらぼうに答えてしまった私だが、乖離はそんな私の態度をスルーしてまう。

「そうか。……下で宴会してるけど来ないのか？つっても、もう終わり掛けてるんだけど……」

こいつ、終わり掛けの宴会に私を誘いに来たのか？普通に考えて失礼過ぎるだろ。それに、なんたって嫌われ者の私なんかを……。

「何で私を誘うんだよ……他にもっといい奴いるんじゃないのか？」

「そのいい奴がお前なんだけど？」

「はっ」

突然の事に、私はついつい間抜けな声を出してしまった。今こいつ何て言った？いい奴だと？この……私がか？

「どうした？」

気付けば、乖離は私の顔を覗き込んでいた。いきなり顔を覗き込まれた勢で咄嗟にその場から離れ、一時乖離から距離をとった。ていうか、いつの間に接近されたんだ？全然分からなかったぞ。

「なんでもねえよ……。っーか、急に近づいてくんなよ！」

「わ、悪い……」

まったく、なんなんだこいつは。この妙に律儀な態度、ホント調子が狂う。

ん、でもまてよ……何で私がこんなに動揺しているんだ？あの道教師にすらほぼ無関心だった私が、いつの間にかいつもの感じに戻ってしまっている。一体何故だ？

なんて事を考えていると、乖離は先程まで私がいた場所にゆつくり

と腰を下ろした。

「何やってんだよ」

「ちよいと休憩」

「何で？」

「それは彼女らに聞いてくれると助かるよ」

「彼女ら？」

私がそう聞くと、乖離は真つ暗な森の方を指さした。

私は指を指された方向をじつと見つめていると、微かだが女の声が聞こえて来た。それも一つだけではなく、複数のものであった為、耳をすませしてみると誰かを呼ぶ様な声だった。

『おーい！乖離ー！』

とか

『お兄様どこ〜』

とか

『乖離〜』

とかだった。

こいつは何をやっているんだよ。と思い、私は目を半開きにして乖離を見ると、乖離はバツが悪そうに目を逸らした。

「おい、何で目を逸らすんだよ……」

「き、気のせいさ」

「んな訳あるか！てか今の声、ぬえとフランだったぞ？もう一人は知らないけどよー」

「あの三人まだ来てるのかよ……」

「一体何したんだお前」

私が呆れたように聞いてみると、今度は小さく笑いながら答えた。  
「何、単なる鬼ごっこだよ。ガキの頃やらなかったか？」

絶対こいつ今のは私に対する嫌味だろうな。私が天邪鬼と知っていてわざと言ったに違いない。その証拠に、私の顔を見て妙にニヤニヤしてるしやう。正直ちよつとウザいな。

しかし、なんとたってこいつはわざわざ私の居るこの高台まで来たんだらう。他に行くところなら色々あった筈なのだ。

「なあ、何でお前ここに来たんだよ」

私は少し威圧的に問うてみたが、乖離はそんなものど吹く風の如く笑って受け流し、私の間に答えた。

「ぬえフランこころちゃんから逃げてたら、その道中でお前の妖力を感じて会いに来た。以上」

「私みたいな嫌われ者にわざわざ会いに来たってのか？ハッ！暇人だこつて……」

「暇人は余計だよ」

しばしの静寂が流れる。

いつもの私ならここで……いや、こいつと出会った時点で逃げ出しているだろうに、何故かその気が起きない。

あの日の道教師の時もそうだったが、最近の私はどこかおかしいと思う。

私は天邪鬼で、幻想郷一の嫌われ者。弱者である私は強者である者どもに反逆劇を起こし、下剋上を繰り返す存在だ。

でも何故か、あの日の異変を境にそれすらもうどうでもいいとさえ思ってしまうようになってしまった。まるで牙の折られた狼のようだ。

切っ掛けがあるとすれば、それは多分今私の前で間抜けな面で目を眺めている奴の勢なんだろうがな。

こいつに何か聞けば今の私は以前の私に戻れるのだろうか。といつても、一体何を聞けばいいのか分からない。

考えても考えても、何も出て来やしない。そんな自分自身に嫌気が差してしまう。

私が脳の路頭に迷っていると、乖離はこちらに振り返らず、ある事を訪ねて来た。

「なあ正邪、前に正邪が言っていた弱者が強者に対する反逆……だっけ？アレって具体的にどういふものなのさ」

「それ、前に言ったと思うが？」

「俺はお前の本心が聞きたいのだが」

言葉に詰まるとはこの事なのだろうか。

口から何も出て来ない。というより、何を言っているのかが分からない。以前の私なら迷わず答えられたと思うが、今の私に限って何一つ出て来やしない。

本当に……情けないな。

「分からないんだよ」

「何がだ？」

私が弱音染みた事を呟くと、乖離は嗤う訳でも、無関心である訳でもなく、ただ私が呟いたことに興味があるかの様に聞いていた。

「私は弱者を救い、強者に仇なすレジスタンスとして今まで生きて来たけどよ……お前という強者に出会ってから……何か、調子が出ないんだよ……」

「俺が強者……ねえ」

「何か違うのかよ……」

こいつが強者であることに変わりはない。何せあの日の異変でE Xクラスのフランとぬえを難なく破ってみせた人間なのだ。それに私だって、あの時にはそれなりに強化されていた筈なんだ。しかし、それでも私達は敗北した。

そしてこともあろうに、私達は異変の首謀者として退治される事はなく、『遊び』であったと嗤われ赦されてしまったのだ。

最初こそ怒りもあったし、何一つ……牙を向けることさえ自分自身に対する憤りもあった。こいつの事が頭を過った時は腸が煮えくり返りそうでもあった。

それでもやはり、あの時の言葉が私の中に残っていたのは事実だ。

『殺さない』

この言葉が、ずっと私の中に残り続けていた。

私が異変の時の事を思い出していると、乖離は月ではなく星を見上げて呟いた。

それはどこか儂く、それでいて悲しそうに。

「俺は生まれてこの方、自分を強者だと思った事は無い」

何故だ？つと問い質したくなったが、なんとなくそれは聞かないで

おくことにする。

どうしてか分からないが、私の中で『それを聞いてはマズい』と警告音が鳴り響いた気がした。

それでも私にとってこいつは強者であり、討ち果たすべき敵である事に変わりはない。例え敵わなくても、それが私の生き方でしかないからだ。

「あくあ、お前と話しているといつも調子に戻ってきた気がする」

「そうか……それなら良かったよ」

乖離は相変わらず星を見上げながら、どこか嬉しそうに笑っていた。

しかし思うが、私も私でほとんどバカだな……。こんな人間なんかに気を許してしまいそうになっているんだからな。天邪鬼と聞いて笑えるなまったく……。

私はゆつくりとした足取りで乖離に近づき、乖離の隣に腰を下ろした。

そして乖離の真似をして、暗い……。それでいて綺麗な星空に目を向けた。

「綺麗だな」

「そうだな……」

そうして星を眺めていると、不意に乖離が口を開いてきた。

「そういえば、俺はまだお前の本心を聞いてなかったよな？」

「……………」

何故今それを持ち出してくるのか。折角いい雰囲気ですら誤魔化せそうだったのによ。

でもまあ、言つて損する事でもねえし、いいか。

「私は相変わらず、反逆者としてこの幻想郷にのさばる強者共に下剋上を繰り返すさ！その為ならなんだってやってやるよ！」

結局のところ、私は何も変わらないという事だ。いつも通り、幻想郷の悪者として偽善を振りまく連中を叩きのめすだけだ。それが私

の『正義』であるのだから。

「なるほどね……それは面白いな！よし、お前にはこれをやるよ」

そう言って乖離は右手に一本の剣を顕現させた。

その剣は私からみても間違はなく名剣と呼べるほどの代物だった。

乖離が使っていた刀よりやや長く、その刀身は月明かりに照らされ白銀に輝いていた。

その名剣を、乖離は私に投げ渡して来た。

「おっとー」

すんでのところでなんとかキャッチに成功した。

剣なんて握ったことは無かったが、思ったよりも重い。私は妖怪だから、人間なんかよりは力はある。しかしこの剣は妖怪の私をして重いと思えるのだから、人間なんかには持てないんじゃないか？

「これを……くれるのか？」

「ああ」

「マジかよ……」

信じられねえが、乖離は本気でこの剣を私にくれるらしい。

どういう風の吹き廻しかは知らないが、くれるというのならありがたく頂いておくとしよう。捨てるのなんてまず論外だしな。

「あ、一応その剣の銘を教えておこうか？」

「あ、ああ」

「その剣の銘は『魔剣クラレント』——とある反逆の騎士が使っていた元聖剣だ」

「元つて、どういう意味だ？」

「俺もよくは知らないんだけどさ、その剣は元々王を決定する時に使う聖剣だったらしいが、その反逆の騎士が無理やり所有権を奪ってしまい、反逆の騎士の怒りと憎悪を吸収して魔剣に変わってしまったらしい」

「ふくん」

魔剣になった経緯は……なるほどな。面白いじゃないか！反逆の騎士の負の念を吸収して魔剣に変わった。実に私にピッタリの剣だ！

「ありがとな乖離、これで私はまだまだ強くなれるぞ！そして、いつかこの剣でお前の首を頂いてやるよ！」

私は舌を出して挑発するように乖離に感謝の意を述べる。やり方はアレだが、これでも一応感謝はしている。

私の挑発染みだ感謝を乖離は笑って受け止めた。

「そうか……。その剣がいつか優しい事の為に振るわれるのを期待するよ」

本当に、なんなんだろうなこいつは。最初こそムカつく奴ではあったが、今は良い意味でムカつく奴だ。

まだ出会って二度目ではないが、私は思った以上にこいつを気に入っているらしい。本当、前の私ならまずありえないことなのにな……。

「まかせとけよ！いつか私の力で、この幻想郷から強者を無くし、弱者だけの世界を造ってやる！」

「ならもう言葉は不要かな？……あ」

折角いいところで終わらせようとした時、乖離の顔が若干青ざめ始めた。

「おい、どうした？」

「マズい！……ここにあの三人が近づいてきている。すまないが正邪、あいつらが来たら俺は向こうへ行つたと伝えてくれ」

そう言っって乖離は高台から飛び降りて下の暗い森の中に消えていった。

私は乖離が指さしていた逆方向の森を確認する。するとそことは違う別方向から、乖離の言っていた三人が現れた。

「あれく乖離どこ行つた？」

「お兄様が全然見つからないわ」

「乖離行方不明？」

確かにぬえにフランがいるな。てかもう一人は誰だ？何処かで見た気がするが……。気の勢か？

「お前ら、何やってんだ？」

私が声を掛けると、三人が一瞬ビクツと身体を震わせて、こちらに



振り向いた。

そして私であることを確認したのか、安心したかのように息を吐いた。

「なんだ、正邪か。ビックリした」

「正邪ちゃん！」

「……誰？」

ぬえは相変わらずだな。フランも相変わらずウザい笑顔だ。そしてもう一人は……『誰?』って、そりやこっちのセリフだったの。

「ねえ正邪、乖離を見なかった?この辺に逃げて来た筈なんだけどこさあ。てか何その剣……」

ぬえは驚いた表情でクラレントを指さしていた。まあ、気持ちはわからんでも無いが。

「これか?まあ、これは気にすんな!それで、乖離だったか?」

「そうよ!お兄様ったら人生ゲームで負けて急に逃げ出しちゃったの」

「人生ゲーム?」

「そ!負けた奴は酒一気飲みっていう罰ゲームでね」

酒を一気飲みか……。妖怪である私達ならともかく、人間である乖離には少々キツイものがあるな。

てかあいつゲームで負けて逃げたのかよ。ダッセく。

「それで、乖離はどこ?」

私は一瞬乖離に教えられた方向を指さそうとして……やめた。

「乖離ならその高台から降りて下の森に入っていたぞ?」

「ありがと正邪!フラン、こころ!追うよ!!」

「ラジャー!!」

そう言っつて三人は乖離の逃げて行った森へ降りていった。

乖離には悪いが、私はこれでも天邪鬼なんですね。人が不幸になる顔を見るのがこの上なく大好きなんだ。だから、お前の頼みは断ることにする。

「さてと、精々楽しませてくれよ?……氷匏乖離」

私は月を見上げながら、クラレントを掲げて不敵に嗤うのだった。

『何でバレたんだー!!』

乖離の悲鳴が私にはその日、とても心地よく聞こえた。

## 十八話 とある日の訪問者

※※※

宴会から数日が過ぎた。いつも通りの幻想郷の日々が訪れる。

太陽は相変わらず、全てを包み込むように、温かい日差しを地上に送り続けている。その日差しを浴び、今日も頑張ろうと。様々な者達は動きだす。

仕事へ向かう者も居れば、遊びに行く者、勉学に勤しむ者、日頃の疲れを癒す為日向ぼっこをする者、皆それぞれである。中には、いつもの事と思いい暇を持って余す者も居る。

皆が皆、それぞれの日々を過ごしていた。

そんな中、博麗神社と人里の中間に存在する森の中では、朝早くから鉄と鉄を強く打ち付けるような騒音が鳴り響いていた。

その原因となっているのは、その森に住んでいる人間の少年『氷鉋乖離』と、お面の付喪神『秦こころ』が刀と鉋をぶつけ合っていたからであった。

二人の勝負は早三十分以上にわたり繰り広げられていた。両者共に一歩も引かず、ただただ楽しそうな表情(こころお面)を浮かべ、刃を交え続ける。

この森には乖離以外にも、中級妖怪達が住み着いているが、その妖怪達であさえこの二人の戦いに水を差すような真似はしない。例え自分たちのテリトリーを荒らされいたのだとしてもだ。何故なら、妖怪達は知っているのだ……この二人の強さを。そして、それが自分たちを遥かに上回っているのだと。

ただ妖怪達にもこの二人の戦いにはある種の喜びを感じている。それは何か……。それは、この戦いの果てに、場所の提供代金として、乖離の手料理をお裾分けしてもらえるのだから。

※※※

既にこころは乖離に六十四度槍撃を打ち込んでいる。その全てはどれも並の人間や妖怪が喰らえば致命傷は避けられない威力があった。にも関わらず、乖離には傷一つ存在していない。それもその筈だろう。乖離はこころが打ち込んでくる全ての槍撃を捌ききっているのだから。

だがそれはこころも同じであり、乖離の繰り出す斬撃を眉一つ動かさず同威力の斬撃で相殺してしまっているのだから。

こころは人の目では追えない速度の連撃を繰り出す。その一撃だけでも、乖離の肉体を引き裂き細切れにするには十分な威力だ。しかしその連撃全てを乖離は的確に見抜き、先程と同じように捌ききってみせる。

乖離は一度後退を図るが、それを見逃すこころではない。瞬時に乖離に近づき縦に鉈を振り下ろす。流石に避けきれないと判断した乖離は能力を使用し、こころから数メートル離れた位置に転移した。

こころから離れた乖離は刀を握っている右腕に自然エネルギーを集中させ、大きく跳躍をし、横薙ぎにしてこころに切りかかる。こころはそれに応えるかのように、自身の鉈に妖力を注ぎ、真向から打ち合う。

自然エネルギーと妖力がぶつかり青と紫のオーラが辺り一面に飛び散り凄まじい衝撃波が生じた。

威力は互角。同威力の技の打ち合いにより彼らの周りに生えていた木々はその衝撃波に耐えきれずバタバタと折られていく。それは打ち合った二人も例外ではなく、お互い真逆の方向へ数メートル吹っ飛んでいった。

乖離は吹き飛ばされた際地面を転がった時に付いてしまった土を払いながら、ゆっくりと立ち上がり楽しそうに口を開く。

「いや驚いたな。こころちゃんがこんなに強かったなんてさ！」

乖離に呼応するように、こころも立ち上がり口を開いた。

「私も驚いた。乖離がこんなに強かったなんて……。それも片手でこ

の強さ……羨ましいなあ」

「そうか？俺は普通だと思うけどね」

そう言つて乖離は使い物にならなくなった左腕を見ていた。この左腕は先の異変で使つた『クラスターカード』の影響で神経と筋繊維がほぼ全て死滅してしまつている為、今はまったく動かないのだ。

そんな乖離を見て、こころは我先にと必殺の構えをとる。

「乖離、そろそろ決着を着けよう」

そう言つたこころは再度鉈に妖力を注ぎ始めた。その量は先程のものとは明らかに違い、鉈から青い妖力の稲妻が走つていた。それを見た乖離はというと、刀を構えようともせず逆に刀を仕舞つてしまつた。

「こころちゃん、悪いが今日はここまでだ。これ以上は流石に怪我では済まなくなるからね」

「そう？乖離がそういうなら……」

こころはそう言つて構えを解き、鉈に妖力を注ぎ込むのを中断する。鉈は青い粒子のように消えていった。

鉈を仕舞つたこころはステップを踏んで乖離の下に駆けより、乖離と手を繋ぐ。こう見ると、まるで兄妹のように見えてしまう。事実こころにとつて乖離は優しい兄のような存在であり、気の許せる友でもある。それと同時に、将棋の師でもあるのだから。

「乖離、朝ごはんは何？」

「ん、ビーフシチューかな？」

「やったー！乖離のビーフシチュー大好き」

こころはさぞ嬉しそうにはしゃぎ出した。そんなこころを乖離はにこやかに眺め、共に家へと帰還したのだった。

※※※

S i d e 乖離

こころちゃんとの暇つぶしから帰つて来て早三時間が過ぎていた。

二人で朝飯を済ませ、こころちゃんは勉強があると言って慧音さんの下、寺子屋へ行ってしまった為俺は一人自室に籠って読書に興じていた。本は良い、色々な知識や考え方などが得られる。特に歴史系の本は偉人関係が沢山あって面白い。

「つーか、もう昼前じゃん」

本を読むのを一時中断し、俺は時計を確認する。時計の針は短い方が11時と12時の中間辺りで、長い方35分辺りまで来ていた。要は11時35分つてところだ。

さてどうしたものか。そろそろお昼になる。自分で昼ご飯を作るのもいいし、人里に食べに行くのもいい。金ならあるしき。

そんなこんなで首を捻っていると、玄関のチャイムが鳴った。感じられるのは霊力、それもかなり強いものだ。これだけの霊力所持者はおそらく霊夢だろう。

「はいはい今出るよ」

俺は来客を確認する為自室を出て、玄関へと向かった。

玄関の扉を開けると、やはりと言ったところだろうか、案の定霊夢が立っていた。

「こんにちは乖離さん」

「やあ霊夢、久しぶり。一人か？」

「ええ、まあ……」

霊夢はどこか落ち着きがないようにそわそわとしている。

「まあ、上がって行きなよ」

「いいの？」

俺は肯定の意を込めて軽く頷いてみせる。霊夢は靴を脱いで俺の後ろを付いて来た。その間物珍しそうに辺りをキョロキョロと見渡していた。

俺は霊夢を客間に案内し、座布団とお茶を出してやる。

「ほい」

「ありがとう」

お茶を受け取った霊夢はゆっくりお茶を啜った。

しかし、霊夢はこの時間帯にどうして俺の家に来たのだろうか。気

になった俺は霊夢に聞いてみる事にした。

「霊夢、今日はわざわざどうしたんだ？こんな面白味の無いところに」「え？ああ、それは『これ』を渡しに来たのよ」

そういつて霊夢は五枚の札のような物を差しだしてきた。

「これは？」

「これはスペルカードの素になる物よ？紫が乖離さんに渡せつて置いて行ったのよ」

スペルカードか……確か、この幻想郷の揉め事や勝負事に用いられる道具のような物だっただろうか。しかし、何故俺になのだろうか。「紫が言うには、乖離さんにもこの幻想郷に居る以上、こっちのルールに則ってもらわないと困るらしいのよ」

俺の表情を見て察したのか、霊夢はこの札のような物を持ってきてくれた理由を説明してくれた。まあ確かに、俺も今や幻想郷で生きる者の一人である以上、この世界のルールに従うのは当然の事だ。だがしかし、この世界のルール『スペルカードルール』や『弾幕ごっこ？』は俺には不向きな気がするのだが。

「なるほどね、分かった。ありがとうな霊夢！」

「べ、別にいいわよこれくらい」

俺の礼に対して、霊夢は少し照れくさそうに顔をそむける。

俺は霊夢から受け取った札を自室の机の中に転移させ、立ち上がる。

「そうだ霊夢、折角だし昼飯食って行く？そろそろお昼になるしよ」

「えっ！いいの?!」

昼飯の誘いをするやいなや、霊夢は目を輝かせてグイグイと近寄つて来た。てかマジで近い近い。鼻と鼻がくっつきそうなんだが。

「いいけど……とりあえず離れようか？近いから」

「あ、ごめんなさい……」

霊夢は落ち着きを取り戻し、ゆっくりと後ずさりをした。離れた後も、霊夢は少し赤面しているようだったが、まあ気にしないでおくとしよう。

それはそれとして、一応昼飯は家で食べる事になったのだが、何を

作ろうか。ここは霊夢に聞いてみるでしょう。

「霊夢、何か食べたい物でもあるか？」

「そうね〜……あ！冷やし中華とか。かしらね」

「あいよ！んじゃ、少し待っててくれ」

俺は客間を出てキッチンへ向かう。

キッチンに着いた俺はエプロンを着て冷蔵庫を開ける。冷蔵庫の中から麺とキュウリ、卵にハムを取り出し調理に移る。

麺は鍋で80℃〜90℃で湯がき、キュウリとハムはまな板に置いて細かく刻んでいく。卵はボールで解いてからフライパンで焼きあげる。この時醤油と砂糖を少し入れておくと良い味付けになる。因みにこれは藍から教わったものだ。俺は基本卵焼きなんかは塩だけで食べていたので、ありがたい知識だ。

卵焼きはフライパンからまな板に移し、まだ湯気が出ている間に細かく刻んでおく。

最後は汁になるが、これには冷やし中華の素があるが、折角霊夢に出すんだし、一から作るとしよう。

俺が汁のベースを何にしようかと悩んでいると、突然スキマが開き紫が出て来た。

「こんにちは乖離様」

「やあ紫、今日はどうした？」

「仕事を急ピッチで終わらせてしまいましたので、乖離様のご様子を窺おうかと思ひまして」

要は暇になったから遊びに来たということでもいいのだろうか。それとこいつは玄関から入ってくるという作法を知らないのかな。

俺がそんなことを思っている中、紫はジーンと鍋と刻まれた具材達を見ていた。

「あの、何か作っておられたのですか？」

「ん？ああ、今丁度霊夢が来ているから昼飯を一緒に食べようって事になったんだよ。作っているのは冷やし中華ね」

「冷やし中華とは？」

「あれ？知らないの？」



「なるほど、そのような食べ物があったのですね」

俺は作業に戻りながら紫に説明してやると、興味深々といったように俺の手際を拝見しながら頷いていた。

ベースは決まったので、後は鍋の中の麺を氷水で冷やすだけだ。

俺は別の鍋を用意して汁を作りながら、もう一方の鍋の中の麺をざるに移して氷水を用意する。これらの作業を全て右手一本でやっているが、結構面倒で疲れる。

氷水に麺を浸け、一旦俺は休憩を取る。すると、紫は感心したかのように拍手を送ってくれた。

「片手であれだけの作業をやつてのけるとは……流石は乖離様です」  
「世辞いらんよ。こんなもん慣れだからね」

とは言うものの、実際にはまったく慣れない。片手での生活つてのは想像以上に面倒で不便だ。特にこういつた料理の時とかはね。でもそれを完璧にやつてのける俺スゲー！

俺が自己自賛に耽っていると、鍋からいい匂いがしてきた。ということはおもう出来上がったという事だろう。

鍋の蓋を開けると、一気に湯気が立ち込め鼻孔を燻る甘い香りが出た。どうやら本当に完成したらしい。後はこれを別の容器に移して、二、三分ほど冷やせば冷やし中華の完成という訳だ。

汁を大きめの容器に移し、冷凍庫に入れると不意に紫の腹の虫がグウ〜！と大きな音を立ててお腹空いたアピールをした。

「……………」  
「……………」

紫は今のがさぞ恥ずかしかったのか、真っ赤な顔を引きつった笑みで誤魔化していた。まったく誤魔化せていないけどな。

「腹が減っているんですね？分かります」

「も、申し訳ございません／＼はしたない真似を……」

腹が減っているのなら腹の虫が鳴るのも仕方ない。それは自然の

事だし、生きている証拠だ。はしたないなんて事は一切ない。しかしどうしようか、冷やし中華は二人分しかない。麺の余りもないし、困ったな。であれば、やっぱり男ならこうするしかないよね？

「俺の分で良ければ食べるか？俺カップ麺で済ますし」

「え？」

「『え？』っじゃねえよ。食べるの？食べないの？」

俺が問い詰めると、紫は深く考え込んだ末、ゆっくりと俺の目を見て言った。

「本当に……良いのですか？」

「無論だ。男より女の方を優先する。これ基本だから」

特にそれが紫であるのなら尚更だ。こいつ仕事を急ピッチで終わらせて来たと言っていたし、それなりに疲れているだろう。であれば紫には栄養を取ってもらわなければならぬ。

「乖離様がよろしいのであれば、ありがたく頂きますわ」

「うむ、それでよし！」

紫は納得してくれたようなので、冷凍庫から汁を取り出して確認する。

冷たさは充分、これならいい感じだろう。早速これを深めの皿に移し、そこに麺と刻んだ具材達をトッピングして完成。

「おーい霊夢！出来たから取りに来てくれ！」

『はーい！』っと返事が返ってきたのを確認した俺は、棚の中からカップ麺を取り出し、蓋を開けてポットからお湯を注ぐ。

「もう出来たの？早いわね」

霊夢は相変わらず目を輝かせながら皿を取りに来た。だが、紫が居るのを認識するやいなや、先程まで輝いていた目は無くなってしまい、代わりに面倒紫だという目に変わった。

「乖離さん、何でこれ紫がいるの？」

「これ呼ばわりとは酷いわね霊夢……」

「仕事が終わって暇だったから遊びに来たようです」

「私そんな事言ってますが？」

「一緒にいたいなもんじゃん」

なんてやり取りをしながらも、霊夢は俺の代わりに二人分の冷やし中華を運んでくれた。かく言う俺は、情けないながらも三人分の箸と自分が食べる用のカップ麺を運ぶくらいだ。

客間に着いた俺達三人はテーブルを囲んで、食事を始めた。因みにテーブルを運んでくれたのは紫だ。それも片手で……。やっぱり妖怪の腕力って凄いわ。

「やっぱり乖離さんの料理は最高ね！」

「何これ!?美味し過ぎます乖離様!!」

という感想が一体何回連呼されたことやら……。喜んでくれるのは素直に嬉しいけどね。

「それよりも、いつこの使い物にならなくなった左腕を治そうかね〜」

二人が美味しそうに冷やし中華を食べている中、俺は質素なカップ麺を食べながら小さく呟くのだった。

## 十九話 買い出し途中で

S i d e 乖離

昼飯を食べ終わった俺達三人は、それぞれの時間に入っている。霊夢と紫は二人で将棋に興じ、俺は読書に耽っていた。

「はい王手♪」

「ウゼー!!」

先程から紫と霊夢から上記のようなやり取りが聞こえて来る。おそらく紫の容赦ない攻めに霊夢が自棄になりかけているのだと思う。こんなやりとりをもう何度聞いたことやら……。

俺は読書の手を止めずに今晚の献立を考える。

丁度麺類を切らせていたし、これから買いに行くのもいいかもしれない。ついでに本屋でも探してみようか。

俺は一度読書の手を止め、買い物の準備をしようとすると、俺の行動が気になったのか、紫が問いかけて来た。

「乖離様、何をされているのですか?」

「買い物だよ、人里にね」

「これからですか?」

「うん」

紫の問に答えつつ、財布とバックを用意して出掛ける準備を整える。

俺が準備と整えていると、気を利かせてくれたのか、紫が大きなスキマを開いてくれた。

「人里正門付近に繋げましたので、これをお使ください」

「ありがとう。あ、そうそう! 霊夢に紫、留守番お願いできるかな?」

「ガッテン!」

「そうか、ありがとな! キッチンに茶菓子云々置いてあるから好きに食べていいぞ」

それだけ言って、俺は紫の開いてくれたスキマにバックと財布を持って入って行く。その際「お菓子ー!!」と霊夢が叫ぶ声が聞こえたのだが、気にしないでおこう、そうしよう。

「ん？これはさつきまで乖離様が読んでおられた本ね。なににな……。」『竹取物語』……あの二ートの物語かしら？」

※※※

紫のスキマを通って人里正門前まで来たが、相変わらず大きな門だと思ふ。妖怪対策にしては、少々お粗末な気がするがまあ放っておこう。

俺は軽い足取りで門に近づいていくと、先の異変の日同様、門番なる者達に止められた。

「そこのお前、止まれ！」

「ここらでは見ない顔だな、何者だ！」

異変の事もあってなのか、必要以上に警戒されている。無理もない事だと思ふが、こうも警戒心を剥き出しにされては、下手な行動は取らない方がいいかだろう。

「何者って、人間ですよ。ここより少し離れた場所に住んでいるんです」

「何をしに来た？」

「買い物ですが」

「それだけか？」

「ええ、まあ……」

俺は少し呆れ口調で答えると、それが気に食わなかったのか、門番の表情が少し険しくなった。

こうしているのも面倒なので、一瞬強行突破も考えたがそれこそ面倒事に発展しかねないので、その考えは捨てた。紫に迷惑がかかるしな。

「あれ？乖離じゃん、何してんのこんな所で？」

門番と睨めっこをしていると、門からひよっこりと妹紅が現れた。

「何かあったのか？」

そう言うと、妹紅は俺の方へ近づいてきた。何故かその際門番達が『妹紅さん、お疲れ様です!!』と妹紅にお辞儀をしていたが、何でだろう。

「検問だよ」

「何で？」

何でと聞かれましても、それはその門番に聞いて欲しい。俺だって普通の人間なのに、必要以上に警戒されてちよつとイライラしているのだ。

という上記の本音は胸に仕舞いこんで、俺は妹紅の問に答えた。

「俺が人里に住んでいる人間じゃないからだろうよ。それに、先の異変の事もある訳だし、検問を敷くのも仕方ないさ」

「ふくんそつか……なああんたら、乖離は怪しい奴じゃないから入れてやってくれないか？」

「妹紅さんがそう言うのでしたら………なあ？」

「そ、そうだな。妹紅さんがそう言うならいいか」

妹紅の説得により、門番達は道を開けてくれた。しかし妹紅は人里で割と顔が利くんだな、ちよつと羨ましいかも。

妹紅の助けがあり、俺は人里に入ることだ出来た。久しぶりに人里に来てみたが、相変わらず繁盛しているようだ。

俺が品定めするように色々な店を拝見していると、隣で一緒に歩いていた妹紅が不意に問いかけてきた。

「乖離は何しに人里まで来たんだ？」

「買い出しだよ。丁度今日の昼飯で麺類切れちゃったからね」

「買い出しだけか？」

「一応買い出しが終わったら本屋を探してみようとも思ってる」

「何故？」

「俺読書好きだから」

妹紅は意外そうに相槌を打つ。そんなに以外だったのだろうか。

そんなこんなで歩いてみると、買い出しより先に本屋らしき大きな建物が目に留まり、足を止めてしまう。店の看板らしき物には『稗田』と書かれていた。

「どうした乖離？」

「妹紅、あれって本屋かな？」

「どれどれ？」

俺は『稗田』と書かれた看板の建物に指を指し、妹紅に教える。

「一応本は売ってるけど、本屋っていう程大そうなものじゃないぞ？  
ていうかここは屋敷だし」

「よし入ろうー！」

「入るの?!」

妹紅が何か驚いた声を発しているようだが気にしない。俺にとつてあそこが本屋だろうがそうでなかりうがどうでもよい事だ。本が売ってある、というだけで俺にはあそこに入る理由があるのだ。

俺は『稗田』と書かれた看板のある建物に直行する。

暖簾を潜って扉を開けると、中は思っていた以上に広いものだった。服装の勢かせれともこの左腕の勢なのか、妙に店内の視線が俺に集まっている気がするが放っておこう。

俺は早速棚に置いてあった本を一冊手に取り読んでみる事にした。俺が手に取った本は『幻想郷縁起』と書かれた奇妙なものだった。

本に傷が付かないように注意を払って開いてみると、そこには数々の妖怪の事が事細かく記されていた。

例を挙げるとしたら、代表的なもので紫だ。

『八雲紫』・幻想郷最強の妖怪・妖怪の賢者という二つ名を持ち、『境界を操る程度の能力』使う極めて強力な大妖怪。

危険度は実質不明、人間友好度も不明である。

ただ、その昔一人の大妖怪が八雲紫の逆鱗に触れ、見るも無惨な姿に変貌させられ、見せしめとして血祭りに挙げたという事例が確認されている為危険度は仮で『極高』に設定されている等々。

「ハハハ、幻想郷最強の妖怪ねえ……ただの泣き虫の間違いじゃないのか？」

幻想郷縁起に書かれていた文を読みながら笑っていると、妹紅が疲れた表情で店に入ってきた。

「急に走りだすからびびっくりしたぞ乖離」

「悪い悪い、ついな」

俺がそう言うと、妹紅は呆れたようにタメ息を一つ吐き、俺の傍まで寄ってきた。

「何読んでるの？」

「これ」

俺は幻想郷縁起を妹紅に見せると、興味深そうに目を走らせ始めた。ページ的には丁度俺の読んでいた紫辺りだと思う。

ある程度読み終わったのか、妹紅は幻想郷縁起から目を放し、俺に問いかけてきた。

「乖離、これ買うのか？」

「もちろん！」

「おおう！」

俺の即答に、妹紅は少し驚いたような顔をしたが、そこまで驚く事だろうか。

暫しの間俺と妹紅が読書に耽っていると、ふと、この店に近づいて来る懐かしい気配を感じた。

その気配は真っ直ぐにこの店に向かって来ていた為、俺は視線を扉の方へと移した。すると、店の扉が開き、笠を被った薄紫色の髪をした女性が入ってきた。

「ごめんください！阿求さん居ますか？」

店内だというのに、笠を被った女性は大きな声を上げて誰かを呼んだ。

それと、よく見ると背中に随分大きな荷物を抱えているが、重くはないのだろうか？なんて思っている。

「は〜い、今行きます」



上記の声が聞こえ、店の奥から紫色の髪をした浴衣姿の少女が出て来た。

「すいません、わざわざ届けてもらって」

「いえいえ、これも仕事ですから」

そういつて笠を被った女性は大きな荷物を降ろし、中から小さな小瓶を取り出しそれを浴衣姿の少女へと渡した。

「どうぞ、今月分です」

「ありがとうございます！」

浴衣姿の少女は小瓶を受け取り、近くの台に置いて胸元から封筒を取り出しそれを笠を被った女性に渡した。

「毎度ありがとうございます！」

二人は互いに小さくお辞儀を交わした。

そんな光景を見ながら、俺は笠を被った女性から感じる気配を記憶の中から探っていた。そして、幾つか該当するものはあったが、一番しっくりきたのが――

「月の玉兎……か」

ついその名称が口から零れてしまった。そしてそれが聞こえていたのか、笠を被った女性は一瞬ビクツと肩を震わし俺に視線を移した。

目と目が合う。彼女の眼は紅く輝いており、その紅い光は僅かに妖力を帯びていた。

やはり……彼女は月の玉兎で相違ないだろう。その決定的証拠となるのが、今も尚輝きを放っている紅い瞳、月の玉兎特有の『狂気の魔眼』なのだから。

しかし、何故この幻想郷に月の住人が居るのだろうか。彼等は極度に穢れを嫌っている為、地上に降りて来るなんて愚行はしない筈なのだが……どうなっている？

互いに無言のまま見つめ合っていると、笠を被った女性の表情はみるみる内に驚愕のものに変わっていった。おそらく狂気の魔眼が俺に効いていないからだろうが、俺に言わせてもらえばその程度の魔眼でどうこうなる俺ではないんだよな。

「あれ、優曇華じゃん！何してんのこんなところで？」

緊迫した空気の中、その空気を掻き消すように妹紅が俺達の間を割って入ってきた。

「妹紅？あなたこそどうしてここにいるのよ」

「付き添いだよ。それより、そっちは？」

「私は阿求さんに薬を届けに来たのよ」

二人は知り合いらしく、俺と浴衣少女を他所に談笑に興じていた。とりあえず、この場は妹紅に預けておくとして、俺は先程まで読んでいた幻想郷縁起を持って浴衣少女に聞いてみる。

「あのお、これ幾らですか？」

「えっ？あ、それですか？それは五百円になります」

急に話しかけたからか驚かれましたが、直ぐに平静を取り戻し値段を教えてくださいました。ついでに幾つか買い物していいですか！

「あ、そこの棚の本とそっちの棚の巻物全部貰えますか？」

「え、ぜ、全部ですか!?!」

「はい、全部です！」

驚きと戸惑いの中浴衣少女は「わ、わかりました……!?!」と言って俺が指定した本と巻物を出し始めた。

次はどうしようかと考えていると急に妹紅が俺の名を笠を被った女性に教えている声が聞こえた。

「あいつは氷鉋乖離、外来人だよ。それでいてかなりの使い手だ！多分私より強い」

「そうなの!?!」

笠を被った女性は再度驚愕の表情を俺に向けてくる。その驚きの表情をみるなり、彼女は実力的に妹紅より下なのだろうか。それでもかなりの力を感じるんだけどな。

俺はゆっくりとした足取りで二人の下に近づき会話に参加してみることにした。

「なぐに話してんのお二人さん」

「優曇華に乖離の事を紹介してたんだよ」

「あなた、本当に人間なの？妹紅より強いって本当？」

「さあね、妹紅と戦った事がないから知らない。それと俺は人間だよ」  
俺は人間。だというのに、優曇華とやらはまったく信じていないよ  
うで、疑いの視線を容赦なく俺に突き付ける。本当に人間なのにな  
ら。。

「それより優曇華、乖離の腕診てやってくれる？」  
「腕？」

妹紅は俺の使い物にならなくなった左腕を指さす。それを見た優  
曇華さんは何やら難しい顔をして何かを考え始めた。

ようやく何かを思いついたのか、手をポンツと叩いた。

「これはもうダメみたいね！一度永遠亭に来た方がいいかも」

永遠亭と言えば確か一種の診療所だった筈だ。紫日く月の民が住  
んでいるのだとか……。今更ながらのツツコミだが、穢れはどうして  
んのだろうか。

「確かに、乖離の腕をどうにかするには永遠亭に行くしかないな」

「あなたは どうする？」

「明日でいいなら行こうかな？今日は買い出しとか色々あつて忙しい  
からね」

「わかったわ、師匠に伝えておくわね」

そう言つて優曇華さんは大きな荷物を背負つて店を出てしまった。

残された俺と妹紅は二人で優曇華さんの出て行った方をじつと見  
詰めていた。

暫しの沈黙の後、妹紅はゆっくりと口を開いた。

「永遠亭まで……明日案内しようか？」

「うん、よろしく！」

「お客さん！本と巻物の準備が出来ましたよ！」

「今行きますー！」

俺は財布を用意して、呼ばれた方へと向かった。

※※※

「師匠、ただいま戻りました！」

「お帰りなさい優曇華、今日は早かったわね」

「予定より早く薬が売れましたので」

そう言つて、私は永遠亭の中に入り荷物を下ろしていつもの恰好に着替えた。

お使いの後はいつも通り、師匠の手伝いが私の日課だ。こうしてお使いが終わつたらいつも師匠の新薬の手伝いをしている。

「優曇華、その棚からB―6とC―7を取つてくれるかしら」

「はい、これですね？」

私は指示された通り、棚の中から指定された材料を取り出して師匠に渡す。

「ところで優曇華、報告とかないかしら？」

「明日患者が来ますよ。一人だけですけど」

「あら、そうなのね。……それで、その患者の容態はどんな感じなの？」

「左腕の神経がグチャグチャに切れてまして、使い物にならないようです」

「そう……」

淡々と作業をこなしながら、私は今日の報告を師匠に告げる。これもいつもの事なのだけれど、今日はビツクリ情報を師匠に言ってみる事にした。明日来る患者、あの奇妙な外来人の事を。

「そう言えば師匠、その患者の事なのですが、外来人ですよ」

「ふん……」

やっぱりこの程度ではまったく動じないわね、でもこれならどうかしら？

「その外来人、私の魔眼が効かなかったんですよ？どうなってるんですかねあれは？」

「あなたの能力が効かなかったの？」

やっぱり食いついてきた。師匠はこの手の珍しい話には結構食いついて来るから少し面白い。

そう思いながらも、私は今日出会った外来人の事を話す。

「ええ、しかも私を一目見ただけで月の玉兎だと見抜いたんですよ!」  
「へえ、それは面白いわね」

師匠はマッドサイエンティストばりの薄ら笑みを浮かべる。もしかして明日来る患者を新しい実験体にでもする気なのかしら。

その勘は見事に的中してしまった。

「優曇華、その患者の特徴を教えてちょうだい」

この手の質問をしてくる時はいつも実験体欲しさに限られている。

里の人間を実験体にする事は条約により出来ない為、外来人であればどうしようが自由であるので師匠はそこに目を付けたのだろう。

私はおずおずといった調子で彼の特徴を話す。

「えっと、背丈はおそらく175cmくらいはあつたと思います。それと、丁度その患者と一緒に妹紅がいましたが、彼女曰く、自分より強いらしいです」

「妹紅より……ねえ。フッフ……それから?」

「確か少し小顔だった筈です。それと、目が綺麗でしたね!アメジストみたい」

「えっ?」

師匠は啞然として、手に持っていた薬の調合本を落としてしまった。こんな師匠は初めて見たわ。

啞然とした師匠はすぐに我に返り、思案するよう顎に手を添えて考え込んでしまった。時折『いや、そんな筈は……』と呟いていたようだけど、一体どうしたのかしら。

暫くの間待っていると、師匠は確信を突くような真剣な目で私に問いかけてきた。

「その外来人の歳は分かるかしら?」

「分かりませんが、結構若かったですよ?人間でいう十代後半くらいでしょうか?」

「……………最後に問うわ、その外来人の名は分かる?」

「確か、氷鉦乖離と……」

私はその名を口にした瞬間——師匠は目を見開き驚愕の表情に染まった。

「氷……鉦、乖……離………？彼、が……この、幻……想郷に？」

上記の言葉を口にしながら、師匠は嬉しそうな笑みを浮かべていた。その笑みは実験体を弄ぶ人のソレではなく、まるで……かつての知人との再会を喜んでいるようだった。

「そう、彼が……この幻想郷に来たのね。……まったく、生き続ければこんな奇跡にも巡り合えるのね」

そう言つて、師匠は今までに見た事も無い優しい笑顔を見せた。私はその笑顔に目を奪われていた。

あの師匠にも、こんな優しい顔が出来るなんて驚いたつてレベルじゃない、耳から足の先までビククリなくらいなんだから。

すると、師匠は涙を流しながら私に言った。

「優曇華、この事はまだ姫様には内緒よ？」

「な、何故ですか？」

「フフ、それはまだ秘密だけれど、明日になれば姫様の面白い姿が見られるわよ？」

「面白い姿……ですか？」

「ええ、きつと面白いわよ？」

それだけ言うと、師匠は棚から一枚の古びた写真を取り出して懐かしむように眺めていたので、興味が湧いて私もちよつとだけ見せてもらえるようお願いする。

「あの、師匠、私も見たいですか？」

「ええ、いいわよ」

師匠からの許しが出たので、私は師匠の隣に行つて写真を覗いてみた。

その写真には六人の男女（男は一人）が写っていた。

師匠に姫様、それに依姫様と豊姫様、そしてサグメ様だ。最後の一

人は黒髪の少年。

写真にはサグメ様と姫様が黒髪の男を取り合っているような場面が写されており、それを微笑ましそうに見守るお三方。そして、取り合われている黒髪の男は面倒くさそうな顔をしていた。

あれ？でもこの黒髪の男って、今日会った外来人じゃない？

写真に写っているのは月の都……あれ、あれ？何で地上の民が月にいるのかしら？おっかしいなあ？

## 二十話 思い返す姫

S i d e 輝夜

幻想郷に来て、一体何年経つただろうか。

数えた事はない。というか、数えるのも面倒くさい。大体千年とちよつとくらいかしらね。まあ、そんな事はどうでもいいのだけだね。

最近妹紅と殺し合いばかりしているから、なんだか時間が経つのが早く感じてしまう。不老不死の私にとって、もはやその時間すら、色あせたものでしかないのだけれどね。

でも、——何故かここ最近、『あの日の夢』を見る事が多くなつた気がする。それこそ、既に数千年前——まだ私と永琳が月の都に住んでいた時の事、数々の思い出が淡い夢となつてよび覚まされる。

そして——愛しい……『あの方』と過ごした日々が。

上記の夢を見る時というのは、決まった法則性があった。それは、私が地球儀を眺めた日と、時折永琳の部屋に忍び込んで彼女の閉まつてある一枚の写真をくすね懐かしむ、この二つに限る。

だというのに、何故かここ数週間はあの日の事ばかりが夢に現れる。

最初は呪いかなにかかと思つたけれど、別段嫌という訳でもないし、そのまま放つておくことにしていた。

それでもやはり、あの時の夢を見れば見る程にあの至福であつた時間が戻つては来ないと思うと、胸にポツカリと穴が空いたような喪失感に苛まれていた。それはもう、身体中を業火で焼かれるよりも、ずっとずっと苦しいもの。

この事を永琳に数百年前に一度話したことがあつた。すると彼女は、私同様に悲痛な表情に顔を歪め涙を流したこともあつた。あの時の顔は今でもハッキリと憶えている。

それはともかくとして、あの方が居ない幻想郷で私は色々楽しく生



きている。妹紅と殺し合ったり、イナバが実験台にされているのを茶を啜りながら見物したり、てゐのイタズラに付き合ったりと、なんだからで楽しい無限ライフを満喫している。

時には人里に赴いて、脇巫女と弾幕ごっこしてみたりとかもある。その際スキマ妖怪にガミガミと説教されもしたのだけれどね。

月の民である私にとって、この地上は穢れ多き不快の地、本来なら立ち入りたくもない世界だ。

でもそれはあくまで以前の私。今の私はその穢れでさえも美しいと感じるようになった。きっとこれもあの方の影響なんでしょうけどね。

あの方はよくこう仰っていた。

『命とは、汚れ穢れて初めてその本質の輝きを放つ。——故に、俺は今を一生懸命に生きる地上の者たちが大好きなんだ。ここ月の都とは違つてな』

最初はなんのこっちゃ？つてなつてたけど、今でこそ、その言葉の意味を理解できる。『今を一生懸命に生きる者』が好き……今の私なら、その思いに共感できる。私も、今の地上が大好きなのだから。

そして時たま思い出すのが、あの方との初めての出会いだった。あれはもう、なんというか……最悪の出会い方だったと思うわね。今でこそ言えるけど、当時の私って随分命知らずな事を言ったと思うわ。あの方が寛大でなければ今頃死んでいるわね絶対!!

——初めてあの方と出会ったのが確か月の都、それも王宮にて会議が行われていた時だったわ。

月の姫である私も、一応その会議に出席していた。まあ、いつもながらに面倒くさいものでしかなかったのだけれどね。

そんな会議が行われている中、あの方は何の前触れもなく——突如として会議室中央に青い粒子と共に現れた。あの時の誰も驚いていたわね、無口で殆ど感情を表情に出さないサグね……今のは

無し！サグメでさえ目を見開き驚愕の表情をしていたくらいだし。

それにもつというなら、その日は会議が開かれるので、月の結界もいつもより強化させ、王宮にもそれなりに強固な結界を張っていたのだから。

しかしあの方は、その結界すらもすり抜けて会議室に現れた。後の報告では結界には何の異常も無かったのだとか。

それはそうと、当時のあの方は黒い外套に身を包め、襟の部分には赤い布が付いていた筈。それと見た目は地上でいう十代後半といった感じで、若干の幼さの残る少年だったかしら。

そして開口一番、あの方は小さなタメ息を吐き、

『みすぼらしい場所だな、月<sup>こゝ</sup>は。……息が詰まりそうだ』

周りの反応などまったく無視し、上記のセリフをさぞ不愉快そうな表情で呟いたのだ。

しかし月の民、会議に出席していた重鎮達はすぐさま兵を呼びあの方に対し汚物でも見るかのような視線を浴びせた。穢れを嫌う月の民なら仕方ないことだけれどね。

兵が会議室に到着してあの方を取り囲むように隊列を組んでいたけど、あの方はそれすら意に返さず、ジッと私を含めた月の重鎮達を見ている。

そこで最も驚いたのが、あの方はこともあろうに帝に目を移し『おい、この中にかぐや姫とやらはいるのか？……答えろ』と、いきなり不敬を働いたのだ。もしそれが帝ではなくツクヨミ様ならどうなっていた事か……。考えただけでもゾツとする。

それはともかくとして、そんな無礼を帝と重鎮達が赦す筈もなく、あーだこーだと喚いていたがそれをあの方は鬱陶しそうに『うるさい黙れ。俺はかぐや姫とやらはここにいないのかと聞いただけだ、それ以外の回答など求めていない』

そう言い放ったのだ。そこで私も少しカチンときて、立ち上がって名乗ってあげたわ！

『私がかぐや姫よーそれと、失せなさい、私はあなたのような底辺の人間を相手にしている暇はないの』

と、言つてやつたわ！でも、それを聞いたあの方は——突如として私の目の前に現れた。

先程まで会議室中央に居た筈なのに、まるで瞬間移動の如く私の前に現れたのだ。それには流石に驚いて尻餅を着いてしまったわ。

兵たちも困惑している中、あの方は私を見下ろしながらアメジストのように輝く瞳で、冷たく言い放った。

『かぐや姫、絶世の美貌を持つとは聞いていたが……なるほど、確かに美しいものだ。——下らん、これではただただ美しいだけだ、中身がまるで空っぽだ。こんな美しさになど価値は無い。……言うなればまるで、はりぼてだな』

心底興味無さげに、それでいてまるで私を見てもいないその目と、突き立てて来た言葉に、私は言い返すことが出来なかった。

怖かった……ハッキリ言つてしまうと、ただただあの時向けられて視線が怖かった。今までに感じた事のない何か、私の胸を射貫き絶対的な恐怖心を植え付けられた感覚があった。

あの時程死のイメージを強く抱いた事は無いと断言できるわねホント……殺気とも違う威圧感つて感じね。

そこからは殆ど放心状態だったから深くは憶えていないんだけど、あの後あの方と永琳を始めとした月の討伐隊が衝突して、一度月の都は滅んだのだったわね。

戦況は圧倒的——月の守護神総出で戦つたらしいけど、永琳以外皆一撃で沈められたのだとか。圧倒的過ぎるわよね〜（白目）

そこからは大体憶えている、あの後永琳とあの方は一騎打ちをしていた。

永琳は本気を出して戦っていた。月の都最強と評される永琳の本気は、もはや災害なのではないかと思う程のものだった。空を縦横無尽に覆う無数の矢、その一つ一つが当たれば即死は免れぬ威力を持つたものばかり。

月の民の誰もが永琳の勝利を疑わなかった。月の頭脳と評され、稀代の天才とまで謳われた永琳の強さに、誰もが勝利を確信していた。実際に圧していたのは永琳だったし、永琳も自身の勝利を疑つていな

かったと言っていた。

——でも、永琳は敗北した。

方法は分からないけど、あの方と永琳が戦っている最中二人は突如としてその戦場から姿を消した。

感知班からも永琳の霊力の感知が出来ないと、騒ぎになっていた。二人が月の都から姿を消してからというもの、月の医療班は総出で傷ついた守護神達の治療に入った。皆、意識不明の重体となつてしまっていた。確か全治数か月な者も居た筈ね。

それらから数時間が経った頃、感知班がようやく永琳の霊力を探知できたという情報が入った。私は永琳の下までわき目も振らず急行した。

ようやく永琳の下までたどり着いた私は、驚愕と同時に深い絶望感を目の当たりにした。

——身体じゅう血まみれで意識の無い永琳が、あの方に抱えられてたのだから。

言葉は何も出て来なかった、否——何も言えなかった。口を開こうにも、目の前の光景が信じられず、ただただ愕然としてしまった。

あの後には、確かあの方の持っていた秘薬で永琳の傷は全快したんだったわね。

永琳が意識を取り戻してから、あの方は月の民を一度広場を集めるように言つて来たから、渋々帝は了承していたわ。敗者に拒否権は無いつてやつね！

広場に集められた全ての月の民、そして傷ついた守護神達に向かって、あの方はたった一言だけ……告げられた。

『俺は……が嫌いだ！』

このたった一言のみを告げて、あの方はその場を去ってしまった。本当に、今思えば中々に最悪な出会い方だったと思う。あの後何度か月の都に現れては、何かを探すようにふらふらと彷徨って突然消える。そんなよく分からない行動をとられていた。

それに、最初の頃こそ大嫌いで、二度と顔も見たくないくらい憎んでいたけれど……一度だけ、あの方が一匹の玉兔に見せた柔らかな笑み、それを見た瞬間私の中で何か弾けたのだった。

それはきつと、私の初恋の引き金だった筈。

くれぐれも誤解の無いように言っておくけれど、決してその玉兔があなたの方にとって特別だった訳では無いらしい。ただ、事実上月の都を崩壊させた張本人であるあの方に、玉兔の一匹はブルブルと恐怖で身体を震わせながらも、あの方を氣遣って桃を渡した、その勇気に対する敬意と感謝の意を込めて微笑んだらしいのよ。

なんか、ひと昔前のヤンキーが捨て猫を拾っているのを見て感動するっていうあれに似てるけど、実際にそれを目の当たりにすれば案外女ってちよろいもんなのね。私の事なんだけれどね？

それ以上に、あの方が向ける生命への愛情が、月の民にはないものであったから、そこにも惹かれたのかもしれない。命の尊さ、そして儂さを誰よりも知っているからこそ、あの方はそれらの物が無い月が嫌いなんだと思う。実際はまだ教えてもらった事が無いんだけどね。

なににせよ、私はあの時の笑みがきつかけとなり、あの方に興味を抱くようになった。名も……訊いてみた。

氷砲乖離——あの方はそう名乗った。

乖離様と、私はそう呼ぶことを許してもらった。

詳細を長々と語ると手に負えないから、簡潔に言ってしまうとね？月を滅ぼした乖離様は重鎮達とんやかんやあつたらしく、色々あつて月の滞在を赦されたわ。

確か教育係担当は永琳とサグ姉……コホン！サグメだった。

その後、丁度遠征から帰ってきた綿月姉妹、確か依姫の先生として

劍術を教えていたとかなんとか。依姫涙目になってたわね。

そういえば、永琳やサグメも乖離様に対して強い興味を抱いていた筈。サグメに至ってはもはや私と同じ恋愛感情なんじゃないってレベルで。あれ？それを言ってしまったら永琳も同類になりそうなんだけど？夜な夜な夜這いをかけようと乖離様の寝室に侵入しようとしていたのを何度か見たし。もちろん是が非でも止めたけどね！

月での思い出は、私にとつてもう二度と戻ることは無いであろう泡沫の夢のようなもの。あれほどまでに幸せを感じていた日はなかった。

毎日乖離様と会い、他愛もない雑談をして、得意の料理を振舞ってもらって、仕事の見学をさせてもらって、寝る時間まで傍に居ていただいて……もう戻らない至福の思い出たち。

この永遠の罪を背負いながら、私は来る日の夜を無限に数え続けながら夜空に輝く星々を見上げる。

本当は月の方が好きなんだけれど、眩い儂き星っていうのも悪くない。

『俺は月より星の方が好きだ』

乖離様はそう仰っていた。……分からなくもないと思うわ。私も……今はこの穢れたる美しき世界が好き。

願わくば――

「もう一度、お会いしたいです……乖離様」

私は空に掛かる星々を眺めながら、叶う事のない願望を呟くのだった。

※※※

「へ、へつくしつ!!」

「大丈夫乖離？風邪でも引いたか？」

「そんな事は無いと思うんだけどな」

「それならいいけどさ」

「お、そろそろ我が家だ！飯食って行くか？」

「ありがたくね」

こうして、物語はちやくちやくと進み続ける……………のかな？

「ただいま〜！」

「ふぎけんじゃないわよ紫イー！」

「何故怒鳴り声??」

## 二十一話 再会、月の二人と星の一人

S i d e 妹紅

今日は乖離を永遠亭に連れて行く日だ。昨日家を教えてもらったから現在その家の玄関前で待機中だ。

昨日は晩御飯をご馳走してもらった時に、私の方から迎えに行くと伝えておいたから、家の前まで来ている訳なんだが……正直結構恥ずかしかったりする。ぶっちゃけ迎えに行くと告げておいた時刻より多分一時間以上早いと思う。

「……………髪整ってるかな？」

私は不安と何となくの気恥ずかしさで、自分の白髪に手櫛をする。かれこれ千年以上は生きて来たけど、異性の家に行って出て来るのを待つなんていう行為は初めての経験だから、年甲斐もなく生娘感が出てしまう。……………何でかな？

それはそうと、何もこんな早くに来る必要は無かったかもしれないな。いくらなんでも早すぎるよね、一時間以上も前から待つなんて……………我が事ながら、バカバカしく思えてしまう。慧音を待つときは、こんなに早く来たりしないのにな。

私が上記の事を思い耽っていると、不意に玄関の扉が開き家主である乖離が出て来た。……………え、早くない?!

「おはよう妹紅、随分と早くないか？」

乖離は不思議そうな表情で、挨拶を告げた後そんな事を聞いてきた。

「お、おはようございませー！」

乖離が急に現れた事に色々とテンパってしまい、妙に礼儀正しい挨拶が口から飛び出してしまった。おかしいな、どうしてこうなってしまうのか……………。それになんだか顔が熱い気がするし、何か恥ずかしいぞ。

「あ、いやおはよう……………今日はいい天気だね」

「今日曇ってるよっ…」



「……………」

うわあああ何やってんだ私イイイイ!!絶対おかしい奴って思われちゃうじゃんかあ!どうしようどうしようどうしよう最悪だよおお!

私は盛大にミスってしまった事に恥ずかしさと焦りのあまり、乖離に背を向けて頭を抱えてしまう。……………ううう半端なく恥ずかしい

／／／／

「大丈夫か妹紅?」

急に気が動転してしまった私に、乖離は心配そうに問いかけてきてくれる。その優しい気遣いに、私の顔が更に熱くなってしまっているなんて乖離は知らないんだろうな。何か今日の私おかしくない?昨日はこんな事無かったのにさ。

でも、いつまでもこんな事している暇はない。乖離に迷惑を掛ける訳にもいかないから、私は気恥ずかしさを堪えながらもゆっくりと乖離の方を向いた。

「ごめん、急に取り乱しちゃって……………もう大丈夫だから」

「そうか?ならいいんだけどさ」

「そ、それよりさ、ちよつと早いけどそろそろ行く?」

「ちよつとつて言うか二時間くらい早いけどな。ま、どうせだし行こうか」

……………二時間も早かったなんて、私は初デートに舞い上がる乙女かつ!うっ……………は、初デート……………か。何か顔だけじゃなく胸が苦しくなった気がする。

「い、行こっか／／／!」

羞恥心を必死に堪え、私はいつも以上の足取りの速さで先を歩いき、そこに続くように乖離も私の背を追ってきた。

※※※

人里と博麗神社の境にある森を抜け、私と乖離は現在迷いの竹林を歩いていた。

乖離は道中物珍しそうな表情で辺り一面を見渡している。そんなに珍しいものでもないと思うんだけど、乖離からしてみれば珍しいものなのかも。

「どの竹も俺が今まで見て来たもののどれよりも大きいなあ〜」

「そうか？普通だと思うけど」

「普通こんな大きくはならないぞ？多分」

思うに、乖離にとってこの迷いの竹林は観光名所みたいなものなんじゃないだろうか。でなきやあんなにも目を輝かせたりしないと思うし、上記のような反応は無いだろうから。

「しっかし面白い場所だよね〜迷いの竹林。辺り一面に生えている竹だけじゃなく、入った者を惑わす結界まで張られている。しかも結構高等の」

驚いた……！まだ竹林に入って数分しか経っていないというのに、乖離は既に竹林の構造を把握してしまっている。普通の人間や妖怪にはまず解けないというのに。実際、私でもこの竹林の構造を理解するのに五百年近く掛かったと思うのに。

「凄いね乖離、早くもこの迷いの竹林の構造を理解しているなんてさ」「理解はしていても多分、案内無しじゃ迷っちゃうだろうけどな」

そう言っつて乖離はケラケラと子供っぽく笑った。それに釣られて私も小さく鼻で笑った。

教えるべきかは分からないけど、この結界はあのマッドサイエントイストが張った特別な結界だったりする。自然に溶け込んでいる勢で、結界が張られていることにすら気付けないという仕組みらしい。

それを速攻看破した乖離マジリスpekだな！これも『世界の抑止力』であった経験と知識からくるものだったりするのかな。

そういえば、少し気になっている事があったから訊いてみようと思う。せつかくの機会だからな！

「あのさ乖離、月の民って知ってる？」

「月の民か……知ってるよ。懐かしいなあ」

なんだ、知っていたのか。なら、面倒なのは抜きで訊けるかもしれない。それにこの質問は、これから向かう永遠亭において大事な事だから。

「乖離は月の民の事どう思ってる？」

それを訪ねた瞬間——ほんの一瞬、一秒にも満たない僅かな時間だけど、乖離の表情はとてつもない程の憎悪に染まっていた。その表情を見た私は、冷や汗と同時に息を呑んだ。

「月の民、ねえ……個人差はあれど、あまり好感は持てないかな。彼等の考え方を否定する気は無いが、肯定する気も無いなあ」

その回答は、思っていたものより遥かに強くそして重いものだった。だって、まるでこの回答は月の民に直接会ったみたいな言い方だったから。

昨日久しぶりに会った優曇華も然り、私の知る月の民はあくまで脱走者だから、あまり多くは知らない。でも乖離は月の民の大半を知っているようだった。

「乖離は、月の民に会ったことがあるのか？」

「会ったも何も、俺は一度月に赴いてそこで暮らしたことがあるからな」

「マジで!？」

予想外の答えだ。よもや月に赴いて暮らしたことがある地上人がいようなんて……。あの閉鎖的思考の持ち主共が乖離を受け入れたのか？あいつらの言う『穢れ』はどうしたんだろう。

「まあ、もう行かなくても良いってんなら……俺は二度とあんなクソみたいなどこ行かないけどね」

「そ、そっかあ」

困ったなあ……乖離も乖離で、なにやら通常の地上人以上に月を嫌っている節がある。月で暮らした事があるって言ってたけど、一体何があったんだろう。よほどの事がなければこんな嫌悪感は出さないと思うんだけど……。

そろそろ永遠亭に着くかもしれないけど、引き返した方が良かった

りするか？万が一乖離があのかバカ姫に遭って、癪に障ることを言われて大喧嘩になったらどうしようか。そんな時はあの薬師がなんとかしてくれるのを期待するしかないかもな。

私が若干の諦めムードになっていると、乖離は何かを察したように気を遣ってくれた。

「安心しなよ妹紅、俺は月の連中が嫌いだがそれはあくまでも有象無象の奴等だけだから。好感が持てた者だって月には何人かいたよ」

「そ、そうなんだ」

それはつまり大人の対応をしてくれるって意味で捉えていいんだよな？いいんだよな！喧嘩にはならないよな乖離?!……おっと、乖離の前に私が喧嘩吹っ掛けそうだな、ハハハハ。

そんな淡い期待と自身の殺傷本能を笑いながら、私と乖離は永遠亭に向けてまだまだ歩き続けた。ていうか、空飛んだ方が早いのにね。

それなりに長い距離を歩いただろうか、ようやく見慣れた和風の屋根が見えて来た。歩き続けて数時間かな？やっと永遠亭に到着した。

「あれが永遠亭か？随分と和風染みてるねえ」

「まあね、でもこれでその左腕が治せると思うぞ？」

「そうだといいんだけどね」

永遠亭の門前に到着して、私は軽く二回ほど門を叩いた。

すると門はゆっくりと重低音を上げながら開いた。そして開いた先にはいつものようなブレザー？姿の優曇華がいた。

「いらつしやい二人共、治療の準備は出来てるわよ」

「悪いねいきなり」

「いいのよ別に」

いつも通りの挨拶と会話をしながら、私は門を潜った。対して乖離は、目を細めなやブツブツと数字を数えていた。

「5…………いや、6かな?」

「何をブツブツ言ってるのあなた」

「え?ああ、この永遠亭だっけか、その庭に作られている落とし穴を数えてたんだよ」

「え、嘘っ!落とし穴あるの?てるの奴、昨日あれだけ埋めておけって言ったのにいゝ」

なるほどね、それでさつきからブツブツと数字を数えていたのか。それにしてもあのバカ兔、また余計な事を…………。永琳に叱られても文句は言えないだろうな。

「せいじゃあ、お邪魔しま——ッ!!」

乖離は突如、門を潜った瞬間驚愕の表情に染まった。

視線は真っ直ぐ、永遠亭の中に向けられている。その位置は間違いなくあのバカ姫と永琳の部屋だ。

ただただ驚きと呆気に取りられた表情で固まってしまった乖離を、私と優曇華は不思議そうに見つめた。どうしてそこまで驚いた表情をするのだろうか。

そんな事を思っていると、乖離は未だ晴れぬ驚愕の表情で呟いた。「まさか…………この霊力、『八意<sup>×</sup>』なのか…………?!それと、もう一つは?!」

八意までは聞こえた……。でも、そこから先の名が何故かノイズ混じりに聞こえ、よく聞き取れなかった。対する優曇華は、乖離の呟いたノイズ混じりの名に驚き半分納得半分といった表情をしていた。私は何故か完全に置いてきぼりになってしまっている。

※※※

Side 乖離

妹紅に連れられて来た永遠亭。

紫が言っていた、この永遠亭には月の民が住んでいると…………。

「おおよそ月の使節団か何かと思っていた……。——だが、今確信した。この永遠亭にいるのは使節団なんかでは断じてない。月の脱走者であり、いつかの日に別れた儂き友二人。」

間違いない、霊夢を圧倒的に凌ぐ霊力と神格、かつて月の頭脳とまで謳われていた彼女に相違ない。

そして、その彼女を従者におく月の姫——かぐや姫！何故こんなところに、なんて問い質す気は無い。そうか、彼女等はこの幻想郷にて生きていたのか。

俺の感覚でいうなら早数年、こちらでは数千年といったところか？いやはや、時間が経つてのは随分と早いものだな。

「真意は問わない。が……。今は、この再会を喜ぶとしよう」

瞼を閉じ、そしてもう一度、ゆつくりと瞼を開く。——最初に目に入ったのは、今にも泣き出しそうな表情で口元を抑えている輝夜だった。そしてその傍らに、既に我先にと涙を流す××が居た。

さてさて、こういう場合俺はどういう反応を示せば良いのだろう。恰好良く『俺の胸に飛び込んでおいで二人とも！』と言うべきか……。いや無いな、ホントに飛んできそうで怖い。なら『フツ、久しいな二人とも！』と、クールに振舞うべきか……。いや、これも無いな、どの道とんでくる……。矢が。

こういう場合は、そう——普通に……。

「久しぶりだな、二人とも。元気、してた？」

俺は親しみを込めて、上記の言葉を口にする。すると、輝夜は俯きながら身体を震わせていた。対する××は、俺と目を合わせて少し気恥ずかしそうに、頬を赤らめ涙の笑顔を見せてくれた。

「本当に……。久しぶりね乖離。あなたがもう一度私達の前に現れる時を……。今日この時をずっと待ち焦がれていたわ」

そう言った××は、ゆつくりと輝夜を連れて俺の前に立った。輝夜は今も尚、俺と顔を合わせようとせず、俯いたままの状態だった。こんなしおらしい態度は、今も昔も変わらないらしい。

しばらくの間黙っていると、輝夜はオズオズといった態度で俺の使い物にならなくなった左腕に触れた。痛みはないが、少し妙な感覚が左腕に走った。

「本当に……乖離様なのですか……?」

「……さあね、それはお前自身で確かめてみるといいよ。俺は俺のつもりだけだな」

少し含みのあるように告げてみるが、どうやらそんなものの必要は無かったらしい。輝夜は大粒の涙を流し、綺麗で整った顔もクシャクシャにして俺に抱き着いてきた。

勢いが激しかった勢か、俺は輝夜を抱きかかえたまま後ろに尻餅をついてしまう。うん、結構痛いよ今の!

「本当に、本当に乖離様なんですか?嘘でも幻でもない。……本物の!」

「だからさ、それはお前自身で確かめてみればいいんじゃない?」

俺は宥めるように、泣きついてきた輝夜の頭を優しく撫でる。

「夢なら……幻想なら……どうか、どうか覚めないで……この幸せを奪わないで!!」

輝夜の悲痛の願いと叫びが、これまでの彼女の苦しみと孤独感を物語っているように、俺は聞こえた。そんなにも、苦しんでいたなんて、俺は知る由も無かった。

仕方ないと言えば仕方ないが、これも、彼女等の背負った罪と罰だったのかもしれない。まったく、ままならないねえ。

「輝夜、これは夢でも幻想でもない、現実だよ……。俺は、ここに居るよ」

「う、うう……ふええええくん乖離様ああ!!ずっとお会いしたかったです!!」

「よしよし、鬱陶しいからあと十秒だけこのまま居てやるよ」

「酷いです乖離様ああ!!うわーん!!!」

泣きじゃくる輝夜を強く抱きしめ、夢でも幻想でも無いということ、輝夜に優しく教えてやるのだった。

輝夜と俺を微笑ましそうに見つめる××に、俺は悪戯っぽく手を伸ば

した。

「あんたも来るか××」

「その名は月を抜け出した時に捨てているのよ？今は永琳と名乗っているわ。……………そうね、私も少しだけ」

そういつて、永琳は俺の後ろに回り背中に抱き着いてきた。その際背中に感じる柔らかな感覚に驚きながらも、それが表に出ないように強く気張った。

「本当に……………久しぶりだね、二人とも」

今だけは神よ、この時を邪魔してくれるなよ？

「なあ優曇華」

「何妹紅？」

「今日ってドラマの撮影だったのか？」

「シッ！今は黙っときなさい」



## 二十二話 ちよつとした語り合い

S i d e 妹紅

永遠亭に来て、輝夜を含め永琳まで乖離に対して訳の分からない態度と涙を流していた。その勢で私と優曇華は完全に置いてきぼりにされてしまっていた。まったく何がどうなっているんだよ……？

それはともかくとして、今乖離は永琳と優曇華に治療室に送られている。腕の症状が思っていた以上に深刻だったようで、並の薬では治らないのだとか……そんな重症だったのに何であいつはあんなに暢気していたんだ、普通の人間だったのにさ。

それはまあ、いいとしてだ……何故、何故私がよりもよつてこのクソアマ輝夜と一緒に待たねばならないのか!!

現在の私かというと、乖離が左腕の治療で永琳と優曇華に連れていかれてしまっているのです、永遠亭の客間で輝夜と二人つきりで待たされている。永琳から『姫と二人で待つてなさい』と、ブラックな笑みで強制させられているのだ。断ってたら多分十回は殺されてると思う………おお怖い。

正直輝夜と一緒に空間なんて死んでも嫌なのに、どうしてこうなるのか……。

「ハア〜」

思わずため息を吐いてしまう。こんな事なら永遠亭に乖離を送るだけしてさつさと帰ればよかったと後悔すらしてしまうよ。

でも、ここに送ってくるまでの時間は存外楽しかった。乖離とは色々と話したけど、どれもこれも話題に尽きない面白いものだったから久しぶりに嬉しかった。こんな気持ちは慧音と出会って以来かな……。

宴会の時も聞いたけど、少し不老不死だった時の話も聞けたから、色々参考になった。

乖離曰く『本さえあれば俺は無限に生きていられるよ』とのことらしい。昨日の買い出し付き合った時もそうだったけど、乖離って半端

ない読書家だったなく。

お茶を啜りながら、私は特にすることも無いので昨日と今日の回想に浸っている。対して、私と向かい側に座っている輝夜はさつきからずっと惚けた顔で「乖離様♡」と連呼している。ハッキリ言ってキモイ……………」

「乖離、まだ治療終わらないのかな……………」

別に寂しい訳じゃないけど、何となくそんな事を口から一つ零してみた。

するとどうだ、さつきまで惚けた顔の輝夜が突如不機嫌な顔に変わり、キツと私を睨みつけて来た。

「妹紅あんたまさか、乖離様を狙ってるんじゃないわよねえ……………」

輝夜は殺気をまるで隠そうともせず、直球で私に問いかけて来た。……………そんな強い殺気を向けられては、私も殺気を向き返してやりたくなるってもんだ。

「……………さあ、どうだろうなあ」

嫌がらせの意味を込めて、私は挑発混じりに返答する。それが気に食わなかったのか、輝夜は更に強い殺気を放ち始めた。

「何も知らぬ小娘風情が、私と乖離様の仲に割って入ろうなんていい度胸してるわね！」

「小娘でいうならお前も似たようなもんじゃないか？クソニート！」

「下衆の仇名で私を呼ばないでくれるかしら汚らしい」

「やだね、何度でも言っつてやるさクソニート」

大体こんな感じ。私と輝夜の仲つてのは幻想郷でも最悪レベルで悪いんだ。水と油だなんてよく言ったものだよホント、呆れて笑えてくる。

そして、この後の展開もいつも通りだ。

「……………表に出なさい妹紅、今日こそその減らず口を閉じてやる！」

「やれるもんならやってみろバ輝夜、乖離の前で泣きっ面晒しやがれ！」

こういった罵倒雑言も私と輝夜の間では日常茶飯事みたいなもの

だ。そしてこの後はお決まりの弾幕ごっこになる。

どちらが先に死ぬかで今まで何度も殺し合ってきている。不老不死同士の殺し合いなんて笑えるレベルの皮肉だったのに、何故かそれが止められなかったりする。

それともかくとして、私と輝夜は客間を出て庭にきた。互いの距離は大体五メートルくらいだと思う。いつも殺し合いをする時はこのくらいの距離感だったと思う。

輝夜は懐から『蓬萊の玉の枝』を取り出し、いつものような構えをとる。私もそれに呼応するように全身から炎を噴きあがらせる。

「まだ乖離は治療中だ、スペカは無しにしよう」

「そこには賛成ね」

互いに小さく笑う。——そしてそれが合図に、私と輝夜は互いに突貫する。

輝夜は能力による加速、私は炎の放出による加速で互いの腹部に全力の一撃を見舞い合う。

「グッー」

「……………ッ!!」

グシャリと、互いの腹が抉れた音が耳に入った。それと同時期に吐き気を催す激痛が私の上半身を駆け巡った。

思わず吐血してしまう。が、それでこそ殺し合い甲斐があるというもの。

私は一足先に輝夜の脳天目掛けて炎を帯びた蹴りを放つ。輝夜は痛みがまだ体を鈍らせているのか、無防備にも直撃を余儀なくされた。

「クッ……………」

直撃を受けた輝夜は、そのまま空中に吹き飛んで行った。しかし、すぐに態勢を立て直した輝夜は不敵な笑みを浮かべながらゆっくりと降りて来た。

「フッフ、痛いじゃない妹紅。…………私じゃなければ死んでたわよ?」

「いつそのこと死んでくれてたら嬉しかったけどな」

そんな悪態をつきつつも、私は呼吸を整える為に瞬きをする。——

——しかし、それが間違いだった。

「あらあら、油断は禁物よ?」

上記の音が耳元で囁かれたと思った瞬間、胸を抉られた痛みが私を襲った。

「ガハッ!!」

心臓部ではなく、逆側の肺を抉られている。その勢で尋常ではない量の血が口から、そして抉られた左胸から流れていた。瞬きの一瞬でこれだ、輝夜の腕は私の肺を掴んでいる……それを見て相変わらず無茶苦茶な奴だと再確認できる。

「フフ、まだ殺しはしないわ。あなたには完全なる敗北が必要なものね?もつともつと、じつくりと……戮り殺してあげる」

「……っの、サドアマがあ!」

「まずは、一つ……」

グシャッ!何かが潰れたような音がした。その音が耳に届く前に私の右胸付近で意識が飛びかける程の痛みが走った。

「ギ、ギアアアアッ!」

あまりの痛みに、私は大声で叫んでしまった。輝夜は、どうやら私の肺の一つを握り潰したようだ。

尋常ではない痛みで、脳が猛スピードでアドレナリンを分泌しているのが分かる。全力でこの激痛を抑えようと身体が必死のようだ。

「いい声で鳴くじゃない妹紅!いいわその悲鳴、前座の賑やかしには上出来よ!」

輝夜は心底愉快そうに私を嘲笑う。

……調子に乗りやがってええっ!!

私は輝夜の腕を両手で強く握った。

「舐めんなよ……………クソ姫があ!」

肺が一つ潰されている、そんなものはどうでもいい。私は込み上げて来る血を?み込みながら、深く息を吸う。

全身から再度炎を放出し、輝夜諸共焼き付けていく。

「うっ……………」

輝夜は即座に腕を引き抜こうとするが、私がそう易々と逃がす訳もない。がっしりと握っておいた輝夜の色白の腕が、徐々に茶色に変わって行き、輝夜の表情も苦悶に変わり始めた。

「このっ、放しなさい!」

猛火の如く燃え盛る炎に、流石の輝夜も堪らず逃れようと必死に腕を引き抜こうと力を込めるが、身体的な強さで輝夜が私に勝てる筈もない。

「お前程度の力でどうこうできる訳ねえじゃん……………ちったあ外遊びでもしてりやよかったなあ!!」

私は更に炎の出力を上げていく。その温度は既に庭の石ころと地面を溶かし始める程に強まって行く。

辺り一面燃え盛る猛火と熱気が充満していく。このままでは間違いないく乖離の治療に支障をきたし兼ねないのは安易に想像できる。

「ちよつと、場所を変えようか」

燃え盛る炎の一部を背中に集め、翼の形に変化させる。

未だに突き刺さっている輝夜の腕を引き抜き、腹に蹴りを打ち込んで上空に打ち上げる。

「ゴハッ!」

吐血と共に、輝夜は為されるがままに上空へ打ち上がって行く。それを逃がすまいと私は飛翔し追いかける。

「詰みだ!負けて死ね、輝夜ああああ!!」

私は怒号と共に全力の一撃を放つべく片手に炎を集中させて突貫する。

「くうッ!調子に乗るな、妹紅おおおお!!」

しかしやはり簡単にはいかないらしい。輝夜は空中で一回転して

体制を立て直し、持てる霊力を蓬莱の玉の枝に集め始めた。

おそらくこれで最後の激突だ。僅かな間の決闘だったとはいえ、思った以上にダメージを受けてしまった。胸に開けられた穴と潰された肺は既に修復しきっている。そこだけはやはり不老不死、回復速度も尋常じゃないし痛みももうほとんど無い。

乖離の治療が終わるまでのささやかな暇つぶし……になっただけまっただけ。

既に輝夜と私の距離は数メートル、お互いに最後の技を仕掛ければ回避は不可能、狙いは必中の一撃となりうる距離まで近づいた。

(この距離なら絶対に外さない!!)

——その時だけ、何故か心が繋がった気がした。

「くたばれ輝夜ああああ!!」

「死になさい妹紅おとおお!!」

私の放つ炎の拳と、輝夜の蓬莱の玉の枝が放つ薙ぎの一閃は衝突し、目の前が一瞬真っ白になるほどの爆発を引き起こした。

——腕の感覚が消えたと思った矢先、私は悔しくも意識を手放したのだった。

※※※

Side 輝夜

……………決着はついた。

私は気を失った妹紅を抱え、永遠亭の庭にゆっくりと降り立つ。

「ホント、世話が焼けるんだから」

妹紅を庭に降ろし、私は小さく吐血をした。予想以上の火力のぶつかり合いのせいでいたる箇所がボロボロ、それに加え全身火傷だ。まあ、どうせそんな火傷数秒あれば回復するんだけど……。

妹紅は未だに起きない、というかいつまで寝てる気よこのバカは……。

ホント世話が焼けるつたらありやしないわね、喧嘩を吹っ掛けたのは私だけけど、もう少し張り合ってくれないと退屈凌ぎにならないじゃない。乖離様がいるからもう退屈なんてありえないけど……。

こうしてみると、なんだか初めて妹紅に出会った日を思い出す。――

――あの日も丁度、こんな構図だったかしらね。

妹紅が私を殺すと言って来て、それを返り討ちにしたんだっただかしら。その時も確か、こんな風に妹紅が起きるまで待つていてあげたんだっただけ。再々言うけど、ホント世話が焼ける小娘ね妹紅……。

「あー疲れた！折角乖離様が来てくださっているっていうのに、なんだか興が削がれちゃいそう」

私はそんな悪態をつきつつも、妹紅の隣に座り込む。

人の事も考えないで、何一人勝手に寝てんのかしらね……今の内に殺しておこうかしら、その方が早く起きそうだしね。

指先に靈力を集め、ソフトボールくらいの弾を生成する。それを未だ気を失っている妹紅の額に打ち込もうとして――止めた。

理由は簡単なもの、殺してもよかったけどそれでは私が乖離様に野蛮人みたいなレッテルを張られてしまうと思っただけから。……決して、決して妹紅が可哀想なんて考えてないわよ？本当なのよ？

指先に集めた靈力を霧散させ、変わりに妹紅の額をちよつと強めに小突く。

「もう、早く起きなさいよ……」

「……………うつさいなあ、ずっと起きてたわバカ」

妹紅は心底嫌そうな顔をして、ゆっくりと起き上がった。やっと起きたわこのバカ娘！

「随分長いこと寝てたみたいだけど、夢でも見てたのかしら？」

「別に……………そんなんじゃないよ」

ぶつきらぼうに妹紅は答える。こんな態度を取るのは決まって私に負けた時だと分かっている。そんなに悔しいのならもつと強くなればよいものを……なんて期待しても無駄よね。

暫しの沈黙の後、私はゆったりとした口調で妹紅に問いかけた。……それはもちろん乖離様の事について。

「ねえ妹紅、あなたはどこまで乖離様の事を知っているの？」

「はあ？なんだよ急に……？」

「いいから答えて」

「多分……表面的なものなら全部知ってる。と思う……」

表面的なものなら全部……ねえ。逆に言えば内面的なものは知らないってことになるんじゃない？ま、妹紅がもしも乖離様の全てを知っているなんてのたまったものなら永遠に殺し続けていたけれど……。

「へえ、例えば？」

「元不老不死だったとか、世界の抑止力で色んな世界を飛び回っていたとか……かな？」

なるほど、表面的とはいえど思った以上に知っていたようね。……おおよそ乖離様が話したんでしょうね、だってこの幻想郷において乖離様の過去を知るのは私と永琳だけ……の筈よ。

ただ解せないのは、何故乖離様が結構重要な事を安易に妹紅に話しているのかということ。おそらく乖離様の過去は受け取り方次第はこの幻想郷全土の敵になるやもしれないというのに……だ。

「つーか、さつきから何だよ急に」

「別に？あなたが気にする事ではないわ」

「なんだよハッキリ言え！」

「それはそうと妹紅、乖離様の過去を知っているのはあなただけなの？」

「質問責めかよ?!」

妹紅は怒りを通り越して呆れたようにタメ息を吐く。そんなのはいいからさつきと答えて欲しいんだけど。万が一にでもあの妖怪の賢者が乖離様の過去を知っているとすると、あのスキマ妖怪のことだ



から乖離様を消そうとするでしょうね……………それだけは何としても避けなければならぬ事態よ。

「いいからさっさと答えなさい妹紅」

「ハア、私を含め霊夢に魔理沙、こころとぬえ紅魔の吸血鬼姉妹とその従者に、エセ記者」

「それだけ？」

それだけなら問題は無さそうね、あのスキマババアの耳に乖離様の情報が入っていないのなら大丈夫そうね。まあ、万が一の時は乖離様を永遠亭に匿ってやり過ぎけどね？まあ大丈夫そうね、よかったよかったです。

——なんて思った瞬間、妹紅の次の一言でその思想は一気に崩壊を告げた。

「えっと、後はあの八雲二人だっけ？」

「はあ？」

今、妹紅は何て言ったの？ついつい間抜けた声が出てしまったけど今そんなものはどうでもいい。『八雲二人』って言ったの？それってあのスキマババアを含めてその式まで知っているって事？

「何それ！大事じゃない!!」

「な、どうしたんだ急に！」

妹紅が何か言ってるみたいだけど今はそんな事に気を取られていない場合ではない。

私は妹紅を置き去りにして永遠亭の治療室まで急行した。

「どうしたんだよ急に……………？」

※※※

急いで治療室に向かっているのに、何故か一向にその治療室に辿り着けない。まるで廊下が永遠に続いているかのように扉を開けても開けても同じ景色ばかり。

「一体どうなってんのよこの廊下はっ!!」

苛立ちと焦燥感で頭がおかしくなりそう。今は一刻を争うという一大事だというのに、どうしてこうも邪魔が入るのかしら。……このふざけた廊下創った奴は後で絶対殺すっ!!

なんてものを思いながらも、私はこの永遠に続いていそうな廊下を無我夢中で走り抜けていく。

そんな時、急に後ろから私を呼ぶ声が聞こえ、そちらに振り返ってみると妹紅が走って来ていた。

「何妹紅、今私は急いでるのよ! 邪魔するなら先にあんたから殺すわよ?!」

「なんでだよ! てかさ、何でそんな焦ってんだよ?」

「答えてる暇はないわ! 私は急いで乖離様にこの緊急事態を伝えなきゃならないのよ!」

「そ、そうか? でもさ、ならなんでお前この無限に続く廊下の結界を解除しないんだ?」

「あ……………」

そうだったああああ!! この結界張ってたの私だったあああ!! 何で今更になってそんな事を忘れていたのか……………。数秒前の私を本気で殺したい。

それよりも今は、過去の醜態に頭を抱えている暇はない。この結界を私が張っていると思いついたのだから、それを解いてしまえばいいだけの事。

結界を解除すると、すぐ目の前に治療室が見えた。私はわきめも振らず治療室まで直行した。

「乖離様!!」

治療室の扉を勢いよく開ける。するとそこには驚いた様子のイナバと呆れたような顔の永琳と、腕の治療が終わったのか、上半身がはだけた乖離様が背を向けた状態で左腕をグルグルと回していた。

「上半身裸の乖離様……だと?」

「あれ、輝夜?」

私に気付いたのか、乖離様はゆっくりと私の方へ振り返る。その際見える乖離様の身体は細身なのに程よく鍛えられた腹筋の割れ目と、マッチョでもなくヘタレでもない、言わば中間な感じの筋肉。

極めつけはそれらにとても似つかわしい顔立ちとアメジストのような紫眼。

「グハッ!」

一発?。o! 私は乖離様の整った肉体美を目の当たりにして、脳に血が上り血圧が上昇して鼻血を噴きあげた。

「我が生涯に一片の悔いなし!!」

それだけ言って、私は興奮した脳を抑える事が出来ずに意識を手放した。

「わっ! 乖離って凄い肉体美!!」

「えっと、ありがとう」

「うぐ、私まで鼻血が……!」

「頼むから輝夜よろしく気絶するなよ妹紅……」

## 二十三話 月と彼の過去

S i d e 乖離

永琳の治療のおかげで、使い物にならなかった左腕はまるで魔法を掛けられたようにすっかり元に戻った。痛みも無いし、副作用も特に無かったことから、彼女の技量の高さを再度確認できた。

月で暮らしていた時もそうだったが、彼女の医療に対する理解と解釈は現代を遥かに凌ぎ、数百年先の技術すら凌駕しているかもしれない。本来は医者ではなくあくまでも薬師なんだけどね。

俺がいうのもあれなのかもしれないが、彼女の脳の構造ってどうなっているんだろうか……いややっぱり知らなくていい！というか知りたくない。あの手の奴はそつとしておくのが一番だろう、無理に知ろうとした連中が無事であった事などどの歴史においても居ないのだから。

それはそうと、左腕が治ったと言ったが現在の俺はその左腕がまたも使えない状態にある。——それは何故って？輝夜がガツチリと左腕をホールドしてしまっているからである！

「……………ねえ輝夜」

「はい乖離様♡」

「そろそろ離してはくれまいか？」

「や〜です♪」

「デスヨネ〜」

輝夜は突然気絶したかと思ったが、流石は不老不死だ、数秒足らずで起き上がり現在の俺の状態を作り上げてしまったのだ。

その勢でかれこれ数十分はずっとこの調子だ。嫌という訳では無いが、折角左腕が戻ってきたというのにまたも使い物にならない状況

に陥ってしまったているのは残念でしかない。今回は一時的なものな  
んだらうけどね。

——それでも、俺は悪くないよね？だからさ妹紅さんや、そ  
んな殺意増し増しで睨まないでくださいお願いします怖いですはい。

「ハア〜」

ついついこの状況に呆れてタメ息を吐いてしまう。なんたつて俺  
がこんな損な立ち位置になってしまうのか。これではまるで月に住  
んでいた時の再現じゃないか、今回はサグメの代わりに妹紅が俺を睨  
む役になっているけどさ……………。

「ごめんなさい、資料の片付けに手間取ったわ」

そう言つて永琳は客間の襖を開けて入ってきた。その後を着いて  
来る制服姿の兎さん。どうやらあの莫大な量の資料はようやく片付  
いたみたいだ。

「さて乖離、もう少し寄ってくれるかしら？」

「え、あ、うん」

俺は永琳に言われた通り、少しスペースを開ける為に左に寄つた。  
無論輝夜も一緒に……………。

永琳は「よいしょつ」と言いながら、俺の右に座り、輝夜よろしく  
俺の右腕をガツチリとホールドしてきた……………。

「つて、オイイイイ!!」

「あら、どうかしたのかしら？急に大声を出して」

こやつ、しらばっくれてやがる。その証拠にいかにもわぎとよ、と  
言いたげな表情で見上げて来る。輝夜といい、何故二人はそうも俺に  
密着してくるのだろうか。それに加え、輝夜には悪いが永琳は中々に  
ナイスな体付きなので、大きく実った果実二つが二の腕を挟んでいる  
ので、全神経がそちらに集中してその感触を刻み付けようとしてい  
る。男の子だもん、仕方ないよねこれは……………本能みたいなものだよ  
キツト。

「オッホン！」

俺がこの状況にあたふたとしていると、それを見兼ねたのか妹紅が大きく一つ咳払いをして助け舟を出してくれた。

「いつまでバカやってんだよ、乖離が困ってるだろ！」

「困ってるんですか乖離様？」

「えっと、まあ……………」

「嬉しいくせに、照れちゃって」

永琳うるさい。あんたに至って確信犯だろう……………輝夜は条件反射みたいなものだけだ。

それはともかくとして、このままこの状況というのも何分芳しくないので、俺は能力を使って妹紅の隣に転移した。

転移したことによって、両腕にあつた重い感覚は消え、一気に軽くなった。

「うわっ！乖離が急に私の隣に！」

妹紅の驚きも分からなくもないが、出来る事ならこういうものだと受け入れて欲しいな。それと、少し離れたからと言ってそんなに悲しそうな顔しないでほしいんだけどなあ二人共……………特に輝夜！

「えっと、役者は揃ったし何が聞きたいの二人共？」

俺はそう言っただけで妹紅と座らずと立ちっぱなしの優曇華ちゃんを交互に見た。因みに優曇華ちゃんからはこの呼び方にOKを貰っている、治療中に。

まあそれはいいとして、妹紅と優曇華ちゃんが俺と輝夜に永琳の關係について知りたいと先程言っただけでどうして客間で待っていた訳なのだが、はてさて一体どんな質問が飛んでくるかな？

「じゃあまず私が、乖離と輝夜ってどういう關係なの？」

「主従じゃないかしら？」

首を傾げながら何かを思案するように永琳が呟く。

「友達じゃないかな？」

俺も永琳同様首を傾げて思い浮かんだ關係を呟く。おそらく俺の思い浮かんだ關係が一番無難なものだと思うが———輝夜はそうでもないらしい。

「夫婦♡……………キヤツ！恥ずかしい♪」

うん、絶対言うと思った。輝夜が俺との関係を誰かに聞かれた際夫婦と答えなかった事は一度もないからな。それに輝夜の発言の勢で妹紅の目が点になってしまい、優曇華ちゃんは耳がビクンツと立ってしまった……………仕方ないのでフォローに入るとしよう。

「妹紅、俺と輝夜は夫婦じゃないからね？友達だからね」

「そんな！ヒドイです乖離様……………私の初めてまで捧げたのに」

「ややこしくなる事言うな！だいたいお前の初めてなんて貰ってないから！貰ったのお前の初めての手料理だからな！」

本当に、輝夜は状況をややこしくするのが好きらしい。本人は多分否定するだろうが、現に今起こっている状況は輝夜の勢だ。こういった事に限れば、多分紫以上に面倒なことになるかもしれない。あいつもあいつでうるさいけど……………。

「乖離と、輝夜が……………夫婦」

妹紅はハイライトを失くした瞳で上記のセリフをブツブツと呟き始めた。……………ダメだこりや、この状態に入ればもうヤンデレ待った無しだろうな、俺終わりじゃん。そもそも何故妹紅がヤンデレになる必要があるんだと、ツツコミを入れたいがね。

「妹紅く帰ってこーい」

妹紅の目の前で手を振ってみるが、反応が無い。これは本格的にヤバイかも……………と、思ったが案外そうでもないらしい。

妹紅は頭を振って正気を取り戻した。

「悪い悪い、脳内妄想で百回程輝夜殺してたわ！アハハハ」

そういつて妹紅は豪快に笑った。それにしても妄想の中ではないえ、輝夜を百回も殺したんだね……………不老不死なのに。

とはいえ、妹紅も戻って来たことだし、次の質問はどんなものになるだろうか。

「次、私が聞いてもいい？」

「どうぞ」

次は優曇華ちゃんのような。彼女は月の玉兔、俺と輝夜達の関係は現地人である者としてやはり興味があるようだ。

「師匠に見せてもらった写真の中に、姫様と師匠を始め、サグメ様や綿月様達にあなたが写っていたけど、あのお三方とも知り合いなの？」  
写真というとおそらくそれは俺が月に滞在した最後の年に撮った集合写真だろう。なるほど、アレはまだ永琳が持っていたのか。懐かしいといえは懐かしいが、俺の感覚ではたった数年前の事なんだよなあ。

あの三人との関係は……大したものではないと思う。ぶつちやけて言うなら、サグメとは愚痴仲間、豊姫とは将棋仲間、依姫は俺のストレス発散台……こんなものじゃないだろうか。

神妙な表情で答えを待つ優曇華ちゃんに、俺は上記のものを踏まえで答えた。

「彼女らは輝夜や永琳同様俺の友達……だと思ってるよ」

「なんだか煮え切らない答えね」

それは仕方ない。だって友達だと思っているのは俺であって彼女らではないからね。本人達に訊けば関係はハッキリしそうだが、今はその手段がないのでどうすることもできない……。

「じゃあ、あの中に本命はいるの？」

「……………は？」

ふと、優曇華ちゃんから投げかけられた問いに間拔けた返事を返してしまう。本命……ちよつと待つて欲しい、それってどういう意味での本命なのだろうか。それに、その『本命』という問いを耳にしたであろう俺と優曇華ちゃん以外の三人の視線が鋭く俺に刺さっている気がするのだが……………。

「その本命っていうのはどういう意味かな？」

「愚問よ乖離、そんなもの私と言っておけば万事解決よ」

「ちよつと！何意味解らない事言ってるの永琳、本命は私に決まってるでしょー！」



「いつ決まったのかしら？何時何分何秒地球が何周した時よ」

「小学生かつ!!」

主従で急に口論が始まってしまった。

こうなってしまうばなかなか止めないんだよな。この二人は……。永琳も輝夜ももう大人なんだからもう少し自重して欲しいんだけど。

二人の言い合いを呆れて傍観していると、妹紅がそっと俺に耳打ちしてきた。

「ここは私を本命って言って終結させとけば？」

「無茶だろ……そんな事言った次の日には監禁されかねんし」

うん、マジでこの二人ならやり兼ねないよね……。特に輝夜に監禁なんかされたら能力の関係上一生牢屋から出られそうにないな。ま、そんなもん俺の能力の前では大して問題では無いんですけどね。

俺がちよつとした予想をしていると、未だに口論を続けている二人を見兼ねたのか、優曇華ちゃんは二人の中に割って入っていった。

「お二人共そこまでです。これ以上の醜態は永遠亭の尊厳に関わりませんよ」

「だって、永琳が!」

「輝夜が!」

「ハア?!」

「お前らちよつと黙れ」

「はい……」

優曇華ちゃんの忠告にも懲りず、尚も口論を始めようとした二人に少し威圧的に注意を促す。するとまるで叱られた後の子犬のように静まり返ってしまった。しかしこれはこれでうるさくないので結果オーライだ。

「優曇華ちゃん、残念ながらあの中に俺の本命はいないよ」

「そう、分かったわ」

俺の答えに納得したのか、優曇華ちゃんはタメ息混じりに答えた。見るからにそうとう二人の口論に頭を抱えていたようである。先程まで立っていた耳も萎れてしまっているし。

さてと、それはそうと俺も一つ優曇華ちゃんに聞いておきたい事があるんだったのを思い出した。

「君は月からどうやって……………いや、どうしてこの地上に来たんだ優曇華ちゃん」

「えっ、そ、それは……………」

俺の問いかけに、優曇華ちゃんは戸惑いながら口籠る。どうやら何か訳アリのようだが、これは俺にとってとても大事な事である為、再度問いかけた。

「威圧的になってしまったらすまないが、君に答えてもらわなければ困ることがある。……………教えてくれ優曇華ちゃん」

再度の問いかけにも、優曇華ちゃんは何も言わず俯いたままだ。これでは彼女がこの地上にやって来た真意を聞くことが出来ない……………。しかし、それではどうしても俺には困る事があるのだ。彼女が月の玉兎ではなく別の存在であるのならここまで問い質すような真似はしなくても済んだのが、如何せん彼女が月の関係者であるならば仕方ない。

今も尚俯いた状態の優曇華ちゃんを見兼ねて、そつと彼女の頭を永琳が撫でた。

「乖離、あなたが心配しているのはおそらくあの時の『条約』の事でしよう？それなら心配無いわ、この子はあの件を知らないから」

知らない……………永琳はそう言って優曇華ちゃんを庇うが、そんなものはどうでもいいし関係無いことだ。俺は優曇華ちゃん経由で地上にふざけた真似をしようとしていないかと、月の重鎮共の動向を心配しているのだから。

「なあ、こんな時に聞くのもあれなんだけどさ……………急にどうしたんだ乖離？表情硬くないか？それに、条約って一体なんなんだ？」

「……………妹紅、あなたは乖離様が本気でキレた姿を見た事がある？」

「え、いや無い……………けど。それとこれと何か関係があるのか？」

「まずは、そこからかしらね……………」

乖離の問いかけによって優曇華は過去のトラウマを思い出してしまった。一見乖離が悪いように見えるかもしれないけど、乖離にも乖離の問題というものがある。あの件に関してというなら尚更よね。

さて、それはそうと、先程の妹紅の言葉はナイスだったかもしれないわね。乖離と月の『条約』……………これを一から優曇華に教えればきつと誤解を生まず優曇華の事を教えられるかもしれない。

まあ問題は、それで乖離が納得すかという事なんだけれどね。

「乖離、あの時の話を優曇華にしてもいいかしら？」

「ん？まあいいんじゃないかな……………それで誤解無く問題解決って事が運ばばいい訳だし」

乖離からの許可は得た。ならばまずはあの日の会議で起こった事を話すべきね。

「妹紅、優曇華、ここから先の話は他言無用よ？」

「は、はい」

「わ、分かった」

二人は一層緊張を増したように、顔を強張らせた。そこまで畏まる必要はないのだけれど、まあこのくらいが良いのかしらね？

「そうね、まずは乖離と輝夜……………そして私達の出会いから話していきましようか。……………そう、あれは千年とちよつと前の話よ」

「あ、その前に長くなるからお茶準備するわね？」

「「早よせい！」」

※※※

それは今は遙か、千年と数十年前の月でのこと……。

## 二十四話 月と彼の過去その②

S i d e 思兼（永琳）

【千年前の月の都】

今日は月一で行われる月の都の重鎮達がほぼ全員集まって開かれる会議がある。本来は年一で行われていた筈のものだったが、最近地上が慌ただしくなってきたというのが理由で順度が早まった。私にしてみれば一月など寝て覚めるほんの些細な感覚でしかないけど、こう何度もあると少し面倒くさいと感じてしまう。幾星霜と生きて来た私が言うのは皮肉なんでしょうけどね。

まあ、私はこれでも『月の頭脳』と言われ称えられているのだから、毎度の様に会議には出席しているのだけれど……。それでも大した変化も捻りも無い報告ばかりで、退屈でしかないのだけれどね。

会議ということもあつて、私は普段着ている赤青の服ではなく赤青の式服を着こむ。その際いつも被っている帽子も外す。この恰好は裾が纏れるからあまり好きではないんだけど、仕来たりであるからどうしようもない。

「八意様、お時間です」

「ええ、直ぐに行くわ。……………姫様は？」

「既に外でお待ちです」

私は外の付き人にそう、とだけ答え三つ編みにしている髪を解く。準備はまあこんなものでもいいでしょう。いちいちあーだのこーだのと言われることもないでしょうしね。

自室を出て、外に出るといつもとは変わった和服姿の姫様が宙を見上げながら待っていてくださった。

私が来たことに気付いた姫様は、そっと振り返りイタズラな笑みを浮かべていた。

「姫様、お待たせ致しました」

「思兼、今日は随分と遅くないかしら？」

「申し訳ありません、いつもの事ですので気が抜けておりました」

「そう……………じゃあ行きましようか」

「はい」

私は小さく一礼をして、姫様の後を続いて歩いた。……………こうして接している、やはり姫様は私が仕えるに足るお方だと再確認できる。その佇まいと気品あふれる態度から……………ね。

会議室前では既に多くの兵が警護として集まっていた。毎度思うんだけど、ここまで嚴重に警備する必要があるのかしらね。仮にも私が会議に出席するのだから、余分な労力としか思えない。そこんところは頭の固い連中の差し金なんでしょうけど……………。

「八意様……………輝夜」

不意に、私と姫様の名を呼ぶ声が聞こえた。本来ならば姫様を名指しで呼ぶなど不敬もいいとこだけれど、声色から察するに彼女ならば問題もないでしょう。

「あらサグ姉、珍しいわね。サグ姉が会議に出席するなんて」

「……………そうではない」

美しい白い片翼がトレードマークの天津神、稀神サグメは少し顔を赤くして否定の言葉を紡ぐが、照れ隠しなのはバレバレ。おそらく久しぶりに妹分の姫様とサグメ自身の上司に当たる私に遭えると思っただから参加したのでしようね。それに、その『そうではない』という口癖も出てる時点で凶星を突けるのよねこの娘は……………。

それでもまあ、姫様もサグメに久しぶりに会えて嬉しそうですし突っ込まないほうが良さそうね。

「姫様、サグメ、立ち話もなんだし入りましようか」

「そうね」

「はい……………」

そう言っつて、二人は我先にへと会議室の扉を開けて入っていった。……………子供じゃあるまいしあんまり燥いでほしくはないのだけれどね。

私は二人の行動にやれやれと首を振って後に続いた。

会議室の中には既に多くの重鎮達が集まっていた。これほどまでに多くの重鎮達が集まるのは珍しいことだけれど、今日はいつものどうでもよさそうな報告会じゃないのかしらね。……派閥の違う重鎮まで多く集まっているみたいだし、今日は本当に何かありそう。

私はそんな事を思いながら、用意された席に着く。勿論その隣には姫様とサグメも一緒だけれど……。

——場の空気が一変する。それはいつもの事ながら、『月の帝』が現れたからである。

「陛下のおなりである。静粛に！」

帝直属の重鎮の一言で、先程まで少々騒がしかった重鎮達がピタリと私語を止めた。この光景も今や特に珍しいものではないけれど、やはり帝が現れると変わるものね。

私から見て前方の扉が開き、ゆっくりとした調子で帝が会議室に入ってきた。他の重鎮達は深く頭を下げ、無礼の無いよう心掛ける。これはある意味万国共通の仕来たりでしょうね。臣下が王に頭を垂れる、なんなら珍しくもないことね。

帝は用意されている玉座に座り、重鎮達に一声かける。

「面を上げよ」

威厳たつぷりのその言葉に、重鎮達はほぼ同時に下げていた頭を上げる。

これより、退屈な会議と報告が始まる。

※※※

「と、以上が今回の報告です」

「うむ、(苦勞)」

あれから二時間くらい経ったかしら、特に捻りもない報告がいくつか挙げられた。一応聞いてはいたけど、相変わらず下手な説明の仕方

だったわね。天才である私だから理解できたものの、隣の姫様は『何が何だって?』と言いたげな表情で首を傾げている。まずあんた達が調べるべきは語彙力ではないかしら?という本音はこの豊かな胸に仕舞っておくとしましょう。

「次の報告です……………」

「へえ……………」

次は誰かと思いきや、次の報告はサグメかららしいわ。あのサグメの報告という事だから、重鎮達も驚きどよめいているみたいね。滅多に人目に出ようとしない彼女が代表として報告を挙げるのだから、これは効く価値が大いにありそうね……………」

サグメは席を立ち、壇上上がり手持ちの資料を重鎮達に配り始めた。その際私も渡された資料を見て、疑問符を浮かべてしまう。

その資料に記載されていたのは……………顔は見えない……………だけれど黒い外套を着こんだ男だった。

突然配られたその資料が指す意味は私にも唐突だから理解できない……………でも、何故かとても大事なものだという事は理解できた。

「サグメ殿、この資料は一体……………」

一人の重鎮が挙手をしてサグメに問いかける。その問いにサグメは小さく深呼吸をして……………答えた。

「執行者が現れました……………」

……………瞬間、会議室全体が凍り付いた……………。サグメの放った回答の答えが、とんでもない事実であるからだ。

「思兼、執行者って何?この資料に何か関係があるの?」

姫様は首を傾げながら私に問いかけて来る。その存在を姫様は知らないのだから。

「執行者とはですね……………」

曰く、星の代弁者



曰く、世界の守り人

曰く、抑止力の体現者

呼び方は様々だけれど、月の都ではその存在を執行者と呼んでいる。彼の者は非情なる救済者、神罰を告げる者、人ならざる人間、誰も救わない正義者、これらを総じて私達は『執行者』と呼んでいる。「ふうん、よく分からないわね」

一応私の知っている限りの簡単な執行者の説明を姫様に伝えただけけれど、イマイチ理解してもらえなかったわね……これからの課題かしら。

私がそんな事を思っている内に、サグメはさっさと事の説明を始めた。

「執行者が観測出来たのは前回地上に偵察部隊を派遣した時だそうです……。送られてきた情報によると、偵察部隊の一人を除き、他は全て皆殺しにされたと……」

前回というと、丁度先月あたりだったかしらね。……それまで報告が無かったということは、おそらくサグメ自身が独自でその情報の信憑性を確認していたからでしょうね。なるほど、それで一か月も研究室から出て来なかったのね。

「そして、皆さまにお配りした資料は……昨日の朝方のものです。急遽情報処理に追われており報告が遅くなった事をお許しください」

そうやってサグメは深々と頭を下げる。

そうこうしている内に、既に数人の重鎮達は慌て始めていた。彼らは『執行者』という存在に強い恐怖を感じているようね。……まあ無理もないでしょうね、なんせそんな存在は私達が月に移住して来る以前は存在していなかったのだから。

「サグメ様！その執行者は何者なのか判別出来たのですか?！」

一人の重鎮が冷静さを欠き慌てた様子でサグメに問いかける。すると降って湧くように次々にサグメに対して抗議の声が重鎮達から放たれた。

そんな中でもサグメは冷静さを損なわず、落ち着いた調子で重鎮達の問いに答えた。

「未だ判別には至っておりません。……が、ただいま究明中です。それに、生き残った者の情報によると、その者は常人では耐えられぬであろう穢れを宿していたとの報告も挙がっています……」

なるほどね、それならそう長くない時間で見つけ出す事は可能でしょうね。——でも、実際にはどれだけ見つけ出すのに時間が掛かるか分からないけど。

サグメの回答を受けた得た重鎮達は少なからず冷静さを取り戻した。そのお陰でようやく話上手く前に進みそうね。

「重鎮達が何であこまで動揺していたのか知らないけど、そんな奴思兼がやつつけてくれるわよね！」

唐突に、満面の笑みで姫様はそう私に言った。……それはあまりにも純粹で、優しさ溢れる笑みだったから、その時だけは私の時が止まった気がした。

「思兼?」

私が固まっていると、姫様は不思議そうに私の顔を覗き込んで来た。それに一瞬驚いてしまったけど、主君の前で醜態は晒せない。私は小さく息を吸い先程の姫様の期待に応える。

「はい……我が身は既にあなたと共にあります。……故にご心配無く、そのような輩は私が必ずや討ち果たしてみせます」

「フフ、ありがとう思兼」

瞬間——会議室に充満した巨大な力の奔流と共に、『その者』はそこに現れた。

※※※

月の都、そこは数億年以上前より移住してきた太古の地上の民が地上の穢れから逃れるために造り上げた月の裏側に位置する巨大都市。そのまた大きな王宮、その会議室で開かれた報告会に、今宵月史上最大の脅威が顕現せしめたのだ。

その者は、荒れ狂う力の奔流の中より蒼き粒子と共に姿を現した。黒い外套を身に纏い、対峙した者を射殺さんといわんばかりの紫眼を持っていた。

その一室に集まっていた者達は、一人残さず……例外無く絶句した。その者を前に誰一人としてその瞬間だけは、口を開くことを赦されなかった。それは例え、天津神たる稀神サグメであつても例外ではない。

その一室に現れた者は、誰が見ても幼かった。まだまだ童子感が抜けておらず、背丈恰好は少しだけ大人びていたが、顔は明らかに少年そのものだった。——しかし、その少年の放つ気配は歳不相応の強大な存在感と威圧感があつた。

少年は、会議室に集まった月の民の重鎮達を見渡し拝見するや否や、小さく……息を吐いた。それはあまりにも退屈そうに、そしてつまらなそうに、嫌悪感を隠そうともせず、呟いた。「みすばらしい場所だな、月は……息が詰まりそうだ」

そう呟いたことで、ようやく月の民たちはその場の緊張が切れた。——だが、恐ろしい事にその緊張が切れるその瞬間まで、月の民たちは息をするのも忘れていたほどであつたのだから。

ようやく緊張から解き放たれた者達は真つ先に、手元に配られていた資料を見て、眼前の少年と見比べる。するとどうだろう、背丈恰好に体格までもが一致しているのが分かった。加えて、現れた瞬間の強大なまでの力の奔流を目の当たりにすれば、疑う者など居はしなかつた。目の前の少年こそが、彼らが恐れていた『執行者』だという事を……。

重鎮達は彼が執行者であると分かると、すぐさま外の警備隊を招集した。

大きな音を立て開かれた扉から数名の警備隊が彼を取り囲む。だというのに、執行者たる少年は警備隊に対して何の興味も抱いていない様子で一方に目を向けた。

少年は、鋭い視線を帝に向ける。殺気は含まれていない、かといって敵意も無い。だというのに彼の瞳に写った月の帝は、恐怖に顔色を染めた。それを見て、彼は誰も気付かないほどに小さく鼻で嗤った。

「おい、ここにかぐや姫とやらはいるのか？……答えろ」

それは余りにも不敬で、礼儀知らずの問いかけであった。月の重鎮達も少年に向かってあれやこれやと叫んだが、彼は鬱陶しそうに周りの重鎮達を睨みつけ、こう言い放った。

「うるさい黙れ。俺はかぐや姫とやらはここに居るのかと聞いたただけだ、それ以外の回答など求めていない」

その言葉を聞いた重鎮達は、一人残らず黙り込んでしまった。彼の放った言葉は確かな敵意と殺意が含まれていたのだから。『余計な口を開くのならば殺す』という意味合いが含まれている。

だがそれを知ってか知らずか、一人の姫が額に青筋を浮かべて立ち上がった。

「私がかぐや姫よ！それと、失せなさい、私はあなたのような底辺の間を相手にしている暇はないの」

事もあろうに、輝夜は自らをかぐや姫と名乗り執行者である彼に啖呵を切ってみせたのだ。その行動には多くの重鎮達も驚きの表情で固まってしまった。

なんと恐れ知らずなのか……

なんと無知であるのか……

しかし、それを聞いた執行者は苛立ち睨む訳でもなく、殺意を向ける訳でもなく、ただただつまらなさそうに視線を輝夜に向けた。――

――瞬間、突如として彼は輝夜の目の前に現れた。

彼と輝夜との距離は最低でも十数メートルはあった。だというのに、それはまるでその瞬間だけ時が止まっていたかのように、彼は

ノーモーションで輝夜との距離を縮めてしまったのだ。

これで何度目の驚愕だろうか、その場に居た誰もが執行者の少年の取った行動に驚愕を禁じえなかった。瞬間移動——それはこの月の都ではさして珍しいものではない。だが、それを何の動作も無く瞬間移動を可能にするなど、ありえないと思ってしまうのは必然であつただろう。

そのノーモーションの瞬間移動を実演してみせた執行者は、目の前で驚愕に表情を染めてしまっている輝夜を一目見て、嘲笑するように鼻で嗤つた。

「かぐや姫、絶世の美貌を持つとは聞いていたが……なるほど、確かに美しいものだ。——下らん、これではただただ美しいだけだ、中身がまるで空っぽだ。こんな美しさになど価値は無い。……言うなればまるで、はりぼてだな」

それは余りにも興味無さげに、それでいてとても不愉快そうに彼は告げた。それを聞いたかぐや姫が冷凍されたかのように固まってしまっている事すら関係無さそうに……。

彼がかぐや姫に興を無くし、その場から離れようとしたその瞬間——彼は自身に飛来する霊力の矢を感じ取り、回避をしようとして腹部に強い衝撃が走った。

数メートルほど地面を削り、腹部に喰らった何かを確認しようとして衝撃が走った方を見る。そこには片足を少し浮かした態勢で、強い殺意と怒気を含んだ目で彼を睨む八意思兼の姿があつた。

彼女の放った蹴りは、決して弱くはない。並の人間や妖怪なら今の一撃で上半身と下半身が分かたれてしまうであろう威力を誇っていた。だが、それを受けた執行者は顔色一つ変えず何事も無かつたように腹部の埃を払っていた。

その仕草を見て、思兼は自身の放った蹴りが執行者に対してダメージを与えられていない事を瞬時に察知。この者はおそらく自身と同等レベルの強さがあると認識する。

痛みは無い。ダメージも無い。だが……彼は確かに蹴り飛ばされた。それがたった数メートル地面を削っただけの物であったとしても、彼は先程蹴り飛ばされたのだ。

彼は考える、『蹴り飛ばされたのは一体いつ以来だろう……』と。

これまで戦ってきた者達の中に、揺動を掛けられたとはいえ受け身もとれず不覚にも直撃を赦してしまった者がどれだけいただろうか……。そんな考えを執行者である彼はしていた。

そんなものに意味は無いと理解していても、彼はその思考を止めることが出来なかった。何せ、今彼の目の前にいる者は紛れも無く強者と呼べるべき存在であったのだから。

執行者は確信する、この者は己が戦ってきた者達の中でも五本の指に入る可能性を秘めている……と。

子供だ。まるでゲームを楽しむ子供のように、少年の口角は自然と吊り上がっていた。久しく出会った強者との対峙に、彼は無意識の内に歓喜していた。

『この女ならば、アレを使わせてくれるかもしれない』

そう心の中で思った矢先、執行者に急接近する者在り。

即座に接近して来る者を迎え撃とうと振り向く。彼の目に留まったのは既に攻撃のモーションに入り、後は放つだけの状態の天津神・稀神サグメの姿があった。

サグメは足に膨大な神力を集中させ、敵を屠り去るべく渾身の蹴りを構え突貫する。その速度たるや、まるで砲弾の如し。

一秒にも満たない早さで二人の距離は縮まった。サグメは敵を打ち碎かんと必殺の蹴りを放つ。対する執行者は放たれた蹴りを躲す事を考えたが、現状ではそれは叶わないと瞬時に感知。回避は不可能、狙いは必中。であれば、彼には正面から迎撃する他無い。

——それは、あまりにも美しかったから、必殺の蹴りを放つサグメを含めその場の誰もが一瞬意識をソレへと集中させてしまった。執行者は放たれた蹴りを目の当たりにして、その蹴りが自身に届くよりも疾く、生命脈打つ六色六枚の羽根を展開する。ソレはあまりにも綺麗で、美しく、見目麗しいオーラを放つ羽根だった。これは生命の脈動。月には存在しえない神秘の賛歌である。命になぞらえる六色の輝きである。

サグメの放った蹴りは、この六枚の羽根と激突した。瞬間現れる強大な衝撃波と暴風。荒れ狂う嵐の如く、その場を支配する豪風と衝撃波は、会議室に集められた資料や紙をあらん限りに撒き散らし、強固な結界が張られていた室内の壁を容易く砕く程であった。

誰もが刮目する。その場で起きた天津神と執行者の衝突を。そして理解する、この場において八意思兼と稀神サグメ、執行者の少年以外は単なる有象無象に過ぎないという事実を。

これが、月史上最大と謳われる戦争の始まりであつたということ。——その場に居た誰もが、その身と心に深く刻み付けたのだ。

※※※

「というのが、始まりよ」

「凄っ!!」

「前置き長いよ」

「その辺は、突っ込まない方向で……」

## 二十五話 月と彼の過去その③

S i d e 思兼

会議室を支配する強風と衝撃。ソレは安易に結界の張られた壁を破壊していく。

サグメの放った蹴りと、執行者が展開した羽根のような六枚の盾が衝突しそこから発生した力の奔流が逃げ場を失い辺り一面に飛び交っていく。

バチン！と、何かが弾けたような音と共に、サグメは私の隣に吹き飛んできた。

敵意と殺意を宿した瞳は健在。サグメは肩の埃を払うように立ち上がる。しかし、視線は真っ直ぐ砕けた地面と砂煙で囲まれた壇上に向いている。おそらく今の一撃で仕留められなかったようね。

「……………」

サグメは無言のままジツと壇上を睨み続ける。すると、舞い上がった砂煙の中からその者は五体満足で現れた。

「…………驚いたな、たかだか天津神風情にこれほどまでの神力が宿つていようとは。…………お前のソレは、八百万の域を超えている」

称賛か、それとも挑発か、どちらにせよ執行者の男は口元に小さな笑みを浮かべていた。その執行者の取った態度に怒りを覚えたのか、サグメは強い口調で否定した。

「ふざけるな……………私などあの方々には遠く及ばない。比べることすらおこがましい」

「……………そうか」

まただ。また執行者は興が削がれたような、つまらなそうな表情になった。

「警護隊！行けー!!」

突如、一人の重鎮の叫び声と共に会議室の外で待機していた警護部隊が入って来た。連携は取れている。その証拠に、瞬く間に警護部隊



は執行者の男を取り囲んだ。

「大人しくしろ！貴様は完全に包囲されている!!」

警護部隊の隊長格である一匹の玉兎が警告を促す。その警告と共に、部隊の全員が気を引き締めるように半歩摺り足を取る。

足りない。どう考えてもこの戦力では圧倒的に足りない。彼らは私に言わせれば雑魚も同然だけれど、個々の強さは平均以上であることは間違いない。月の部隊でも十分上位に入れる者達であることは変わらない。

しかしだ、彼らが敵としてとっている相手は規格外の化け物。洗練された兵たちといえども、彼の執行者が相手ならば羽虫も同然だ。

その証拠に、執行者も彼らに対して何の興味も抱いていないようだしね。視線は途切れる事無く、私とサグメに向いている。

「…………茶番なら他所でやれ。虫けらが立ち入って良い領域ではない」

上記の言葉は、意外にも執行者の言葉では無い。それはサグメから発せられた言葉だった。

それを聞いた隊長格の玉兎はサグメに抗議した。

「し、しかしサグメ様、この者は我々が…………!」

「お前たち程度で勝てる相手ではない。…………下がれ」

圧を掛けるように、サグメは非情にも彼らを突き放した。だが、サグメの判断は正しいと言える。確かにアレを相手取るには警護部隊程度では無力でしかない。無駄に死体を増やさないためには私達が出るしかないのだから。

「あなた達は月の守護神達を要請しなさい。アレは私達でないと対処は不可能よ」

「り、了解しました…………」

そう言って、執行者を包囲していた部隊はゆっくりとその場から離れ、急いで月の各地へ散っていった。

「相談は済んだか？」

「ええ、待たせて悪かったわね」

私は髪を三つ編み状に結び、気を引き締める。恰好が戦闘服ではな  
いけれど、今は我が儘を言ってられない。一刻も早く、この無法者を  
排除しなくてはならない。

サグメは既に臨戦態勢、あり余る神力を開放しいつでも戦いを始め  
られる状態に入っている。

私も全身に霊力を纏わせる。――瞬間、会議室が異様な音を立  
て地震の如く揺れ始めた。

霊力を体に纏わせるなんて、一体何時振りだつたかしらね。基本的  
に力をセーブして生きて来たから、こうして力を開放するのは何だか  
童心に戻った気分になる。その勢で、力の加減を誤って大気を震撼さ  
せちゃったりもするのだけれどね。

私とサグメはもういつでも始められる状態に至った。方や執行者  
は未だに動きを見せない。力を開放する気が無いのか、それとも侮ら  
れているのか。……どちらにせよ決着は早い方が好ましい。

先に動いたのは、サグメだった。ゆっくりと歩きながらサグメは執  
行者に接近していく。その立ち振る舞いは貴人の如く、優雅なもので  
あった。

二人に距離は腕を伸ばせば届くほどに縮まった。サグメはそつと  
執行者の胸に手を添えてゆっくりと瞼を閉じた。あの構えはおそら  
くサグメが最も得意とする格闘術の一つ、【秦画】でしようね。あの状  
態から相手の先手を誘い、カウンターを狙う技法。アレは私でも真似  
られないサグメ独自の技。

ただ解せないのは、それを知ってか知らずか、執行者は何の動きも  
取ろうとしない。アレではカウンターが狙えない。

「その構え、古代中国に存在したとされる護身術に似ているな……。  
だが、お前のソレは……ああ、なるほどな。それが原点ということ  
か」

「御託はいい………来い」

執行者は、ほんの一瞬だけ指を動かした。それに大した意味があった訳ではないのだろうけど、それが過ちとも言えることには変わり無い。

一瞬——時間にして0, 1秒の僅かな動き。これをサグメは見逃さなかった。

「愚行だ……」

サグメは冷たい口調で、それでいて強く力の籠った声で告げる。

吹き荒れる神力は執行者の胸に添えられている手に収束していく。放つは不可避の拳、仕留める為ではなく相手を怯ませるサブアサル  
ト。

「ハッー」

一喝。サグメは張り上げた声と共に拳を強く握り執行者に突き刺した。神力の籠った鋭利な一撃は執行者を貫通した。

余波として生じた衝撃波は真っ直ぐ壁にぶつかり深く抉り込んでいた。アレはあくまでも隙を作る為の技ではあるけれど、サグメが放つと一撃で必殺たりうるモノとなる。

体制を崩すように、執行者は前のめりに倒れそうになるもサグメはその程度では許さない。既に神力を足に集中させ、後ろ廻し蹴りを倒れ込む執行者の腹に直撃させた。

落雷でも落ちたのかと思わせる程の轟音と共に、執行者は蹴り飛ばされ壁を突き破って外に弾き出された。あれをまともに喰らったのだから、相当なダメージになったでしょうけど、何故かサグメの顔色は優れないままだった。

「サグメ……」

私はサグメに声を掛ける。しかし返答は無い。ジツと執行者が飛んで行った方向、突き破られた壁を睨みながら更に神力を開放し始めた。

「八意様……」

「何？」

「万全装備にお着替えください」

それは予想外にも、私に本気を出せという意味を含んだ言葉だっ

た。

「サグメ……………？」

「あの瞬間、あの執行者めにやられました……………」

そう言っつてサグメは執行者を蹴り飛ばした方の足を私に見せた。

——絶句、それはあまりにも理解しがたい光景だった。蹴り飛ばした方の足が足首から切断されていたのだから。

「この程度の負傷ならば数分で完治しますが、問題はそこではありません」

曰く、不可能な体制からの反撃。

曰く、反撃をノーモーションで行った。

曰く、ソレは理解の及ばない何か。

サグメの体験と憶測が正しければ、確かにそれは私が全力を出す必要があるものなのでしょうね。あの状態からの反撃なんて、現状この月には私以外存在しない。しかもそれがサグメの攻撃に対する反撃ともあれば尚更だ。

「分かったわ……………私も本気でアレの対処に専念するわ」

「では、私は先に奴を……………」

そう言っつて、サグメは執行者が飛んで行った方向に飛んで行った。

月の都に土足で踏み込んだその愚行、私の手で直々に後悔させてやる。

※※※

執行者は現在、月の都から少し離れた場所、大結界外から青く写る神秘の星を眺めている。——地球、それはあらゆる神秘を生み出してきた生命の源泉であり、母なる巨像である。月として例外でなく、あの星から生まれた物でもある。

月より写る地球を眺めながら、執行者は蹴られた腹部を擦る。今度ばかりは痛みはある。ダメージも十分に。だが、ソレらはまるで初めから無かったかのように消えている。

「やれやれ、少し油断が過ぎたか？強者を殺すはあらゆる武具に非ず、慢心に他ならないとはよく言ったものだ。……ま、俺は強者でもなんでもないのだがな」

己の未熟を恥じているのか、それとも嘲笑しているのか、執行者は他者から見ればどちらにもとれるような笑みを浮かべていた。それもまた一興と言わんばかりに。

笑っていた表情は、再度その目に写った地球とともに掻き消えた。

彼は、手を伸ばす——

届くはずのない遥かな星に、還るべき愛しき地球に、執行者たる少年は無い物ねだりをする子供のようには手を伸ばす。帰りたい……：……そう思いながらに。

伸ばした手を、ゆっくりと下ろす。

その変わりに、彼は自身の背後に立つ者に語り掛ける。

「お前たち月の連中には、あの星が穢れているように見えるのか？」

「あの星だけでは無い……。穢れているのはお前たち地上の民も同じだ」

執行者は呆れたように息を吐き、自身の背後に立つ者・稀神サグメに再度対峙する。

「それはどういう意味で穢れと口にしてているかは知らんが、その本質は理解できているのか？」

「……愚問、命の穢れ、悪意の穢れ、魔性の穢れ、それらを総じて穢れと言える。あの星にはソレが溢れすぎている」

——それは怒り。

——それは幻滅。

——それは憤り。

上記の感情を含め、サグメは告げる。それが月の見解であると言わんばかりに、強く、そして冷たく告げる。

それを聞いた執行者の目は、鋭くサグメを捉えていた。  
圧を掛ける訳でもなく、ただ、己が意を伝える為に少年は口を開いた。

「結局お前らはその穢れの意味を理解出来ていないのだな？」

それは突如として起きた現象。執行者を中心に巻き上がる赤き雷渦。けたたましく吠え上がる赤雷の渦は——その者の怒りを具現化したかのようなであった。

「——凶に乗るなよ、雑種風情が！」

ここに来て、初めて見せた執行者の激情。赤雷が彼の怒りの深さを物語るように荒れ狂い、辺り一面に降り注ぎ地を削る。それを目の当たりにしているサグメは、一歩だけ後ずさる。サグメは無意識の内に理解していたから、眼前の敵と自身との力量の差を……。

神の怒りは嵐を起こす。古くから存在するおとぎ話ではこう紡がれる。

しかし、それは間違いである。

嵐、俗にいう天災や災害の類は神の怒りに非ず。時には天災クラスの怒りをみせる神も居るだろう。しかしそれは決して、天災とは神の起こすモノでは無い。

——それは星の意思、地球そのものの怒りである。

星そのものが怒りを発した時、地上にはありとあらゆる天災が降り注がれる。それはここ、月であっても例外ではない。

彼の怒り、激情とはつまり——そういうことである。

「お前たちは世界の意思に反し、あまつさえ生命の宝庫たる地上を穢れと侮辱した。……その不敬は万死に値する！……死して悔いろ！愚かなる先人共!!」

執行者は空に手をかざす。かざした手に荒れ狂う赤雷は収縮して

いき一振りの刀が顕現する。それ刀は紫色の刀身とともに、まるで冷水で濡らしたかのような光沢を煌めかせていた。

少年は刀を握る。空にかざした手を刀とともに振り下ろす。

サグメは一步後ろに後退する。刀から発せられる凄まじき圧に、彼女の本能が大音量で危険シグナルを発していたのだから。

しかし、サグメは一步後退したのみで決して勝負を擲った訳では無い。その証拠に、サグメ自身も負けじと強大な神力を開放しはじめる。

サグメの中では、おそらく自身と執行者の実力は拮抗しているものだと解釈している。その証拠に、放たれる不可思議の力の奔流を自身の神力で弾き返しているのだから。

サグメは空に片翼をはばたかせ飛翔する。自身にとつて有利は距離まで移動するために。その動きに無駄は無く、瞬く間にサグメと執行者の距離は数百メートルまで広がった。

「この距離なら……」

瞬間——サグメの背後に顕現する無数の神力の矢。これらは全てサグメが作り上げた殲滅弾倉そのものである。一つ一つの威力でも安易に数百メートル先に立っている執行者を屠れるだけの威力はあるだろう。その矢をサグメは出し惜しむことなく全てを撃ちだそうとしている。

「確実に……殺す！」

殺意を隠すことなく、サグメは告げる……。

初弾が放たれる……。その弾速は安易に亜音速に到達し、一秒と掛からぬ内に執行者に被弾した。——筈であった。

射ち放たれた神力の矢は圧倒的な速度で執行者に接近していた。しかし彼はこともあろうに、手の甲で矢を弾き飛ばしてしまったのだ。

「二筋縄ではいかない……らしいわね。——ならば、これを防げるか？」

サグメは更なる神力を矢に籠め直す。今度は確実に、それでいてより手数を増やして敵を打ち砕く為に、残る矢全てを射出態勢に移行し

ていく。

全弾倉、圧倒的神力が込められた無数の矢をまるでガトリングガン  
の如く射出する。それはもはや矢の領域に非ず、一つ一つが神罰を体  
現した制裁のように、雨霰の如く撃ち込まれていく。

対する執行者は片足を下げ、迎撃の態勢に入る。刀を両手で掴む。  
すると、赤雷がまるでサークルを描くように、執行者を中心に回り始  
めた。

一閃——！それは鮮やかなまでの一閃であった。執行者が放つ  
た斬撃はノーモーションからの一撃。しかしそれは圧倒的な威力で  
迫りくる無数の矢を悉く切り裂いていった。それはまるで、海を切り  
裂く落雷のように、スツパリと全ての矢を切り裂いた。

その光景に、さしものサグメも絶句した。自分は一切加減などして  
いない、だということにこれはあまりにも安易ではないか。そう思わず  
にはいられなかった。それほどまでに、サグメにとって衝撃的なまで  
の終着であったのだ。

その結末を嘲笑うように、少年は……執行者は小さく嗤いながら  
サグメに接近していく。

「よもやと期待したが、お前ではやはりアレを使用するには能わない  
ようだ……。さて、断罪の刻だ。言い残す事はあるか？」

「加減はしていない……。私は本気でお前を殺すつもりで攻撃を仕掛け  
た」

「……………」

「なるほどな……。アレで足りないのであれば、私も神格を上げよう」

それが何を意味しているか、執行者は瞬時に察知した。サグメの告  
げた言葉、『神格を上げる』という事の意味を。

サグメは着ている上着を脱ぎ捨てて。その勢で隠れ蓑を失って露  
見してしまう両腕に刻まれた幾多の刻印。これらはサグメの全身に  
刻まれているものであり、彼女が忌み嫌っている穢れの象徴ともいえ  
る。

「あまりこれを晒したくはないがこうでもしなければ、お前と渡り合  
えそうにない。……………八意様、お赦してください！——『禍なる



邪神よ、この身を呪え』」

サグメの宣言と共に、邪悪なる神力がサグメに集まって行く。その量は、先刻のサグメを遥かに上回っており、天津神といえど到底抑えきれぬ強さではなかった。

だが、執行者は面食らう。圧倒的なまでの邪気を含んだ神力はサグメ本来の神力と同化を始めたのだ。

サグメはまるで、怨念の炎で全身を焼かれているかのような痛みを感じていた。圧倒的なまでの邪悪の神力の制御が出来ず、その悪性により、まれそうであった。——しかし、彼女には為さねばならぬ使命があった。『月を守護』するという、大きな使命が。……それが推進力となったのか、邪悪なる神力は徐々にサグメと一体化し始めた。

——反転、それは月では赦されざるもの。

——反転、それは地上の神々の墮天そのもの。

サグメの全身は無数の刻印で刻まれ、美しき白翼も禍々しい黒に染まり、紅の瞳は黒混じりの青に変色していた。

「なるほど、それが本来のお前の姿という訳か……」

「そうではない……と、言えないのがなんとも心苦しい。このような穢れた姿、本来なら嫌悪し憎悪すべきものである筈なのだがな」

サグメは淡々と告げる。彼女はかつて、この姿で一度月の都を半壊までに追いやっている。その時は八意思兼によつてなんとか鎮圧された。そしてそれ以降サグメはこの力を忌み嫌い封じて来た。

だが、それも今日で終わり。サグメは自身の全てを出し尽くしてでも、眼前の執行者を消し去るべく邪神の力を振るう。

そのサグメを見た執行者は……。

「前言撤回！使うとするか、『クラスターカード』！」

懐から取り出した一枚の赤いカードを掲げ、執行者は嗤う。

## 二十六話 月と彼の過去その④

Side サグメ

忌み嫌われし穢れの象徴、生命の淀みたる邪神の力を開放したのはいつ以来だっただろうか。

前回使用した時は八意様が止めてくださったからよかったものの、月の都を半壊させてしまう程に暴走してしまったトラウマがある。あれ以降邪神の力は封印して来た。……もうあんな過ちは繰り返さぬようにと。

しかし、今回は状況が状況だ。出し惜しみなどしては月の都を守ることが出来ない。

敵が敵なだけに、侮りや力の温存など考えて良いほど今回の敵は甘くない。下手をすると私や他の守護神達では敵わないかもしれない。果たすべき義務を果たせないなど、月の守護者であり天津神の名折れというものだ。伊達に数万年と月の守護を請け負っていないのだから、どんな手段を用いても勝たなければならない。

例えこの身が穢れによつて、汚染し尽くされてしまったとしても――

全身を駆け巡る重圧的な邪神の神力。それに伴う激流のような痛みと吐き気。

意思を強く保っていないと一瞬で意識が持つて行かれそうなほどの精神干渉力。かつてはこの痛み能耐えきれず、暴走してしまった。だが、今は思った以上に冷静だ。

今にも意識が弾け飛びそうなのに、私の中の何かがそれを強く繋ぎ止めている。自身でも驚くほどに、頭が澄んでいる。――怖くない。今見えている光景に、何の恐怖も感じない。自身がどうなってしまったのかは知らないし、どう変わってしまったのかも知らない。

だけれど、身体に流れる神力はこれまでに無いほどに強く脈動し渦

巻いている。その渦の中心に私の神力が集まり、融合を果たしているのが分かる。

視認できている光景はなんとも美しく、まるで世界が小さくなってしまったかのように自身の視野が広くなったのを理解できる。

「なるほど、それが本来の姿という訳か……」

「そうではない……と、言えないのがなんとも心苦しい。このような穢れた姿、本来なら嫌悪し憎悪する筈なのだがな」

私は淡々と告げる。もう痛みも引いているみたいだし、これなら存分に戦える筈。

尤も、今の私であれば先程の数倍の力を発揮できる筈だ。天津神でありながら邪神の神力を得たのだから、諸刃の剣であったとしても刺し違える程度であれば叶うだろう。

私は敵意と殺意を十分に含んだ眼光を執行者に突き付けた。

対する執行者は——笑っていた。

何に対する笑いかは分からないけど、その笑みは一切の不純を含んでおらず、寧ろ見た目相応年相応の笑みであった。実年齢は知らないけど……。

ただ、その笑みと同時に執行者の纏っていた空気が一変したのも事実だ。

執行者は懐から一枚の赤いカードのような物を取り出し、私に見せつけるかのようにかざした。

「前言撤回！使うとするか、『クラスターカード』」

——瞬間、紅き光の柱が私の目の前に顕現した。

それは執行者を？み込み、計り知れようのない膨大なエネルギーの奔流となって月全体に波動となって拡散しれいく。

とてつもない圧迫感に私は襲われる。……息が、出来ない。

目の前に造り上げられた光の紅柱から放たれる波動によって、私は数メートルほど地面を削りながら離されてしまう。踏ん張っておかなければおそらく数十メートルは引き離されていただろう。

未だにその輝きが衰えることのない光の柱は、これまでに感じた事

のない爆発的な生命エネルギーを感じる。——それは私達月の民が嫌う『穢れ』である筈なのに、その力からはその穢れすら感じなかった。

「これほどとは……………」

圧巻だ。例えようもないほどの圧巻。これほどまでの存在感を放つ者など私は八意様意外に知らない。——いや、もしかしたらあの方以上に……。そう思われるほどに、目の前のソレは圧倒的なものであった。

神々しく輝く紅き光の柱は、徐々に収縮を始め一塊の球体へと姿を変えた。

警戒してその球体を観察すること三秒——『その者』は霧散する粒子の如く弾けた紅き球体から姿を見せた。

現れたのは、白い礼装を身に纏った白髪紅眼の少年だった。

見た目が大きく変化しただけでは無いということくらい、私でも容易に理解できる……。その証拠に——勝利のイメージが、まるで沸かないのだ。

先程までとは明らかに違うその佇まい。そして執行者から放たれる空気の重さが断然違っており神の重圧をも凌ぐほどに、圧倒的な力量差を感じる。

執行者は小さく息を吐き口を開く。

「少し本気を出すか——がっかりさせるなよ？」

それだけ言い終えると、執行者は左手に先程持っていた紫の刀とは違い、赤い大剣を顕現させた。

「その……………剣はッ！」

瞬間、私の神経が凍り付いた。

ありえない……。何故——何故あの剣が執行者の手に有るのか！あの赤き大剣を見間違える神がこの世にいようものか。あれは……間違いなく最古の神々が造り上げた世界を終焉へと誘う『神造兵器』の一つ。

「『壊山剣・イガリマ』」

あの剣は本来月の都の最高意思決定者である『ツクヨミ』様が封じておられた神をも殺す剣。

一説には、あの剣は一振りで山脈を両断してみせるのだとか、神舞う天を裂く威力があるのだとか……。俗説は多々あれど、この世の神々において『神造兵器』は本来禁じられた宝具である。

それを何故、あの執行者が所持しているというのか……。

「それを……どこで手に入れた」

私は静かに問いかける。

「ある戦争での戦利品と、答えておこう」

戦争……。ここ数千年で『神造兵器』が使用された戦争など地上には無かった筈だ……。そもそも、そんなものを戦利品と出来る戦争といえればかなり限られてくるだろう。

となると、まさかとは思いが……。

「神話戦争……か？」

「……知っていたか」

まさかとは思ったが、そのまさかだったとは……。

『神話戦争』と言えば、一万七千年前に起きた地上での超大規模な戦争。人間と神々、魑魅魍魎悪鬼羅刹の類が三竦みで起こした星の主導権を巡った争い。私も深くは知らないが、その戦争で神々は禁断の至宝たる『神造兵器』七つ全てを導入したとか……。

なんにせよ、あの執行者にとつての切り札がイガリマという事だろう。初見で面食らったが、あの剣の特徴は私も理解している。

威力はあれどあれほどの大剣だ、そう易々と振る事など出来ないだろう。

私は小さく息を吐き、気合を入れなおす。姿形が変化し、内包している不可思議な力が膨大になろうと私のやる事など決まっている。

「行くぞ執行者……天津神の裁き、とくと受けるがいい!!」

翼をしならせ、突貫の構えを取る。

全身を駆け巡る膨大は神力は更に加速を始め、バチバチと稲妻の如く猛る。

突撃、それは砲弾のように。吹き荒れる豪風と共に私は勢いよく執行者めがけて突貫をかける。

間合いは一瞬で塞がれ、眼前には無防備な姿がある。

——完全に捉えた！

「ハアアアア!!」

咆哮と共に、蹴りの態勢に入る。

今放てるこの一撃であれば、最初に放ったものの数倍の威力はあるだろう。その威力をもつてすれば、執行者といえど屠ることは可能はずだ。

——故に、後悔して逝くがいい愚かな執行者！

回避は不可能、防御も間に合わないであろう私の蹴りが執行者の顔面に近づいたその時——一瞬にして執行者は私の前から消え、必殺の一撃が被弾することは無かった。

私の放った蹴りは執行者に被弾する事はなく、何も無い空へと放たれた。その際生じた凄まじい豪風は、地面を抉りつつ遙か遠くまで飛んで行った。

だが、今の私はそんな事を気にしている余裕は無く突如として消えた執行者を見つけることに躍起になっていた。

しかし、一体どうやって今の一撃を回避したというのか……。あの状況で躲すことも防御することも不可能はずだ。……例えば八意様であってもあの状況からの回避や防御は不可能に近いだろうに……。

「一体……どこに？」

辺りに気配を配りながら、執行者の行方を搜索する。

「どこ見てるんだマヌケ……」

不意に背後から掛かる声。その声を聴いた瞬間、私は背後にレーザーを三発程撃ち込む。

少しの間が空き背後から聞こえる爆発音と爆風、それを背に受けながら私は振り返る。するとそこには何事も無かったかのように佇む執行者の姿があった。

「どうやってアレを躲した……」

「愚問だ。……転移したまでだ」

納得がいった。なるほど、そう言えばこの執行者はノーモーションからの転移が可能だった。それで私の蹴りを寸でのところで回避してみせたという事か。………忌々しいことだ。

私は再度神力を足に集中させる。

「またそれか？ 何度やっても結果は変わらんが……」

執行者は呆れたように口を開く。

言われるまでもないが、どうあれ私の蹴りが奴に届くことは無い。それは先程躲された原因を聞いて理解している。——ならば、初から当てなければいいだけの事だ。

『転移というものも、随分便利なのね』

私はそれだけ口にする、再度執行者に突貫する。

先程までとまったく同じ構図。このまま蹴り込めば転移で躲されるのは必定だ。——がしかし、布石は打った。

私は渾身の蹴りを放つ。それは先程と同威力の代物だ。一度にこれほどまでの神力を消費するのはかなりの負担があるが、今はそんな事を気にしてはいられない。

私の放った蹴りは、想像通り執行者に直撃した——筈だった。

………驚愕した。私の放った蹴りは回避された訳では無い。執行者の肘と膝に挟まれ、完全に威力を殺されてしまったのだ。

波打つ衝撃は四方に散らばり霧散する。地を削った筈の豪風は弾圧され沈黙。私は戸惑いと驚愕の中、為す術が無くなっていた。

「大技の直後には必ず隙が生じる。……同じ技を二度選んだお前の負けだ天津神」

瞬間、執行者は私の前から再度姿を消した。思考が巡るよりも早く、私は神力を背後に放出してその場から離れようとする。

しかし、時既に遅し。背中に走る猛烈な激痛を感じた。

「うっ!! あああああー!」

堪らず悲鳴が零れ落ちる。足を斬られた時以上の痛みが背中を無情にも駆け巡る。その痛みには耐えられず、膝を地に着けて悶える。

痛い、とんでもなく痛い——。これまで経験したことのない痛

みだ。焼ける、この身が焼けて、溶けて、ぐちゃぐちゃに零れ落ちそうだ！

「き、きき……ま……何をし……た？」

掠れた声で背後に佇む執行者に問いかける。その間も休むことなく続く激痛に、意識が奪われかける。

「この短刀には少し特別な毒を塗ってあってな、その毒に侵されるとほぼ確実に死に至る。本来神に対してこの程度の神秘纏わぬ雑具では傷つけることは出来ないがな」

そう言つて、執行者は赤黒い血で刀身が穢れた短刀を見せつける。その血が自身の物と理解するよりも早く、更なる激痛が全身を支配する。

「グッ——アアアアアアッ!!」

更なる絶叫。意識を手放そうにも異次元染みた激痛が途切れかけの意識を繋ぎなおす。

「この毒は『大蛇』と呼ばれる化け物の毒を加工したものでな？本来の数倍の毒性を持っている。ギリシヤに『ヒュドラ』という怪物がいるが、それと同等の毒性があるかもな」

執行者が何かを言っているようではあるが、全く耳に入ってこない。そんなものすら耳に入らぬ程に、私の身体は蝕まれている。

僅かだが、頬を伝う温もりを感じた。それが何なのかは理解できないが——そう、キット私はこの痛みに耐えられず泣いているのだろう。

「不憫なものだな、月の民とは……。なまじ生と死を否定しているが故、痛みによるショック死が出来ないのだからな」

また、何かが聞こえた気がした。そんな事を考えている余裕もなく、全身を侵し続ける激痛に私は無意識に、無様にも懇願する。この痛みから、この激痛から解放して欲しいと……。

「た、たす……け……て。——痛い……。痛いよう……」

意識が朦朧とする中、自分でも何を言っているのか分からないほどに救いを求め泣き続ける。きつと、こんな姿の私を見て執行者は嗤っているのだろう。だが、無限に続くとも思える痛みの中では手段など



選んでいる猶予もある筈が無い。

「たす……け……恥を知れ天津神っ！」……ツ！」

か細く、紡ごうとした救命の言葉は執行者の怒りによって断絶された。

だが、それが起源となったのか……私は拳に強く力を入れ、あらゆるの神力を開放して痛みを無くすように錯覚させる。

よろよると、朦朧した意識のまま立ち上がる。

錯覚させて痛みを中和させたとはいえ、完全に消せた訳では無い。あれほどもものだ、今でも全身に走る焼けるような痛みはある。それでも、私は再度執行者に向かい合う。

「醜態を……晒したわね」

「まったくだ。見るに堪えないとはこのことだ」

「死の前に……一ついいかしら？」

何故か、私はそんな事を聞いてしまった。

「……何だ」

以外にも、執行者は聞き返してきた。

「名を……聞かせて欲しい」

それに何の意味があるというのか。冷静に考えるまでもなくなんの意味もない。だというのに、私は執行者である彼の名を聞いたかった。冥土の土産つてとこなのかもしれない。

執行者は小さく息を吐きながらも私の方を向き、その真名を教えてください。

「氷鉋乖離だ……」

「氷鉋……乖離」

勝利を諦めた訳ではないけれど、現状この状態では勝ち目はない。

——だからせめて！

『あなたは……勝つでしょうね』

最後の言葉と振り絞る。

全神力を両手に手中させる。その瞬間に生じる強大な暴風と神力

の奔流。辺り一面を薙ぎ払うかの如く吹き荒れる風が、自身を侵し続ける毒の痛みを忘れさせてくれる。

これより放つは私に残った最後の技。これを放てば力の殆どを失いただの肉塊と成り果てるだろう。それでも、私はこの一撃を止める気はない。

「天津神たる稀神サグメが告げる」

その詠唱は速やかに。

「死は原に、生は極に果つる」

神の権威を招来させる。

「祖は地となり、真は天に上がる」

蒼き神力が全身を駆ける。

「示し穿つは是、この神秘なり！」

臨界に達した極限の神力は一点に収縮する。

「大地を清めよ【光ラ・アとなれ、神ジェルトの宿業】!!」

放つ極大の波動、全てを塵へと誘う神々の権能。

放たれた全力の一撃は、真つ直ぐ迷う事なく一直線に執行者へと突き進む。

だがそれと同時期に執行者が所持するイガリマが息吹を上げ、神代最大の力が振るわれる。

迫りくる私の【光となれ、神の宿業】を前に、執行者はイガリマを天に翳し唱える。

「神罰を告げる剣よ、唸れ」

イガリマはそれに呼応するように、絶大なる神力を放ち始める。

「天を裂き、地を抉る」

一点の曇りも無く、『神造兵器』はその本質を垣間見せる。

「山を砕き、祖に連なる厄災はここに顕現す」

圧倒的神力はギツチギチに収縮し詰め込まれていく。

赤き稲妻は大地を駆け走り、触れた岩石をバターの様に溶解させていく。

私と同じく、極限に達したイガリマは荒れ狂うオーラは静謐の如く

静まり返る。

——瞬間、時限爆弾を作動させたかのように放たれる凝縮された神力は、空間を抉りながらその神名を明かす。

「裁きを受けよ！【天と地を砕く神の剣】!!」

空間断絶を思わせる至高の斬撃は、迫りくる『光となれ、神の宿業』と激突する。強大に膨れ上がった二つの絶技は、空間を破壊しながら狂ったように踊り合う。

しかし、勝敗は決した。

私の放った究極を一撃はみるみる内に極大の斬撃に切り裂かれていった。例え究極の一を持ってしても、極限に達した一には届かないという証明であった。同じ一でも根本が違えばここまで差が生じてしまふのだろう。

一秒経つごとに迫る死の前に、何故か私は冷静であった。頭は澄んでおり、思考はいつも以上に落ち着いているのが分かる。

不思議と死への恐怖は無かった。寧ろ、これほどの存在に殺されるのであれば本望とさえ思える。死の間際に感じる時間の圧縮といったところだろうか……。

瞬きを一つ、無防備に行った。

瞼が開き、最初に目に入ったのは超高音で切り裂かれていく私の最後の一撃が映った。悔いは無いが、ああもあつさりと押し返されているのを見るとなんだか自身が無くなりそうになる。

「申し訳ありません……八意様」

最後に私の口から出た言葉は、尊敬すべきあの方に向けた謝罪だった。

勝利の布石として運命の逆転を図ったが意味は無かった。あの執行者の前では運命という大仰のものも意味を為さなかった。現実、私はいずれより敗北するのだから。

ただ、欲を出すならば……せめてあの方に何かを残したかった。

繋いだ鎖を断ち切るような音が月に響き渡る。ようやく私の技は完全に破壊されたようだ。死の間際だったからか、とてもゆつくり

感じた。

「見事であつたぞ、天津神」

最後に聞こえたのが、執行者からの称賛の声であつた。

その称賛が耳に届いた瞬間、私の意識はそこで途切れた――

※※※

決着は着いた。勝利したのは執行者たる少年であり、敗北したのは天津神たる稀神サグメであつた。

二人によつて放たれた絶技は月の一部を崩壊させ、一定距離の地形が変化してしまつた。

神と言えども、星を守護する者には届かなくなつたということだろう。その証拠に、現在極大の絶技の跡地で血まみれに倒れ伏す稀神サグメを見下ろしているのは執行者たる少年である。

彼は己に愚かにも、愚直にも挑んだ天津神を見下ろしながら呟く。「同じ手段を選ばなければまた違う結果になつていたかもだな……」

それは所詮もしもの話、他愛も無いならば話に過ぎない。それを執行者は理解しているが、どうしてもそれが解せぬままであつた。稀神サグメを強者であると認め、切り札の一柱である『クラスターカード』を使用し勝利を収めたと言えども、彼にはサグメのつた行動がなんとも理解し難いものだった。

だが結果は結果だ。今更そんなことを自問自答したところでどうにかなる話ではない。であれば、彼はこの決着に納得する他ない。

だが、それでも彼に情が無い訳ではない。

「まだ生きているな……」

あの一撃を受けて尚、サグメは死んでいない。天津神である加護か、それとも邪神となったお陰か……どちらにせよサグメはまだ死んでいなかったのだ。不幸中の幸いとはこのことだろうと執行者は嗤う。

執行者は懐から赤い液体の入った小瓶を取り出し蓋を開け、それを豪快にサグメに浴びせた。

「これで毒の効果は中和された筈だ……。後はお前の気力しだいだな」

本来ヒュドラレベルの毒を中和できる薬は現状この世界には存在していない。だが彼がサグメに浴びせた液体は大蛇の毒性を加工したものである。したがって、同じ大蛇の毒ならば血清が生成できるということになる。

だとしても、あれ程のダメージを受けたのだから毒が消えても助かるとは限らない。それを知っているからこそ、彼はサグメにかけた毒を消したのだ。自身に奥の手を使わせたせめてもの敬意を表れである。

「しかし、自らを邪神に反転させるなど正気の沙汰ではないな。……だが、それほどまでの覚悟であったという事なのか」

邪神の力は既に解けてしまっているサグメを前に、執行者は不可思議な疑問を抱く。

そしてその疑問は、突如として彼の背後に現れた十数名に向けられた。

「それとも何か、その答えを伝えにでも来たのか有象無象」

執行者は振り返る。

既にその場には、八意思兼を始めとした月の守護神達が臨戦態勢で構えていた。

かつて、月史上において全守護神が動いたことなどない。月の守備は地上の神々であっても簡単に切り崩せるものではないからだ。それに加え、月を守護する者は地上でも最上位に位置しうる猛者揃いである。極めつけは、現状八意思兼と稀神サグメは月のツートップに君臨しておりこの二人は月最大の戦力として知られている。

故に、如何に地上の神々が強かろうとこの次元を超えた防御を突破することはできないのだ。

——しかし、それも今日この日までと言えるだろう。月の守護神といえど、カテゴリーが『神』ではなく『世界』そのものであれば話は別だ。如何に神が猛威を振るおうと、世界そのものには決して届きはしない。神と世界・所謂『星』とでは圧倒的に格が違い過ぎるのだから。

執行者は自身に敵意と憎悪を剥き出しにし、今にも攻撃を仕掛けてきそうなまでに緊迫している月の守護神達を一見して、呆れるようにタメ息を吐いた。

「で？クソの役にも立たない有象無象が束になって何をしに来たんだ……。まさかとは思うが、俺を殺しに来たなどと妄言を吐きはしないよな……………」

それは冷徹に、向けられた敵意と憎悪を掻き消すほどの圧倒的殺気が放たれた。しかしそれはあくまでも執行者が投げかけた問に付属しただけのものである。

だがその殺気が意味するのは、『くだらん返答は赦さん』という脅しにも似たものである。さしもの守護神達もこれには簡単に口を開くことが出来ずにいた。

しかし、そんな殺気にすら臆しない者が一人…………。

「愚問よ執行者、私たちはあなたを殺すのではなく…………一片残さず消し去る為に来たのよ」

上記の言葉を紡いだのは、既に弓に矢を番えた八意思兼であった。その返答に対し、執行者はイガリマを構え応える。

「そうか…………では、邪魔者は排除しておかないとな」

瞬く間の一瞬、時間にして一秒も掛かっていない。

月の守護神達は、執行者が攻撃を仕掛けた事イガリマを振るったにすら気付かずに、八意思兼を除き全員が切り裂かれた。

『桁違いだ』と、切り裂かれた誰もが思った。認識するよりも速く、鋭く放たれた一撃に一切の例外無く全員の守護神が地に倒れ伏した。

「お前たちは俺と戦うには能わない……役立たずは役立たずらしく、地だけを這いずつてろ」

執行者はつまらなげに、切り捨てた守護神達に目もくれずにいた。だがそれと同時に、執行者はふと違和感を覚えた。……右腕に何か刺さっている。それは青い霊力を帯びた一本の矢であった。

思兼は既に矢を放っていた。執行者が守護神に対して斬撃を放つたとほぼ同時に、彼女も攻撃を仕掛けていた。必殺の矢ではなかったにせよ、『ソレ』は確かに執行者に届いたのだ。

それが意味している事は単純に執行者と思兼の力量である。気付かぬ内に放たれていた矢。偶然か……それとも理解していたからか、どうあれ執行者はここにきて初めて不意討ちをまともに喰らったのだ。

だがそれがどうしたというのだろうか。執行者は理解の及ばぬ攻撃を受けても尚、動揺も無く驚きも無く、さも自身が不意討ちを受けたのは当たり前だったかのように、気に留めることはなかった。

執行者は右腕に刺さっている矢を引き抜きそれを何食わぬ顔でへし折った。

「この程度か？……月の頭脳とやらは？とんだ拍子抜けだ」

「お望みとあらば、呼吸する暇なく消してあげましょうか？」

「出来もしない事を言うなよ……。たかだか数億年生きたくらいで粹がるな」

「……遺言はそれだけ？」

思兼はそれだけ問うと、返答を待つこともせず無数の矢を展開した。その数、稀神サグメの数倍以上だ。

「加減無しで……殺してやる」

刹那、数千を超える必殺の矢が縦横無尽に執行者へと放たれる。一切の情も無く、慈悲も無く、ただただ眼前の敵を打ち砕かんとひた走る。

一矢が地面に触れる。その瞬間巻き起こる壮絶な爆発と衝撃波。これには流石の執行者も表情が変わった。あれをまともに喰らうのは避けた方が賢明だと、判断を下し上空に高く跳躍した。

視線が交差する。それを機に執行者は爆発的なまでのエネルギーを放出し、月の都方面へ向かった。

思兼は執行者を追いかけてようとして、血塗れで倒れているサグメを一見した。

彼女にも思うところはあれど、あの執行者を相手によくぞここまで成し遂げたものだと呼びの念を送った。これほどまでに傷ついたものを放っておくのは忍びないが、今はあの執行者を追うことが先決だと判断し追跡に向かった。

※※※

再度の対峙、そこより始まった月史上最大の戦いは双方の実力が拮抗していた為激しさを増していった。

執行者は迫りくる無数の矢を悉く撃ち落としていった。

対する思兼も、時折反撃してくる執行者の斬撃を同威力の矢をもつて相殺していた。しかもそれが月の都の中心部で屠り行われているのだから、それを見ていた者達は圧巻と絶句、信じがたい光景に恐怖心すら抱いていた。

だがそれでも、徐々に態勢は思兼に軍配が上がり始めた。

数時間以上戦い続け、次第に執行者の動きが落ち始めていた。このまま戦っても自身に勝ち目はないと判断した執行者は捨て身覚悟で思兼に突貫する。

「ここでは本気が出せん……場所を変えさせてもらおうぞ」

上記のセリフが思兼の耳に届いた瞬間、両者は目も眩むほどの極光によって姿を消した。

だが、二人はあくまでも月から姿を消したのであって存在そのものが消えた訳では無い。

二人の目に映ったのは、広大な空の海・輝ける星々の運河である。それも、現実を侵食しうる強大な世界。

「固有……結界……」



「流石に知っていたか……。そうとも、ここは固有結界の中だ」

「……猪口才を。これしきの世界がなんだというのかしら？こんなもので力の差は埋まらないわよ……」

「そう思うか？」

妙に余裕を含んだ笑みを執行者は浮かべる。が、その笑みには油断も慢心も無く、一つの覚悟に似たものがあつたのだ。

クラスターカードが解ける。執行者の長く白い髪は黒に戻り、紅眼は紫眼に戻った。イガリマも同じくして、淡い光となって執行者の手から消えた。

それを見て尚も、思兼は油断することなく執行者を見据えた。この男は油断や慢心をして勝てるほど甘い存在ではないと知っているからだ。故に、彼女が気を抜くという事はあり得ない。

「そろそろ本気を出すか、あんたはどうする？」

「そうね……。決着を付けましょうか」

思兼は、靈力を一点に集中させ一本の矢を精製する。

その矢を見た執行者は目を細め、今までにない警戒をする。

まさに、規格外の象徴と言える。思兼が精製した矢はいままでのものが玩具にしか思えない程の靈力を帯びていた。稲妻が走り、空間が震撼する。サグメの最後に放った絶大な神秘すら霞んで見えてしまうほど神々しい。

地上のどの矢をもつてしてもアレに到底及ばないと感じられる。

嗚呼、これこそが神話の具現か……。なかなかどうして、美しい。

一点に収縮した靈力は研ぎ澄まされた鋭利な針の如く、細く……。強く……。頑丈に洗練されていた。

アレは神々の叡智を超えた『真』に達している。本来ならば敵う道理などありはしない。

執行者が会議室で見せた六色六翼の盾をもつてしても空気を裂くかの如く貫通するだろう。それを一目で見抜いた執行者は改めて、月の頭脳・八意思兼の規格外さを認識する。

だが、規格外であれば自身として例外ではないと咆哮する。

「図に乗るなよ、月人があああああつっ!!」

獣の如く吠え盛る。そこに手に握られた『切り札』と共に。

地球にまだ神々が存在する遙か太古、世界を支配していたのは生命に非ずたった一つの巨大概念であった。

星にまだ天も地も無かった頃、たった一つの巨大な概念は地球そのものを覆い尽くし生命の誕生と創造を赦さなかった。人も、妖怪も、神も、亡霊も、全ての一切合切はその巨大概念によって誕生の刻を奪われていた。

『それ』はあらゆる全ての天災の原点であり頂点。森羅万象天衣無縫全てを崩壊させる『絶望の果て』である。

それは例え世界に名高い最高神であつても抗いきれない。そう、抗える筈がないのだ。結果を導く力ではなく、結果を突き付けるものとは格が違う過ぎるのだ。

そしてそれは、たった一人の人間に向けられようとしていた。

執行者が手にしているのは青黒い球体。その色は一見禍々しいものにも見えるが、その実何も感じないようでもある。これが何なのか……：……どれだけ思考を巡らそうとも到底答えが出る筈も無い。これはこれとして受け入れる他ないのかもしれない。

アレに原点はあるのか。

アレに派生はあるのか。

アレはそもそも……何なのか……。

誰がどれだけ考えようとも、世界全ての知恵を集合させようとも——  
——答えが出る筈はない。この世には、何人たりとも理解の及ばないものが存在している。

しかし、一つだけ分かることがあるのだとすれば、『ソレ』はあまりにも——  
——強大過ぎたということだろう。

思兼は、その実体を見た事は無い。いや、彼女に限らずこの世全ての生命はその実体を認識した事が無い。

——だが、原点にて刻まれた遺伝子の記憶であればどうだろうか……。それが例え見た事も無い物・感じた事が無い物であつたと

しても憶測を立てることは出来るのではないだろうか。恐怖するこ  
とは出来るのではないだろうか……。

未だ見た事、感じた事のない『死』と同じように。

鮮明に浮かび上がる死のイメージ——それは執行者ではなく思  
兼が抱いたものだった。

出鱈目だ……何もかもが出鱈目だ!! あんなものがこの世に存在し  
ていたというのか。バカな、ありえない——! 『アレ』はあらゆる  
法則性や概念を一切無視し、全てを崩壊させるものだということのか!!

——死ぬ! アレと相対すれば間違いなく死ぬ。意思も、肉体  
も、魂でさえ完全に消し去られてしまう。

そう思わせるほどに、思兼が見ているソレは果てしなかった。

固有結界が、音を立てて崩壊を始めた。地に叩きつけられ爽快な音  
を立てて割れるガラスのように、ひび割れ崩れ行く。

その現象を引き起こしているのは他でもない、執行者が抜いた最大  
の切り札である。

青黒い球体は果てを感じさせない膨大なエネルギーを放ちながら、  
『その形』と成っていく。

『青』

『黒』

『赤』

『白』

四色のエネルギーが交り合い、ここに再び<sup>最初の地球</sup>原初の<sup>地球</sup>厄災が目を醒ます

「【星断剣・アース】!!」

異様な形を持った一振りの剣……いや、そもそもそれは剣と呼べる  
のだろうか。否、それは剣に非ず、形ばかりのミテクレである。

しかし、そのミテクレに秘められた星そのものを思わせる極大のエ  
ネルギーは表現に難しくないほどに凄まじかった。

両者必殺の武具は整った。後は己の全てを賭けて放つのみ。

世界が——一変する。

思兼は矢を弓に番え引き絞る。

執行者は剣を掲げ力を籠める。

その意志は、鋼を越えダイヤの如く。

「神々の叡智よ、ここに集え」

「星よ、暗雲を断ち切れ」

その咆哮は噴火のように。

「千を束ね、真へと至りし一となす」

「原初の息吹を呼び覚ます」

激動のように二つの力が荒れ狂う。

「剛と柔はここに交わる」

「星の開闢とは、全ての否定」

臨界に達した二つの極限至高の絶技は、今放たれる——。

「叡智を越えよ【ヤゴコロの矢】!!」

「万物に終焉を【インファイデア・アース転輪する星の宇宙】!!」

極大に膨れ上がった二つの絶技は、一方的な決着を迎えた。

【ヤゴコロの矢】が【転輪する星の宇宙】に触れた瞬間——それは音も無く、呆気なく消し去られたのだ。まるで、燃え盛る業火に紙切れを投げ入れるかの如く、何の抗いも赦されずに消え去った。

さしもの思兼も、この決着に驚きを隠せず動揺と憤りを感じていた。

それは無理もないだろう。己が鍛え上げて来た究極の技が、信念が、誇りが何の意味も無く、非情無比に否定されたのだから。

景色が一変する。……執行者が見ていたのは思兼であった。彼女はほぼ放心状態にあり、このまま放って置けば【転輪する星の宇宙】によって魂ごと消え去られるのがオチだろう。

だが、何故かは知らない。執行者は無意識に動いていた。——  
彼女を八意思兼を救う為に……。

届かない……今更全力で移動しようと、思兼が死ぬほうが早い。だからこそ、彼はその結末を『覆す』のだ。

滅びの波動は、刻々と思兼に迫る。そしてその一端が彼女に触れた瞬間、全身を鋭利な刃物で切り刻まれたかのような傷を与える。

全てを崩壊させる空間断絶の波動と、破壊されていない空間とで生じる異次元の風圧からなる超振動のカマイタチが思兼の身体をズタズタに引き裂き始めた時、切り刻まれ無に消え果てようとしたその瞬間、思兼の姿が消えた。

間一髪、執行者が行つた空間転移が作動し、思兼は一命を取り留めることに成功した。

「やれやれ、世話が焼けるな」

正に奇跡と呼ぶに相応しい出来事であつただろう。あのままでは無に消え去る筈の思兼は重症ではあるが助かったのだ。下手をすれば二人揃って死んでいたかもしれないのに……。

気を失っている思兼を見て、執行者はかつての友人の名を零れ落とす。

「……………アルニウン」

やれやれ、今日は厄日だろ……と、小さく愚痴りながら「転輪する星の宇宙」によつて破壊されていく固有結界をしばしの間眺め、思兼を担ぎ上げた執行者はその場から姿を消した。

## 二十七話 月と彼の過去その⑤

### Side 輝夜

月での大戦、一騎対月の最大勢力による戦いから早三年が過ぎた。あの日の大戦結果は言わずもがな、月の勢力は惨敗に終わり一騎による一人勝ちとなった。それ以来、月の民たちがどうなったかという、存外皆無事であった。それもこれも、あの方が慈悲深く聡明な方であったのが救いといえる。それでも重鎮達と一悶着はあつたんだけれど……。

勝利を得たあの方は、別段月の崩壊や月の民たちの月脱退を望む訳でもなく、ただ今まで通りの運営をすればいいと仰っていた。曰く、戦いに勝ったところで別に得るものがある訳では無いらしい。

ただ変わった事はある。あの日以来月はゆっくりとだが、あの方の影響を受け花や穀物類を育てるようになっていった。主にコスモスとか向日葵とか、西瓜とかね。

変わったのは月の状況だけではなく、月の民達も同じ。特に、あの方と戦ったサグ姉や思兼とかはもはや別人のように変わっていった。というのも、サグ姉は何かとあの方の話や前に立つと急にしおらしくなったりする。いつも冷静沈着なサグ姉が嘘のように取り乱したりとかは一種の名物だったりもするくらい。

思兼に至ってはまあ……アレなのよねえ。急に夜中に薄着であの方の寝室に忍び込もうとするくらいに変わった……。あの時は色々騒ぎになったんだっけ？

とまあ前座はこの辺にして。今現在の私はというと、あの方・氷鉋乖離様の部屋（ミニ図書館）に向かっている。

特に会わなければならぬ理由がある訳でもないけど、私にとって『会いたくなかった』というだけで理由はこと足りる。

「ふんふふふふんふん」

鼻歌を鳴らしながらスキップで乖離様の部屋まで向かう。

因みに言っておくと、乖離様の部屋は王宮ではなく旧八意家の屋敷にある。なんでもそちらの方が青く輝く星を一望できるかららしい。私にはそれの何がいいのかよく分からないけど乖離様にとってはとても重要な事なのよね多分。

なんて考えていると、早くも乖離様のお部屋に到着！

「フフフ……」

妙な笑い声が出たのは無視して、私は部屋の扉に手を掛けた。すると中から誰かしらの話声が聞こえて来たから、少し聞き耳を立ててみることにした。

「それでは、やはり先生は普通の人間という解釈が正しいのですか？」

「まあそうだな。……といっても、お前たちには信じ難いだろうけど」

「ハハハ、まあ……そうですね」

声の主は、おそらく依姫かしらね？この月においても乖離様を先生呼ばわりするのは彼女だけだし。それと、一体何の話をしているのかしら。

「結局、俺はこの月ではいつまで経っても嫌われ者ということだろうよ」

「そ、そのような事は……」

「無いと？」

「うっ……」

乖離様の先読みに、依姫は何も言い返せなくなった。確かに乖離様は月では嫌われ者であるのは間違いない。地上の民という理由と、三年前の大戦を考慮すれば当然と言える。実際、私も乖離様を嫌っていた者の一人でもあった訳だし。

でも、今は違うと断言できるわ！

「まあ、いいさ。どの道俺にはそんなものは関係ないしな……」

「は、はあ……」

まあ確かに、この方は自身の風評などには一切興味を抱かない。誰がどう言おうと、誰にどう嫌われようと、これといった反応を今まで示したことがない。ただ、好意とかになつてくると話は別みたいだけれどね。主に私とか私とか私とか……。

「それにまあ、嫌われていようと、俺を憎からず思ってくれる酔狂な奴もいる訳だしな。……………そうだろ？輝夜」

不意に声が掛かる。明らかにバレてた。音も無く忍び寄ったつもりだったのに、完全に気付いていたとは……………流石は乖離様ね！

そうじゃなくて、気付かれていたのはいいんだけど、何故に今更？なんて考えていないで、さっさと入った方が良さそうね。

私はドアのとつてに手を掛け、ゆっくりと開き入っていった。

「お邪魔します」

中に入ると、若干驚き顔の依姫と含みのある笑みを浮かべた乖離様が私を見ていた。うん、とても気まずい。

「い、いつからお気づきに？」

『フフフ』という妙な笑い声が聞こえた時からかな？」

なるほどつまり最初からということですね分かりました。それならそうと早く声を掛けてくださってもいいでしょうに……………。

なんて思っていると、乖離様が急に立ち上がった。

「さて腹が減ったから何か作るが、食いたい物でもあるか三人共？」

そう言つて乖離様は私と依姫に背を向けてキッチンまで早歩きで向かった。ん？今何で三人つて言ったの？ここには私と依姫しかない筈なんだけど……………。

なんて思っていると、後ろからなにやら物音が聞こえて来た。

「ん……………もう朝？」

聞こえて来た声は乖離様の寝室からだった。そこをジーンと見つめていると、白い翼が見えた。……………間違いなく、十中八九サグ姉ねあれは。

サグ姉はまだ眠そうに、目を擦りながら布団を体に巻いて出て来た。よくよく見ると布団剥がしたら全裸になるのではないか思う程に、素足や生足がはだけている。

「ん？輝夜に依姫……………どうして」どうしては私のセリフですよサグメ様!!」……………うゝ、耳に響く」

サグ姉の問を遮るように、我先に依姫が問を投げかけた。それはまるで叫ぶように慌てていたので、つつい耳を塞いでしまった。それ



はどうやらサグ姉も同じなようで……。

それより気になるのは、何故サグ姉が服も着ていないまま乖離様の寝室から出て来たということよね。おそらく依姫もそれが知りたくて、というかサグ姉の身を案じて叫んだのでしょよね。

「先生……これは一体どういうことですかああ!!まさか、サグメ様と大人の過ちを犯したなどとは言いませぬよね!!」

キッチンにも届くように大きな声で問を投げかける。

少し間が空くと、乖離様は顔をフライパンで隠し肩を落とした状態で現れた。

「俺は何もしていない。というか、昨日は徹夜で仕事片付けていただけだが?」

「では何故サグメ様が裸なのですか?!」

乖離様の返答に満足していない依姫は一層声に圧を掛けて問いかける。対して乖離様はやれやれといった感じで返答なされた。それはとても面倒くさそうに。

「服着て寝ないのはサグメの癖だろ。第一、そうお前のいう大人の過ちとやらは穢れを生み兼ねないんじゃないのか?」

「それはそうですが……しかし「依姫……ごちゃごちゃうるさい」………」

と、ここで今度はサグ姉によって依姫が鎮圧されてしまう。まだまだ乖離様に問い質したいと思う依姫も、流石にサグ姉の怒りには触れたくはないよね。まるで借りて来た猫のように大人しくなってしまうたし……。

「つたく、どうでもいいがさつさと服を着ろサグメ」

「何で?」

何でって、そりやずっと裸でいる訳にはいかないからでしょう?というか、乖離様には刺激が強いからなんじゃないかしら……。

「あのなあ「こっちの方が色っぽいでしょ?」………否定はしない」

「いやいや、否定してください乖離様!」

流石の私もこれにはツツコミを入れてしまう。だってサグ姉が乖離様を悩殺しようとしているのがまる分かりなんだから仕方ない。

そんな感じでツツコミを入れておくと、今度はサグ姉が敵意むき出しで睨んで来た。

「輝夜、私から乖離を取る気……?」

「サグ姉こそ、私から乖離様を奪うつもりかしら……?」

これには私も負け地と応戦する。だって乖離様取られるの嫌だもん!

「まあまあ二人共落ち着いて……」

「依姫は黙ってて!」

依姫が何やら言ってきたけど問答無用で弾劾する。これは私とサグ姉との乖離様正妻戦争なのだから部外者はすっこんでおいてもらう。どうやらそう思ったのは私だけではなくサグ姉も同じみだったけど。

して、弾劾された依姫は今の一蹴で落ち込んでしまう。まあどうでもいいから放置しときましようか。

しばらくサグ姉と睨み合っていると、キッチンから良い匂いがしてきたので、少しそちらを向いてみると乖離様がニラ炒めを皿に乗せて出て来た。というかいつの間にか料理に!

「バカ(×2)が、俺の部屋で揉め事起こすならお前ら飯抜きな?」

乖離様のその一言で、ピシヤリと私とサグ姉の睨み合いは終わった。それもその筈、超絶美味しい乖離様の料理が目の前にあるのに、それにありつけないなんて拷問以外の何ものでもないのだから。

「依姫、箸を五人分用意してくれ。それとキッチンに置いてある他の料理もな」

「はい先生。ん?五人ですか?」

「ああ」

依姫は首を傾げながらも、言われた通り箸と料理を用意するためにキッチンの奥へと向かった。

「それとなサグメ、さっさと服着ないならお前だけ飯「もう着た!」……よろしい」

乖離様が何を言おうとしたのかを理解したサグ姉は、手品かとツツコミを入れたくなるほどの速度で衣服を着こんだ。これぞ正に早業

！

「さてと……そろそろかな」

ふと、乖離様は上記のセリフを呟いた。私はそれが気になり、訊ねてみる事にした。

「乖離様、そろそろとはどういう意味なんですか？」

「直に分かるさ……俺の料理の匂いを嗅ぎつけて来る厄介なのがセツトでいるんだよ」

「厄介とは……？」

「もう来るさ……3, 2, 1……」

そう時間を数えられた瞬間、廊下からもの凄い足音が響いてきた。それも二つ。

おそろおそろドアを覗いてみると、盛大にドアは開かれた。

「乖離（さん）の料理の匂いに釣られて！」

「ほら来た」

乖離様は自身の予感を嘲笑うように現れた二人に視線を移した。そして現れた二人というのが、言わずもがな思兼と豊姫だった。それにしてもこの二人は普通にドアを開けられないのかしら……。

「役者は揃ったな？ 飯の時間だ、席に付け」

乖離様はそう言つて、キッチン近くに用意されている料理の乗った机とは逆側、仕事用に使うソファアの凭れ掛けた。そうして近くにあった適当な本を一冊手に取り、他知らずといったように一人読書を始めてしまった。こうなってしまった乖離様は誰にも止められないのよね。何せこの方は、読書の邪魔されるを極端に嫌われているのだから。それでもやつぱり一緒に朝ごはん食べたかったな。

四人で食卓を囲んでいるなか、乖離様だけは一人本を読みながらアジの開きとニラ炒めを食べている。なんだか同じ空間で食べている気配がしない。そもそも一緒に食事をとっている訳ではないのだけれど……。

そんなことを考えていると、不意に乖離様は読書の手を止め、思兼に視線を移した。

「思兼、あんたに聞きたい事がある？」

「何かしら？あ、スリーサイズ？上から97、58、84よ」

「誰得情報だそれ……」

「あ・な・た♡」

「……」

その発言には、流石にその場の空気が冷めた。だって仕方がないじゃない。いい歳こいてバカみたいなんだし、歳を考えるとツツコミを入れたくなるわね。

でも、誰もそんな事は言わない。というか言えないというのが現実ね。だって言ったたら絶対思兼の怒りを買って薬の実験体にさせそうなんだから。

「と、冗談はさて置き……何かしら？」

「……噂でだが、近々この月で戦争が起こるそうだな」

「……情報が早いわね」

戦争？一体なんの事かしら……気になるけど黙って聞いていた方が利口みたいね。

「主犯は割れているのか？」

そう聞かれた際、若干乖離様の覇気が薄れたような気がした。それと同時に、空気が重くなった気もした。

「名は分からないけど、かなり強力な妖怪だそうよ」

「そうか……」

思兼の返答を聞き乖離様は困ったように、掌で顔を覆いながら俯いてしまった。一体何故かは分からないけれど、何やら問題事の予感がある。乖離様があこまで俯かれたことはなかったのだから。

しばしの間、乖離様の復帰を待っていると助け舟を出すようにサグ姉が声を掛けた。

「乖離、何か思い当たる事でもあったの？」

それに呼応するように、豊姫も同じく乖離様を心配されてか声を掛けた。

「乖離さん、我々でよければ相談に乗りますよ？なんでも話してください」

二人が呼びかけても、依然として乖離様は何も答えない。正直、こんな乖離様は初めてといえる。私には分からないけど、一体何がそこまで乖離様を悩ませているのかしら。

もうしばらく待っていると、乖離様が俯いたままの状態で私たちに問いを投げかけてこられた。しかもそれは――

「もし俺が、その戦争に参加して両者を一人残らず惨殺すると言ったら……お前たちはどうする?」

誰もが黙り込む。乖離様の強さを知っているサグ姉と思兼なら尚更に。乖離様が口にされたことは、ある意味では決して抗いようなない絶望である。安易な返答なんて出来ない。それほどまでに乖離様が口にされた言葉は重い。彼の請け負っている仕事、そして乖離様自身の正体を知っているなら尚更。

乖離様は執行者・又は星の守護者である。彼は外に見える青き星、地球そのものの意思であり代行者でもある。つまり、月で起こりうるであろう戦争が星によって『歪み』の対象となった時、乖離様はその鎮圧の為に星の裁きを下される。そうなれば乖離様は月の勢力と地上の勢力両方を壊滅させ、その『歪み』を排除されるでしょうね。

誰も、何も口にしない。思兼は何も言わずただただ考え込むように思考を巡らせているのでしょね。そしてそれは他の三人も同じく。「俺の意見としては不干渉っていうのがベストなんだが、何分そうもいきそうになくてな……」

乖離様は若干諦めたように、小さく嗤った。それが切っ掛けとなったのか、思兼が立ち上がり胸元から一枚の紙を取り出した。

「では乖離、ギアスを結びましょうか」

「ギアスの縛り……」

ギアスと言えば、物事における契約や約束の上位互換・絶対重守の誓い。ギアスで結ばれた拘束を振り払うことは不可能で、解除する事も出来ない。一度結んだ契約が破られると、ギアスの呪いが働き破られた一方は破った一方に不可避の罰を与えられるもの。その際破った一方は何の抵抗も不可である。

「別にそれは構わないが、一体どういった約定を結ぶ気だ?」

「簡単に、私たち月の民は決して自分たちからは地上に手を出さないということ。武力を行使するのは攻め込まれた時に限る」

「んで、俺には何を約束させる?」

「あなたには、星の意思を抑制してもらおうわ」

「つまり、戦争が起きた際は星の意思では無く自分の意思に重きを置けど?」

「まあそんな感じかしら」

話に入り込む余地も無く話の段階は次々に進んで行ってしまおう。思兼が何を思いギアスを結ぶのかは分からないけど、乖離様はその真意を知ってか知らずか了承した。

乖離様と思兼を除いた私達三人は、静かに二人の契約を見守った。魔法陣とは少し違った紋章が床に浮かび上がり、二人を取り囲む。囲まれた中で乖離様と思兼はそれぞれ異なった言語で詠唱を唱え儀式を完成させる。

私には何語を話しているのかは分からないけれど、契約において大切な物だということは理解できる。

二人の契約式を見守り、無事に契約は終了したみたい。

後から聞いた話だけれど、実はこの契約の真意は別にあつたらしく、月だけを縛るものではないらしい。しかし、その真意は幾ら思兼に聞いても教えてはくれなかった。何でも、知られてはマズイことだとかなんとか……。

ただ、この契約から一月が過ぎ、乖離様は月を去って行った。

優しく、労いと別れ、再会の誓いをして……。

## 二十八話 思いの他

S i d e 妹紅

お茶を啜りながら、一息吐く。乖離、輝夜、永琳が月で起こった事、その後にあつた出来事を語り聞かせてくれた。戸惑いもあるし、ハッキリ言つて話に付いて行くので私は手一杯だった。ツツコミたいところは多々あれど、そんな気も失せてしまう程に淡々としたものだった。

色々とあつたのは分かつたし、乖離が宴会の時に話してくれた自身の過去についてのこともあの時よりは少し深く語ってくれた事で、大体の理解はできた。

それでも、どういつた経緯で乖離が月の赴いたのかは、頑なに語つてくれない。単純に仕事だったからと場を濁していたが、その真意が別にあるというのは私じゃなくても気付いていたと思う。

でもやはり驚いたのは、乖離の強さはたつた一人で月を征服できるほどのものだったということだ。異変の時も『クラスターカード』による規格外の強さを見せたというのに、まさかアレの更に上があつたなんてね。自称人間様は凄いもんだと思つたよ。私の知っている中でも幻想郷の事実上最強は永琳だと思つていたけど、どうやらその認識は更新しておかないといけないらしいね。

それでも疑問に思う事はある。……話を聞いていた時もそうだったけど、どうして乖離は月の民を一人として殺さなかつたのだろう。忌み嫌い、憎んでさえいる月の民なのに乖離は誰一人として殺したとは言つていなかったし聞いていない。

憎しみもある、嫌悪感もある。であれば殺してやりたいと思うのは必定ではないのか？私や輝夜がそうであるように……。その件に関して、聞いてみようかな。

「ねえ乖離、乖離は月の民を殺してやろうとは思わなかつたの？」

唐突な問。私の問に乖離は一瞬だけ目を見開いたけど、すぐさま冷静な目に戻つた。

「どうしてそう思うんだ妹紅」

「私や輝夜がそうであるから……かな？」

そう答え、私は一瞬だけ輝夜を横目で見た。その時の輝夜の表情はなんとも言えない感じだった。

ふむ、と乖離は顎に手を添え考え込む姿勢を取った。その仕草は哲学者を思わせるようなものだった。

「……あるよ。殺してやりたいと思つた事は、何度もね」

……そう、乖離は呟いた。辛そうに言つた訳でもなく、申し訳なきように言つた訳でもない。ただ淡々と真実を告げるように。

「乖離様……」

輝夜は心配そうに乖離に声を掛ける。それでも乖離は輝夜に向き直る事はせず、ただじつと私の方を見続けていた。もちろんのことだが、私も同じように乖離に向いている。それに、乖離はまだ何か言いたげだし。

「それでも、俺は無益な殺生は嫌いだね。……どいつもこいつも根の歯も無い世迷言を揃えては雑言のように吠えまわる月の民といえど、俺には殺す理由が無いんだよ」

こじ付けければ話は別だが、と付け加えて乖離は答えた。それはつまり、腹が立ったという理由で殺すみたいな低俗な考え方はしないってことなんだろうか……。

「俺は鬱陶しいとか、ムカついたからといった理由で命を奪えるほど完成していないんでね……自分が上等だと思ひ上がりはしないさ」

そう言つて乖離は私の心情を悟つていたような口ぶりで告げた。その際軽くウインクされたのはどうやら、完全に私が何を思つていたかを知っていたってことじゃないか……。覚り妖怪かよ！

それでもやっぱり、乖離は優しいんだな。自分がどういふ存在であるかを理解し、弁えている。その姿を考えただけで、何故か私自身と比較してしまうのは何故なんだろう……。自分が不老不死としてどうあるべきなのか理解していないからかな。

なんて事を考えていると、今度は私ではなく優曇華が乖離に質問を投げかけた。



「乖離は、戦争とか怖くないの?」

「これはまた唐突だね」

優曇華のしおらしい態度を見るからに、乖離の過去と月で結んだ条約を聞いていよいよ自分から踏み込む気になったみたいだ。その行動を見た他二人も少し固かった表情が緩んでいたしき。

「戦争ねえ……俺は神でもなければ妖怪でもない。ただの人間だから怖いな」

どうみたらただの人間なんだと……ツツコまない方が良さそうだな。私以外の二人は全力でツツコミたい衝動を必死で堪えてるみたいだし。

「逃げたいと思った事は無いの?」

「それは無いかなあ……。俺にとつて戦争は確かに怖いものではあつたけど、だからと言って逃げたいと思う程のものではなかったかな」  
そりやそうだろうね……。永琳を圧倒できるほどの強さがあるんだから、どの戦争でも無双しまくれたんじゃないかな。

ん?でも確か話の中でサグメつてのが『神話戦争』だのなんなの言つてた気がするんだけどなあ……。あれは一体どんな戦争なんだろうか。神や人間がどうこう言つていた気がする。

「乖離は強いよね……」

優曇華は少しだけ顔を俯かせ、そう呟いた。その声色は明らかに自分を卑下しているものだった。その証拠に優曇華は悔しそうに……それでいてどうしようもないやるせなさに体を震わせていた。

私も聞いた事はあるけど、確か優曇華は月から逃げて来た脱走兵だつて聞いた。戦争が怖くて、どうしようもなくて逃げ出したのだとか……。私も詳しくは知らない。

ただ、そんな優曇華を見ても乖離はこれといったアクションを取らない。先程まであれほど優曇華を問い詰めていた姿が嘘のように、乖離は腕を組んだまま動かない。

「震えるほど怖いのなら……その震えすら笑えるほどの恐怖をその身

に刻み付けるといい」

不意に、若干いままでよりもトーンの落ちた声で乖離が言葉を紡いだ。それは強く、圧の効いた声で。

「どういうこと？」

おそろおそろと、私は隣に座る乖離に問いかける。視線が一瞬こちらに向くが、すぐさま優曇華の方に戻った。

「戦うのが怖いならば逃げるといい……死にたくないのなら這いつくばって震えるといい。——その果てに何もかもを失う事になったとしても逃げ続けるといい」

アメジストの瞳は鋭利に、冷たく優曇華に突き刺さる。誰が止める訳でもないその眼光は私でさえも冷や汗を掻くほどに恐ろしかった。私でもこんなんだから、それを全身に浴びている優曇華はさぞ恐怖に顔を染めている事だろう。

と、思ったけど案外そうでもないらしい。

実際のとこ優曇華は呆気に取りられたような表情をして固まっていた。

再度乖離の方を向いてみると、その表情はさっきの冷たい眼光とは裏腹に心安らぐような笑みを浮かべていた。

「とはいえ、今の優曇華ちゃんはどうじゃないよね。君にも君なりの覚悟と決意があるんだろうし」  
「えっ？」

完全に呆気に取りられている優曇華と、その状況を隣で楽しむ主人二人。

もしかすると、乖離は全て理解した上でああいう言い方をしたのかな……。強い恐怖を取り除くためには、それを上回る恐怖が必要だ。そしてそれを克服することであらゆる苦難も乗り越えられる……。的な？

兎にも角にも、乖離は優曇華のやるせなさを上手い感じに取り除こうとしているんじゃないだろうか。乖離が言っていた月での約定の規定を確認するため。

とはいえ乖離の事だろうから既に察しはついているんだろうけど

ね。

「戦争というワードと、その恐怖心から察するに君は脱走兵だろ？」

「……うん」

優曇華は弱々しく答える。一方の乖離はやはりという顔で笑みを浮かべていた。

「そうか……。なら大丈夫そうだ」

安心したように乖離はお茶を啜る。

結局のところ、乖離にとって優曇華が脱走兵だというのはどうだっ  
ていいものだったのかもしれない。一番の要は優曇華が月の都の意  
思でこの幻想郷に来ているかどうかということだったんだろうな。

「あの〜乖離、それだけなの？」

未だに納得できていない優曇華は神妙な表情で乖離に問いかける  
が、たった一言「うん」……。というお気楽な返事で流されてしまった。  
ドンマイ優曇華。

それでも、さっきのお気楽な返事の勢か、優曇華の表情が明るく  
なったと思う。

「それはそうと乖離様！忘れていましたがあのスキマ妖怪も乖離様の  
過去を知っているのだとか！」

「ん？ああ、うん」

輝夜の今更焦ったような態度にも、乖離は依然として動じずに返答  
を返した。そもそも話、輝夜はどうしてあそこまで焦っているんだ  
ろうか……。乖離の過去って言うんだから、何か知られてはマズイこ  
とでもあるのかな？

「うんじゃありませんよ乖離様！あのスキマ妖怪に乖離様の過去が知  
られているという事は、確実に乖離様の命が狙われるという事じゃな  
いですか！」

「何故に？」

「う〜ん、おそらく俺が元星の守護者兼執行者だったからじゃないか  
？」

なるほど……。ん？どづいいうこと？

「乖離様は元々世界を正しい方向へ廻す為に動かれていた星の執行者

なのよ？歪みを断ち、その修正を施して忽然と姿を消す真正銘の蜃気楼」

うん、それは宴会の時に聞いたな。世界の歪みを断ち、本来のあるべき姿へと戻すのが執行者であった乖離の務めであったと聞いた。けどそれが何の問題があるんだろうか……分かん！

「それは知ってるけど、結局何が問題な訳？」

「ハア、妹紅ここはどこ？」

「幻想郷」

「妖怪や神は外の世界ではどうなった？」

「神話になったな」

「そうよね？」

結局輝夜は何が言いたいのか……。ここは幻想郷だろ？忘れ去られた者、本来外の世界で消える筈だった者達を招き入れ、存続させる最後の理想郷。

神も妖怪もここでひっそりと暮らしている。（一部は例外）

ん？待てよ？『忘れ去られた者』『本来世界から消える筈だった者達』……。世界の歪みを排除し、本来あるべき姿に戻す……。あつ！

「乖離って幻想郷の敵じゃん!!」

ようやく思い至った。何故輝夜がああ八雲を強く危険視していたのか、そして必要以上に乖離を案じていたのか。本当に今更なことなんだけど……。

対する乖離は言わずもがな、相変わらず落ち着いた様子で笑っていた。

「気付くのが遅いわよ……」

「いや、普通気付かないだろ」

幻想郷は本来の理から外れた異界の地でもある訳なんだし、確かに乖離は幻想郷の敵になるかもしれない。本人がどうかは知らないけど。

「兎に角、乖離様をあのスキマババアから守らなければ！」

「その必要は無いぞ輝夜」

「え？」

乖離絶対守るウーマンに変身しかけた輝夜は乖離の言葉で停止を受けた。輝夜は意味が分からないといった表情でキョトンとしている中、乖離は涼しい笑顔で事情を説明していた。

乖離の説明を受けた輝夜はというと、納得したのも然りという感じだったが、すぐさまさつきまでと同じ雰囲気に戻ってしまった。その訳はというと……。

「なんですかそれ！それなら尚更乖離様を守らなければ！あんな胡散臭い奴に乖離様を近づける訳にはいきませんよ!!」

「大げさだな」

乖離はやれやれと首を左右に振ってタメ息を一つ吐く。一方輝夜は相も変わらず「乖離様絶対守る!!」と叫んでいる。これには流石の乖離も面倒くさそうな表情になっていた。確かにあれは色々と面倒くさそうだな。

叫び続ける輝夜を他所に乖離は何かを思い当たったのか、一つ大きく息を吐き立ち上がった。

「永琳、少し付き合ってもらえるか？」

「ん？ああ、いいわよ」

そうやって永琳承諾をする。一体何に付き合うのかは分からないが、なんだか緊張して来た。一体何が起きるのか！

そんな事を思っていた矢先、唐突に永琳が服を脱ぎ始めた。

……………ハッ!?

「て、おいしいい！何脱ぎ出してんだあんなっ!!」

これには流石の乖離も平静を失い、顔を真っ赤にして永琳から目を逸らした。対する永琳は何の躊躇いもなくさらに脱衣を進めていく。

「付き合っしてほしいんですよ？ならさつきとしましょう？」

「何をだよっ！」

「SEX」

「あつたまおかしいだろあんな！どうしてそういう解釈になるんだよ

！」

とんでもないセリフが永琳の口から放たれ、それを耳にした乖離は更に顔を真っ赤に染めつつコミを強く入れた。だというのに依然として永琳は脱衣をやめない。というか誰も永琳を止めない……。私は完全に傍観者になってるし、優曇華は乖離に似て顔を真っ赤にさせ口をパクパクと動かしているだけ。輝夜は……なんか永琳よろしく脱ぎ始めているのだが……!?

「そして何故お前まで脱ぐのか輝夜！」

「ノリで！」

「ノルなし!!」

ナイスツツコミだね乖離。なんて言っているものだろうか……。ていうかこの状況は止めるべきなんだろうか、それとも私も参加すべきかな？んくでも恥ずかしいなあ……。

なんて考えていると、ほぼ全裸に近い輝夜と永琳が乖離にすり寄って行っている。なんとというか、男冥利に尽きる光景だな。すり寄せられる乖離は必死に目を瞑って対抗しているが、後どのくらいで折れるのか見ものだ。

なんて思った私が愚かだった。この状況を早い内に止めるべきだったんだ。そうしていれば、こんな事にならずに済んだのに……。

突如として、私達の目の前に豪風と共に紅い光の柱が顕現する。それは前回の異変で見たものと同じで、圧倒的な威圧感が招来する。

その光をみるなり乖離にすり寄って行った二人はこの光景とは逆に、紅い光の中でもハッキリと分かるほどに青ざめていった。

紅い光の柱から以前と変わらぬ恰好、透き通った紅い瞳・白と赤が混ざったような礼装が見える。一概に言ってしまうえば何とも美しい。だがしかし、当の本人は怒りの表情に加え、手に大きな大剣を構え振り上げた。

「いい加減にしろよ、アホ共!!」

そう言い放ち、乖離は神秘に輝く大剣を振り下ろした。

強烈な波動が永遠亭の結界を大きく揺るがせたのは言うまでも無  
いだろう。

## 二十九話 不死とは

S i d e 妹 紅

乖離がキレて、クラストーカードを使用したせいで永遠亭の客間は  
大惨事になってしまった。床は切り裂かれ棚は吹き飛び、座っていた  
ソファーはビリビリに破けている。ハッキリ言ってしまうと部屋は  
無茶苦茶になっている。

やらかしたのは乖離である訳なんだけど、そうさせたのは他でもな  
い。頭のネジが飛んだ二人組だ。

因みにいうと完全に被害者となった私と優曇華は、今まさに乖離か  
ら説教を受けている二人のアホに代わって部屋を掃除中だ。まった  
くとばっちりもいいとこだよ……。

まあそれでも良かったことがあるとすれば、ある種の拷問を受けて  
いる輝夜が見られたということかもね。

「俺は再三言ったよね？色仕掛け断固拒否と……」

「はい……」

「お前ら千年以上も経って一体何を学習したわけ？」

「乖離（様）の愛し方……」

「……ふざけてんの？」

二人の返答に対し、乖離の声のトーンが下がった。それだけじゃな  
く、アメジストに輝く瞳が何故かハイライトを消してるように見える  
んだが……。うん、こっから見ててもかなり怖いな！

「すいませんでした！」

そう言っつて、『私は淫らな真似をしました』という看板を首に掛けた  
二人が乖離に土下座をした。あんまりにも珍しいものなので、見てい  
てなんだか飽きないなあ。

それはともかくとして、そろそろ部屋の片付けも終わりそうな頃合  
いだ。基本部屋を汚したりしない私だから掃除はやったことが少な  
いけど、優曇華は永遠亭の下っ端な訳だし、手も早いし動きもテキパ  
キとしているから存外スムーズに行きそうだ。



しかし手は動くにせよ、やはり優曇華も主人二人が一人の人間相手に頭が上がらない姿をみるのが珍しいようで、ちよくちよく二人の様子をチラ見していた。

「そんなに気になる？」

割れた瓶を拾いながら、私は上記の問を優曇華に投げかけた。

「そりやうね……あのお二人が人間一人相手にあの態度よ？明日は槍が降りそう……」

確かに、それは分からなくないかも。誰に対しても上から目線の二人が乖離相手にはまったく頭が上がっていない。見ている分には面白いんだけど、実際に私もされたらああなってしまふのかな……。

なんて思っていると、輝夜が助けを求めるかのような目で私と優曇華を見て来た。

（妹紅助けてお願い!!）

（いや、無理だろ）

（イナバ……）

（申し訳ありません姫様無理です）

そんな感じのアイコンタクトを取っていると、どんどん輝夜の目に涙が溜まってきているのが分かる。……おそらく相当怖いんだろうなあ。

こつちを向いて、今にも泣き出しそうな輝夜を見るのは気分がいい……筈なんだけど、何故かな？この上なく救出してやりたいと思ってしまう。ホント不思議だよ。

「どこを見ているんだ輝夜、説教中に余所見とは随分と偉くなったなあ？」

「申し訳ありません乖離様!!」

……こわっ!!何あれ超怖いんだけど!?

全く笑っていない笑顔で脅され、輝夜は瞬時に泣き泣き乖離に向き直る。……もうあれだね、不憫っていうか何と言うか……ドンマイだ。

半ば諦め思考で作業を進めていると、ようやく片付けが終わった。それはどうやら私だけではなく、優曇華の方も掃除が終わったよう

で、二人して新たに用意したソファア―に腰かけた。

「あの説教って、いつ終わると思う〜?」

「乖離の気分次第じゃないかしら〜」

もはや他人事のように私達は棒読み感覚で上記の言葉を口にしつつ、二人だけでお茶を啜った。

さてさて、片付けも掃除も終わった事だし私達は何をしようか……。特にやる事が無くなった身なれば、後はもう目の前で手ひどく絞られる二人の見物しかないようだ。とはいえ、殺気かと思わせられるほどにハイライトを無くした乖離の視線。それを一身に受け続けるともなれば、多少なりと……。いや、結構良心が働きそうになるな。

でもだからと言って乖離を止めたりなんてしない。因果応報、乖離を怒らせたのはあの二人な訳なんだし仕方がないよね。仮に止めたとしても、おかと違いもいとこなので逆に私が乖離に怒られそう……。それだけは勘弁!

「ふう、少し外に出て来るよ」

「説教は?」

「帰ってから」

……。まだ続くのこれ?どんだけ根に持ってるんだ乖離……。

乖離は一度だけ正座させている二人を見て、客間から出て行った。

ようやくというのかな?説教タイムは一時休憩に入った。

二人は正座を崩し太もも付近を擦っていた。どうやら相当痺れてしまったのだろうな。まだ三十分も経っていないのだけれどね。

「あ、足が……」

「キツイわね」

こういう時、劳いの言葉を掛けてやればいいのだろうか……。それとも自業自得と嗤ってやるべきか……。うくん、迷うなあ。どっちにしたって反感を買いそうだしな。

「うくむ、やはりいきなり脱ぎ出すというのはアウトだったみたいね。やっぱりムードが大事かしら」

ん?今この薬師なんて言った?

「やっぱりノリじゃダメみたいね……やっぱりこう、乖離様自身が望んでくるように工夫しないとイケないわね」

このバカ姫まで……。

こいつら、あれだけ絞られて尚懲りぬか……。ここまですればもはや執念だな。一種の尊敬の念を覚えそうになる。優曇華なんて『こいつら手遅れだ』みたいな顔して諦めてるしさ。

「お前ら懲りないのか？」

「何によ？」

ダメだこいつらもう手遅れだ！乖離のあれほどの説教を喰らって何事も無いかのように立ち直ってる。もうあれだな、しつこい通り越して厄介だぞ。こんな奴らの相手をしなければならぬ乖離が哀れ過ぎて涙が出そうになる。

まったく、揃いも揃って拍車が掛かり過ぎなんじゃないのかなあ……。それともこいつら一定の条件下ではマゾにでもなるのか？

「乖離が不憫すぎるだろ……」

努力をしたって報われない。……特にこいつらに限ってはブレない折れない諦めない。どれだけ乖離が頑張って説教をしたところで意味はないみたいだ。

「もし乖離が不老不死のままだったら、こんなのとずっと居ないといけなくなるんだらうなあ〜」

私がそう口になると、突如として輝夜の目が変わった。

「妹紅……それはどういう意味？」

若干の焦りと緊張を含んだ声が耳に届く。輝夜は信じられないといった表情で私に詰め寄って来た。

「妹紅！どういう意味なのか答えなさい!!」

「い、いや……言葉通りなんだけど」

あまりの気迫に圧されつついつい引き気味になってしまう。というか、輝夜のこの急変振りは一途なんなんだろう……。妙に慌てているし。

「永琳は知ってた？」

「いえ、私も初耳よ……」

どういうことだろう……。乖離は自分が元不老不死だつてことをこの二人に開示していないのだろうか……。だとしたらこれってこの中では私しか知らなかった秘密って事になるんじゃないや……。？」

「妹紅、少しいいかしら？」

「な、何？」

先程とは打って変わって、真剣な表情で永琳が問いかけて来る。まだ看板ぶら提げた状態で……。

「乖離が不老不死だつていう事はいつから知っていたの？」

「先の異変後の宴会で教えてくれたよ……。それと、あくまでも乖離は『元』だからね？」

二人は依然として何かを深く考え込んでいる。状況整理が間に合っていないのかな？私も初めて乖離が元不老不死だつて聞いた時は驚いたし、泣いてしまったりもしたけど、この二人は私の時とは何かが違う気がする。

私の予想ではあるんだが、もしかしたらこの二人は乖離を再度不老不死にするつもりではないだろうか……。

輝夜も永琳も、どっちも乖離を愛している訳なんだし、最愛の人と永遠に居続けたいと思うのは当然の事なんだと思う。ひよつとしたら……私もそうするかもしれないし。

もしも、私の予想通りこの二人が乖離を不老不死にしようとして、それを乖離が拒めば一体どうなるんだろう。……あまり考えたくはないが、戦いとかになるんだろうか。そうなればおそらく乖離に勝ち目はないだろう……。

月での過去を聞いたから思ったが、乖離は当時よりかなり弱体化している。永琳すら上回る力を有しているにも関わらず、異変の際はその片鱗を全く見せていなかった。実際のところは乖離しか分からないんだけどな……。

それでもやはりこれはあくまでも私の予想に過ぎない。当たるかどうかは別としてだが、こいつらに限って乖離と戦うなんて事は無いと思う……。

「乖離様が元不老不死……蓬萊人とは違うまた別の不死ってことになるのかしら？」

「まあそうなるな。蓬萊人とは、永琳の作った蓬萊の薬を服用した不老不死の事を指すのだろうか？」

「そうですね……。では、乖離様の不死とは一体………ん？」

……何事も無いように会話に参加し、何事も無いように椅子の上に腰を掛ける。そんなスムーズな動きに私達は何も対応できなかった。何の違和感も感じられず、誰もが平然としてしまったのだから……。

私は帰って来た乖離の鮮やかな入室に内心拍手を送りながらも、その実肝が冷えるほどに冷や汗を掻いていた。なにせ、乖離の目と表情がこれでもかかってくらいに怒りの感情……もはやオーラが滲み出ていたのだから。

「……………」

二人はそんな乖離を見て無言で震え始める。尋常ではない程の恐怖心を抱いているのか、輝夜は歯をカチカチと鳴らせながら青ざめ震えている。

一方の永琳は……もう、なんかよく分からん。とりあえず表現できるのは、あまりの恐怖の勢か顔が死んでいる。

「いつ誰が正座を崩していいと言ったんだ………ん？」

怖い……とりあえず怖いよ乖離。こつちまで震えて来そうなほどに怖い！

「お前ら二人……そのまま一生正座して生きていくかい？」

清々しい程の笑顔で、なんとも残酷な事を口にする乖離。容赦とか情けとか、そんなものが一切感じないんだけど……。い、いつもの優しい乖離は何処へ行ったのか。

そんな乖離の言葉を聞いた優曇華が、そつと乖離の肩を掴んだ。

「乖離、もうその辺で許してあげて？お二人もきつと反省しているから………ね？」

ナイス優曇華！と叫びたくなる衝動を必死に抑える。今そんなこと言ったら絶対殺されるから……。

それは置いておいて、流石の乖離も小さく一つ息を吐き目を閉じ

た。

「分かったよ優曇華ちゃん。今回は君に免じてこの場は収めるとしよう」

ようやく、アホ二人は乖離の拷問（説教）から解放された。

今にも泣きそうだった二人は深く、深く乖離に懺悔した。とはいえ、懲りてない様子ではあったけどね……。

「さてと、俺は帰るとするよ」

「え!?!もうお帰りになられるのですか乖離様」

「いやだって、こころちゃんがさっさと戻ってこいって言うからさ」  
「ん?何でそこでこころが出て来るんだ?」

「さっき俺が外に出たのはさ、こころちゃんから電話が来てたからなんだよ。それに、こころちゃん関係無しにくだらな説教も終わらせて帰ろうと思ってたし」

電話って言えば、あの受話器の事だろう?乖離そんなの持ってきてなかったと思うんだけどなあ。それとくだらないって……あれだけ輝夜と永琳を絞っていたのに最後の感想がそれとは……。

「だって、こいつらどれだけ説教しても直さないし……もう俺面倒だし」

その気持ちは何か分かるんだけど……だからと言ってその言いようはあんまりなような気がすんだけどなあ……。あとやっぱり乖離は覚り妖怪なんじゃないかな……?」

そんな事を思っていると、乖離はさっさと帰る準備を済ませていた。

「ありがとう、助かったよ。左腕が治ったのはあんたのおかげだよ永琳」

「気にしなくてもいいわよ?怪我した時はいつでもいらっしやい!というか毎日来てもいいわよ?」

「毎日は遠慮しておく。流石に俺の精神が持たんから!」

「ではせめて、送らせてください乖離様」

まあそれだけなら、と言って乖離はポケットから財布を取り出した。

「因みに治療費っておいくら？」

「無料よ」

「……そ、そう？」

戸惑いながらも、乖離は財布をポケットに仕舞い込む。

それはそうと、乖離が帰るなら私も送って行かないとな。一応連れて来たのは私な訳なんだし、送り届けるのもちやんとこなさないとな。

※※※

何故か優曇華だけを留守番に残し、私を含めた不老不死三人と乖離は揃って竹林の中を歩いていた。

「しっかし、ほんとここは案内が無いと迷いそうだな」

来た時と同じことを口にしながら乖離は辺りを眺めている。そんなに珍しいものでもないだろうに、そんなにキョロキョロする必要はないんじゃないだろうか……。

「あ、そうそう。輝夜、これ返しておくよ」

そう言って乖離は輝夜に左腕を突き出した。すると、乖離の左腕に金色の粒子が集まり、瞬く間に見目麗しい黄金の羽衣が顕現した。

驚くほどに美しい羽衣だ。私が今まで見て来た財宝宝石の中で何よりも美しいと断言できる。まるでこの世の美を集約させたみたいだ。

「憶えていてくださったのですか？」

「当然だろ？そもそもこれは借り物だから……。だいたい、再会の約定にと俺に渡したのはお前だろ？」

私とその羽衣に見惚れている中、輝夜は乖離から羽衣を受け取りそれを今着ている着物の上から羽織った。

「うん、やっぱりそれはお前が一番似合うな！」

綺麗……なんて言葉では足りない。美しいとか、神々しいとか、そんなチャチなものじゃない。あれはもう……美の権化ではないのかと思う程に、今の輝夜はくしくも美しく見えた。女である私でさえも

強く気を保っていないと膝を着いて拝顔しそうだ。

でも、そんな輝夜を見ても尚乖離は何事もないように立っている。見慣れているのか、それとも美しさとかには興味がないのかな？……いや、そんな筈はないか。

『『天の羽衣』……随分と乖離様のお役に立てたみたいね』

「それには幾度となく助けられたからね〜」

「お役に立てたのなら私は嬉しいです……。それに、乖離様の臭いもムンムンに……グへへ／＼／＼」

「ちよつと輝夜それ私にも嗅がせなさい！」

折角いいムードだったのに、ホントブレないなこの二人は……。もう乖離もツツコまなくなっている辺り放置かな？

「やれやれだね」

「やれやれだよ」

アホ二人を他所に、乖離は近く竹に背を任せ座り込んだ。歩き続けていたから疲れてしまったのだろうか。

「ねえ乖離、一つ聞いていい？」

「ん？」

乖離は不思議そうな表情で私を見て来る。

聞く事は一つだけだ。突拍子もない話だけど、乖離がこころとの電話で外に出ていた時にしていた話。……乖離の不死性についてだ。

「乖離ってさ、元不老不死だったんだろ？ならその不老不死って蓬莱人とどう違うんだ？」

私がそう聞くと、乖離は目線だけを未だ尚天の羽衣とやらに鼻先突っ込んでいるアホ二人に向けて話してくれた。

「蓬莱人とは永琳作りだした蓬莱の薬を服用した人間が成る不老不死だ。それに対して俺の不老不死ってのは……星より与えられた純度100%の天然物。人の手によって作られた紛い物の不死とは違い、如何なる矛盾も通用しない究極系のものだったと思う」

「つまりどういうこと？」

「つまり、この世のあらゆる法則を無視し、人や妖怪・神によって鍛えられた不死殺しでは届かない代物だつてこと」



つまりは、月の連中が所持する不死殺しの魔弾や、神話に聞く不死殺しの魔槍をもってしても太刀打ちできない存在ってことになるのかな……？不老不死にも序列が存在しているんだろうか。

だとしたらだ、乖離は蓬莱人やあのミミズクヘッドとは違い如何なる手段を用いても絶対に倒せないという事になるのではないだろうか……。

「この世のあらゆる理は星に還る。万物万象人妖神と、星によって派生した者ではその真域には届かない。だからこそ星々の集約性、絶対の不死は殺せない」

そんな難しいことを言われても分かんないんだけど……。要するに、人や妖怪、又は神では乖離の持っていた不死を殺せないということかな？そもそも不死殺しなんてバカバカしい程の皮肉なんだけだな……。

「まあそれでも、星断剣を用いれば絶対の不死も関係無く消し去られるんだけどね」

「チート武器……」

「ハハ、違ういな。アレには星の理とか関係無いし」

乖離はそう言いながらケラケラと笑っている。私にしてみれば話の中でしか理解できていないが、永琳の全力をいとも容易く葬り去った物だったと思う。永琳の強さを知っているからこそ、最初は信じられないものなんだけだな。

それと、結局のところ乖離の不死性と蓬莱人の不死性ってどこが違うんだろうか……。

「なあ、結局のところ乖離の不死性ってなんな訳よ？」

「妹紅達蓬莱人の不死性は肉体の再構築と魂の固定化ってのに対して、俺の持っていた不死性は情報のリセット。要は初期化ってことさ」

「ハ？」

言っている意味がよく分からず間拔けた反応をしてしまった……。情報のリセットって何？

そんな私を見て、乖離はため息混じりに詳細を説明してくれた。

「つまりだな？その人物を一個体の情報体として、傷を負う＝新情報の追加っていう解釈をする。んで、追加された情報は元あるデータには余分なのでこれをリセット・消去して初期値に戻す。Did you understand?」

「なるほど……。ていうか、何気に私をデイスつただろ?」

「爆炎頭脳にはこれくらいが分かりやすいかと」

「あ！またデイスつたな!!」

流石の私も怒った！こいつ一度ならず二度までも私を馬鹿にした。よし、輝夜よろしく燃やしてやる！

そう考えた私は炎を纏い、一足たに乖離に蹴りかかった。

「喰らえ乖離!」

「危なっ!」

乖離はすかさず回避行動に移り私の蹴りは紙一重で躲された。しかし炎を纏っていたことで多少なりと乖離の慌てた姿が見えた。

「何すんだ妹紅!」

「私を馬鹿にした罰だ!燃やして灰にしてやる!!」

私がそう言い放つと乖離は「逃げるが勝ち!」と叫んで走り出した。勿論逃がす訳はない。追いかけてとっ捕まえて燃やす!でも乖離走るの速すぎないか?人間離れた速度なんだが……。

しかし追いつけない速度という訳では無い。故に、私は乖離に出来ない飛行を駆使して乖離を追跡する。

「逃がすか!乖離!!」

結局のところ私や輝夜、永琳と言った不老不死は乖離をして完全ではない紛い物ということらしい。それがどこまでの完成形であるのかは私には分からないが、私達の知らない不死の領域があるということとは理解した。

不老不死となって千年以上生きて来た。嬉しい事や楽しいこと以上に、悲しい事や苦しい事が多かった。もう何度も死にたいと考え、あらゆる死に方を試みても全てが失敗に終わった。生きる事に絶望し、死ぬことだけを渴望し、その合間に憎き怨敵と殺し合った。

永遠に続くこの命尽きる事は無く、幾星霜と時が経とうとこの身が変わる事は絶対に無い。

だけど最近、生き続けて良かったと思うことが出来た。友人である慧音に言えば泣いて喜ばれるかもしれない。

それはとある外来人との出会いだ。……彼は元不老不死で、数多の戦場を乗り越えその地に立つ。その立ち振る舞いは歴戦の猛者を思わせない程に優しく、傍にいと心安らぐ気分だ。

しかし彼には優しさと同じく、人間ではありえないほどの非情感を備えているように見える。まるで機械の様に物事を全て割り切っているようにだ。

私の想い過ぎであればいいのだが、過去の話を聞くとそのイメージがより鮮明になってくる。

それでもだ、彼は私とは違って自身がどうあるべきなのかよく理解している。行き着く果ての無い私とは対照的に真つ暗な世界に自らの意思で進んでいる。その姿は私には眩しく、お手本みたな存在に見える。

だからこそなのかな……。彼の前に立っているだけで動機が激しくなったり、名を呼ばれるだけで幸福感を感じてしまうのは。

私もバカじゃないからね、もうこの感情には察しはついている。きつと私は……強く、儂く、全てを受け入れてくれそうな彼に……氷鉤乖離に恋をしているんだと思う。

でない、こんなにも笑顔で追いかけてたりなんてしないから。

「待て乖離いい!!」

「ぬおおおおお！いつまで追ってくるんだよお前!?!」

「永遠にだ!」

「永遠に?!」

そっ、永遠に  
♡

## 日常編

### 三十話 刹那の対峙

#### S i d e サグメ

月で起きた大異変が終結して早数か月。地獄と地上、月を合わせた三つ巴の戦争は博麗の巫女とその愉快的仲間たちによって幕を閉じた。あれ以来、月では大きな動きがある。というのも、あのメチャクチャな女神・『ヘカーティア・ラピスラズリ』と首謀者である元月の民、『純狐』がもたらした被害が甚大であった為地上に資源採取に行こうというものである。

無論の事だが、私はそれには強く反対した。第一、今回の異変は我々月の民の蒔いた種であり、その後始末を怠った自己責任が生んだ結果だ。しかもそれを博麗の巫女に手を借りて解決してしまったという始末。

しかし頭の固い月の上層部はそんなもの勝手に地上の民が解決してしまった事に過ぎないと開き直る始末だ。自分たちの不備を棚に上げて地上の民への恩義を掌返しとは、なかなかどうして私は殺意と憎悪が湧いた。

我々月の民にとって月を守るのは絶対であり使命でもある。それ故に月を守る為ならば手段を選ばないというのも分からなくは無い。だがここまで愚かで矮小だと自分が何のために戦い命を捧げているのか分からなくなる。

だいたいの話だ。もしその地上に赴き資源採取をしたとして、何か問題でも起こしたらどうするとか……。選抜メンバーには綿月姉妹が選ばれているらしいが、彼女達も知っている筈だ。月の民が地上で何か問題を起こせば、即座に星の抑止力が起動し今度こそ月は崩壊するであろうということ。

それにだ、万が一何事も無く資源採取に成功したとして、今度はあの妖怪の賢者が出て来るだろう。それは何故かって？そんなもの決

まっている。表の世界には行くことが出来ないで、裏側の世界である幻想郷に行くからだ。表の世界では色々と制約付くので、あまり縛られない幻想郷に赴くのだ。

だからこそ、きつとあの妖怪の賢者は黙っていないだろう。もしかした月と幻想郷とで第三次月面戦争勃発になりかねない。まあそうなったとしても、月が負ける事はないだろうけど……。

問題はそこではなく、やはり月側の礼儀知らずというところだと思う。まったくもって、自分たちの不備を認めないのは如何なものか。……それに、今回の異変のみではなく、いつぞやにもあったオカルトボールがどうかいう異変も元を辿ればこちら側が起こした事らしいではないか。もうこんな月嫌なんだが……。

「と、こんな感じ?」

「ハ、ハア……?」

私のある種の愚痴を現在、地獄の閻魔である四季映姫に聞いてもらっていた。当の四季映姫はというと、困ったような、呆れたような口ぶりで相槌を打つ。面倒くさがってはいないようだが、なんとも言えない反応。

「まあ、大まかな事情は分かりましたが……それで一体どうするおつもりなのです?」

「特に決まっていはいない。けれど、出来ることなら力を貸して欲しい」「そうは言われましても……」

四季映姫は一層困ったような口調で返答する。地獄の閻魔に天津神から助力を要請するなど前代未聞だが、こうでもしないと月が色んな意味で危ないので仕方がないと思う。私だってこんな事はあまりしたくない。

「私は閻魔ですので、公平な立場を維持しなければならない身です。独断で月に加担することはできません」

「どうしても?」

「どうしてもです」

ケチな閻魔様なこと……。でも仕方ない、彼女も彼女で色々大変なのだろうから。部下からの不満とか、上司からの圧力とかで振り回されていそうだし。大体立ち位置は私と同じ、中間管理職ってところかしら。

「しかし、月面戦争が起こりかねないというのであれば私も取るべき行動が変わりますね」

おそらくその言葉の真意は単純に、月面戦争が勃発するとヘカーティアが面白半分で参戦してくるので、その後処理が面倒なのだろう。あの面白い女神のことだから間違いなく現れるでしょうね……。互いに似た立場であるから、同情してしまうのは仕方ないと思う。

まあでも、四季映姫は閻魔だから月面戦争が勃発したとしても公平に両者を裁くでしょうね……。それでも頭の固い月の上層部はあーだこーだと喚いて潔く閻魔の裁きを受け入れそうにはない。

「あなたはあのヘカーティアが遊び半分で月面戦争に出て来る事を恐れている?」

「ヘカーティア様ですか……。ええまあ、あの方は地獄の総括者であるにも関わらず気分屋ですのでね」

すぐく分かるその気持ち。月の重鎮達も無駄に権力振りかざすクセに興が削がれると仕事を丸ごと部下に押し付けて逃げ出すようなろくでもない連中しかいない。やはり私と彼女は似ている。

「しかし私が恐れている……。いえ、面倒なのはヘカーティア様もあります、最も危惧しているのは月面戦争が起こってしまった場合、『星の抑止力』が発動するかもしれないということですよ」

「……星の抑止力」

「星の抑止を担う少年とは一度ならず二度、三度と交えたものですが……。ハッキリ言って私や神々が太刀打ちできる相手ではありません」

ん」

四季映姫は悔し気に、それでいて不愉快気味にそう吐き捨てる。

……知っている。私もその星の抑止力と一度戦い、絶対的な力の差を体感しているのだから。あれはもう妖怪とか神とか、そんな次元を遥かに超越した異次元の存在。生命といカテゴリーに所属している以上、あれに相対できるものなど居ないとさえ思わされる。というか、八意様から聞いたけど星断剣って何？万物万象全てを崩壊させるなんて意味分かんないんだけど?!

「……何の顔芸ですか?」

あれ?顔に出てたのかしら……。それは見苦しい姿を見せてしまったようね。でも仕方ないとも思う。あの時の事を思い出せば思いつくほどに力の差と自身の劣等感が蘇ってくるのだから。

星の抑止力を担う者の強さは我々では計り知れないし、そもそも相対することだって不可能に等しい。おそらく、八意様でようやく同じステージに昇れるぐらいでその先の世界に踏み込むことは出来ないと思う。例えば同じステージに昇れたとしても彼は安易にその先の次元へ進出できるのだから。私のように神格を上げるようなパワーアップとは異なり、執行者は星の依り代……いや、もはや星そのものとしての猛威を振るうパワーアップだって可能だろうし。

「しかし、困ったものですね。……何故このタイミングであの男が幻想入りしてくるのか」

「あの男?」

四季映姫から放たれた言葉に疑問を抱き問いかける。すると彼女は一層表情を暗くさせ、深くタメ息を吐いてその者の名を口にした。「氷匏乖離ですよ……。まったく、何故よりもよって彼が幻想入りなどと」

一瞬、頭の中が真っ白なペンキで塗りたくられたように空白に変わってしまった。その名を忘れる筈も無く、その名を愛おしく感じなかったことも無く、ただただひたすらな愛情を捧げた者の名が四季映姫から告げられた。真に美しく、気高き星の守り人……『氷匏乖離』という名を……。



そんな思いに耽っている私を他所に、四季映姫は一枚の紙を取り出した。

「数日前に八雲紫から新たに一人の人間が幻想入りしたと連絡がありました、このような資料を送って来たのです」

そう嫌々そうに顔をしかめながら、私にその資料であろう紙を渡してきたので、一応確認を含めて目を通しておくことにする。

名は氷鉋乖離と書かれており、種族は人間。職業は今のところ無職とのことらしい。実年齢は不明ではあるが、肉体年齢が人間の18歳で固定化されているので18歳とのこと。

精神ともに常人を遥かに超えた意思を持ち、時には機械のように冷酷になることがあるらしい。人妖共に個人的には好いており、誰でも分け隔てなく接するとのこと（尚常識は弁えている）

通常の戦闘能力は鍛えられた人間程度ではあるが、一度力の蓋を開けると大妖怪クラスを秒殺できる程の強さを兼ね備えている。その領域は人の身でありながら神に匹敵する。ただ、女性経験が乏しく色仕掛けにはめつきり弱いのは一種の弱点。

色々と詳細は抜いたけれど、この資料に書かれている人物は間違いなく乖離だ。あれほどまでに細かく記されていていれば間違いない。いいし。

乖離が月を去ってからもう千年以上は経つけれど、時間とは思ったよりも早いものなのね……。数万年と生きて来た私にとっては寝て覚めるぐらいの感覚でしかなかったけれど、やはり嬉しいものは嬉しい。これを依姫たちに報告してやるとキット喜ぶわね！そうと決まれば……。

「おや、どうされましたか？」

「急用を思い出したから帰るとするわ」

「そ、そうですか……」

四季映姫に愚痴＋相談事に対する礼をして、私は地獄の門を抜けることにした。

道中は薄暗く光を灯していないと一メートル先も見えない。光を灯せば灯したで、怨霊の類かそれともただの幽霊か……光を求めて

やってくる。

そんな幽霊たちを無視して突き進んでいると、強大な神力を感じ歩を止める。

薄暗い中でも神々しく輝く紅い髪を靡かせ、今一番遭いたくない人物と直面してしまった。

「あらん？月の天津神がこんなところにいるなんて珍しいわね」

「ヘカーティア・ラピスラズリ……」

私の明らかに嫌そうな態度も何処吹く風のように無視し、ヘカーティア・ラピスラズリは相変わらず含みのある笑みで問いかけて来る。

「映姫ちゃんに何か用でもあったの？」

「あなたに言う義理があるの？」

「無いけど、別に答えてくれてもいいじゃないかしら？」

素晴らしいながらも、相も変わらず人をイラつかせるような含み笑いを浮かべる。前回対峙した時もそうだが、やはり私はこの女神と一緒にいるといただけですこぶる気分が悪くなりそう。何故なら、この人を子馬鹿にした態度がとても不愉快に感じるからだ。

「私は月に帰ると……そこを退いて」

「ん、どうしようかしらねん？」

瞬間、私は体に流れる神力を開放した。

空気が固まり、光に寄って来ていた霊たちは私が開放した神力に当てられ霧散していく。完全に臨戦態勢に入った私を前にしても、ヘカーティア・ラピスラズリは尚も余裕の笑みを崩さない。

「退かないのであれば……押し通るまで」

殺意を剥き出しにし、右手をヘカーティア・ラピスラズリに翳し神力の弾を突き付ける。

「あら、怖い怖い♪そんな目で睨まないでよ」

そう言っただけなのに、まるで心が籠っていない。現に、ヘカーティア・ラピスラズリは汗一つかかずにヘラヘラと笑っている始末。……まるで遊ばれている気分だ。圧倒的な力の差があるのは理解しているが、ここまでコケにされると自分を抑えるのが難しくなるというも

のだ。

右手に集約させた神力の弾を分散させ、無数の弾幕へと変化させる。一つ一つの火力はその昔、乖離と戦った時には及ばないが、それなりの威力は兼ね備えている。

「退く気が無いなら、容赦しない」

「……フツ、冗談よ。やれやれ、月の民は短気ね」

鼻で嗤いながらヘカーティア・ラピスラズリは興が削がれたような表情で道を譲った。

「遊ぶ分にはいいけど、流石に今日この場でとなると映姫ちゃんに何言われるかわかったもんじゃないからね」

仕方ないわねーと、そう呟く彼女を他所に私はさっさとこの場を去ることにした。これ以上関わっていてもいいことは無いし、ストレスが溜まる一方だから。

駆け足でその場を去ろうとした時、不意にヘカーティア・ラピスラズリは小さく囁いてきた。いずれ来るであろう月の未来について……。

「精々余生を楽しんでおきなさいな月の民……。いずれお前たちは地に堕ちる事になるだろう」

そんな声が聞こえた時には、既にヘカーティア・ラピスラズリの姿は無かった。言い逃げにしては随分といい趣味をしている。……言われるまでもなく、近い将来月が地に堕ちることは知っている。

ヘカーティア・ラピスラズリが知っているということは、どうやら彼女にもあの日の『神託』が下ったようね……。

「月はいずれ、星の怒りと裁きによって消滅する……」

おぞましい話だが、それがいつ起こるのか分からない。私はもしかしたら月の民が地上に資源採取に赴いた時にそうなるのではないかと推測している。もしそうであれば、それはおそらく乖離の手によって下される裁きなのではないだろうか……。

どうなるかは分からないが、そんな肝が冷えるような事態にならないことを祈るしかない。

そう思いながら、私は月への帰路に着く。

※※※

「よかったですかご主人様？あんな言い回しで」

「大丈夫よクラッピーちゃん、あの娘もあの娘で理解しているみたいだったから」

「月が消滅するっていう信憑性のない神託ですか……アタイには想像つかないです」

「そりゃそうでしょうね。月が消えて無くなるなんて。向こうの『私』が知れば大騒ぎよん？」

「でしょうね」

「……まあでも、それを防ぐために今私達が動いているんだから大丈夫じゃないかしら」

「だといいんですけどね」

### 三十一話 命蓮寺にお出かけ

#### Side 乖離

とある晴れ日のお昼頃のことである。俺がいつものように自然を堪能しながら、涼しい風に吹かれ昼食を取りながら本を読んでいた時の事。

いつもと変わらぬ日常を送っていると、ほぼ毎日のようにやって来る来客が現れる。無論のことだがこころちゃんである。

「乖離あそぼー」

いつもと変わらぬ元気な声が耳に届き、本を少し下げこころちゃんを確認する。子供らしい足取りで近づいて来るその様はなんだか愛らしいとさえ思える。風に靡かれるピンク色の髪を揺らしながらこころちゃんは俺の下に来た。

「乖離、あーそーぼー」

俺の後ろに立つやいなや、こころちゃんは肩を掴んで前後に揺さぶってくる。飲み物を持っていないからいいものの、食事中に揺さぶらないで欲しいのだが……。

「こころちゃんストップストップ！ちゃんと遊ぶから揺さぶらないでくれ」

そう言うと、こころちゃんはピタリと俺を揺さぶるのを止めた。そのお陰で昼飯吐かなくて済みそうである。見た目は子供といえどやはり妖怪、腕力は人間の比ではない。

さて、落ち着いたところでさっそくこころちゃんの希望を叶えてやりたいところだが、俺には生憎と片付けというものが残っている。

「少し待ってくれないか？昼食の片付けをしなければいけないね」「そうなの？じゃあ待つ」

こころちゃんは縁側にちょこんと座り込み、「早く片付けろ」と言わんばかりに見つめて来る。

せつせと昼食を片付ける俺とは対照的に、こころちゃんは退屈そうに俺が片付け終わるのを待っている。時折奇妙なお面を取り出して

はそれを被り、ジーつとこちらを見つめて来る姿はなんとも言えないものだ。

「ふう、片付いたつと」

ようやく片付けが終了した。

と、一息吐くのも束の間。突如背中に走る痛みと共に俺は数メートル先に吹っ飛んだ。

「痛い……………」

なんとなくではあるが、デジャヴだこの感じ。今回悲鳴は上げなかったものの、いつぞやの宴会でもこれに似た事があつたな。あの時は背中にダイナミックタックルを喰らつた。…………さて、今回はというと。

「乖離、おーそーい」

不満気に吹っ飛んだ俺を見下ろすころちゃん。その表情は相変わらず無表情なのでよく分からないが、彼女の目がなんとなく不満を訴えてきているように感じる。

まあそれはいいとしてだ、何故今回も俺は吹っ飛ばねばならないのか…………。

「あんまり遅いから蹴っ飛ばしてみたよ♪」

理不尽です。とても理不尽に思います。昼食と優雅な一時を奪われた挙げ句揺さぶられて吐きそうになったり、片付けが遅いという理由で蹴り飛ばされたり、踏んだり蹴ったりであるな！

「可愛く言ってもアウトです」

「もっかい蹴りたい？」

何故そうなるのか…………。というか俺に一体何の責があるのか？待たせてしまったことはすまないと思うが、いくらなんでもそれだけの理由で蹴られる意味が分からない。ころちゃんってこんなに暴力的な娘だったかな。

「それは流石に勘弁してほしい。てか、蹴られたら遊んであげられなくなるよ?」

「そっか！じゃあ蹴らない」

単純思考の子供はチヨロイぜ！なんて言う気は無いし思いもしな

い。とりあえず蹴られずに済むのであれば何でもアリだと思う。

「じゃあ早速遊ぼう！」

「いいけど、何して遊ぶの？」

「乖離は何して遊びたい？」

そんな事を聞かれても困るのだが……。遊びたいのは俺では無くこころちゃんではないのだろうか？急に何して遊びたいとか聞かれても出て来ないしなあ。したいことがあるとすればさっさと部屋に籠って読書がしたい。

なんて考えていても仕方ないな。遊びたい事がある訳ではないが、ここは無難に鬼ごっここと言っておこうかな。

「そうだな、鬼ごっこなんてどう？」

「二人で出来るとか思ってるの？」

「やろうと思えば……」

「乖離はバカなの？」

この言われようである……。折角案をだしてやったというのにこころちゃんは呆れたように息を吐く始末。こころちゃんなんか酷くないか俺の扱い……。

「ならこころちゃんは何かしたい事でもあるのか？」

「命蓮寺解体ショー」

この娘ほんとどうしたの今日。いつもはこんな感じじゃないのにさ……。

因みに言つて、命蓮寺解体ショーは却下だ。そんな事したら俺が聖さんに殺されそうだし……。

ん？でも少し待つてほしい。そういえば宴会時に聖さんと別れた時に遊びに行くつて約束したんだっけな。よし、それで行こう！命蓮寺に遊びに行こう。

「こころちゃん、命蓮寺に行こうか」

※※※

上記の思い付きで、こころちゃんの案内もあり来てみました。命蓮寺……。

「アカイのお〜」

第一印象がそれである。幻想郷に來た初日にあの高台で見た事はあつたが、改めて見るとなかなかサイズと規模だ。門にはしつかりと『命蓮寺』と書かれてあるし、立ち入りの際の注意事項などの看板もちゃっかりと用意されている。

「乖離、入らないの？」

呆氣に取られている俺を他所に、こころちゃんはさつさと門を潜り敷地内に入っていた。

「そいじや、お邪魔します」

門を潜りいざ入門。

したのはいいものの、辺りに見える者達は妖怪ばかりで人間がまるでいない。普通の寺ではないと思っていたけど、まさかこことは思わなかったかな。幻想郷縁起で読んだことがあり、妖怪寺と呼ばれていたがまさにその通りとは驚いた。

付け加えるのなら、この寺に來ている妖怪達は決して弱くない者達ばかりだ。皆がそれなりの実力を備えた者であるのは見たら分かる。……だがしかし、ここまで悪意や敵意を抑えている妖怪達がいるとは珍しいものだ。通常妖怪には表立って人間以上の悪意と敵意が出ているものであるからな。無論のことだがそれは紫を始めとした者達も例外ではない。

「ねえこころちゃん、ここに居る妖怪達は特別な修行でもしているのか？」

「うん、ここに居る妖怪達は皆聖の弟子みたいなものって聞いている」

「ほうほうそれはそれは」

妖怪が人間を師事するなんて中々珍しいものだ。逆ならいくらでもあつたんだがな。流石は大魔法使いってどこかな？

「げ、何であんたがいんのさ……！」

突如として聞こえた驚きを含んだ嫌々そうな声色。

振り返ると、そこにはいつぞやの異変で出会った主犯格の少女が苦



虫を潰したような表情で立っていた。

「久しぶりだなぬえ」

「おひさ〜」

俺の挨拶に続きころちゃん片手を挙げて軽く手を振った。それを見たぬえは目を逸らしながらタメ息混じりに近づいてきた。

「なんでいんのよ……」

如何にも嫌そうな態度を隠そうともせずぬえは目を細め問いかけて来る。答えるべきことは単純に遊びに来たということぐらいしかないのだがなあ……。

「聖さんに遊びに来てって誘われてるからかな？」

「私は案内役」

「ふーん……」

相変わらずの目付きで興味無さげに相槌を打つぬえ。そんな俺が来たのが気に食わなかったのだろうか……。もしそうなら俺はとっととお暇して我が家でゆっくり読書に耽っていたいのだが。

それも一つの手とは考えたが、やはり折角遊びに来たのだから聖さんの顔を見てからでも遅くはないだろう。

「それにしても、やっぱり妖怪の気配が多いなここは」

「伊達に妖怪寺だなんて呼ばれてないからな」

そう呟きながらぬえは俺に背を向けて歩き出した。

「聖に会いたいんでしょ？ついてきなよ」

俺ところちゃんは一度目を合わせ意思確認を取る。

こころちゃんはコクコクと首を縦に振るので、俺は一つ息を吐きぬえの後に続いた。

ぬえに案内されながら、俺ところちゃんは寺の中を徘徊していた。あちこちに見える仏像や、廊下に支え柱はきちんとは掃除が行き届いており清潔感が出ている。それでいてどこか不思議と気分が落ち着く感じがする。こんなところで読書なんてしたら最高なんだろうなあ……。

歩いてどのくらいしただろうか、階段を四つか五つほど上がった先

に見える一際変わった襖が見えた。それを確認すると、道中一度も振り返らなかつたぬえがこちらに振り向き、先に見える襖に指を指した。

「あここに聖がいるから」

「案内ありがとうなぬえ」

「別に……」

ぶつきらぼうに答えたぬえは来た道に戻り始めた。

「乖離、私はぬえというね？」

「はいよ」

ぬえを追うように、こころちゃんも来た道に戻っていった。

さて、一人になってしまった俺ではあるがどうしたものだろうか……。目前に見える襖に手を掛けるべきだろうか迷う。中には数人の妖怪と人間(?)がいるようだが、一切話し声が聞こえてこないということは何らかの業務でもしているのだろうか……。

ここで油を売っている訳にもいかないのです、失礼を承知で声だけでも掛けてみるとしようか……。

襖の前まで移動した俺は、深呼吸をして声を一つ掛けてみる事にする。

「すみません、聖さんはいらつしやいますか？」

襖越しに声を掛けて数秒、中からこちらに歩いて来る足音が聞こえる。少しの間と共に襖が開かれた。

中から出て来たのは、ネズミのような耳をした灰色の髪の毛が特徴的な少女だった。

「おや客人かい？すまないね、聖は今精神統一の最中でね、もう少し待ってもらえるかい？」

「そ、そうですか……」

どうやらお取込み中だったようだ。しかし精神統一とはまた風情のあることをするんだな。流石は宗教家というところなんだろう。

それはそうと、精神統一がいつまでかかるかは分からないが、しばしの間待たねばならなくなった。さてさてどうしたものかねえ。

と、思っていたところ。

「どうだろう？聖が精神統一を終えるまで中で見物でもしながら待たれるかい？」

「じゃあそうします。けど、いいんですか？」

「心配ないさ、ここには悪い奴なんていないからね」

そういう問題ではなく、部外者にそういった神聖な義を晒してもよいものだろうかという問いだったのだがな。まあ折角入る許可を得たのだし、お言葉に甘えておくべきだろう。

「そうそう、名を聞いてもいいかい？私はナズーリンだ。見ての通り妖怪さ」

「俺は氷鉤乖離です。まあ、言うまでも無く人間です」

簡単な自己紹介を済ませ、襖を潜り部屋の中に入れてもらうとそこには沢山の巻物や御経が綺麗に並べられており、部屋の中心には宴会の夜に出会った住職こと聖さんが大きな大仏と向かい合うように座っていた。

精神統一とは先程ナズーリンさんから聞いたが、正直驚いた。あれは精神統一なんてレベルじゃない。最早無我夢想の領域ではなからうか……。俺がこの部屋に入ってきたというのに、聖さんは全く微動だにしていない。自分の世界に入っているという言葉があるが、彼女の場合は自分の世界を意図的に創り出し外部を遮断しているのだろう。そんな真似が出来る者はこの幻想郷にもそう居ないだろうな。

精神統一に耽っている聖さんから少しばかり目を放し、俺は周りを見渡しながら用意してもらった座布団の上に膝を下ろす。

この部屋には聖さんとナズーリンさん以外にも、数人の変わった者達がいた。一人はセーラー服を着て室内だというのに帽子を被った少女。何故に船長帽なのかは知らない。

二人目は如何にも虎を思わせる恰好をした女性。見る限り危険な感じはしないが、内に秘めている妖力が彼女の實力の高さを物語っている。……不用意に手を出さない方がいいだろう。そもそも出さないけど。

三人目は……何だろう、見た瞬間に紫が浮かんだのは……。俺と目が合った瞬間口元を怪しく歪ませる女性。大きな狸のような尻尾を

持ったこの女性は、なんとなくではあるが妙な事を企んでる時の紫に似ている……胡散臭さそうなのが特に……。

ある程度この部屋にいる者達は把握した。一人俺の苦手なタイプの女性が居るがそこはまあ気にしないでおこう。このまま聖さんが精神統一が終わるまで待つのはいいとして、特にすることの無い俺はどうしたものか……。一緒に精神統一をして時間を潰すのもやぶさかではないが、多分寝てしまいそうになるだろう……と思う、多分。なんて事を考えている間に、どうやら聖さんの精神統一が終わったようだ。

「お疲れ様です聖」

「ありがとうございます星」

星と呼ばれた虎を思わず女性はタオルを聖さんに手渡し、それを受け取った聖さんは顔を拭いている。そんなに汗でも掻いたのだろうか。だとするならば流石の集中力だ。

「お疲れ聖」

「ありがとうございますナズーリン」

「終わって早々だが、聖に客人だよ」

「あら、今日は客人の予定は入っていない筈ですが……」

聖さんは不思議そうな表情で後ろに居る俺の方に振り向いた。

すると、驚きを含んだ嬉しそうな表情に変わり急激に接近して来た。……近い近い。

「乖離さん！お久しぶりです！遊びに来てくださったのですか？」

「え、ええまあ……」

突然の空気の変わりように、思わず苦笑いが出てしまう。さっきまで神聖な義を行っていたとは思えないなあ……。

聖さんの急変に驚いたのは俺だけではなく、どうやら周りの方々まで困惑している様子だ。まあ急にテンションが跳ね上がった人を見れば誰だって驚くよな……。俺だって驚いたし。

「聖、知り合いだったのかい？」

「ええ、この方は氷鉋乖離さんと言って先の異変でぬえを止めてくれた方ですよ」

「ほほう、君がぬえの言っていた……」

ぬえが何を言っていたのかなんとなく察しがついた。なんせナズーリンさんのなんとも言えない表情を見ればな。おそらくいらんことでも吹き込んだらろう……。

それはまあいいとして、向こうは向こうで何やら話し合いをしているようだ。

「聖、そこの方は先の異変でぬえを止めて頂いた恩人なのですよね？でしたら出来るだけこの命蓮寺を気に入って頂けるようおもてなしをして、あわよくば入信していただきましょう」

「それがいいね。見たところ妖怪に対する差別意識もないようだし、彼が命蓮寺に加われれば大きな核心となる筈」

「それにさ、意外とイケメンじゃん？ 私結構好みかも」

「よいではないか、入信させてはどうかの聖殿？」

などと言った事を五人こぞって耳打つし合っているようだが、まったくの丸聞こえだという事に気付いていないのだろうかこの宗教家達は……。俺は宗教間で存在する物事の捉え方や解釈は好きだが、だからと言って入信などする気はないのだが……。

四人に言い寄られる聖さんというのと、以前俺が勧誘を断っているのでなんとも微妙な表情だ。おそらく無理に入信を勧めて俺の機嫌を損ないたくないようである。まあそんなもの豊聡耳の勧誘ラッシュで慣れているのでどうとも思わないのが本音だ。

「と、とにかく今日は折角ですので楽しんで行ってください乖離さん」  
あ、逃げた。四人からの圧力に耐えきれずか、聖さんは顔を赤くし上記の言葉を俺に投げかけて来た。その一方で不服そうな四人は親指を下に向けて「ブーブー」とブーイングを飛ばす。

それを聞いた聖さんは魔力を開放し、

「南無三三三」

という掛け声とともに四人にキツイ拳骨を叩きこんだ。クリーンヒット、一発？、〇。自業自得だな。

唸り声を上げ頭を抱える四人を無視し、聖さんは部屋を後にしようとし。

「部屋を変えましょうか？客間でしたら将棋や囲碁くらいなら置いていますよ」

と気を遣ってくれた。勿論乗らないわけがない。

「ええ、是非」

俺は聖さんに続くように部屋を後にした。

その後はこころちゃんやぬえを交えて将棋や囲碁を楽しんだ。

……無論の事だが俺の一人勝ちで終わったがね。

## 三十二話 神様との出会い

Side 乖離

数日前に命蓮寺に遊びに行つてからというものの、俺の日常は変化を遂げた……。

いつもと変わらぬ日常である筈なのに、とても何かが違う。送る日々は同じであつてもその日に起こる出来事は俺が想像していたものとは違う。

いつものように朝6時に起床して7時半までランニングをしていい汗を掻きそれを朝風呂でスッキリと流す。それが終われば朝食を摂りお昼になるまでゆつくりと読書に耽る。そしてお昼になればお昼御飯を食べてまた読書に耽る。晩方も同じように……。後は風呂に入つてゆつくり床に着いておやすみなさいだ。

そんな感じの俺の日常は、とある者達によつて崩壊を遂げつつある。しかもだ、俺の日常を崩壊させようとする者達はただただ暇だったという理由らしいじゃないか。

まったくもつて理不尽だと思う。ストレスが溜まつて胃袋が崩壊したら笑つて泣こう……。

そしてその俺の日常を脅かす者達というのが……。

「王手なりー!!」

「グワー」

「輝夜アアアアアアアツツ!!」

「妹紅オオオオオオツツ!!」

「……………」

卓袱台を挟んで将棋を嗜むぬえとこころちゃん。液晶テレビの画面にゲームをしながら吼え合う妹紅と輝夜。この状況に俺と同じように色々と絶望して言葉を失つてしまう掃除中の藍。

以上の五人の勢で、俺の日常は崩壊を遂げてしまったのである。

(尚藍は除くものとする)

「ハア………」

どうしようも無い状況にタメ息が出てしまう。本来この時間帯であれば自室で気ままに茶を啜りながら読書をしていたというのに……。まったく、何故こうなってしまったのだろうか……。

こころちゃんはいつものことだとして、ぬえは俺が命蓮寺に遊びに行つてからというものの毎日のように来るようになった。輝夜はまあ……。あれだ。妹紅は最初の方は料理を教えて欲しいということまで来ていたが、輝夜が来るようになってからというもの我が家のテレビゲームにご執心となった。藍は完全に家政婦さんみたいな感じかな？多分週三回のペースで朝食を作りに来てくれるからありがたい。掃除もしてくれるし。

とまあ、そんなこんな日々が続いている訳だが、俺のストレス発散兼至福の読書が奪われてしまったのでどうしたものかと考えている。いつその家を空け渡して俺は誰も居ないような場所に新居を創つて細々と暮らしたほうがいいかもしれない。だとしても絶対この連中は追っかけて来そうなので却下かな……。

「くそ！もう一回だ!!」

「ぬえ弱いぞ〜」

「妹紅オオオオオオオツツ!!」

「輝夜アアアアアアアツツ!!」

「人様の家だというのに少しは自重できないのかこのバカ共は……」

平常運転でハツチャけた四人とは対照的に藍は呆れた様子で頭を抱えた。俺にしてみれば、こうして俺のことを気遣ってくれるだけでもありがたい事なんだよな。

「こうなったら……紫様に報告してこいつら全員スキマ送りに……」

おっと、今藍からとんでもない言葉が発せられた気がする。俺の聞き間違いでなければ紫に報告して俺の家で暴走している四人をスキマ送りにするだのなんだの……。それは流石に可哀想だと思っただが……。

「……どうしよう」

特に名案が浮かんでくる訳でもないが……とりあえずこの状況を



なんとかかしたい。でなければ我が家が地獄絵図になりかねない。人里近隣の森で四人の有名人が同時失踪なんて洒落になんないからな。

とはいえ、本当にどうしたものかなく、読書を奪われたのは痛い。それでもこうして冷静な考えを巡らせていられるのだから当分は大丈夫なんじゃないだろうか。度が過ぎれば流石に俺もキレるだろうけどね。

「これ収集つげんの面倒だし釣りに行こうかね〜」

「乖離殿、お出かけですか？」

「まあね、少し近くの川で釣りして来るよ」

「少々お待ちください、直ぐに釣り装備一式を準備いたしますので」

「いや、餌と竹竿でいいよ。別にそんな大物を狙っている訳じゃないし」

「そ、そうですか……」

俺がそう断ると、藍はどこか残念そうに肩を落とした。ありがたいことだが、残念ながら俺は妖怪クラスの腕力を備えている訳では無いので片付けやら持ち運びなどが面倒なのだ。

準備をして玄関を出ようとした時、不意に藍に呼び止められた。

「乖離殿、これをお持ちください」

そういつて藍から手渡されたのは風呂敷に包まれた何かだった。中から良い匂いがしてくるのでおそらく俺を気遣って弁当を拵えてくれたのかもしれない。

「藍、これは？」

「お弁当です。折角釣りに行かれるのですから、昼食も必要かと」

予想通りだ。やっぱり弁当を作ってくれたのか……。本当にわざわざ申し訳ないな……。釣りの準備に加え弁当までとは。

「ありがとう藍、お昼にはありがたく頂くとするよ！それにしても、藍はいいお嫁さんになりそうだね」

「お、おとおおお嫁さん……。ですか？／＼／＼／＼」

「ああ、きつと藍と結婚できる奴は幸せ者だろうよ！それじゃ、行ってきます」

「い、いつてらっしやいませ……／＼／＼／＼」

顔を熟れたてのリンゴの様に赤くした藍に見送ってもらいながら、俺は玄関の扉を開け外に出た。

「くっそー！全然勝てない!!」

「ぬえ弱い」

「妹紅オオオオ!!」

「輝夜アアア!!」

「貴様ら少しは自重しろオオオツツ!!」

なんて叫ぶ声が聞こえた気がする……。

※※※

家から歩いて十五分といったところだろうか。俺は近場の川に辿り着き、現在釣りの準備をしていた。

針に餌をくっ付け水深の深い場所に目掛けて投げる。するとポチャンと小気味よい音を立て餌を付けた針が川の中に沈んでいく。これ以後は釣れるのを待つだけだな！

「やっぱ、釣りは男のロマンだよな」

こう、なんというのだろうか。自然を堪能しながら魚がヒットするのを優雅に待つ。釣れなければ釣りなどただのマゾゲーなどと言う輩は多いが、俺はそうとは思わない。待つことも釣りだし、いつ釣れるのか期待を寄せて待つのは時間を忘れさせてくれる。それに期待を寄せて釣れた時の喜びは何にも代えがたい。

と、そんな事を考えている間に早速ヒットしたようだ！

「お、これはなかなか引きが強いぞ?」

先程までしなっていた糸が棒のように真っ直ぐ伸びる。ヒシヒシと手に伝わってくる綱引きのような感覚。

川を覗いてみると立派な鮎が懸命に逃げようともがいている。

……これこれ！この感覚が釣りの醍醐味ってもんだ。魚と釣り人の我慢比べと動きに合わせた駆け引き！この手に汗握る真剣勝負が最高に楽しいんだよなあ釣りって。

「よつとー」

竹竿を振り上げ活きの良い鮎が綺麗な鱗を反射させ水面から飛び上がってくる。そこに上手く合わせて片手で糸を掴む。そうすると再度川に落ちることなく魚を上げる事が出来る。

竹竿を置いて鮎に未だ掛かっている針を抜いてやり、用意しておいたクーラーボックスに収納する。

「はは、これだから釣りはやめられないよな！」

早速一匹釣れた幸福感に浸りながら、俺は竹竿を拾い上げ再度針に餌を付ける。

もう一度川に投げ込もうとした俺だが、不意にその手を止める。

「誰かそこに居るのか？」

背後から感じる気配。今まで感じた事の無い気配に若干の警戒をしながら、俺は振り返ること無く問を投げかける。すると、草が揺れる音と共に俺の背後に立つ誰かが現れた。

「ごめんなさいね？見ていて少し面白かったものだから」

声色からして女性。それも今まで聞いた事の無い声だ。その声はどこかこころちゃんやテンションが高い時の輝夜のように楽し気な雰囲気を感じた。

ずっと背を向けている訳にもいかないので、俺は背後に立つ女性を確認するために振り返る。

「!?」

振り向いてビックリ、最初目に入ったのは艶やかな紅色の髪を靡かせ、真紅の瞳を爛々とさせている少女。そして何に驚いたかという、その頭上に乗せた帽子？のような赤紫色の球体と奇抜な服装だ。黒いTシャツに太い白文字で『welcome hell』とデザインされている。

「あらん？どうしたの固まっちゃって？」

幻想郷に常識は通用しないとは聞いた事があるのだが、ここまでとはな。十人十色、物好きの多い幻想郷でもあんな服装をする者がいるとは驚いた。

長らく固まってしまった俺に痺れを切らしたのか、派手な服装の少

女は俺に近寄って少し強めの口調で問いかけて来た。

「ねえ、聞いている?」

「あ、ああすまない」

我に返り首を二三回横にふる。

失礼を働いてしまった事に謝罪をすると、少女は微笑みを浮かべていた。

「あなた、ここで何をしているの?」

「ああ、えつと……釣りかな?」

「フーン……」

面白いものでも見ているかのように、少女は軽く口角を吊り上げる。なんだかその笑い方は妙な事を考えている時の永琳に似ているような、似てないような……。

しっかし、よくよく観察してみると彼女から感じる力が人間の物ではないというのが分かる。霊力でもなければ妖力でもない。ましてや魔力という訳でもないな……。この感じは間違いなく神の気配――

――神力に他ならない。それもかなり高位に位置する神様だ。

「君は……人ではないね?感じる気配から察するに神様とみた」

「ご名答!私はこちら見えて立派な神様よん♪」

自慢げに、かつ楽し気に神様アピールをし始める少女。なるほど、神様故にその奇抜な服装なのだなと、俺は一人勝手に解釈をした。

一応なんだか長くなりそうな気がしてきたので、俺は竹竿を引っ張り針を川から引き上げて仕舞っておいた。

「ところで、あなたお名前は?」

「俺は氷鉋乖離」

「そう……私はヘカーティア、ヘカーティア・ラピスラズリよ」

ヘカーティア・ラピスラズリ……どこかで聞いた事のある名だった気がするのだが……はて、どこだっただろうか。

なんてことを考えていると、ヘカーティアという名の神様は興味深そうに俺の顔をマジマジと見つめていた。恥ずかしいですはい……。

「えつと、何か俺の顔にでも付いてる?」

「あなた……ただの人間ではないわね？尋常ではない程の『エーテル』を感じるんだけど」

またしても驚いたな……通常神と言えど自然エネルギーを感知できる者は土着神や豊穰の神、または創造神か太陽神辺りの筈だが、彼女はそのどれともタイプが違うというのに、俺の中の自然エネルギーを感知したというのか。因みに西洋辺りでは自然エネルギーをエーテルと呼ぶらしい。

「君は、一体どこの神様だ？自然エネルギーを感知できる神なんて相当限られてくる筈だが……」

「私は地獄の女神様であり、月・地球・異界の総てを統べる神様よん」  
そう得意げに、何の臆面も無く至極当然かの様に彼女は笑う。……ハッキリ言つて冗談じゃないぞ？月・地球・異界を統べる神様？そんなの神話上のどの神よりも高位な存在じゃないか……。神話戦争で幾多の神々と出会い戦ってきたが、ここまで高位の神に出くわすなんて凄いな幻想郷!!

しかし、彼女は地獄の女神様と言つた筈だ……。であれば、あの映姫様とも知り合いだったりするのかな？

「あのさ、四季映姫様つて知つてたりする？」

「映姫ちゃん？知つてるも何も、私の一番部下兼妹みたいなもんよ」

まあ、地獄の女神様だから当然と言えば当然か。しかし、あの堅物閻魔の上司はユーモア女神様とはな……。どうやったらあんな規則or規則が誕生するのやら……。不思議だ。

俺が思考に耽つていると、女神様は俺の肩を軽く叩き、質問を投げかけて来る。

「今度は私から訊くけど、あなたは本当に人間なのかしら？どうにもそんな感じには見えないのよね」

「俺は人間だよ。他とは少し変わっているだけの……普通の人間さ」

こんな事紫に言つたら、『どこが？』なんて聞き返されそうだな。

俺の返答に女神様も紫よろしく『どこが？』みたいな表情で固まつてしまっている。そんなに俺は人間らしくないのかね。こればかりは流石にショックでしかない。

「ま、まあいいわ。ところで、あなた今暇かしら?」

「いや、釣りの最中ですが……」

「私と弾幕ごっこで遊びましょ?」

人の話聞けよ……。俺は男のロマンを楽しむことで手一杯だったのに。やはり幻想郷住人に常識というものは通じないしそもそもそんなもの存在していないようだ。

ただまあ、女神様のお誘いとあらば乗ってやってもいい気もする。何より……強者との闘いほど心躍るものはないからな。

「弾幕俺は撃てないけど、それでもいいかな?」

「撃てないの?」

「うん」

「うーん、じゃあ回避だけに専念して私を興じさせてねん?」

空気が変わる。完全に臨戦態勢に入った女神様は口元をニイ〜つと、三日月状に吊り上げ宙に飛び上がったいく。

そして放たれる紅い弾幕の数々。球体状の物からレーザーのような弾幕がさんざめく降り注がれる。回避にのみ専念して興じさせるとは言われたものの、これは流石に逃がす気が無いとみえる。

迫りくる弾幕の嵐の前に、高鳴る衝動が抑えられないのが分かる……。ある意味では絶望的な状況だが、この程度の危機など飽きる程体験している。そしてそのどれも突破して来た。

………魚釣りはやめだ。ここからは単純な戦いでストレスを発散しようか。

右腕に自然エネルギーを集約させ、紫色に輝く愛刀を顕現させる。一閃の構えをとり、刀に自然エネルギーを注ぎ込む。すると先程まで光り輝いていた刀は紫色の波打つオーラを放ち始める。

既に俺と女神様が放った弾幕との距離は初弾接触一メートルあるか無いかの距離まで接近している。だがそれでも、力を開放した俺には酷くその弾幕が遅く見えた。

迫りくる弾幕を切り裂くのにわざわざ全力を使う必要性などない。たった一振りあれば十分だ。

一閃、至極単純な一閃を放つ。振られた刀の剣先は、弾幕を易々と

空気を切り裂くかのように両断した。ソレは連鎖的に迫りくる無数の弾幕を巻き込み、人の目では到底負えない速度で空へと駆け上がった。

切り裂かれた弾幕は爆発四散していくなか、弾幕を放っている張本人たる女神様はさぞ楽しそうに笑っていた。俺の耳にもハッキリ聞こえるように……。

「凄い凄い！私の弾幕を意図も容易く斬っちゃうなんて。フフン、合格よん？私もちよつとだけ力上げちゃおうかしら」

「ちよつとと言わず全力を出せばいいじゃないかな？」

「自惚れてるのかしら？人間風情を相手に神様が全力を出しちゃその時点で私の敗北よ？」

「そうかい……なら精々後悔しないようにな」

再度刀に自然エネルギーを籠める。先程に比べれば少し弱いが、これで少しは弾幕ごっこ風に来るかもしれない。しかし、この技を使うのはいつ以来だったかな……。

「深奥抜刀【夢限乱舞】」

刀から放つ斬撃が幾つもの層に別れ、列を乱すかのように空へと散っていく。一刀より放たれる派生した斬撃が数十存在する中、一秒に約十二回斬撃を飛ばしているのもはやそれは弾幕と言っても過言ではない量の斬撃が女神様へと放たれる。

「なんだ、弾幕撃てるじゃない！」

「生憎とこれは弾幕ではないんだよ……。実戦用に編み出した剣技の一つさ」

俺の放つ無数の斬撃を女神様は避けることなく、自身が放つ弾幕で相殺しつつ上記のように会話を愉しむ。

「へへ、人間技も捨てた物じゃないのね」

「人間技を舐めてもらっちゃ困るねえ、一神話において人の技は神をも撃ち落とすほどに至るんだし」

「そうなの？じゃあもう一つ驚かしてちょうだいな♪」

満面の笑みでそう言うやいなや、女神様は一枚のカードを取りだす。間違いなくスペルカードだろう。それも何故だかは分からない

が、随分と危険な気配を感じる。

女神様から湧き上がる膨大な神力は更に一層出力を上げ、一枚のスペルカードに集約していく。おそらく俺も相応な対処をしなければ死を見るかもしれない。

「それじゃいくわよん？精々死なないようにね♪」

彼女の持つスペルカードが色彩を放ち始める。感じた事も無い純粹なまでに強力な神力、これはもしかしくともサグメ以上だ。それに加えに先程までに紅かった髪の色が黄色に変わり始めている。帽子の上に乗せていた赤紫色の球体も髪の色と同じく黄色に変わりつつある。

「月『ルナティックインパクト』」

スペルカードから顕現する月と思わしき巨大な飛来物。どう考えてもあれは弾幕ではないのだが……。

なんて考えている暇はない。あれは明らかに拙いな……おそらく直撃すれば間違いなく命はないだろう。迎撃するにせよ、並の攻撃では突破することは不可能だろう……。

俺は一步足を後ろに下げ、懐から一枚のカードを取り出す。

「クラスターカード……」

クラスターカードを使い、『壊山剣・イガリマ』を用いればあれを迎撃する事は可能だろうが、問題はその後被害だ。イガリマはあまりにも威力が強すぎる勢で力加減を間違えば博麗大結界を破壊し兼ねない。

正に絶望的な状況だ。このまま回避をするにしても最早逃げ切れないだろう。クラスターカードを使わず、かつ博麗大結界に支障をきたさないようにアレを迎撃する方法は……。

「悪いが……少しパーツ<sup>カ</sup>を借りるよ」

久しぶりに行う自身からではなく、周りの動植物から自然エネルギーを供給してもらう行為。これは本来生命の基盤たる精气（オド）から自然エネルギーを精製しているのを無理やり俺に供給させるものだ。なので俺はこの方法はあまり好きではない。

が、今はそんな事言ってる場合じゃないので拘りは捨てるとしま



しよう。

体に流れ込んでくる膨大な自然エネルギー。回路の蓋は既に関開けてある、故に貯蔵も十分に行える。これだけの自然エネルギーを集められるのは、幻想郷が豊かな自然で溢れているからだろう。

迫りくる巨大な飛来物を前に、俺は刀を掲げその真名を開放する。

「神無き世界……人の理をもって真なる業に果てよ！」

【人理の輪／人王隱華】

放つは極大の斬撃。迫りくる月を撃ち落とす人の集業。

放たれた必殺の斬撃は、女神様の放ったスペルカードと衝突し紙を破く音に近い音を大音量で発生させ、粉塵の如く両者の技は消えていった。

「ハアハア、疲れた」

久しぶりにノーマル状態でここまで力を使った気がする。神様相手だったからかな……？永琳相手でもノーマルでここまでやったことないと思うぞ。

刀を地面に突き刺し、そこにもたれ掛かって上を見上げてみると、女神様は案外余裕そうな表情でこちらを眺めている。……正直これまで出会って来たどの神よりも強いんじゃないこの神様？いつぞやの破壊神なんて目じやないぞマジで……。

「あらら？もうバテちゃったかしら？」

全く息も乱れておらず、余裕綽々な声が耳に届く。少しイラつきながら、俺は女神様の問に応じる。

「まあね……あんた超強いな。ひよつとしたら過去一かも」

「当然よん？地獄の女神様……舐めないでね？」

舐めたつもりはないがな……。と、心で呟きながら呼吸を整えて再度立ち上がる。

「さてと、第二ラウンドと行くかい？」

「そのへ口へ口な身体でかしらん？」

「人間、追い込まれた時が一番強いんでね……」

正直結構キツイ……これ以上続けるとなると、俺もマジで覚悟を決めなければならぬかもしれない……。クラスターカード……果て

は『星断剣』を抜くことも視野に入れておくべきかもしれない。だがそうになると、幻想郷が滅んでしまうから大分気が引ける……。

敵意はなく、純粋な闘志のみを燃やし空の上で余裕を振りまく女神様を睨みつける。

睨んだ波いいものの、大して彼女には効果はない。寧ろ俺に睨まれている状況を楽しんでいる様子だ。弱者が必死に強者に噛みつきとうとしているソレに近い感覚……屈辱では無いがなんとも言えない。

見上げている内に、女神様の髪の色は少しづつ元の紅色に戻り始め、空の上で待機していた彼女はゆつくりとこちらに降りて来た。

「お誘いはありがたいのだけれど、これ以上になると色々とマズイんじゃないかしら？」

「まあ確かにね」

俺がそう答えると、女神様は再度興味深そうに俺の顔を覗きこんで来た。

数秒ほど見つめ合った後、女神様はクスリと小さく笑い顔を放した。

「うんうん、やっぱり君は面白いわねん！さっきの斬撃……アレは全力とは程遠いのでしょ？」

「あれ？バレたか」

「そりやそうよ……私だって全力なんて出してないんだもの！」

「君には敵わないねえ……」

「今のあなたなら？」

「……まあ、ね」

どつちにせよ、おそらくクラスターカードを使っても勝てない気がする。この女神様は俺が出会って来た者の中ではダントツで強いかもしれない。真面目に実力は永琳以上と認識した方がいいだろう。

だが、何故かな……この女神様、妙に嬉しそうな表情をしているのは……。嫌な予感がしてくる。

「次にやる時は……お互い全力をぶつけ合いましたろう？」

「おや？人間相手に全力は出さないのじゃなかったか？」

「本来はね……でも楽しい事を前に面倒な拘りは捨てるわ」

「さいですか」

刀を仕舞い、俺は大きく深呼吸をして立ち上がる。

「そうだ、あなた私の友達にならない？あなたといると暇しそうないのよねん♪」

「別にそれは構わないが……」

「やった！じゃあ、乖離クンね！私の事はなんて呼んでくれる？」

「……………へかちゃん、とか？」

「いいわねいいわね♪へかちゃん！友達同士の呼び方って感じがして」

無邪気に喜ぶ地獄の女神様を尻目に、俺はさっさと釣りの続きを始める事にした。

頭を掻きながら、竹竿に新しい針を付けていると不意に抱き着かれたような感覚を背中に覚えた。

「おっと！何すんの？」

そう訊いた瞬間、耳元に生暖かい息遣いの感覚が襲う。慌てて振り向こうとすると、へかちゃんは囁くように言った。

「また、会いましょうね……乖離クン♪」

その言葉が聞こえ、振り返った先にへかちゃんの姿は無かった。それと同時に、抱き着かれた感触も一緒に消えていた。

「何だったんだあの女神様は……」

それだけ小さく呟いて、俺は未だ耳元に残る生暖かい感触を紛らわせるために、釣りに専念する事にした。

※※※

「映姫ちゃん映姫ちゃん！私新しいお友達ができたわよん♪」

「ほう……どのような方なのですか？」

「氷鉋乖離クンっていう、人間にしては随分と強い人よ？」

「ブフォーツツ!!」

その日、閻魔の休憩室で温かいコーヒーを地獄の女神の顔面にぶちまけた閻魔がいたとかいないとか……。

### 三十三話 紅魔館へ

S i d e 紫

午前の仕事が終了したお昼頃、私は乖離様のお住まいにお邪魔させてもらっている。門前払いをくらうかもと緊張したけれど、案外すんなりと入れてもらった。しかもお手製のクッキーとお茶まで出して頂いて……乖離様のクッキーマジ美味し!!

私は客間でのおんびりさせて頂いてる中、家主である乖離様はずっと厨房から出て来ない。何でも、こころがあんまりにもプリンをねだるもんだから料理人魂に火を灯しただいま最高のプリンを製作中とのことらしい。

「プリンか〜」

そういえば、私もプリンを食べた事は数回しかなかった筈。たまに外の世界に出ては買い物をして、ちよつと気が向いたら買って帰ったぐらいだったと思う。でもあんまり美味しかった記憶は無いわね。でも、乖離様を作るのだから結構興味はある。

「少し、覗いてみようかしら?」

好奇心が湧くのは仕方がないこと、だから私は覗き見をしようなどとは考えていない。正面きって突入するに限るわ! だいたい覗き見をしたところで乖離様の気配感知に引っ掛かってシバかれるのがオチだしね。

! そうと決まればやる事は簡単、厨房に向けてスキマを開くだけつと

スキマを開き厨房に接続すると、そこでは乖離様が真剣な表情でボールを抱えて泡立て器を猛スピードで動かしているのが見える。……泡立て器のスピードが最早人間業ではないのはスルーしておきましょう。

「乖離様、お忙しい中申し訳ありません。プリンの出来は如何ですか?」

私がスキマ越しに声を掛けると、乖離様の手はピタリと、電源を

切った機械のように停止した。

「うーん、まずまずかな……。見栄えはよくても味が良くないからね。試作段階だけど、食べてみるかい？」

「よろしいのですか？」

私がそう訊くと、「自己責任で」とだけ返され試作段階？であろうプリンを手渡して頂いた。

見栄えの方は……一見普通のプリン。でも、そのプリンから香る鼻を燻るキャラメルソースとほのかなフルーツの香り……それだけで今にもガッツキたくなってしまう。もちろんそんなはしたない真似は死んでもしないけれど。

「それでは、頂きます」

スキマからスプーンを取り出し、滑らかに揺れるプリンを両断する。ツヤツヤと黄色に輝く断片を一息に口の中に入れる。

ほんの一瞬、目の前に樂園が見えた気がした。甘味はもちろんの事、舌を優しく撫でるかのようにプリンの断片は私の口の中を徘徊する。その度に訪れる色々なフルーツの味とそれを更に際立たせるキャラメルソース。およそプリンとは思えない程の果汁は、さながらフルーツゼリーのように感じる。

それでもやはりこれを確認たるプリンと認識させているのは、ゼリーとは違う舌触りと卵と牛乳だと思う。私もさほど食レポというのは得意ではないのだけれど、このプリンは言うなれば……庭園に飾られた芸術品かしら。

「お味の程は？」

味の感傷に浸っている私を尻目に、作業を再開された乖離様が味の感想を求めて来られた。

「と、とても美味しいです……」

情けない事だけれど、私にはこのプリンの味を上手くは表現できない。なんというか……こう、異次元の料理というかなんというか……。

「まだまだ未成品なんだけどね」

小さなタメ息を吐きながら乖離様は型取りに移られている。

「このプリン……こころちゃんに強請られたから作ったはいいものの、彼女は大そう満足していたようだったが、どうにも俺が納得できなくてね〜」

やれやれと首を左右に振りながら乖離様は一人ごちる。私にしてみれば、こんな高次元のプリンを作れるだけ立派だと思っただけけれど、やはりその手の専門家からすればまだまだという事なのかしら？料理に心得がある私とはいえど、やはり分からないものは分からないわね。

なんて一人で納得している私を他所に、乖離様は冷蔵庫から試作品であろうプリンを幾つか取り出し、袋に閉じていた。気になった私は少し訊ねてみる事にした。

「乖離様、何をなされているのですか？」

「ちよいと紅魔館とやらに行つてくる。いつぞやプリンを食べさせるとかなんとか言つてたからさ、いい加減有言実行しないと思つただけさ」

そういえば、先の宴会でそんな話をレミアアやフランドールとしていたような……。それにしても冗談紛いの口約束を守ろうだなんて、乖離様はお人好しなのかそれとも律儀なだけか、或いは両方か……。まあどちらにせよその優しさ凄くカッコいい!!

紅魔館に行くとなれば、私もささやかなお手伝いが必要よね？

「乖離様、私のスキマをお使いください。紅魔館前の門までお送りしますわ」

「ん、そう？…じゃあありがたく使用させてもらおうよ」

新たにもう一つスキマを作り、紅魔館前の門に繋げる。まあスキマを出て早々居眠り中国と対面になるでしょうけど、乖離様なら一切の問題は無いわね。……………どうせ私もお供させていただくしね。

※※※

S i d e 乖離

紫にスキマを繋げてもらって、初めて霧の湖とやらに浮かぶ紅魔館に来た……………のだが。

「……………なんだありゃ？」

第一声がこれである……………。俺自身、目が良いのも相まって、目の中に飛び込んでくる赤一色の大きな館。正直言つて、これは酷いな。趣味が悪いを通り越している。もはや故意としか思えない程、如何にも客人の目を悪くさせるのが目的かのような赤さである。

紅魔館…………『スカーレット・デビル』の異名を持つレミさんにはうつつつけだ。赤は赤でも血の赤ということなのかね。

「……………zzzz」

「……………」

そして、なんとというザル警備な事か…………。赤一色の館に目を奪われていたから敢えてスルーしておいたが、俺のほぼ真横では器用にも仁王立ちして幸せそうな顔で眠る門番らしき人物。感じられる気配は妖怪なのだが……………なんだろうか、妙に俺と似た自然エネルギーを感じるの。

見た目はまあ紫とそこまで変わらないくらいの身長と、紅いストレートのロングヘア―。そして如何にも中国を想起させる格好の女性。

「相変わらず、ザル警備にもほどがあるわね……………彼岸の死神といいつうしてこう紅い髪の連中はサボりがちなのかしら」

と、俺のすぐ後ろで紫が呆れた口調で上記の言葉を吐き捨てる。……………とかいいたんだね紫。それと、なかなか今の例えは良かったと思う。小町もだいたいこんな感じだしなあ……………。その勢で一体何度映姫様に叱られてんのかねえ。

とまあ、こんなところで油を売っている訳にもいかないの、とりあえずこの門番を起こすことにする。

「あゝ、すいません。起きてますかあ」

一応よく聞こえるように少し声を大きくして呼んでみたが、全く反応を示さない。変わらぬ寝息とたてながらぐっすり眠っている門番……………この人ダメじゃね？



「おーい！」

先程よりも大きな声で呼んでみたが、一向に反応を示す気配がない。俺が言えたことではないとは思うが、よくこれで門番なんて務まるよな。紅魔館は人員不足なのか？

呆れ果てて見兼ねていると、不意に門の向こう側、館の扉がキィーと開かれる音が聞こえて来た。

瞬きの瞬間門番の直ぐ傍には先程までは居なかった筈のメイド服の銀髪の女性が額に青筋を浮かべて立っていた。そして鋭い殺気の籠った視線を門番である女性に向け、静かな怒りの声を上げた。

「いい加減に起きなさい中国……それ以上お客様の前で無礼を働くのなら食事は抜きにするわよ」

「ひゃいっ!!」

慌てて起きる大きな声が耳に届く。

俺が大きな声で呼んでも起きなかった門番を、たったの一睨みと脅迫紛いの言葉で起こすとは……凄いなあ。

「さ、咲夜さん!?!どうしてこんな」

「どうしてもこうしても無いわ。あなたが寝てばかりだから私が代わりにお客様の接待をしているのよ」

明らかに不機嫌そうなメイドさんを前に、門番の女性は一種の恐怖を露わにペコペコと頭を下げ謝り倒す姿が映る。

そんな二人の構図を内心微笑ましく思いながら、同じように不機嫌さを隠そうとしない紫に目を向けると、今にも噴火しそうな妖力を俺の前だからか、自制を掛けている。……傍から見ても結構怖いな、紫レベルの妖怪が機嫌を損ねると碌なことがないからなあ。

「ハア、もういいわ。あなたは今晚の御飯は抜きね?」

「そ、そんなあ〜」

涙ぐんだ目で膝をつく門番を無視し、メイドさんは俺と紫に顔を向け姿勢を正し綺麗に一礼をする。

「お恥ずかしいところをお見せして申し訳ありません。どうかこの至らなすぎる門番をお許しください」

「うう〜、す、すみません〜」

二人して俺と紫に謝罪に意を込めお辞儀する。俺としてはそこまで畏まつてくれなくてもいいのだが、これもこれで彼女らなりの筋とあったところだろう。

「まあ、俺としては大して気にしてないので大丈夫なんですがね」

「そう言っただけだと幸いです」

「……ハア、乖離様はほとほと甘いですね」

甘いと言われましても……俺は別段気にするような事とは思っちゃいないんだよなあ。こういうのは色々と体験して来ているのもう慣れてしまったのだ。

そんな事を思っていると、メイドさんは仕切り直しと言わんばかりに再度一礼し、俺に要件を訪ねてきた。

「して、今日紅魔館にお越しなられたのは、何か要件がおりなのでしようか？」

「大した用という訳ではないのですがね、これを持って来たんですよ」

俺は袋に入れたプリン（試作品）をメイドさんに手渡した。

「これは何ですか？随分沢山あるようですが」

「全部プリンですよ。ちよつと作り過ぎちゃって、お裾分けみたいなもんだと思ってくれば」と

メイドさんもやはり女の子という事だろう。プリンと教えた時目がキラキラと輝き始めた。女の子というのは皆スイーツ系が大好きなんだな。多分これは人妖共通なんだろう。……だって紫もそうだったし。

そうしてプリンが入った袋を渡して帰ろうとした時、不意にメイドさんに呼び止められた。

「どうでしょう？折角ですので中でお茶でもしていきませんか？きつとお嬢様も喜びます」

「うむ、帰ってもプリン製作くらいしかやること無いし……お邪魔でなければありがたく」

「では、こちらです。どうぞ」

そう言っつて、メイドさんは俺達に背を向けて歩き出した。それを見

て俺は彼女に付いて行くように歩き出した。

門を潜り、館の扉を抜けて中に入る。その際きちんとお邪魔しますは言っておいた……………礼儀だからね！それにしても、この紅魔館は俺が思っていた以上に薄暗く吸血鬼といった日光に弱い者が住むには最適といえるだろう。なんせほとんどの窓が黒いカーテンで日光を遮っているのだから。

「お嬢様はただいま大図書館でパチュリー様と魔理沙とご一緒されています」

俺の先を歩くメイドさんが親切に現在のレミさんの状況を教えてくれる。……………して、今大図書館などと申されたかね？読書家である俺にとつては凄まじくそえられるワードなのだが……………それとパチュリー様って誰？

そんな思考に耽っている間に、メイドさんは歩を止め大きな扉の前で停止した。どうやら到着のようだが……………何故微妙な顔をしてメイドさんは俺の方に振り返るのだろうか……………。

「で、何故あなたも付いて来るのかしら……………八雲紫」

「あら、私がいてはいけないのかしら？」

ふと振り返ると、スキマから身体を伸ばした紫が如何にも胡散臭い笑みで俺の後ろに居た。なるほどね、紫がいたからメイドさんは微妙な顔でいたのか……………。

ただ時折思うのは、どうしてこうも紫は俺以外に対して胡散臭い態度を取るのか……………これでは無駄な誤解が生まれるだけだろうに……………。それとも、紫にはそうするべき理由でもあるのか……………？まあなんにせよ、今の俺にはこれと違って関係がある話という訳ではないがな。

「あなたがいると色々面倒な事になるのよ」

「そう邪険にしないでくれるかしら？私はまだ何もしてないでしょ？」

「つまりこれから何かする気なのでしょう？」

「さあ、どうかしらね？」

メイドさんは紫の挑発じみた返答に対し、静かな殺気を放ち始めた……………。ただその殺気を紫は一身に受け、楽しんでいるようにも見え

る。

ただねメイドさん……そいつをビビらせたいのなら——そんなありきたりな方法じゃダメだ。手本を見せてやるとするならば……。

「紫、いい加減にしろシバくぞ?。」

「は、はいッ!申し訳ありません乖離様!!」

俺の半脅しにも似た忠告を紫は青い顔をして慌てるように受け入れた。これでおそらくは余計な真似はしなくなると思う。

紫の潔い態度に呆気にとられたのか、メイドさんはパチクリと瞬きを繰り返していた。まあこいつはこれでもこの幻想郷最強の妖怪らしいので無理はないだろうね……。

※※※

扉の前でなんやかんやあったものの、俺達は無事に大図書館とやらに入ることが出来た。

「何これスゲー」

そして第一声がこれである。若干の棒読みではあるが気にしない。俺は今現在目の当たりにしている光景に圧倒されており、思考が上手く働かない。

数百……いや、数千を超える無数の本。俺の数倍はあろうかという高さの本棚にびっしりと仕舞い込まれた本達が眼前に広がっている。……なるほど理解した。ここは俺にとっての楽園だったのだろう。

「俺もう死んでもいいかも……死にたくはないけど」

人間も妖怪も、自分の趣味嗜好の対象が眼前に無数に広がってればハイになるほどの幸福感に見舞われるだろうと思う。特に、永琳が引くレベルの読書家である俺であれば尚のことだ。これほどまでに立派な図書館は世界にも五つとしてないだろう。正直レミさんやこの紅魔館に住むもの達が羨ましいよ……。

「あら、乖離じゃない。久しぶりね」

俺が幸福感に浸っているとところに、宴会ぶりの声が耳に届く。声の

主を確認する為に目を向けると、そこには宴会時とはまた変わった服装のレミさんが一冊の本を片手に蝙蝠の如し翼をはためかせていた。

「久しぶりレミさん」

「今日はどうしたのかしら？紅魔館に何か用でも？」

「お嬢様、こちら乖離さんからの手土産にございます」

俺がレミさんの間に返答しようとしたところに、突如メイドさんがレミさんの後ろに颯爽と現れ先に要件を伝えてしまった。

「手土産？一体何かしら？」

「乖離さん曰く、プリンだそうです」

「プリン!？」

プリンだと聞いた瞬間、レミさんは見た目相応の少女のようにテンションが上がった。さつきまでの令嬢のような佇まいは何処へやら。「えーっと、以前宴会でプリンを作ってあげるって約束してたから、その約束を果たしに来たんだよ。まあ、試作段階の欠陥品だけどね」

「そうなの？まあ、まずは見た目から拝見させてもらおうわ!!」

袋を開け、中身を開封していくレミさん。プリンが崩れないようにと細心の注意を払って何層にも袋詰めしている。しかしそれをレミさんはお構いなしというかのようにビリビリと袋を破り捨てていく。

「ほほう…なかなかいい見栄えね♪」

破り捨てた紙袋からプリンを取り出し、嬉しそうに眺めるレミさん。そんな姿は宴会時のフランに似ているような気もする。流石は姉妹といったところだろう。

「レミイ、何してるの?」

幸せそうにプリンを眺めるレミさんと呼ぶ不思議な声。声の主を確かめる為に声のした方角に目を向けると、そこには紫色の長髪を靡かせる少女と、不思議そうな面持ちの白黒魔法使い、魔理沙が立っていた。

「あらパチエ、待たせてしまったかしら？今丁度客人が差し入れを持ってきてくれたのよ?」

「客人？あなたが?」

「えっと、うん」

「客人つて、乖離じゃないか！久しぶりだぜ！」

「久しぶり、魔理沙」

興味深そうに俺を観察するパチエと呼ばれた少女とはうって変わった、魔理沙はいつもと変わらぬ笑顔で挨拶をしてくれた。といっても、魔理沙と会うのは一週間振りぐらいだけど……。

「おや、破損していた左腕は治ったのか？」

「まあね、ちよつとした知り合いの万能薬でちよちよいつと」

「そうかそうか、そりゃよかつたぜ！」

「だったら安心したぜ！」と言って魔理沙は再度元気の籠った笑みを向けてくれる。そういえば魔理沙も俺の左腕の事を気に掛けてくれていたっけな？

そんな感じで少し世間話をした後、俺は茶会とやらに招かれ大図書館の奥にある宴会用の席に座っている。

鼻を燻る香りの良い紅茶を片手に、用意された茶菓子を摘みそれを口に運ぶ。……うん、美味しい！

「何このプリン?!?!神か!!このプリンは神の造作なのか!!」

「最高ねこのプリン!!極上のおいしさだわ!!」

「お、おいしすぎる……むきゅ〜」

俺の反対側に座る者達、主に俺の作成した試作品のプリンを食した方々は上記のセリフと共に爆発している。一人は「神よーっ!!!」と叫びながら幸福に浸る白黒魔法使い。続いて「これは悪魔の誘いね♪」などと幸せそうな表情でのびかけてる吸血鬼さん……悪魔はあんたでしょうに。最後の一人は……うん、のびてるわ。

「まったく、大げさな反応だことで……」

「一概にそうとも言い切れませんわ」

呆れ果てる俺に意を唱えるように隣の席に座る紫は紅茶を飲みつつ答える。

「乖離様の作成なされたプリンは一種の生物兵器に匹敵します」

「穏やかじゃないぞその表現」

「そう、あのプリンを食べた者は例外なく至上の味に侵され放心状態に追いやられるという「はいストップ!その辺でいい!」……そうですか?」

危ない危ない、これ以上言わせたら俺の中で何かが決壊するところだった。それが何なのかは分かんないんだけどね……。

そういえば、フランは今どうしているのだろうか……。宴会以来会ってないが、元気になっているのかな。

「フランどうしてんのかな」

「フランなら遊びに行ってるわよ」

独り言として口から出てしまった言葉にレミさんが答えてくれる。ただ、何かレミさんの表情は複雑なものであった。

「フランは最近例の天邪鬼の下に出掛けているわ。というのも、最近あの天邪鬼が白銀に輝く剣を手に入れたらしく、剣術ごっこみたいな感じで遊んでいるらしいのよね」

天邪鬼というとおそらくは正邪だろう。白銀の剣というのは俺が正邪に与えた『クラレント』だ。剣術ごっこで遊ぶということはフランは炎の大剣『レーヴァテイン』を使っているということだろう。どちらも魔剣クラスの代物だが、レーヴァテインにおいては俗説的に神剣として扱われたりもするので、クラレントでは少々分が悪いかもしれないが、クラレントは所有者によって性能を変化させる剣なので正邪との相性は良いのだろうと思う。でなければレーヴァテインなど相手に出来る筈もないしな。

「ごっことはいえ、正邪がフランを相手に生きているというのはクラレントを使いこなしているのかもね」

「クラレント?何かしらそれ?」

「アーサー王伝説に出て来る叛逆の騎士・モードレッド卿が使用したとされる魔剣だぜ!」

俺がレミさんにクラレントの事を教えようとする、我先にと魔理沙に言われてしまった。しかも何気に得意げな表情で……こやつ、やるな?!

「ふくん……白銀のクセに魔剣の類なのね」

そこには触れないであげてレミさん。元はクラレントは西洋屈指の名剣だったんだから。あれだ、モーさんの勢だから！

そんな切実な願いを心の中で思っていると、パチエさんとやらが不意に肩を叩いてきた。……というかいつの間に俺の隣に移動したのだこの人。

「乖離……と言ったわね？いきなりで厚かましいのは理解しているのだけれど……あなたに興味があるの。……といわけで、私に付き合ってくれないかしら？」

「「は?!」「」」

唐突の言葉に、その場の空気が凍り付いた。



## 三十四話 魔法使いの魔術知識

S i d e 乖離

こういう時は、なんと言うのが妥当なのだろうか……。唐突な告白、ほんのりと赤く染まった頬と潤んだ瞳。気にしない方がいいのだろうか若千口元に残っているキャラメルソース。

なんというか、だ。唐突の告白には慣れている……。が、こうして初対面の女性に告白されたのは初めてだ。

「あのさ、すまないけどもう一度言ってくれない？」

万が一という事も考えられる。俺は確認というのを理由に紫髪の少女、パチエさんとやらに再度問いかける。

彼女は一つ咳払いをして、少々呆れ気味に先の言葉をもう一度告げる。

「あなたに興味があるのよ……。だから私に付き合ってくれないかしら？」

少し簡略化されたが、意味は同じだ。

さてさて、困った事に俺は返してやるべき返答が思いつかない。こんな事は人生でも初めての事だし、いつも俺に告白紛いの行動をとってくるバカ共とは訳が違う。パチエさんとは今日会うのが初めてだから、無碍にも扱えない。これが紫か輝夜辺りなら無視するか正面切って断るかの二択の筈なんだがなあ。

「……………」

「……………」

互いに沈黙が続く。パチエさんはまだかまだかと顔を赤くして俺の返答を待つ。そんな顔をされると余計に断り難くなるからやめて欲しいのだが……。

チラリ横目で他の連中を見ると、各々反応が異なっている。魔理沙は面白い玩具でも見つけたかのように目を爛々とさせている。レミさんとメイドさんは非常に驚いた様子で口をパクパクと餌を待つ鯉

のように開いたり閉じたりを繰り返している。……で、一番ヤバイのは紫だ。パチエさんは気付いていないのかもしれないが、恐ろしく冷めた笑顔と目付きで俺を見ている。アレはもう良い子の見て良い笑顔じゃないな。

「えつとさパチエさん？何で俺な訳なのかな？」

「魔理沙から聞いたわ。……あなた、魔術にもかなりの心得があるんでしょ？」

「そりや、まあ……」

うん、伊達に固有結界なんて張ったりしないからね……。

「私も魔術の事に関して……それなりには知識がある方なんだけどね、まだまだ多くの知識を欲しているのよ。……だから、魔理沙曰く『自分よりも魔術に詳しい』らしいあなたに付き合っただけ……私と」

如何にも魔法使いらしいね……。あの手の人種は揃いも揃って知識欲の塊だ。食う寝る勉強の三要素でしか構成されていないのかとさえ思える者だっている訳だし、彼女も彼女で例外ではないということかもしれない。ということはだ、パチエさんの告白はあくまでも知識の幅を広げる為のものであって、別段愛の告白という訳では無いのかも知れない。それならそれで俺は助かる……。……色々と。

「まあ、俺としては別にどちらでもいいんだけどさ、パチエさんは何の魔術を知りたいの？」

「そうね……まずは、あなたの知る魔術や魔法について教えてくれないかしら？」

俺の知っている魔術と来たか……。知っているというより、会得しているものが色々ある勢でどれを挙げればいいのか迷うなあ。簡単に説明できるとしたら投影魔術くらいだが、これは流石に魔法使いであるパチエさんなら知っているだろう。……であれば。

「固有結界って知ってる？」

「ええ、知っているわよ。現実と幻想を入れ替える魔術の最奥にして忌まわしき大禁呪でしょ？」

やっぱり知っていたか……。まあ、魔術の最奥と言われているだけ

あつてその手の連中からしてみれば常識の範囲内ということだろう。……魔理沙が知らなかったからワンチャンいけると思ったが見通しが甘かったみたいだ。

さて、俺の知る魔術で代表的なものが固有結界であったのだが、これ以外にパチエさんが知らない魔術といえれば他に何かあつただろうか……。こんな大きな図書館を持っているのだからそんじやそこの魔術なんて挙げたところで意味無いだろう。

「仕方ない、アレを聞いてみるかな……」

「アレ？」

本来あの魔術は他人に教えていいものではないが、どうせアレは俺以外使えないしまあいいだろう。

「パチエさんは、『降霊術』を知っているかな？」

「もちろん」

「なら……『星天覇将術』は知っている？」

「星天覇将術？……聞いた事もないわ」

だろうね……。なんせアレは俺独自のオリジナルみたいなもんだし、ぶつちやけ魔術と呼んでいいものか分からないもんだつたりもするしな。言ってしまうえば分類不明の術だ。発動に魔力が必要だから俺が勝手に魔術とカテゴライズしているだけだし。

「私も初めて聞きました……一体それはどういった魔術なのですか？」

どこか興味ありげに疑問符を浮かべ問いかけて来る紫……。紫は知らないというがお前は一度体感している筈だ。だって、言ってしまうば。

「星天覇将術って、『クラスターカード』をカッコよく日本語にしてみただけだけど？」

「……マジですか？」

「マジ」

紫はそうきたかく、と言いたげな表情で頭を抱えた。クラスターカードの起動には確かに魔力は必要だが、そんなもん俺の自然エネルギーを能力で一部魔力に変換してしまえばいいだけだからな。意外

と発動は簡単だけどコスパの問題で乱用が効かないのが残念なんだよなあ。まああんなもん乱用したら幻想郷の危機だけど。

「クラスターカードって何なの？」

「私も知りたいぜ！」

「俺の切り札の一つだよ……。とはいえ、あんまし使っていないものじゃないけどね」

「そのクラスターカードって言ったかしら。それ、魔術ならどうやって会得するのか教えて欲しいのだけど」

「私にも教えてくれ乖離！」

魔理沙とパチエさんは目を輝かせグイグイと俺に近寄ってくる。そんなに迫られても困るのだが……。アレは星の守護者であった俺だから使えるものであつて、星に関連性のある者でなければ神であっても使えない。

「悪いが教えることは出来ても使用は出来ないと思うよ？」

「何故？」

「何故って、アレは星の力を呼び出す為のもんだし」

事実上は神降ろしや降霊術に似ているものだが、アレは根本から規模が違う。神や幽霊の類では無く星そのものをその身に宿すようなものだから、『器』の小さい人間や魔法使い程度では扱いきれない以前に圧倒的情報量に脳が耐えきれず星の力を宿す前に死ぬ。俺が死なないのは一概に星の守護者であり星からのバックアップを受けているからである。

したがって、クラスターカードの使用が可能なのは俺だけである。まあ永琳や輝夜、妹紅のような不老不死なら可能性は無きにしても非ずといったとこだが、まあ無理だろうね。

だが、尚も納得がいかないといった表情の二人に気負けした俺は、渋々ではあるが使用方法のみ教えてやることにした。

「あく、まあ使い方くらいなら教えてあげられるよ」

「是非!!」

更に目を輝かせた二人に呆れながらも、この図書館の中でもそれなりにスペースの空いた場所に移動した。

※※※

ある程度広い場所に移動した俺達は、早速クラスターカードの使用教授の為に結界を張っていた。尚クラスターカードの使用方法を教えると言った時紫は大層反対していたが、そこは何とか説得した。

「さてと、こんなもんでいいかな」

「そうね、これくらい結界を張れば大丈夫じゃないかしら」

「でも、張り過ぎじゃないか？」

魔理沙の疑問も御尤もだが、嚴重に結界を張っていないとエネルギーの暴走が起きた時の対処が面倒なのだ。伊達に星の力を借りたりしないからね。

因みに、嚴重に張った結界内には俺と魔理沙にパチエさん、監視役に紫の四人である。レミさんとメイドさんは結界外から観賞するといっていた。見せ物じゃないんだけどなあ。

一応準備は整ったので、いよいよ開始するでしょう。

「さてと、ほんじゃまあそこに座ってくれ二人共」

俺の指示に従い、二人は疑問符こそ浮かべど潔く床に座り込んだ。俺は懐からクラスターカードを取り出し、二人が座った向かい側にカードを落とす。するとどうだ、クラスターカードから紅い光が放たれ、それは線を描くように二人に近づいていく。描かれた紅い線はまるで樹のように枝分かれを始め二人を通り越していく。……さていよいよここからだ。

「二人共、そこから一步として動くなよ……。下手に動けば魔力回路を破壊されて二度と魔法が使えなくなるぞ」

「マジかよ……」

「マジだよ」

引きつった笑みで笑う魔理沙だが、その笑みには全くの余裕を感じない。まあ二度と魔法が使えなくなるなんて言えば当然だろうけど。

二人を通り越した紅い線は一定の長さまで伸びた後、一瞬にして消

え去った。どうやら、第一行程はクリアしたようだ。

「もう立っていいよ二人共」

「今ので終わりか？」

「アレが使い方なの？」

味気ないと不満を漏らす二人ではあるが勘違いである。これはあくまでも適正検査みたいなものなので、本番はここからだ。

「さてと、本番行こうか」

「え？」

やっぱりさっきので終わりだと思ってたようだ。もしそうだったとしたら、わざわざこんな嚴重な結界なんて張りはしない。

「次は発動条件なんだけど……うくん、実際に見せた方が早いよね。」

『冠位・夢想顕現』

クラスターカードの起動。それによる膨大な自然エネルギーが全身を駆け巡り、まるで体に強烈な電気でも奔ったような感覚に襲われる。それだけじゃない、圧倒的なエネルギーは暴風を生み出し結界内にいる魔理沙やパチエさんはその暴風に抗うように床を強く踏みしめている。

……何故だろうなあ、幻想郷に来てクラスターカードの使用順度が増えている気がするのだが……。まあ特に何をするという訳でもないし、大丈夫だろうけど。

とか思っていると、バリィ！と、まるでガラスでも砕けたような音が結界内で響く。おそらく高濃度の自然エネルギーとその量に耐えきれず結界の一枚が壊れたのだろう。……やっぱクラスターカードは使用だけでもかなり周りに影響を与えかねないな。

かつて俺が永琳やサグメを相手取った時に使用した際は月全土に紅い波動を放っていたというのに、今ではたった一枚の結界を破壊する程度……言わずもがなかなり弱体化しているな。それに、やはり高濃度とはいえ自然エネルギーの質も落ちている。——まあそれでも、全力を出し切れば紫相手に相打ちまでは持つていけるだろう。

「二人共大丈夫か？」

自然エネルギーの放出を一定まで制限し、放たれる暴風も止み辺りは静かになった。気張り床に足を踏みしめていた二人に俺は上記の間を投げかける。しかし二人は糸の切れた人形のようにペタリと床に座り込み苦笑いを浮かべていた。

「アハハ、びつくりしたあゝ」

「とんでもない威圧感ね、今のは……」

初見とはいえ、かなり弱体化していたとはいえ、緊張が一気に解れて座り込む程度であればこの二人はそれなりに見込みはありそうだ。かつての紫なんて俺が全盛期一步手前だったとはいえクラスタカードを発動したショックで気絶したくらいだからなあ。――

――だが今の紫は、顔色一つ変えずに立っている。なかなかやるようになつちやつてまあゝ。

紫の成長具合に関心していると、まだぎこちないが魔理沙は足を手で支えながらゆっくりと立ち上がった。

「急な暴風にも驚いたけど、乖離がまるで別人みたいになつちまつたのにも驚いたぜ」

「ああ、これか？これはまあ……ちよつとしたイメチェンだと思つてくれ」

白い髪の毛に結界越しで映る紅い瞳。私服でいた筈の装いもクラスタカードの発動により礼装へと変化させられている。こればかりは俺の意思でもどうこうできるもんじゃないから仕方ない。

「それで、見た目だけの変化じゃないんだろ？何か見せてくれよ！」

「その状態で魔術や魔法を使うとどうなるの？」

弱々しい足取りとは裏腹に意外とテンション高めな魔理沙。そんな魔理沙に釣られるようにパチエさんもゆっくりと立ち上がり目を輝かせながら魔理沙と同じことを言ってくる。

「そうだねゝ、んじや参考ついでに魔理沙のマスパでも真似てみようか」

俺は斜め上に手を翳し、翳した手に溢れんばかりの自然エネルギーを集中させる。

「術式開放・『アナライズ・マスタースパーク』」

翳した手に魔法陣が浮かび上がり、その魔法陣に集約していく極大の自然エネルギー。ビリビリと稲妻を放ちながらバスケットボールサイズまで大きくなった自然エネルギーの塊はその内部で数百から数千に渡る反射運動を繰り返す。

臨界に達した膨大な自然エネルギーの塊は今か今かと放出されるのを待ちわびる。

「壊砲・エレメンタル・バースト」

バスケットボールサイズに大きくなった自然エネルギーの塊は俺の掛け声と共に一瞬にしてビー玉サイズに収縮し――

――突如強烈なエネルギーは霧散し消えていった。

「アレ??」

いよいよ見せ所というところで霧散した魔法を前に、二人はどうしてそうなったのかを理解できぬといった表情で目を点にしている。二人にはどうしてこうなったのかは理解できていないのだろうか、俺には理解できている。

翳した腕を降ろし、落胆の表情を浮かべる二人を見て、俺はこの現状を引き起こした張本人に視線を移した。

「この結界内のエネルギーの境界を弄らせていただきました……」

いつになく真剣な表情の紫は、目を細めスキマを開いた状態でそう語った。

周りを見渡せば結界内に多くのスキマが開きそのスキマから覗く無数の瞳は俺一点に注いでいた。

「恐れながら乖離様……この紅魔館ごと私達を皆殺しにするおつもりですか？」

「随分と穏やかじゃないねえ、別に俺は妙な気をはらんでないが」「でしたら何故、あれだけのエネルギーを収集なさったのですか……?」

より一層声色に重みをかけ、半ば睨む形で紫は俺に問を投げかける。ここまで必死になるとは、よほどさっきのを俺に撃たせたくなかったのだろう。だが、俺も被害を考慮していなかった訳ではない。それとも紫には俺がそこまで愚かな者にでも映ったのだろうか。



「エネルギーの調整はしていたし、お前がそこまで心配する程の被害が出るほど集めたつもりはないが……？」

「……………」

……未だにスキマを閉じようとしめない紫を他所に、俺は二人に再度視線を移すと思つた通りというべきか、二人は若干の困惑状態にあるようだ。まあ俺と紫が二人して物騒なこと話してたらそうなるよね。仕方ない、これ以上二人に迷惑を掛ける訳にもいかないね。

一つ息を吐き、俺はクラスターカードを解除する。その際訪れる全身を駆け巡る苦痛を顔に出さないように紫に両手を挙げて降参のポーズを取る。

「ハア……俺が悪かったよ紫。だからそんな怖い顔しないでくれるとありがたい」

俺がそう謝ると、紫は若干申し訳なさそうな顔をした。

「私の方こそ出しゃばった真似をして申し訳ありません」

そう言つて紫は深々と頭を下げた。俺としては紫のとつた行動はまあ是非もない事だから謝る必要はないと思うのだがね。それに、俺も俺として配慮が足りなかったと反省しておくでしょう……。

「さてお二人さん、必殺魔法は発動できなかったけどクラスターカードはあんな感じだよ。発動条件は掛け声アリ無しでもどちらでも可だ！必要なのは資格と発動に十分なエネルギーだけ」

「その資格つてのがイマイチ分かんないぜ」

「右に同じく」

「それはまあ、星の力云々だね」

まあこの後、遊びから帰つて来たフランも交えて皆で色んな魔法や魔法の事を話し合った。その際パチェさんと読書家という趣味に意気投合しいつでもこの大図書館を使用しても良いと許可をもらった。無論俺も家に保管してある魔術書は魔導書、研究資料の提供を約束した。



## 三十五話 仕事探しは難題

S i d e 乖離

「うゝむ、どうしたもんかなあ」

日も落ち始めた夕暮れ時、俺は自室にて人里より集めたある物を並べながら思い耽っている。そのある物というのは仕事の求人票だ。

幻想郷に来てから一か月が経とうとしているが、俺はこの世界で未だに職に就いていない。仕事を何かしらしなければとは思っていたのだが、いつもなあなあと流してしまっていた。実年齢はともかく、表向きの年齢は一応十八歳なのだから外の世界ではもう高校卒業を果たしている年頃。そうなれば就職か進学かに別れるが、幻想郷に大卒など存在しないため必然的に就職に走ってしまう訳である。

「参ったなあ」

いくつか取り寄せた求人票を比較しながら一枚一枚念入りに目を通しておく。だが、求人票の殆どが妖怪退治や人里近辺の調査ばかりだ。加えて言うならどれもこれも給料がそれほど高くない。一応金には困っていないし、ぶっちゃけ言うなら俺の持ち金は子々孫々遊んで暮らせるくらいの貯えがあるのだ。そうなれば仕事などする必要は無いのだが、如何せんこの性格だ、遊んで暮らすという選択肢を俺は作れないのだ。

どうしたものかと頭を悩ますも、いい案がまるで湧いてこない。妖怪退治をするにしても、無意味な殺生は嫌いだし、俺は別に人間の味方という訳でも無いので特別妖怪を退治する必要がない。紫辺りに相談すれば何かいい案を出してくれそうではあるが、費用対効果のなっていない無理難題を押し付けられそうで怖い。

「マジでヤバイ……」

我ながら情けない。先程から口を開けば弱音や泣き言ばかり、こんな姿誰にも見せられないな。まあ仕事が決まらない以上仕方がないが、とりあえず口を開けば弱音を吐くのは止めよう。

最悪守護者として復帰する事も考えたが、それはそれで幻想郷全土

を敵に回しかねないのでそれは極限の非常事態案件として隅の隅まで置いておこう。

妖怪退治は個人的にしたくない。かといって選り好みばかりしていると結局仕事が決まらず仕舞いとなる。プライドを捨てるか守るか……：俺としては守りたい。こういった悩み事は我が人生において記憶にない。つまり初めての経験となるので全くもって打開策が見当たらない。

「ふう、こうなったら是非も無し。あれは使ってみよう」

気を取り直して棚の上に置いてある一つの大きな鏡を手に取り机に置く。この鏡はこの世に二つしかない『死海の合わせ鏡』。つまり死者の世界と通信できる便利？アイテムだ。これはとある閻魔様から譲り受けた大事な品だ。……壊したら殺されるレベルの。

椅子を引き鏡に向かい合うように座る。そして鏡にそつと手を伸ばし死者の世界・『地獄』と繋げる。本当はこんな事はやってはいけないのだが、事情を説明すれば赦してくれると信じよう。

鏡の中はテレビ画面同様の砂嵐状態。ほぼ初めて使うので壊れているのかとすら思える。が、通信はどうやら安定していき鏡の向こう側には明らかに不機嫌そうな表情で閻魔の席に座するお偉いさんが映った。

「死海の合わせ鏡が急に光り出すので何かと思えば……あなたですか  
氷鉤乖離」

「お久しぶりですね、四季映姫・ヤマザナドゥ様」

本当に久しぶりだ。ぶつちやけ俺としても会いたくもないし顔すら見たくない相手だが、こういった悩み事には俺の知る限り一番の適任者であるので背に腹はかえられない。

「で、今日は一体何の用ですか？私は仕事で忙しいのですが」

「えーつと、今日はですね……仕事の事で相談がありました」

俺がそう言うと、映姫様は明らかに面倒くさそうな表情を浮かべた。相談したいのは俺だが、そんな露骨な態度を取られるとこちらとしても少々納得のいかないことがあるのだが……。

「仕事……ねえ。今更私に相談を持ち掛けてくる程の事ですか？」

「こつちは死活問題なんですよ（精神的に）」

「あなたには星の守護者という大役があるのでは？」

「それは数年前に引退しました〜」

「ブフォツ!!」

俺の引退という言葉を聞いてか、映姫様は唐突に噴き出した。慌てて手持ちのハンカチで口元を拭き、焦った表情で訊き返してきた。

「い、引退したんですか?! そもそも引退できたんですか!!」

「まああれやこれややってる内に……。そんな感じで、現在の俺は無職な訳でしてね」

なるほど、と納得して映姫様は落ち着きを取り戻しいつもの態度に戻った。それからしばしの間考え込むような姿勢をとり、何か思い当たったのか手に持つ錫杖をパチンと鳴らした。

「仕事に励もうというその誠意は称賛に値します。では、閻魔秘書といのはどうですか?」

「閻魔秘書?」

「ええ、私の下に就き私が裁く亡霊や怨霊達をこの冊子に記録付けていくのです」

そういつて映姫様は一冊の分厚い冊子を取り出した。その厚さはなんと十センチ。俺の持っている本よりも厚く如何にも重そうな物だ。しかも見たただけで分かる、あれはイジメだ。

「一応聞くけどそれ何年分くらいあんの?」

「ざっと千年分ですかね? 一日百名と考えても」

「謹んでお断りさせて頂きます」

あんなの出来る訳がないだろう。余程のマニアかその道を進んだプロくらいしかやる気起きないだろ。だいたい、十センチの厚さにも驚いたがアレで千年分はおかしいんじゃないだろうか……。ただ、断ったせいか映姫様がまたもや不機嫌な表情に戻った。

「あなたから相談しておいて代替案を提示してやったというのに、私の厚意を無碍にするのですね」

「仕方ないでしょ? 俺は人間なんだから千年も生きていられないんですよ」

「それはおかしいですね、あなたは不老不死の最上位者ではなかったのですか?」

「それ『元』だから……。大事だからもう一度言うが、『元』だから!」  
二度目だけ少し強調しておいた。それでもしないとなんだかんだと難癖付けられて納得してもらえそうにない。

「ハア……。厄介ですねあなた」

不満気にタメ息を吐きながら映姫様は上記の言葉を口にする。敢えて口には出さないが厄介なのはあんただ! その格式ばった態度をどうにかできないのかこの閻魔様は……。

互いに不満はあるにしても、それでも一応嫌々だろうが俺の相談は受けてくれてる訳だから、こういう面には非常に好感が持てる。その他が非常に気に食わるのでその好感が霞むんだがな。

と、そんな思考に耽つてしていると鏡からバタンツ! とひとしきり大きな音が聞こえた。その音を聞いてか、映姫様は鏡越しではあるがビクッと体を震わせ驚いた様子を見せた。

「映姫ちゃん、お団子買って来たわよくん♪一緒に食べましょう」  
鏡の奥から聞こえて来るテンションの高い女性の声。加えて、映姫様をちゃん付け出来る者といえば、俺にはここ最近出会った一人の神様が脳裏を過ぎった。

「へ、ヘカーティア様!? もう、来るなら来ると連絡してください!」

やっぱりヘカちゃんだったか……。映姫様がこれほど取り乱す存在と言えば世界でも相当限られてくるし、地獄の総括者であるヘカちゃんなら納得できる。

「あら、お取込み中? なら出直そうかしら」  
「お団子だけ置いて帰って頂いて構いませんよ? いっその事もう来ないでください」

「もう! 映姫ちゃんったらツンデレさんね♪ホントは一緒に食べたいくせに」

凄いなこの二人……。映姫様も閻魔の身でありながら地獄の女神相手にぶつちやけた本音をぶつけるなど……。それに対するヘカちゃんの対応も対応だ。二人の実力を知っている者からすれば傍か

から見れば肝が冷えるだろうよ。ただ、こういった関係は仲が良い証拠なのかな。

「ハア……。まあいいですけど、仕事が終わるまでそこで大人しくしていてくださいね?」

「アイアイサ〜」

「すみませんね、急に……」

「……………掛けなおした方がいいですかね?」

「ええ、そうしていただけると助かります」

「それじゃあまた後で」と言つて、俺は鏡の通信を切つた。なんとうか、映姫様つて俺が考えていた以上に大変そうだな。そういえば、閻魔の席の後ろに胃薬があつたのはやはり映姫様の物だったのか……。かなりストレス溜め込んでんだろうな。

「て、人の心配してる場合じゃないよなあ」

相談を持ち掛けたはいいが、結局振出しに戻つただけだ。このまま仕事が決まらず仕舞いとなると、俺の精神的にくるものがある。いい歳してニートなんて俺は嫌だ。金には充分余裕はあるが仕事はしておきたい。

妖怪退治の依頼が書かれた求人票を手に取り、渋々ではあるが承諾しようかと考える。もうプライドだのなんだのと言つてる場合じゃない気もしてきたし。

俺は妖怪退治の依頼票に目を走らせる。退治対象は『八雲紫』と書かれているが、一体誰が何の目的で紫を退治してくれたのと依頼票を出したのか……。報酬面は他の退治依頼に比べて非常に高額だが、俺はこの依頼を受ける気には到底なれなかった。そもそも、全盛期ならともかく現状の俺では紫と対峙しても勝利の可能性は極めて低い。むぎむぎ死地に飛び込むようなものだ。妖怪退治などそんなもんなんだろうけどね。

「マジでどうにかならないかな〜」

口を開くなり弱音が出て来る。さっきそれが無いようにしようと思つた矢先これだ……。もういつそのこと開き直つて仕事しなくてもいいかも……。

と、半ば諦めムードに陥っていた矢先、不意に死海の合わせ鏡が光出した。

「あれ?」

俺はまだなんの操作もしていないのに勝手に鏡が映り、再度の砂嵐が見えた。そうして待っていると段々砂嵐も治まり、鏡には紅い髪を靡かせた少女が映った。

「ハア―イ乖離クン、元気してる?」

「申し訳ありません氷匏乖離、ヘカーティア様に鏡の所有権を強奪されました……」

鏡の奥には先程と変わらずテンション高め of 神様と、言葉通り申し訳なさそう表情で渋々団子を頬張る閻魔様が見える。……まあ大体察した。おおかた連絡を取っていた相手を問い詰められ、仕方なく答えてしまった結果無理やり鏡の所有権を奪われたという事だろう。それにしても、難儀なものだよ映姫様。

「久しぶりだねヘカちゃん……」

予想外の展開におもわず苦笑してしまう。誰だつて地獄から強制的に通信が飛んで来たら驚くと思う。しかもそれが地獄の女神様ともあれば尚更に。

「で、何か用な訳?」

「映姫ちゃんから大体話は聞いたわよん!お仕事をお探しのようね」

「まあ、うん」

話を聞いたか……ほんの一分くらいしか間は空いて無かったと思うがね。

「そんな就職活動真つただ中の乖離クンにいい仕事のお報せよ!」

「何?」

興味はある。が、就職活動真つただ中とヘカちゃんは言ったが、ぶつちやけ今はそんな時期ではないだろうに……。それとヘカちゃんの後ろで美味そうに団子を頬張る映姫様よ、仕事は?」

「実はね、十席ある内の閻魔の席が一つ空いてしまっているのよ。そこで、乖離クンに空いてしまった閻魔の座にどうかなあと思つてね?」



「断る!!」

つい強めに反応してしまっただが、断固拒否である。閻魔という役職は俺には向かないし霊を裁く度量など俺にはない。そもそも閻魔とは通称『十王』と呼ばれる地獄の王である。十王の一角である映姫様とは幾度となく覇を競い合った事があるのでその役職の重みも責任も重々承知している。……結局何が言いたいかというと。

「そんな面倒なもの俺は嫌だね!仕事は欲しいがそういうった類の職種は俺には合わない」

「そう?乖離クンにはピッタリだと思うのに」

「お言葉ですがヘカーティア様、私は氷匏乖離が閻魔の座に就くことは反対です」

と、ここで団子を食べ終わった映姫様も会話に参加してきた。

「彼は元を糺せば我々閻魔を然り、あなたの敵だったのですよ?」

「確かにそうだけれど、それはもう過去の話じゃないの?」

「いいえ!過去も現在も未来も氷匏乖離という人間は我々の敵であることに変わりはありません。そうでしょう氷匏乖離」

「そうですね」

映姫様の言う事は確かに正しいものだ。故に肯定することになんかの不満も無い。が、ならどうしてその敵である俺なんかの相談事を親身に聞いてくれるのかね。それは本人にしか分からない事だが、大方それが映姫様の優しさということなんだろう。なんだかんだ言ってもこの閻魔様は情に深いからね。

「オホンツ!当初の目的から逸れてしまいそうなので戻しますね。ええっと、氷匏乖離あなたは仕事を探しているのですよね?」

「無論……」

「では、料理人というのは如何でしょう?お団子を食べている際ふと思ったのですが、そういうえばあなた小町に手作り弁当を拵えていたことがありましたよね。小町は随分あなたの作ったお弁当を称賛していましたし、料理人であればあなたも納得できるのでは?」

なるほど、その発想は無かったな。しかし料理人か……確かにいい案ではあるのだが、店を開くとなると従業員然り、空き地も必要だし、

店のデザインや建築費用も随分掛かりそうだ。その点は紫に相談すれば問題は無さそうなんだが、やっぱり大事なのは店のデザインと従業員だ。一人で経営するのも悪くないが、初めてという点を考慮すればやはり一人では無理があるな。

「料理人、その案頂きましたよ映姫様」

「そうですか……それは良かったです。しっかりと仕事に励むのですよ？ええ、それがあなたの積める善行です」

相変わらずの上から目線の物言いではあるが、代替案を提示してくれた事に感謝してその点には目を瞑っておこう。それに、そこを指摘してもややこしい問答にしかないだろうしね。

「あらん？結局決まっちゃったの？いい機会だと思ったのに」

へかちゃんは残念そうに肩を落とす。彼女も彼女で一つの案を提示してくれたのだ感謝はしておくのが礼儀というものだろう。

「悪いねへかちゃん、俺やっぱ閻魔様になるのは無理だよ。でも、俺の店が完成したらプレオープンするからさ、そんな時は映姫様と一緒に試食しに来てよ」

「そう……分かったわ。美味しい料理、沢山振舞ってねん？」

「ああ、もちろん！」

「話は纏まったようですね。ではここらで失礼します」

「バイバイ乖離クン♪」

「二人共、ありがとうね」

別れを告げて鏡の通信はプツンと音を発し切断された。

さてさて、これからの課題は決まった。とりあえず空き地探しと従業員の確保、後は店のデザインと経営に必要な器具を揃える。……うん、なんだか充実して来た気がする。

「それじゃまあ、早速買い物行きますかねえ。そろそろ夜になるけど」

## 三十六話 正邪の思惑

S i d e 正邪

「アハハハハッツ!!」  
「クツ」

とある森の一带にて響き渡る少女の笑い声。それに合わせるように振るわれる業火の剣が草木を焼き払い周りを焼け野原に変えていく。

私は焼けていない地を猛ダツシユで駆けながら迫りくる炎を寸でのところで回避しつつ迎撃を試みる。

「こん、のッー!」

白銀に輝く剣『クラレント』を両手で構え、地を這う炎を切り裂きながらその発進元へと一直線に突貫する。

対して、『彼女』はそんな私の行動が読めていたかの如く、得意げな笑みを浮かべながらただでさえバカでかい炎の大剣を更に巨大化させ待ち構えていた。

「もうその動きは通じないよ正邪ちゃん!」

少女の叫びと共におよそ大木かと思える程にまで巨大化した炎の大剣は地を溶かし始める。その勢か、酸素濃度が薄くなり呼吸がしづらくなる。が、もう既に全速力で突貫しているせいで呼吸などそもそも関係などない。しかし、そうすることによって最早回避は不可能だ。

「反転しろ【魔剣クラレント】!!」

クラレントに妖力を流し込み強化を施した後、私自身の能力によって本来の性質を『反転』させる。

性質が反転したことによって、クラレントは美しい白銀の剣から禍々しい赤紫色の『魔剣』に変貌していく。それによって全身に走る妖力の稲妻が、更に私の突貫を加速させていく。

「いいわいっわ! そうこなくっちゃね正邪ちゃん♪」

「いつまでも私を舐めてんじやねえぞフランツ!!」

怒号の様に叫ぶ私を見て、吸血鬼の少女フランは楽し気な表情を浮かべつつその紅い瞳は確かに獲物を捉えた捕食者の眼に変わった。

こうしてフランと弾幕ごっこならぬ、剣術ごっこで遊んだことは何度かあるが、ここまで互いに力を上昇させたのは今回が初めてだ。正直言うと私の剣とフランの剣とは明らかに性能の差が存在している。方や名剣、方や神代の魔剣・もしくは神剣。それだけじゃなく、私とフランには妖怪の種族としての格が違う。したがってここまで力を上昇させれば考える必要も無く私が敗北する。妖怪の上位種である吸血鬼と下位の天邪鬼ではそもそも勝負にならない。

だが——そんなものが負けて良い理由になる訳がない！

「うおおおおラアアアアアアア!!」

咆哮と共に魔剣へと変貌させたクラレントを振りかざす。フランもそれに合わせるようにレーヴァテインを真つ向からクラレントにぶつけて来た。

鉄パイプを思いっきり地面に叩きつけた際、手から全身へと駆け巡る痺れに似た感覚に襲われた瞬間、強力な衝撃波が生じ、私とフランを囲むように赤紫色の稲妻とレーヴァテインから派生した火の粉が辺り一面を破壊していく。

炎の大剣と禍々しい雷を宿らせた名剣がギリギリと音を立てる。お互い剣と剣をぶつけ合った状態で地を離れ宙に浮いて行く。そんな中フランはいつも以上に楽し気な笑みを浮かべ笑っている。これぞ正に強者の余裕というものなのか……まったくもって忌々しいものだ。

「クツ……アアアア！」

剣に精一杯の力を込め、なんとかフランを弾き飛ばそうと試みるも、やはり種族の差が生じてしまう。私程度の腕力では吸血鬼のフランの腕力には到底太刀打ちできないようだ。

対して、フランは相変わらずの笑みを浮かべたままじりじり押し返してくる。

「レーヴァテインと打ち合って尚折れないその剣には驚いたけど……これで終わりだよ正邪ちゃん！」

そんな声が聞こえた瞬間、先程までの鬨ぎ合いが嘘のように一気に押し返され逆に私が弾き飛ばされた。

抵抗虚しく、受け身も取れないまま地面に強く叩きつけられ、肺の空気と共に赤い液体が私の口から飛び出る。

「ゲホッ！ゴホッ！……う、おえ！」

思わず吐血してしまう。どうやら力を使った反動と地面に叩きつけられたダメージが重なり私の身体を蝕んだのだろう……。それにしても、自分の血とは実に気色の悪い色合いをしていやがる。

そんな自虐に耽りながらも、クラレントを確認すると、魔剣に変貌させていた筈が元の白銀の剣に戻ってしまっている。ということとは、もう私に戦う余力はないな。

「大丈夫正邪ちゃん？ちよつと力込め過ぎたかな」

「おかげさんでな……火傷だらけだよ」

「そうなの？じゃあ手当しようか？」

「いや、自分で出来るから」

お前の場合は手当じゃないからな……。

さて、これでまた私の敗北の歴史が増えてしまった訳だが……。どうにもこうにも、クラレントを手に入れたくらいじゃまだまだということなのか。

やはり、種族の差は埋められないのか……。とか、思ってみたが博麗やあの白黒魔法使いはフランに何度か勝利している訳だし、やっぱり技量の問題ということなのか……。うむ、難しいな。

私は未だ尚痛む身体に鞭を打ちよろよるな動きで立ち上がる。

「ふう……天邪鬼の私が真向勝負つてのはやっぱ向いてねえのかもな」

「そんな事ないよ正邪ちゃん！前に比べればとつてもよくなってるよ」

激励しているつもりなのか、フランは笑顔でそんな事を語り掛けて来るがお前にそんな事言われてもイマイチ実感湧かないんだよなあ。実際、ぬえも含めて起こした異変だって三人の中では一番私が弱かったわけだし。弱者は弱者なりに策を労しても所詮強者共には簡単に

突破されるのがオチだからな。

自分でもバカらしく思えて来る捻くれ思考だが、生憎と天邪鬼の私にはこの考え方が一番しっくり来ているんだよな。——だから。

「明日もここに来いよフラン……。今度こそ勝つ」

「うん、いいよ！明日も遊ぼうね正邪ちゃん！」

相変わらずの笑顔が癪に障るが、まあこいつの思考回路は幼女並だし仕方ないか……。歳でいえば一応私よりは上なんだがな。

フランは「またね♪」と別れを告げ飛んで行ってしまふ。今日は快晴なのにあいつ大丈夫なのだろうか。吸血鬼であるが故太陽は苦手なんじゃなかったか？いや、でも前に日光反射魔法を使っているとかなんとか言ってたな。じゃあ大丈夫だろう。

「さて、私もいつも通りどこかしらフラつこうかね」

特に行く宛ても無く適当にブラブラとする、これがいつもの私の日常である。そんな事をしている内に退魔師やらクソうぜえ狼女やら首無しろくろっ首に追われていたりもするが、そいつらを出し抜くのが中々に愉快だ……。さて、一体今日は誰が私を捕らえにくるのか楽しみだよ。

※※※

やる事も無くブラブラと歩き周り結局人里に訪れてしまふ。案の定といふかなんとういか、私も含めて皆無難な選択肢をとってしまうものなのだろうか……。

まあ人里に来たはいいものの、結局のどこ特にこれといってやることの無い私は気ままに散歩をしつつ道行く人間達を観察していく。視線が合う者、露骨に視線を逸らすものと皆それぞれだが、中には妖怪に対する嫌悪感を隠そうともせず睨んでくる者も少なからず居る。だが結局は腑抜けばかりでそれ以上の事はしてこないし出来もしないのだろうか……。

こういつた厄介者を見る目は昔からの事だから別に気にも留めて

ないが、何故だろう……今日は妙に不可解な視線を感じる。嫌悪とか憎悪とか、そういった感情の類では無く、好奇心にも似た感情が籠った視線が少し前からずっと私の方を向いている。ここ人里では問題を起こせば色々と面倒になるので今は目立った行動をとるのは得策ではないだろう。

「……………」

先程よりも私に向かう視線が段々と強くなっているのが分かる。近づいているようでどこか距離を置いているようで、結構あやふやな感じだ。付けられているのかとも考えたが、それにしても尾行が下手すぎる。

ただ、近づいているようで距離を置いているように感じるということはおそらく……。

「さつきから一体何の用だよ……ぬえ」

「あらバレちゃった？流石ね正邪」

視線を感じていた方向とは逆側に顔を向けると、妙にニヤついている大妖怪様が目に映る。その表情があまりにもイラつくもんで、一瞬クラレントで叩き斬ってやろうかとも考えたが、ここは人里である訳だし、問題行動は起こさないに限る。そもそも大妖怪相手にはまだ私じゃ対抗できないし。

「んで、何の用だ」

「別に。正邪が人里にいるのが珍しいと思っただけ」

「そうですかい……んじやとつと失せてはくれませんかね？」

「相変わらずの減らず口で安心したよ雑魚妖怪」

「……………安心してもらって嬉しいよマヌケ妖怪」

お互い笑顔を浮かべて上記のセリフをぶつけ合う。こういった意味の無い皮肉めいた挑発は私とぬえの間では挨拶のようなものだ。……無論殺気や怒りの気配を発している訳ではないが、妖怪同士が今のようなやりとりをしていては人間達も気が気じゃないだろう。横目で見ても分かる、人間達の不安げな顔……恐怖した表情。その恐怖や畏怖こそが我ら妖怪と人間の差だ。

だがまあ、それが通じるのはこういういった有象無象の類に限るんだが

……。

「いつも通りだね」

「いつも通りだな」

私とぬえはハハッと笑い、歩を合わせて歩き出した。

「お前こそ何してんだよこんなところで」

「私？私は乖離に呼ばれて来たただけけど」

「あいつに？」

あの人間が一体何の用でぬえを呼んだかは知らないが、呼ばれたからといってむぎむぎ現れるぬえもぬえだろう……。仮にも妖怪であるのだから警戒くらいはしておけというものだ。だが、私も行く宛ても無くブラブラしているだけだし、暇つぶしに付いて行ってみようか。

「私もよくは分からないんだけどね、乖離が大事な話があるのかないとか言ってたから」

「場所は分かっているのか？」

「一応命蓮寺まで集合場所の地図は届けてくれているから分かるには分かるんだけどね……」

そう言っただけぬえは一枚の紙をポケットから取り出し、目を走らせていく。私も少しぬえに寄って地図とやらを覗いてみる。

「ん、この赤い印の付いているところが目的地か？」

「そうみたいね」

「それって……ここじゃん」

人里全体が描かれた地図に一点だけ赤い印の付いている場所がある。そこは言うまでも無く、今現在私とぬえの横に建っている大きめの建造物。宿かよとツツコミを入れたくなる大きさだが、見た限り建ってそう時間が経っているようにも見えない。まるで、ここ最近出来上がったばかりのようだ。

「ここ？にしては随分と立派なところじゃん」

「ぬえも知らない場所か？」

「たまに人里には来るけど、こんな建物があつた記憶は無いわね」

てことは、やっぱり私の予想は間違っていないということなのか？



立派と言えば立派だし、少々この時代には会わない建築仕様だしな。どこか現代染みているというかなんと言うか。

「とりあえず、入ってみる?」

「そうだな」

入口にはちやつかり青紫色の暖簾があるし、扉はこの時代の物とは違って純木製の物ではなく硝子を使っている。

ぬえが扉を開け中に入って行くのに続き、私も同じくして建物の中に入る。

建物の中は非常に良く手入れされており、正に新築感を醸し出している。広々とした空間の中に大小様々な固定された机と椅子が置かれてあり、瞬時にしてこの建物が飯屋というのが分かった。

「これは中々……」

人里には沢山の飯屋があるが、ここまで立派で進んだ設計が施された飯屋はまず無い。カウンター席っていうのか?そんなものまでしっかり用意されている辺り、抜かりが無いなここの主人は……。

「あれ正邪ちゃん?」

「ぬえ、やつと来た!遅い」

妙な声が聞こえたと思ったら、数時間前に別れた筈のフランとお面を付けた奴まで一緒にいる。お面の奴はいつぞや会った気がするな。

二人は私とぬえを見るなり「こつちだよー」と言いたげに手を振ってくる。二人共子供用なのか、小さな椅子に座りながらジュース?の入った硝子のコップを手をしている。

「あれ?フランも呼ばれたの?てつきり呼ばれたのは私とこころだけか?」

「私は館に帰ってる途中でお兄様に呼ばれたんだよー」

「ふくん、そうなんだ」

ぬえは乖離に呼ばれたと言っていたが、こいつらも揃ってあいつに呼ばれたのか?だとしたら、一体何の意図があつて……。

なんて思っていると、どうやらこいつらを張本人様がご登場のようだ。

「皆集まつてる?……あ、正邪発見」

乖離は私を見るなり急に意味の分からん言葉を発した。私を発見？ 一体どういう意味だ。

「よかった、イチイチ探す手間が省けたよ。これで紫のスキマに頼らなくてもいいな」

今なんか物騒な事を聞いた気がするが、その意味を追求するのは私の勤が危険信号を発しているのでやめておこうしよう。

だが、こいつは私を探してたと言った。一体何の用があるかは知らないが……相手は私を然り、ぬえやフランですら太刀打ちできない化け物なんだ、下手な事はしない方がいい。

「でさ乖離、何で今日私達を呼んだの？」

「俺今週の金曜からこの『定食屋』を経営する事になってさ、従業員を募らないといけないんだよね」

「つまり、私達にここで働けつてののか？」

「言い方はアレだが、まあそんな感じ？」

警戒していたのも束の間、なんとという拍子抜けな事か……。驚いて危うく目が点になるとこだった。それに驚いているのは私だけではなくぬえやフラン、後お面被ってる奴も驚いた表情をしている。一名は真顔だが……。

しかし、乖離は一体どういうつもりだ？ そのお面の奴はよく知らんが、私とぬえとフランは先の異変の首謀者であり、この幻想郷でもそれなりに危惧されている者だ。特に私なんか未だに指名手配されてるし。

「まあ別に働きたく無いってんなら断つてくれてもいいよ？ 人員は減るがなんとかやり通してみるし」

天邪鬼の性分だからという訳でも無いんだが、私にはこれといって断る理由が無い。それどころかこいつの下に就けば私を追ってくる自警団の連中や妖怪共も下手に手出しできなくなる。私にとっては願ったり叶ったりなのだが、妙に上手く使われてる気がしてならない。

そう思ったのはどうやら私だけではないようで、ぬえも同じ意見のようだ。

「別に働くという点には問題ないんだけどさ、何の意図があつて私達なの？乖離が声を掛ければいくらでも人員は募った筈じゃないの？あの蓬莱人の連中とかさ」

「ん？単純に暇さそうな奴で真つ先に頭に浮かんだのがお前らだつたつてだけだが？あとあの二人は却下、喧嘩で店を破壊されたら困る」

「そ、そんだけ？」

「そんだけ」

今日で二度目の拍子抜けだ。まさか本当にそれだけが理由だつてののか？ただ暇そうだからという理由で……。人間つて何考えてんだか分からんな。

「で、どうする？」

「私は賛成だよー」

「私もー♪」

暢気に重要点を聞かずに手を挙げるロリ二人。何故お前らはそんな悠長なんだよ……。子供の思考回路つてどうなつてんだ……。

先が読めない奴だが、ここは敢えてこの話に乗ったほうがいいんじゃないか？こいつが私達を利用しようとしているようにも思えんしな……。それに、意外と楽な仕事かもしれないし。

「いいぜ……乗つてやるよ。その代わり、安全は保障出来るんだろうな？」

「客からのやつかみならこちらで対処するが、お前から喧嘩は売らないでくれるとありがたいかな」

まあそういう事なら多分大丈夫だろうが、問題は私では無くフランじゃないか？あいつは何かと不安定な奴だし。というか、こいつもこいつでよく妖怪なんて雇おうなんて思ったな。こいつ自身が妖怪と真正面からやりあえる強さがあるから、そこからくる自信なんだろうけど。

「ぬえはどうする？」

私を含め三人は了承しているが、残っているのはぬえだけだ。こいつも私同様にすんなりと首を縦に振ることはないだろうが、その何か

を考えている様子を見るに何らかの意図があるんだな。

そうこうしていると、ぬえがポンツ！と手を打ち、親指と人差し指で輪を作り乖離に見せつけるように、如何にも何か企んでる表情を見せた。

『これ』と応相談だね〜」

こいつ、抜け目ないな……。幻想郷で生きていく限り野宿だけではまず不可能だ。必ず金銭面の問題が生じて来る。ぬえはそこら辺を良く理解しているようだ。流石は平安京の大妖怪！そこに痺れもしないし、憧れなんてクソ喰らえ。

「その辺はこの冊子に目を通してくれるといいよ」

どこから取り出したのか、乖離はおよそ紙三枚分程度の冊子を四つ、それぞれに手渡してきた。真つ先に目に入って来たのは時給面だ。一番最初に一が一つとそれに並んで零が四つ……。ん？零四つ？

「何イイイイツ!!時給一万だとおお!!」

あまりの桁数に私は腰を抜かして床にへたりこんでしまう。

ありえない、こんな数字！一体どここの有名企業に主任採用されたんだ私達は……。！時給一万とかそこらのサラリーマンより圧倒的に高額だろうに。乖離のやつ一体何を考えているんだよ。だいたい、そんな金どこに仕舞ってんだか。

「乖離……。な、何かの冗談だよねこの数字?!ありえない!ただの定食屋のアルバイトでしょ?」

「……。何か問題でもあるのか?」

乖離はケロツとした表情でぬえに疑問符を返すが、当のぬえも金額が金額なだけに困惑と喜びがごっちゃまぜになって正常に頭が機能していないようだ。

しかし、私達とは対照的にフランとお面女はこの金額がしつかりと理解できていないのか、『何それ?』とでも言いたげな表情で小首を傾げている……。嗚呼、お子様頭脳は色んな意味で羨ましいよ……。

「んで、ぬえの方はどうする?」

「ま、まあ乖離がそこまで言うなら働いてあげなくもないかな?」

白々しい奴め……。目の中金に染めて何をいいやがるんだかこの大妖怪は。

「よし、これで人員は揃ったし早速役割分担を決めるぞ?」

そう言っつて乖離は少し大きい紙を取り出し、そこにすらすらとペンを走らせていく。

「一応料理長は俺として、副料理長……。まあ俺のサポートに回れる、というか料理できる奴拳手」

「「ぬえ（ちゃん）」」

「え? 私なの!」

ぬえはいきなり私を含め三人に推され戸惑った表情を見せている。とはいえ、ぬえの料理の腕は私もフランも体験済みだ。ああ見えてぬえは命蓮寺という寺で暮らしていた経験もあつてか、精進料理はかなりのものだ。聞いたところによるとその命蓮寺では一番料理が上手かったとかなんとか。

「次は接客or料理を運ぶ役柄だが……。これはこころちゃんとフランしかありえんな」

「頑張るぞー!」

「オ〜♪」

こころと呼ばれたお面女とフランは流石いうべきか、中身が子供であるが故に何の異論もなく楽し気にガッツポーズをとっている。

しかし、そうなつてくると後の私の役柄は何になるんだ。

「正邪はく……。うん、店長でいいだろ」

「はっ!」

ついつい間抜けな声が出てしまったが、今こいつ何て言つたんだ? 私を店長に……。?天邪鬼であるこの私をか?

「いやいやいや、店長はお前じゃないのかよ」

「料理長と店長は両立できないのでね。それに、お前は俺よりもあの三人をまとめ上げる事に向いている。逃亡者として培った観察眼とあらゆる状況にも対処できるその冷静さを持ったままでよ」

どうしてそこまで私を信頼できるのかは知らないし、知つたような口を叩かれるのは非常に不愉快ではあるが、こいつの前ではあの八雲

ですら頭が上がらないんだ……。ひとまずここはこいつの口車にのってやるとするか。

「へいへい……。やりやあいんだろ〜」

まあなんにせよだ。仕事という面でも乖離を観察しておくのは大事だろう。いずれは越えねばならん存在だ、むしろ好都合と解釈しておこう。

「そんじや早速、下準備を始めるぞ!!プレオープンは三日後。それまでに仕事の流れを体に叩き込んでもらう!」

望むところだ。天邪鬼の采配ってのを見せてやろう!!いずれはその首をもらい受けるからな乖離。

## 三十七話 プレオープン

S i d e 乖 離

今日はプレオープン。我が定食屋の試運営日だ。

三日前から雇った従業員達に客に対する礼儀と作法を余すことなく叩き込み、店の運営やその他諸々を頭に刷り込ませた。時間が無かったのもあり、少々大雑把になってしまったのは俺の采配不足として反省しておこう。

全員今日の為に必死に覚えようとしてくれたのだが、やはり妖怪。私の強い連中なので一体何度『いらつしやいませ』の作法を指摘したことか……。正邪はあからさまに嫌そうな顔でいらつしやいませと言うし、フランなんかは完全に客を破壊する気だったようだし。その点で言えばこころちゃん辺りは割とキッチンといていた。寺育ちだからだろうか？

ぬえと俺は基本的に厨房に居るので客と対面することはあまり無い。だが、こちらもちちらで手間が掛かった。

現代機器の扱いにおいて、説明書云々や俺からアドバイスを何度か送ったりもしたのだが、やはり慣れない事をさせた勢だろうか、ぬえは何度か店を炎上させかけた。そのお蔭でガス台が跳ね上がりましたがね。

それでも彼女らはよくやってくれた。正邪とぬえは不眠不休・徹夜をしてでも自分の役割を頭に、そして体に叩き込もうとしてくれた。まあ、我が家に泊まり込みしてくれた勢で家の食費がバカにならなかつただけでもネ！やれハンバーグ食わせるだのカツ丼作れだの、俺にもやる事があるのに散々こき使われたよ。それはそれとして新鮮だったからいいんだけど。

して、現在はどうかというと、こころちゃんとフランは楽しそうに綾取りをして遊んでいる。プレオープンまで時間もあるし、ああして英気を養っておくのも仕事の内だ。

そしてぬえと正邪はというと、死んでいるんじゃないかとさえ思える程、爆睡中だ。この二人においては昨日の朝から今日の朝まで徹夜をしていたのだから無理もないだろう。

かく言う俺も徹夜勢である。うちの従業員が頑張ってくれているというのに、俺が楽をできる筈もあるまいて。まあその勢もあつてか、鏡を見れば目の下にクマが出来ているがね。

「さて、そろそろ来る頃合いか……」

重い腰を上げ、俺は店の出入り口へと足を運ぶ。

店を扉を開け、外に出ると一際強い風が吹く。暖簾がはためき、パタパタと顔に当たる。少し上を見上げれると、手帳とペンを持つ鴉天狗が居た。

「おはようございます乖離さん！調子はいかがですか？」

「まずまずかな？徹夜の勢で少し体が重いよ」

文は黒い翼をたたみ、スツと俺の前に降り立った。

「今日はご招待いただきありがとうございます！私も美味しいご飯が食べられると思ひ徹夜勢です♪」

驚いた。ここにも徹夜勢が居たとはね……。

今日こうして文を招待したのは、彼女の発行している『文々。新聞』にうちの定食屋を宣伝して欲しいというのと、これは俺の意思ではないのだが人間と妖怪両者が平等に食事が出来るという空間を作つて欲しいというところある僧侶さんのお願ひでもある。まあ俺としては客がくればなんだったっていいんだけどね。

「文も徹夜か……なら、眠気も吹っ飛ぶような料理をご馳走しないといけないな」

「はい！期待増し増しで待ってますよ〜！」

にこやかに笑う文につられて、俺も無意識に頬が緩んでいた。だらしがないなと思ひながらも、意外と悪くないとも思つた。

「プレオープンまで時間は残り30分くらいか……。そろそろ二人を起こさなくてはね」

「では私がお先に中を取材させてもらつても構いませんか？」

「いいよ、存分にね。あ、でも厨房は立ち入り禁止ね？あこは料理人の



「聖域だから」

「了解です♪」

「独占インタビュー！」と徹夜しているとは思えないテンションで文は我先にと店の中に入って行った。やれやれと苦笑しながら俺も正邪とぬえを起こすべく再度店に戻った。

尚二人を起こした時とても機嫌が悪かったらしく、危うく三又の槍で串刺しにされクラレントで真つ二つに切り裂かれるところだったのはちよつとした裏事情。

「さて諸君、店の前には既にお客様が待機中だ。首尾は上々かね？」

「俺の方は問題ないよ。いつでもいける」

「右に同じく。徹夜で今回出す料理のレシピは頭と体に叩き込んだ」

「私達も大丈夫だよ！ね、こころちゃん♪」

「バッチこーい！」

「よろしい……ではお迎えしよう」

それぞれがそれぞれの配置につく。皆私服ではなく、俺が呉服屋に発注した制服を着て仕事にあたる。その中でも俺は黒いエプロンを着て、ぬえは白いエプロンを着ている。これが料理人の正装だ。

さて、これから俺はお客様方を迎え入れ戦場に赴く訳だが、なに神話戦争の延長戦と思えば気が楽になる。相手は所詮歴戦の猛者（腹ペコ）でしかない。その程度なら問題はないだろう。

「正邪、鍵を開けてくれ」

「分かった」

正邪は扉の鍵を開け、数歩後ろに下がる。

小さく深呼吸をし、俺は扉に手を掛ける。ガラガラと音を立てて開かれた扉の先には、やはりというべきか……招待状を送った者達が目キラキラと輝かせて待っていた。

「ようこそ我が定食屋へ。これよりプレオープンだ！存分に試食して

いっしてくれ」

さて、これより先にはあるのは料理人の戦場だ。

※※※

「オーダー入るよ！唐揚げ定食六人前、カツ丼大盛り二人前」

「オーダー！ハンバーグ定食四人前と麻婆丼三人前！」

「了解！」

オーダー確認。俺とぬえはすぐさま料理に取り掛かる。

すっかり味付けを施した唐揚げを油鍋の中に流し込み三十〜四十五秒間揚げていく。その間別の油鍋にカツを入れて一分から二分程熱していく。時間の余裕はあまりないので次の作業に取り掛かる。

「ぬえハンバーグを頼む！こっちは麻婆に取り掛かる！」

「分かった、任せて！正邪領収まだ終わんない?！」

「話しかけんな！気が散る」

店の中は大忙し。プレオープンにつき招待した客は十人を超えている。その中でも数名は大食いと来たもんだから、俺達に休む暇など与えてくれそうにはない。それぞれがそれぞれの仕事で手一杯で、とてもではないが助力に行けそうにない。

「唐揚げ揚げ終わった！どんどん回してくれ」

衣がふやけないように丁寧に油紙で油を吸い取り、皿に並べてレモンを添える。先に湯でておいたレタスをしっかり湯切りしておき、唐揚げの下に敷く。後は茶碗にご飯と沢庵を乗せて完了だ。

「ぬえ、味噌汁の方はどうだ？」

「今六人分器に注ぎ終わったよ！唐揚げ定食六人前完了!!」

「了解！出来た皿からどんどん出してくれ」

上記の行程の間にカツも出来上がったらしい。すぐさまカツを取り出し油紙の上に置き数秒冷ます。そうこうしている間に卵を溶き、玉ねぎを細く刻んでいく。フランパンを用意し、特製のタレで溶いた卵と玉ねぎを加熱していく。

「ぬえ、ハンバーグはどうなった？」

「まだ掛かるよ！そっちは？」

「カツ丼はもうじきできるから麻婆にも取り掛からないとな」

そう俺が言うと、ぬえは小さく四角に切り終えた豆腐を出してきた。

「豆腐は切つてあるよ」

「……ナイスだ！」

ぬえが先に豆腐を切ってくれたおかげで料理の行程が一步先に進んだ。というか手際がいいのも確かだが、昨日今日でよくここまで料理の腕を昇華させたものだ。ぬえにはこっちの才能があつたのかもしれない。

丼ぶりに白米を盛り、揚げ終わったカツを六等分に分け特製タレで加熱した具材を乗せればカツ丼の完成だ。次は麻婆丼に取り掛かるでしょう。

「オーダー追加！カツオ御膳を四人分お願い！」

焦った様子のごころちゃんが厨房に届くように大きな声を出して教えてくれる。やれやれ腹ペコ集団め、俺達に休ませる気は無いとみた！しかもカツオ御膳といえは俺とぬえが協力しないと出来ないやつじゃないか。今のぬえにその余裕があるかどうか……。

「急だけどオーダー追加！ケーキをホールでお願い!!」

フランの声が響いたと思つたら次から次へと難題が飛んでくる。ケーキのホールと言えは俺しか作れないじゃないか。ぬえにはまだ作り方教えていないし、さて困つたぞ……。カツオ御膳を四人分に加えケーキのホール、俺はこれから麻婆丼に取り掛からなければならぬといはいえ、ぬえは未だハンバーグ定食にてんてこ舞。

「スウ……」

一旦整理をつける為に静かに息を吸う。俺のやるべき事は麻婆丼を作りながらカツオ御膳とケーキをホールで作る。ぬえは今現在ハンバーグ定食を作るので手一杯、おそらくカツオ御膳とを両立させるのは少し厳しいかもしれない。

「ぬえ、カツオ御膳いけるかい？」

「え、マジで言ってる!?ムウ〜やるしかないでしょ?こうなったから大妖怪ぬえ様の本気見せてやるわよ!!」

「……よしー!」

気を引き締める為にエプロン帯を締めなおす。ぬえも然り、こころちゃんもフランも正邪も頑張ってくれているのだから、俺も本気を出さないといけないな。

「いくぞ、腹ペコ共。胃袋の貯蔵は充分か」

どこかで聞いた事のあるセリフを口にした俺は真っ先に麻婆丼とケーキに取り掛かったのだった。

結果だけを言うならば、なんとかオーダーラッシュは切り抜ける事に成功した。特にケーキをホールでつてのは難題中の難題だったが、そこは俺の料理人歴Ⅱ才能で突破した。麻婆丼もカツオ御膳も、ぬえと共同戦線を張りなんとかクリアしてみせた。それ以外の追加オーダーも同じ要領で……。

「燃え尽きた〜、真っ白に」

「指が……指がアア」

「へとへとだよー」

死んだように椅子にもたれ掛かるぬえと、痺れて動かないのか指を必死に抑える正邪とお冷を流し込んで水分補給を取るこころちゃんとフラン。皆、よく頑張ってくれた。かく言う俺も長椅子に仰向けになっっているんだけどな。

「久しぶりにこんなに疲れたな〜」

ここまで働いたのなんていつ以来だろうか。おそらく月に住んでいた頃にサグメと研究室に二日ほど引き籠って始末書纏めてた時振りかな。いやはや、今回はアレに匹敵するレベルだったと思う。

こうして休んではいるが、この休憩が終わればまだデザートが残っているのもう一山越えねばならない。そう考えただけでも頭が痛くなりそうだ。

「お疲れのようね乖離くん」

「ん？」

不意に名を呼ばれたと思うと、額に冷たい物が当たった。ひんやりしていても気持ちいい……。声から察するにヘカちゃんがお冷を持ってきてくれたのかな。

「あのカツ丼大盛りとても美味しかったわよ？ 私も映姫ちゃんも夢中になって口の中にかき込んでたわ！ あくあ、これだけ美味しいご飯なら純狐とクラッピーちゃんも連れて来ればよかったわん」

控え目に言って勘弁して欲しいな……。こつからまたも腹ペコが増えると思うと気が気じゃなくなりそうだ。

俺はヘカちゃんからお冷を受け取り、起き上がって一息にお冷を口に流し込む。冷たい物を一気に飲み込んだせいで頭がキンキンと痛くなる。

「美味しかったのなら嬉しい限りだよ。まあ俺らはその勢で死にそうだけどね……。過労という意味で」

「過労死なんてしたら地獄行きよ？」

「ハハハ、これは手厳しいねえ……」

思わず苦笑してしまう。ヘカちゃんが地獄行きなんて言ったら本当にそうされそうで怖い。なんて言っても相手は地獄の女神様だ。人間一人を地獄に墮とすなんて寝ていても出来るくらいなんだろうな。

「それより、他のお客さんは喜んでくれてたのかねえ」

「皆嬉しそうに、それでいて楽しそうに料理を食べていたわよ？ えーっと、妖怪の賢者さんだったかしらね。彼女なんて泣いて食べていたくらいだし」

紫か……。別に泣いて食うようなものでもないだろうに。まったく大げさな事だ。嬉しいと言えば嬉しい事だがね。

「そうそう、他にも月の姫と白髪モンペは唐揚げを取り合っていたわ

ね？そこで二人の保護者？に怒られていたわね」

輝夜と妹紅か。で、保護者と言えばおそらく永琳と慧音さん辺りかな。唐揚げ取り合うとか子供かよ……。まああの二人は何年経っても中身は子供なのかな。

「考えるだけで頭が痛くなりそうだよ」

「それと、あの鴉天狗の娘は「実食レポート！」とか言って麻婆丼を食べて幸せのあまり昇天しかけてたわよん？」

今度は文か。ていうか、うちの定食屋で飯食って昇天とかマジでやめて欲しいのだが……。妖怪が定食屋で飯食って死んだとか笑い話にもならない。もしそんな噂が広まればお客さん来なくなってしまうじゃないか。

しかし、なんにせよ皆喜んでくれているのなら嬉しい限りだ。苦勞した甲斐があつてなによりだし、料理人冥利に尽きるというものだ。

「ただ、女神の舌を喰らせるには些か物足りないわよ？」

「言ってくるじゃん。こう見えても俺は料理の腕に誇りとプライドを持つてるんだ。……いいだろう！俺の最高のスイーツで沈めてやる」

「あら、それはとても魅力的ね♡ぜひお願いするわねん！」

そう言い残して、ヘカちゃんは去り際に俺にウイソクを飛ばしてくる。若干の苦笑いと共に、重い腰を上げて宣言通り、俺の最高のスイーツ『虹色ディニッシュ』を振舞うべくもう一度厨房へと足を運ぶ。

厨房では既にこころちゃんと正邪が食器洗いをしており、殆どの皿が綺麗に洗浄されている。この二人はやたらこういった作業は器用にこなすから凄いと思える。ぬえや俺は料理はともかく皿洗いはがさつだからね。フランの場合は言わずもがな、破壊してしまうのでこういう作業はさせられない。

さて、ここからは俺の仕事だ。スイーツ系はぬえといえど作り方は教えていないので手伝えと言ってもそれは無茶振りに等しい。そもそも話をするのなら、俺は料理人を名乗ってはいるがそれはあくまでも副業のようなものに過ぎない。俺の本業はスイーツ系・つまりパティシエにある。

大きめのボールを用意し、小麦粉と良質なミネラルウォーターを準備する。片手にお玉、もう片手には泡立て器を構え、最後のステージへと昇る。

「ラストスパート……これで終わらせる」

結局、死亡フラグ紛いのセリフを言ったはいいものの、ディニツシユ作りやその他のスイーツ系は特に手伝って貰う必要もなく、気さえ抜かなければ簡単な作業なので回収する必要は無かった。そもそも回収とかしたら俺が死んでしまうのだけだな。

ただ、プレオープンは無事終了した。招待した者達も喜んでくれていたし、本格的に開店となったときはスポンサー契約を結びたいなどと言い出してきた者も居たくらいだ。……主に紫とレミさんだけだ。

そして今は、俺は従業員たちと共に店の前に並んで立っている。というのも、文がせっかくだからと集合写真を撮る事になったのだ。

「何で写真なんか……」

「いいじゃない正邪ちゃん！面白そうだわ♪」

「ワクワクする！」

「そうよ！文句バツカ言わないの」

嫌そうな顔で不満を漏らす正邪、楽しそうな表情ではしゃぐところちやんとフラン、嫌そうな顔をする正邪の腕を組み無理やりにも参加させようとするぬえ。この光景が、俺にとってはとても微笑ましいものに見える。

「それでは皆さんいいですか？撮りますよ！」

俺は皆より少し後ろに立ち、出来るだけ彼女らが目立つような位置に移動する。が、こころちゃんに裾を掴まれていたようで動けなかった。というかいつの間……。

「それでは3・2・1……」

文が数字を数え終わると、フラッシュにより一瞬視界が真っ白にな

る。この程度の光には慣れていたので瞬きをすることは無いが、目に悪いのは確かだ。あまりフラッシュを浴び続けると視力が落ちてしまうだろう。

最後に撮った集合写真は後に文々。新聞に採り上げられていた。皆良い顔で写っていたので、写真のデータをコピーしてもらい、定食屋の物置台に飾っておくことにした。

もう一つ挙げることがあるとすれば、我が定食屋の名は『料亭氷鮑』になった。何故俺の苗字をと思ったのだが、他の皆がそうしろというものだから抗おうにも抗えきれなかったのだ。まあ、それはそれとして構わないのだけどね。

これからも、彼女らとは楽しく営業を営んでいけることを願うでしょう……………。

※※※

「神奈子様、諏訪子様、ご飯の準備が出来ましたよ！」

「はいいっ！」

「あら、これは文々。新聞ですね…………。何々、人里にて新たな定食屋開店？従業員は愉快な人間とそのお供妖怪四人…………また妙な記事を載せますね文々さんは。アレ、この写真は…………この写真に乗っている真ん中の男性、どこかで…………。でも、この特徴的な雰囲気は、まさか…………乖離君？」

「早苗く御飯は？」

「あーうー、お腹空いたよう〜」

「どうして、乖離君がこの…………幻想郷に…………。もう、二度と会えないと思っていたのに…………どうして…………。」



「えっ!!何で早苗泣いてんの?!」

## 三陣宗教編・神話の獣

### 『キャラクター説明1』

#### 『氷鉤乖離』

種族：人間・星人 血液型：O型 身長176cm 体重58kg

趣味：読書・釣り・将棋・料理

能力：『根底から全てを覆す程度の能力』

二つ名：星の守り人・世界の意思・神罰を告げる者

危険度：不明

遭遇率：やや高め

生息域：人里と博麗神社中間の森

八雲紫の計らいにより幻想郷へとやって来た人間の青年。気さくで温厚な性格をしており、幻想郷では珍しく常識を弁えた人物。紫の眼よりも薄いアメジストのような瞳が特徴的。

幻想入り以前は外の世界に住んでいたというのもあり、どこか幻想郷の常識外れな行動を取る者達に頭を抱える事が多い。しかし面倒見はとてもよく子供っぽい性格をした娘達に懐かれる事がある。

素性の一部は秘匿されているが、元々は『星そのものが用意』した抑止力の顕現であり不老不死の完成形。生まれついて霊力ではなく自然エネルギーを持っていたことから世界の中枢に触れ完全に覚醒している。幼少期を迎えずそのまま少年期に移されいるため、幼い自分を知らない。そのことから幼い自分が一体どういう姿をしていたのか気になっている。

幼い頃の紫の面倒を見ていたことや、月に赴き輝夜や永琳たちと縁を紡いだことなど、世界の記録と歴史を渡る時間跳躍をしていた過去がある。それにより寿命や老いで死ぬ事が出来なくなっており、実質的に不老と化している。しかしそれを能力を用いて老いるようにしている。

強大な力を持つ者が跋扈する幻想郷の中でも一際異質な強さをほ

こつており、どのような相手に対しても油断や慢心が無い為紫とは別の意味で弱点が無い。更には相手に合わせて戦いの型を変えられるので攻略が極めて難しい。かつては地上の神々でさえ困難とされた月の都を単身で制圧し、守護神達を軽く一蹴してみせるなど未だ実力の底が知れない部分がある。頭の回転も非常に早く、将棋においても紫に勝利してみせるなどかなり戦術にも長けている。

奥の手として『クラスターカード』と『星断剣』と呼ばれる宝具を所持していたり、その他にも『イガリマ』や『クラレント』など神話などに出て来る武器武装を幾つか所持している模様。

対人関係は良好で、人当たりは良い。人間も妖怪も差別することなく接するので色々と誤解を招きかねない。恋愛経験は無く、結婚願望は人並みにはある。

現在はぬえ、こころ、正邪、フランと共に定食屋を営んでいる。

「面倒事は嫌いだね。昔からそう言った類の事柄からは回れ右して逃げてるよ……。まあ、逃げ切れたことは一度もないけど」

「戦いは嫌いじゃない。力比べは互いを高め合ういい刺激になるからね」

「生憎と俺は自己の感情だけで命を奪ったことは無いんだ。……アレだよ、要するに仕事であるかそうでないかの違いさ。……そういう訳だ、サクッと死んでくれ」

「ちよつと！読書の邪魔をしないでくれよ!!今いいところなんだからさあ！」

### 『八雲紫』

種族：妖怪 血液型：不明 身長168cm 体重聞いた者からス

キマ送り

趣味：乖離様を眺める・乖離様と話す・乖離様（ry

能力：『境界を操る程度の能力』

二つ名：妖怪の賢者・幻想郷最強の妖怪

危険度：極高（仮）

遭遇率：不明

生息域：どこにでも

幻想郷を創設した賢者の一人であり管理者。妖怪の中でも特に優れた能力と知力、身体能力をもつ幻想郷を代表する大妖怪。乖離の眼よりも濃い紫色の瞳が特徴的。妖怪としての本質が強くなると瞳の色が金色に変わる。

最強と畏れられるだけありかつて同じ大妖怪を血祭りに挙げ惨殺していることもあり、同じ大妖怪である九尾の狐を自らの式にしている事から実力の底が図りきれない部分がある。能力自体も非常に強力で、最強の一つに数えられている。

対人関係はその胡散臭さゆえに避けられやすくあまり良くはない。ただ、友人や知り合いはそれなりには存在するのでボツチではない。強者の余裕を見せて自慢を含める部分があるが、乖離にはまったく関心されていない事を知らないままである。また、乖離の持ちうる『星断剣』を実際に見た事はないため『原災を起こす能力』と勘違いしていたりする。

いつも胡散臭い態度と回りくどい手口で他人を翻弄し、駒のように扱う癖があるのだが、乖離にはそういう手口が全く通用しておらず逆に掌の上で弄ばれている。と思っているのだが、実際は乖離自身が無干渉なだけなので単なる早とちりである。

幻想郷でも乖離の過去を知る少ない者の一人であり、乖離が幻想郷の敵になる事を常に危惧している。本来であれば幻想郷を脅かす可能性のある存在は即刻排除すべきなのだが、そこは乖離に対する強い敬意と執着染みた愛情で見えぬ振りを貫いている。しかしそれにも限界があると理解している為、万が一において覚悟は決めている。

恋愛は乖離以外の男に興味は一切なく、結婚願望も乖離一筋である。幼い頃に乖離と出会い、共に過ごした過去があり、乖離との実力の差を今も昔も変わらないのではと少々不安気味。

「最近乖離様精分が足りてないわね……」

「乖離様が強くて優しいから好きなんじゃないの。乖離様というだけで理由はこと足りるわ!!」

「命乞いならする相手を間違えたわね……。私は最初からあなた達を赦す気なんて毛頭無いわ。虫けらは虫けららしく、地だけを這いずつていれば死なずに済んだものを……。後悔と恐怖を抱いて逝きなさい」

「幻想郷最強の妖怪などと呼ばれてはいても、所詮乖離様から見れば本土の中だけの話なのよね」

## 『無名』

種族：星人

趣味：――

能力：『――程度』の能力

二つ名：無し

危険度：分類不能

遭遇率：不明

生息域：無し

後に『氷匏乖離』と名乗るであろう少年。感情も表情も無くただただ与えられた任務のみを遂行するマシンドール。抑止力である自身の存在価値に興味が無く敵対する者に一切の容赦はない。

本来は世界の歪みに際し姿を現し、その修正を行う。

人間の振りを必死に行おうとするロボットとは違い、完全に機械と

成り果てた存在として動いているので話し合いなどと言った解決など考慮せず一方的な殲滅を開始する。

そんな中で『アルニウン・レイシユラード』と出会い名を貰い人生や道徳、感情を学び命の価値を見定めるようになる。これがきっかけで徐々に世界との繋がりが薄れていき最も人間に近い感情と思考を得るようになる。

「……………」

「……………」

「アル……ニウン」

「オレの名は………乖離だ」

『クラスターカード』

乖離のみが所有する特別な兵装。星そのものとながる事によりほぼ無尽蔵に近い莫大なエネルギーを引き出す事が可能。これにより一時的ではあるが神を凌駕するほどの力が発揮可能であり、基礎身体能力も飛躍的に向上する。乖離以外に使用することは不可能であり、他の者が使用しようとすると何の反応も起きない。また通常時は使用不可能な『神造兵器』の使用も可能にするという効果も付与される。

現在はクラスターカードの質も落ちており、発動して三分が限度となっている。

呼び名としては

『クラスターカード』

『星天覇将術』

『冠位・夢想顕現』

上記の呼び名は乖離が勝手につけたものであり、真名は『クラス

ターカード』

『壊山剣・イガリマ』

かつて神話戦争にて用いられた神々の七つ宝具の一つ。巨大な山脈さえ両断可能なほどの圧倒的威力を誇り、神造兵器の中でも選りすぐりの逸品。神であっても使用が困難とされている武具ではあるが、乖離はクラスターカードの起動によりこれを行使可能となる。真名開放を行わずとも災害クラスの破壊力を有しているが、消費するエネルギーは尋常ではないため例え上位の神であっても最大火力を發揮できる者はそういない。クラスターカード使用中の乖離だからこそ誰よりも扱いに長けている。

かつてはサグメとの一騎打ちにて最大の敬意と覚悟の称賛として真名開放を行っており、サグメの最大火力の一撃と真つ向からぶつかり、圧倒的力の差でねじ伏せている。

『星断剣・アース』

乖離の持ちうる最高にして最強の切り札。この世のありとあらゆる物質、または概念を一部の例外すら残さず全てを消滅させる究極宝具。その実体は地球誕生の瞬間から存在していた最初の厄災の現れであり、神を問わず妖怪を問わず人間を問わず、生命が遺伝子レベルで刻み込んだ『最初の畏れ』の顕現。法則性も原理も一切を無視して対象を復元不可能な領域、素粒子すら残さぬレベルで消し去る事が可能であり、また魂であっても完全に消滅させることが可能。

いつもは青黒い球体状になっており、乖離の呼びかけと共に剣の形となつてその姿を見せるが、剣とは名ばかりのみてくれであり、斬るや突くといった一般的な攻撃手段は意味を為さない。これは『原災』を剣という器に嵌め込んだだけのもの。ただ力を開放させることによって斬るや突くといった行為も意味を為すことがある。

あまりにも強大過ぎるので乖離自身も使用においてはかなり注意を払っており、星断剣使用时には強制的にあらゆるバフ効果が解除さ

れるので殆ど生身の状態となってしまう。これにより使用時を見極めなければあっさりと発動を妨害されたり、場合によっては瞬殺もありえるというデメリットもある。全盛期の乖離であっても上記の通りあらゆるバフが強制解除されるので究極の不死も意味がなくなってしまう。それでも星断剣の最大全力火力は地球そのものを消し去れるほどなので基本負ける事はない。

かつて月の戦いにおいて使用した星断剣の火力は本来の三割にも満たない火力である。それでも永琳の全力の矢を一瞬にして消し去る程の威力がある。

乖離が星断剣を手にし、その力を開放したことにより乖離自身にもとある影響があった。それが能力の派生であり『根底から全てを覆す程度の能力』である。これはあらゆる法則性や原理を無視して消し去る星断剣に対し、法則性や原理を利用しあらゆる状況を意のままにコントロールする事が可能という星断剣の劣化能力のようなもの。



## 三十八話 意外な出会い

S i d e ぬえ

「ありがとうございます〜」

店内に響く感謝の言葉。今日のバイトの終わりを告げる宣言にも似たそれは、どこか気だるげな雰囲気伝わってくる。

「終わったか……」

私の隣で料理長は感情の籠っていない顔でそう呟く。あれだけの作業を毎日のようにこなしていると自然にそんな表情になってしまうのだろうか。私は疲労と気苦労でどこか引きつった笑みが零れてしまう。

「お疲れさん、それじゃ私は閉店作業に入るね」

「ああ、頼む」

着ていたエプロンを脱ぎ、肩にかけて私は厨房を出る。

厨房を出ると既にここらとフランは閉店作業の一環として店内の掃除をしている。その様子に少しクスッと笑いながら、私は店の外に出て暖簾を仕舞う作業に入る。

外はもう真夜中、私がバイトしている定食屋は戌の刻まで営業中だ。確か現代の時間では夜十時くらいだったかな。空を見上げれば月が暗天を照らしている。こういった時間帯は私達妖怪の時間だ。ここは人里ではあるが周りを見渡しても人っ子一人歩いていない。

「……………なんか、ちやつかり人間に馴染んじやっているわね」

ふと、そんなことを考えた。私も然り、この定食屋で働いている者は乖離を除けば全員妖怪だ。なのに私達は毎日のように人間を相手に頭を下げている。千年以上生きて来た私は他者から『大妖怪』と畏れられているのに、その大妖怪が人間相手に媚び売っているとすると他の奴らのいい笑いものだ。そう考えると少なからずイラっとは来るけど、どこか悪い気はしていない。それもこれもあの変わり者の料理長の悪影響なのかもしれない。

「ぬえ〜、まだ片付いてないのか？」

「もう終わるよ」

不意に店内から聞こえた正邪の呼びかけに応えつつ、私はさっさと暖簾を仕舞い店内に入ろうとする。

「ほうほう、ここがああ天狗の記事に記してあった定食屋とな？」

今度は別の方角から聞こえるどこか古めかしい物言い。こういった口調は私の知る中では二人だけ。一人は平安時代からの旧友マミゾウ。そしてもう一人は聖たち命蓮寺勢と対立関係にあたる聖徳太子の連れの『物部布都』。しかし残念な事に、今宵出くわしたのは後者のようだ。

声のした方に視線を向けると、奇抜な導師服に青い鳥帽子を被った一人のアホが仁王立ちの如く立っている。

「青娥殿が言っていた通りじゃな。よもや本当に妖怪が人里で定食屋などを営んでいようとはな」

青娥と言えば、あの八雲以上に胡散臭く信用ならない邪仙の事か。つまり、そこに立っているアホはあいつにそそのかされてここへやってきたという事か。根っからのアホとなると、最早救いようがないなこれは。

「で、何の用でここに来たのよ」

「ウム、青娥殿が言うにはこの定食屋には太子様を脅かす者がいると言うのでな？我が視察を兼ねて排除しておこうと思った訳だ！」

「フーン、それってさ……つまりここで私に殺されたいって事でいいんだよね？」

「ぬぬ、やはり太子様を脅かす者というのはお前の事じゃったのか！覚悟せよ妖怪畜生!!」

ちよろい。相変わらずこいつはちよろい。少し挑発しただけですぐに乗ってくる。こんな奴がああ聖徳太子の連れだと思おうとあいつの格もたかが知れるというもの。

既に布都の方は臨戦態勢に入っているようだが、今ここでやり合うのはマズイ。下手に大技を使って定食屋が倒壊なんてしたら私が乖離に殺される。かといって加減をしたところであいつが加減をする筈も無い。それを考えると、早計だったかもしれない。そもそもここ

は人里なんだから、騒ぎを起こした妖怪は博麗の巫女に退治される。  
「二人盛り上がっているところ悪いけどさ、ここで騒ぎを起こせば博麗の巫女が黙ってないんじゃないの?」

「太子様の為とあらば我は喜んで博麗の巫女に退治されてやろう!」

そう来たか……。やれやれ、参ったな。迎撃は簡単だが店への被害は避けられない。どう転んでも戦う以外に道はないらしい。面倒ではあるが、サクツと殺して黙らせるか。

私は妖力を開放し、愛槍を顕現させ臨戦態勢へと移行する。

「私にも大事な物つてのがあるからさ……。容赦はしないぞ?」

「望むところじゃ!!」

「ぬえ、遅いぞ何やってんだよ」

一触即発の事態に、不意に店の中から正邪が現れた。

「せ、正邪!」

「ぬ、貴様は!」

「妙に遅いと思ったら何してんだよ」

あからさまに不満気な表情を隠そうともせず正邪は問いかけて来る。どこから説明したものかと考えていると、正邪は布都を一見してタメ息を吐いた。

「厄介事に見舞われてんのか?」

「まあそんな感じかな」

やれやれと言わんばかりに正邪は再度タメ息を吐く。なんだかその面倒事に絡まれたと言いたげな表情は乖離に似ていると思える。正邪も正邪で乖離からの影響を受け始めているのかもしれない。

「これから賭の時間だったのに、邪魔しやがって……。ぬえ、さつさと終わらせるぞ」

そう言つて正邪は赤雷と共に白銀の剣を顕現させ構える。

「へえ、正邪から協力してくれるなんて珍しい」

「黙って構えろよ」

久しぶりの正邪との共闘。正邪は乖離から譲り受けた白銀の剣を手にして以来、今ではフランにすら迫る強さを得ていると言っていた。ま、一度も勝ったことはないらしいけど。それでも今私達の前に

いる相手はフランに比べれば月とスッポンほどの力の差があるのだから私と正邪なら準備運動程度で圧倒できる。

「確信したぞ妖怪共！貴様らが太子様を脅かす存在だな!!」

「テメーのバカ主の事なんぞ知るかよ！私は仕事終わりの賄いの邪魔されてキレてるだけだ！」

赤雷と共に正邪は白銀の剣を振り上げ布都へと突貫する。その衝撃で地面にはひび割れがはしり、砂煙が舞い上がる。これには流石の布都も慌てたように上空へと避難するが、それを逃す私ではない。

布都が上空へ避難したのをいいことに、私も弾幕を展開しつつ布都へと襲撃を掛ける。弾幕自体の火力は抑制してあるので当たっても大したダメージは与えられないが、それでも逃げ場を塞ぐ包囲網としては充分に機能する。

「クソッ！貴様ら卑怯じゃろ!!二対一など」

「先に喧嘩吹っ掛けて来たのはお前だろ！」

布都も負けじと弾幕を展開して迎撃を図ってくるものの、乖離との一戦以降感覚を研ぎ澄ませた私にはあの程度止まって見える。

布都の弾幕を回避しつつ確実に距離を詰めていく。長期戦になるのは面倒なので一気に決着を着けるために槍に妖力を注ぎ込む。それに、布都は上空に避難し私と二人で対峙しているつもりなのだろうが、別に正邪が宙を飛ばない訳じゃない。

「おい、余所見とは随分余裕じゃないか」

「なッー」

既に正邪は布都の背後に回り込んでおり、赤雷を帯びた白銀の剣は布都を捉えている。

正邪の容赦無い一撃が布都へと見舞われる。ガキンツ！と鈍器で金属を殴ったような音が反響する。

驚いた事に、正邪の不意討ちを布都は両手でガードして受け止めている。本来なら両手とも一息に両断されていてもおかしくない。おそらく何かの術だろう。

「ぐぬぬ、遠慮がない」

「遠慮なんざする訳ないだろ？それより、もっと力込めてないと薪み

たいにスパーンと斬れちまうぜ?」

「抜かせ! 妖怪風情が!!」

これはもう正邪の圧勝で決まりそうだ。あの状況から切り返せるのは霊夢とか乖離とかその辺の人間離れした奴らくらいなものだし、たかだか尸解仙程度ではあの状況から切り抜けるのは無理だろう。だが、油断は禁物。短期決着を望むなら今が最大の好機だ。

私は妖力を注ぎ込んだ槍を布都に狙いを定め、投擲の構えを取る。「さつき正邪が余所見を指摘したのに、学習しないねえ人間は」

未だ尚鬨ぎ合っている布都に向け槍を投擲する。風切り音を響かせ一直線に対象に向けて飛来する槍はまさしく榴弾砲の如し勢いがあつた。

「ちよ、おいッ!」

「え?」

私の投擲にいち早く気付いた正邪はギョツとした表情を浮かべ慌てて白銀の剣を霧散させ布都から距離を取った。それが幸をそうしたのか、槍は布都の目の前で大きな爆発を起こす。

爆煙と爆風が入り乱れる中、急の不意討ちに不満を露わにする正邪がこちらに近づいてきた。

「おいぬえ! お前殺す気か!!」

「いやあ、正邪ならちゃんと躲せると思つたのよ」

「嘘つけ! 絶対私ごとやる気だつたな!」

「言いがかり」

正邪の講義を適当に流しつつ、未だ爆煙漂う宙に警戒を向ける。雑魚とはいえ相手は尸解仙、あの程度の爆発では直に復活して来る筈だ。あるいは正邪の斬撃を防いだように何らかの術を使用し回避している可能性もある。相手は伊達に放火魔などと呼ばれていないのだ、防火対策はしているだろう。

しかし、私の警戒は杞憂に終わりを告げた。爆煙の中から一塊の物体が落下していくのが分かる。言わずもがな、布都だ。

「うゝん、もう少し妖力込めて爆撃しても良かった気がする」

「お前反省してないだろ……」

※※※

あの後なんやかんやあって私と正邪は布都を回収し店の中に運んだ。なかなか頑丈な奴なのか、気絶していたのに数分で目を覚ました。目を覚ました布都はさつきまでの勢いは何処へやら、まるで借りて来た猫のように大人しくなってしまうた。

そして現在は適当な席に座らせて尋問という名の賄待ちの暇つぶしをしている。

「で？結局お前は何しに来やがったんだ？」

「……青娥殿がここに太子様を脅かす者がおると言うので、我が調査を兼ねてその排除にと思つて……」

正邪の庄のかかった問いに布都はまったく覇気のない返事を返す。いつもはそこに居るだけで煩そうな奴なのに今はまるでその正反対だ。何と言うか、見ているこつちが虚しくなりそう。

「布都は青娥にたぶらかされたの？」

「分からぬ……」

「こころもそんな布都を見兼ねて声を掛けてやったのだろうか、如何せんその布都は相変わらずのようだ。勝負に負けて悔しいという感情と何の役にも立てていないという状況に自責の念でも感じているのだろうか……。だとしてもそれは私達には何の関係も無いのだけだ。」

「我は青娥殿がここにいる妖怪達を排除すれば太子様が喜ばれると言っていたので行動に出たまでだったのじゃ」

「で、行動に出たは良いものの標的に返り討ちに遭い立つ瀬がないと？」

「ウグツ、ぐうの音出ぬ……」

「こういうのってごまあみろって言うんだっけ？」

確かにそうだけど、それは流石に惨いと思うぞフラン。こんなアホでも一応大義名分があつての行動みたいだし。まあ喧嘩売る相手を間違えたのは自業自得だろうけど。ていうかどこで覚えたのよそんな俗っぽい単語……。

「まあ詳しい話は君をたぶらかしたあの邪仙に問うとしてだ、とりあえず賄出来たよ皆」

ふと後ろで乖離の声がしたと思ったら、トレイに五つの丼ぶりに乗せた乖離が意味深な表情で立っていた。

「おおー！待ってました!!」

「賄最高!!」

「ワイー！一日の安らぎだあ！」

皆賄で大はしゃぎ。それもその筈、この定食屋は弩が付くほどに忙しい。如何に高給料といえど乖離の賄がないとぶっちゃけやっていけない。

「今日はニラ丼だから滋養強壮に良いよ」

「ニ頂きます!!」

トレイから一人ずつ丼ぶりを受け取り、箸で一斉に口の中に出来たてのニラ丼を掻き込んでいく。やっぱり仕事終わりの賄がないとだよね。

「……………あの、一つ残っておるのじゃが？」

「それは君の分だよ。はい、箸」

キョトンとした表情で未だ理解が及んでいない布都に箸を手渡す乖離。人の厚意を無碍にするのは憚られると思ったのか、布都は渋々ながらも乖離から箸を受け取る。

「こう言つてはなんじゃが、本当に良いのか？我はお主らをの敵じゃぞ…………」

「ごちやごちや言つてねえで食えよ。冷めたら美味しくなくなるだろ？話はそれから！」

未だニラ丼に手を付けようとしないう布都を正邪が無理やり論ずる。若干納得いかぬと言いたげな布都だが、諦めて合掌の後ニラ丼を一口

頬張る。数回咀嚼した後、急激に布都の表情が変化する。最初は驚いた顔から今度は幸せそうな表情に変わり、一口飲み込めばどこか悲しそうな表情に変わる。見ていてとても忙しない。

「う、美味しいッ!!なんじゃこの味は!?今まで感じた事もない味わいが口いっぱい広がるうう!!」

「堕ちたな」

「堕ちたね」

「堕ちた」

「堕ちちゃったね」

「……あのさあ、作った本人の前でそういう事言うのやめてくれる?」

まるで一種の漫才のようなやりとりが開かれる。これもこの定食屋ならではの醍醐味の様なものだし、私としてはいつでも大歓迎なんだけどね。楽しいしき。

「プハーツ!実に美味であったぞ!!これほどの物とは思わなんだ」

気付けば布都は私達より先に完食してしまったようである。乖離の料理が美味しいのは分かるけど、もつと味わって食べればいいと思うんだけど。勿体ないしき。

ただ、そんな布都を見て乖離は相変わらず意味深な表情で笑みを浮かべている。

「そりやどうも、物部布都さん」

「おや?我はお主に名を名乗ったことがあったか?」

「いや、俺が君を知っているだけだよ。あの豊聡耳の部下でしょ?」

「お主、太子様を知っておるのか?」

「知っているも何も、あいつはある意味で言えば俺の『バカ弟子その2』だからさ」

「………は?今乖離何て言ったんだ?あの聖徳太子が乖離の弟子?」

「………そんなバカな!!」



## 三十九話 神靈廟

side 乖離

今日は定食屋の定休日、久々の休みである。定食屋を立ち上げてここ数週間口々に休みを取れなかった為、現在はゆっくり体を休ませている。

いつものように家の庭でくつろぎ、優雅に読書を楽しむ。この時間こそ俺にとっては至福なのである。

今日は僅かに雲が空を漂い、燦々と煌めく太陽を時々遮り影が生まれる。こういった穏やかな日常こそが俺の求めるものなのである。

本を読みながらふと、昨日の事を思い出す。閉店作業が終わり、賄を作っているとぬえと正邪が鳥帽子を被った狩衣姿の少女を連れ込んで来た。一瞬人攫いでもして来たのかと思っただが、連れて来られた少女は人間ではなく、驚いた事に仙人の類であったのだ。そして彼女がああ豊聡耳神子の部下の一人である物部布都その人だった。物部布都の事は幻想郷縁起を読んで知っていたのでさほど驚きはしなかった。

物部布都が定食屋に連れ込まれた経緯を聞くと呆れて頭が痛くなりそうだった。彼女はこともあろうに、あの穴抜けの邪仙に唆されて我が定食屋で働く者達を排除しようとしていたと聞いた。そして、なんやかんやあつてぬえと正邪に惨敗してあの有り様だそうだ。

閉店したとはいえ、仮にも客なので一応俺の分の賄を物部布都に譲る事にした。そのお蔭でまた作らなくてはいけなくなったんだが、まあ後悔はしていない。しかし、いい食べっぷりだったな。

それにしても、豊聡耳神子か……。幻想郷に来てこころちゃんと出会って久しく聞いた名だったな。こころちゃんの創造主にして日本が誇る聖人君子。憲法十七条を敷き、冠位十二階を定めた名君だ。仏教を重んじる一方で道教にも手を出していたんだか……。細かい事はさほど覚えてはいないが、彼女は後に聖徳太子と呼び讃えられ

ている。

まあ実際は、泣き虫で意地っ張りで偉そうでポンコツを絵に描いたような箱入りお嬢様だった訳だが……。

『あなたねえ、皇子である私に対してその態度は不敬だとは思わないの！』

『ごちやごちやとうるさいガキだな……もう一回シバき回されたいのかよ』

『ゴメンナサイ許してください氷鮑様』

ふと、いつぞやのやり取りを思い出す。あれはまだ彼女が幼い頃の記憶だったか。あれからは多少マシにはなったが、根本が治っていないので意味はないだろう。今思えば、ホントによくあんな奴が日本史に名を刻む聖人になんぞ成れたものだ。実は現在の豊聡耳神子はあいつの影武者だったりしてね……。

「まあなんにせよ、あれもあれでよくやっている方なんじゃないかな」  
ついつい口に出てしまう。それだけ、俺にとっては信じがたい事なんだろう。あいつの成長を嬉しく思う半面、影武者なのではと疑ってしまう自分が居る。ヤンキーの更生物語よりもよっぽど信じがたい代物なんだろうな俺にとっては。

ふう、と小さく息を吐き俺は再度読書に集中する。これ以上考えてもあいつ自身に会わなければ何も分からないのだから、時間の無駄である。

特に意識していた訳ではないが、ふと気付けば俺が読んでいる本は飛鳥文献の資料集だった。やっぱり昨日物部布都に会ったせいだ影響されてしまっているのだろうか。何にせよ読書にはなるのであまり気に留めないでおこう。

※※※

二三時間程読書に興じた後、俺は特に行く宛ても無く家からそれなりに離れた森の中をフラフラと彷徨っている。ここら一帯はほとんど無法地帯であり、並の人間が護衛も付けず一人で歩いていると妖怪の恰好の餌となる。特にこの辺の森は人里よりも多少離れているので中級〜上級妖怪が出没するなどかなり危険な地だったりするらしい。別に家に籠って読書を続けても良かったのだが、少し歩きたい気分になったのだ。

歩いていると自然と喉が渇き小腹だつて空いてくる。一応と思っ家から持ってきたお菓子を口に放り込み、数回咀嚼した後腰に付けておいた水筒を取り水を流し込みお菓子と共に一気に飲み込む。エネルギー補給も出来た事だし張りきって散歩を続けるとしよう。

歩き続けて数分と言ったところだろうか、森を抜け綺麗な平原が見えて来た。草の高さも丁度良く、風を心地よく吹いている。こういった場所でランチなんて出来たら最高なんだろうな。

ただ、俺はその平原に近づくことをせずその場から一步も動かず周りに気を配っている。……うん、完全に囲まれているな。感じる妖力から推測するに下級〜中級妖怪の群れだろう。隠れているつもりなのだろうが、俺の気配感知能力は常人の数十倍以上だ。加えてあからさまに殺気がダダ洩れなのだ。それでは気付いてくださいと言っているのと同じだ。

「やれやれ、俺も舐められたもんだねえ……。この程度の数でどうこう出来るとか思われてんだから」

数で言えば十にも満たない少数。それでも群れであることには変わりないが、さてさてどうしたものかな。一掃するのは簡単なのだが、無駄に体力を消耗したくない。紫を呼んでみてもいいのだが、その場合俺を襲おうとしている妖怪達が映姫様の厄介になるだろうな。

考え事も束の間、数体の妖怪は木陰からゆつくりと姿を見せた。それぞれ姿形は違うが、だいたいの根本は同じか……。

一体の妖怪と目が合う。殺意に満ちたその瞳に、ついぞ笑みを零してしまう。……変わらないのだ、何もかも。人間も妖怪も、例え神であつても殺意に満た眼というのはどいつもこいつも変わらない。

相手側は俺を喰う気なのかは分からない。腹を空かしているようにも見えないし、人間だからとにかく何が何でもぶっ殺すっていうアレなのかもしれん。だとしても殺されてやる気は毛頭ないのだけだね。

「まあ訊いても意味はないだろうけど、ここは見逃してくれない？俺も無駄な体力は使いたくはないからさ」

俺がそう問いかけると、周りの妖怪達はそれぞれが顔を合わせクスクスと笑いだす。

「妖怪が人間を襲うというのに、それをむぎむぎ見逃す意味があるの？」

「まあそうだよね。……ん？今の声って」

不意に聞こえた聞き慣れた声。どう考えてもその声は目の前の妖怪達からではない。ふと木の上から強大な妖力を感じ、そこに目をやると得意げな顔をしたぬえが太枝に座っていた。

「ぬえ？」

「ヤツホ乖離、こんなところで会うなんて奇遇ね」

ぬえは変わらず得意げな笑みのまま挨拶を交わしてくる。この表情は何か企んでるのは見れば分かるが、どうしてぬえがこんなところに居るのだろうか。まあそれを言ってしまうえば俺も似たようなものなんだが。

「ところでさあ、お前たちはいつまでそこにいるつもりなの？この人間は私の獲物だ……。疾く失せろ」

ぬえは威嚇するように妖気を放ち、上記の言葉を他の妖怪達にぶつける。するとどうだ、彼らも妖怪としての身分を弁えているのか、一瞬ビクツと背を震わし、渋々ながら後退を始めた。人間ならともかく、自身よりも格上の大妖怪を相手にはしたくないらしい。俺だって今のぬえを相手にはしたくないな。クラスターカードだって持ってきていない訳だし。

「さてと、邪魔者は居なくなった訳だし私も食事を摂ろうかな」

「……は？」

ぬえは妖艶な笑みを浮かべ見せつけるようにそつと舌なめずりを

する。

ゾクリと、俺の背筋が凍り付く。まるで氷を背中に叩きつけられた気分だ。動けない訳では無いが、何故か身体が上手く反応しない。これが人間本来の恐怖という感情なのだろうか。……いや、マサカネ。俺が動けないでいると、ぬえはそんなものはお構いなしというようにゆったりとした動きで俺の下まで歩み寄ってくる。

「あのぬえさんよ、一体何をしようとしておられるので……?」

「何って、食事だよ。言ったでしょ? 私の獲物だつてさ」

「いや、それはあの場を治める為の方便なんじゃ……」

そんなこななしている内に、最早ぬえと俺の距離は五十センチもなほほどに縮まってしまった。獲物を捉えたかのように輝く深紅の瞳と、薄っすら嗤っている口元から覗く鋭い牙。ぬえはどうやら本気のようなのだ。……本気で俺を喰うつもりらしい。俺も流石に体が動かないとなると覚悟を決めるしかないらしい。

意を決し、目を閉じる。目を閉じていればさほど痛みも感じずに済むだろうから。

「フフ、ホントに食べられるかと思った?」

「……………」

さつきまでとは一転して、いつもの楽し気な声色のぬえに戻った。目を開けると、クスクスとぬえは笑っている。……まさか、俺をからかっていたのか。

「どう? ビックリした?」

「……マジで喰われるんじゃないかと思った」

「流石に食べないよ。さつき命蓮寺でうどん食べたばかりだしね」  
そう言っただぬえはケラケラと笑いだす。ぬえにとっては冗談のつもりなんだろうが俺からすれば肝が冷えるんだよ。まったく、最近のぬえは妙に紫に似てきている気がする。同じ大妖怪だからなのだろうか。

「でも、乖離がどんな味するのかは興味あるけどね♪」

控え目に言っただけ弁して欲しい。安心したのも束の間の如く怖い

事言わないで欲しいよ。妖怪は人間の恐怖から生まれいずる者とはいうが、こういった大妖怪クラスは折りがみつきたい。俺自身もう少し妖怪達に対する恐怖心を改めておかないといけないかもしれないね。

「なんか、どつと寿命が減った気がする」

「柔だなくこんなもんほんの挨拶みたいなものでしょ？」

「それが挨拶ってんなら多分来週俺の葬式になりますね」

「骨拾っておこうか？」

「出来れば骨壺にお願いしますよ」

なんてジョークを交わしながら、俺は緊張が解れて地面に座り込む。すると、俺の隣にぬえもちよこんと座り込んだ。

「そういえばさ乖離、今暇？」

「まあ暇と言えば暇だな。散歩してただけだし」

「じゃあさ、ちよつと私に付き合ってくれない？」

「別にそれは構わないけど、何すんのさ」

「神霊廟に行く」

何故？という疑問はあるが、大方昨日の物部布都が原因だろう。彼女があのだけの邪仙に唆されたとはいえ、一応ぬえ達のテリトリである定食屋にちよつかい掛けて来たのだ。妖怪として人間に舐められるのは癪に触るといふことなんだろう。特に正邪あたりはかなり頭にきてそうだ。

「念の為訊いておくけど、何しに行くわけ？」

「決まってんでしょ？妖怪私達に舐めた真似してくれたんだ。……思い上がった人間に恐怖を与えてやるのよ」

「さいですか」

それは俺も含まれているのか？何て訊こうと思ったが止めた。多分面倒な事になりそうだから。

さて、まあ神霊廟に行くのはいいのだが、俺はあこへの行き方は知らない。こころちゃんが前に行き方云々言ってた気はするのだが、結構めんどくさい方法を使わないとだめとかなんとか。その辺、ぬえはちゃんと神霊廟への行き方は分かっているのだろうか……まさか、言

い出しつぺが知らないなんてことは無い筈だ。

「で、その神霊廟にはどうやって行くんだ？」

「これを使うんだよ」

そういつてぬえは紫色に輝く奇妙な玉を取り出した。見るからに怪しげな物だが、これで一体どうやって行くというのか謎である。それに、あまりよくない力を感じてるのだが……。

「なんだこれ？」

「これはオカルトボールって言って、月の魔力が込められた不思議玉なんだけどね。前に起きた異変の時こっそり一つ拝借しておいたのさー！」

「月の魔力って……」

「このオカルトボールは私が勝手に改良してあるから妖力さえ注ぎ込めばだいたい何でも出来るよ。因みに乖離と初めて会った時の異変のキメラ達もこれで創り出したんだよ」

あの化け物どものルーツはそれだったのか。なるほどね、それであるな非感情的生物が出来上がったという訳か。しかし、月の魔力を利用してほぼ万能道具を作り出したぬえもぬえだ。まったく、本当に大妖怪と呼ばれる連中は何をしでかすか分かったもんじゃないな。

「さてと、掴まりなよ乖離。これで神霊廟までひとつ飛びだ！」

ぬえは楽し気な表情を浮かべ、さっと立ち上がると俺に手を差し伸べて来る。

俺は一つ息を吐き、差し伸べられた手を掴む。瞬間、目の前が真っ白な光に包まれる。突然な光の放射により目を瞑るのが一瞬遅れてしまい視界がぼやけてしまう。まったく目に悪い。

ぼやけた視界を元に戻そうと目を擦り数回の瞬きをする。ゆっくりりとはあるが視界が戻りつつある。未だ尚少々歪んで見えるが、俺は視界に飛び込んで来た光景に一瞬面食らってしまう。

まず目に入ったのは中国の建造物に似た城や建物がいくつも建ち並んでいる。規模は思った以上に広く、そして巨大だ。加えて、この地からは一切自然エネルギーを感じできない。どうやら俺は本当に仙人達の住まう異界『神霊廟』に来てしまったのだと理解する。

「うん、無事到着できたみたいね。乖離大丈夫？」

「ああ、少し視界がぼやけて見えるけど問題ないよ」

俺はぬえの手を放し、この異様な世界に圧倒されそうになりながらもゆっくりと腰を上げる。

「ここが、神霊廟ねえ。これまた不思議ワールドに来てしまったものだ」

一つそう呟き、再度確認するように周りを見渡してみる。目に入る光景はあまり変わりはないが、眼前に見える一際大きな城に俺は視点を留める。この世界には自然エネルギーを感じないのであの城に誰が居るとか、誰が何人住んでいるのかなんていうのは上手く感知できないが、大方あこがこの神霊廟の創造主様の住居と言えるだろう。

「よし、きつそく突撃訪問してやろう！待ってるよ人間共!!」

ニシシと笑い大きな城に向け歩き出すぬえに若干の不安を感じながらも、とりあえずここに留まっても仕方ないので彼女に付いて行く事にする。

数秒歩いた後、俺とぬえは大きな門に差し掛かる。門の周りは塀で囲まれている為ここが正面入り口という訳だ。普通に『頼もうー!!』と叫ぼうかと考えたが、ぬえにはそんな考えは最初から無かったように、複数の弾幕を展開し、それ一気に門に向けて放射する。

ほぼ同時に弾幕全てが門に激突する。すると色鮮やかな爆発をみせた後、大きな門の扉はガラガラと音を立て崩壊を遂げた。突撃訪問とは言っていたが、これではもう強襲じゃないか……。

「さ、進もうか乖離」

ぬえは悪びれも無い笑みを浮かべ上記の言葉を俺に投げかけて来る。そんなぬえに不安なんてものを通り越し、一種の恐怖すら覚えそうになる。……そのうち俺の家もこの門と同じ末路を辿る事になるのかな。

まあ今は進むことを考えるしかない。こんなところでいずれ来る可能性のある未来を予想したところで意味ないしね。



ぬえは先程同様俺より先に前進し始める。俺もそれに付いて行くように歩き出す。壊れた門を潜り中央広場のようなどころに出た。なんとも広い土地だと感心しつつ、周囲を警戒する。この状況だ、いつ襲撃を受けてもおかしくはない。

と、思った矢先こちらに向けて放たれる矢のような物を視認する。形は間違いなく矢であるのだが、その実体は矢の形をした雷であった。それも自然発生した雷ではなく、誰かが意図的に放ったものだというのは感じる霊力で理解できる。

俺はぬえよりも先にこの危険を察知。全身に身体強化を施し迫りくる雷の矢を迎撃すべく愛用の刀を顕現させる。

「いきなりの襲撃で一撃だけとは味気ないな」

刀を一閃、迫る雷の矢を真っ二つに両断する。思ったよりも威力はないが、この威力でも常人ならば即死だろう。俺は続く第二波を警戒する。

「いきなりとはまたご挨拶だこつて」

ぬえも臨戦態勢に移行し、愛用の三又の槍を顕現させ周囲を警戒する。

さきほどの雷の矢はおそらく小手調べ・様子見というところだろう。こちらへの牽制のつもりか……。それにしても随分と樂觀的な一撃だ。どうやらあの矢を放った張本人は戦闘慣れしていないらしい。

「ぬえ、さっきの矢を放った者が何者か分かるか？」

「多分あのヤンキー幽霊じゃない？あいつ意外あんな雷使うやつなんてそういないよ」

ヤンキー幽霊って誰？とツツコミを入れようとしたのも束の間。今度は俺達を包围するかのようにならぬ雷の矢が展開される。

質でダメなら数の力押し、発想は悪くないがそうすると威力が落ち決定打に欠けるといもの。それに、第一撃が単発であったのに対し第二撃目でここまで大量の攻撃を仕掛けてこようとは、向こうには余裕というものがないらしい。

だが正解だ。自然エネルギーの供給が外から出来ない今の俺では

迎撃しきるのは少々困難といえる。その点でいえば敵さんの判断は良い。

「ぬえ、掴まれ！」

俺の呼びかけに応じ、ぬえは俺の腕を掴む。この神霊廟では移動の範囲は限られてくるが、今はやるしかない。

座標の絞り込みは出来ないが、今は緊急事態だ。俺はこの神霊廟の何処かに空間転移を発動させる。

一瞬の浮遊感を覚えた瞬間、目の前は沢山の置物のような物が下に配置されていた。

「え?」

「ちよッ!」

ドーン!!と大きな音を立て俺とぬえは何処かしらに落下した。俺は上手く受け身を取る事に失敗し、無様にも置物のような物に激突した。

「いたたた」

「ゲホッ!ゲホッ!何処よここは」

「知らんよ。この神霊廟には自然エネルギーが無いんだから空間転移をしようにも座標を絞り切れないんだ。ま、おかげで助かったけどね」

なんとかあの窮地からは脱した。流石にあんな量の矢は迎撃できない。それを見越して空間転移を選択したのは我ながらナイスアイデアだったと思う。無理に迎撃しようと無駄に自然エネルギーを消費せずに済んだのだから。

「さつきから一体何の音?誰かそこに居るの?」

瞬間、扉が開くような音が入る。俺とぬえはそろってギョツとしてしまい、その場で固まってしまった。

カツンカツンと誰かの足音が俺達に迫る。息をする間もなく、その人物は俺達の前に現れる。

「一体誰?そこで何をして……あれ?キミ達は」

俺の眼に入ったのはまるでミミズクのような髪型をした少女。『和』と書かれたヘッドフォンを付けており、腰に一振りの宝刀を携え

ている。加えて、この距離なら完全に感知能力が働いてくれる。あの聖さんにも勝るとも劣らない強大な霊力。

「マジ、こんなところで最悪の相手に見つかった」

「キミは確か封獣ぬえだったかな？それと……あなたはどこかで」

驚いた。こいつ、雰囲気とかその辺が昔と全然変わっていない。落ち着いた口調と物腰。漂わせる王様オーラ。間違いない。というか疑う余地もなく、俺の前に居るのはこの神霊廟の創造主にして我がバカ弟子二号……。

「豊聡耳神子……」

「あなたは……え？まさか、氷砲……様？」

お互い、まったくもって奇妙な再会を遂げてしまった。